

水上瀧太郎全集

三卷



大正十一年六月頃
慶應病院廊下にて

目次

落葉の頃

その日、午後の散歩から歸つて來ると、往來に面した家の入口の段々に、リリアンは一人うら寂しく腰掛けて居た。

「ハロオ、リリイ。」

「ハロオ、オホキ。」

くるくるした眞靑な目のふちに微笑を湛へて彼女は應（こた）へた。

「何處（どこ）にいらつしやつたの。」

「散歩。」

大樹（おほき）は答へながら、リリアンと並んで腰を下した。此頃は兎角氣分が勝（すぐ）れないで、少しばかりの散歩にも彼は疲れてしまふのであつた。

「くたびれた？」

リリアンは覗き込んで訊（き）いた。

「どうも此の頃は變だ。神經衰弱かしら。」

「あんまり本ばかり讀んでるからでしよ。夜遲くまで。」

大人らしくたしなめるやうな口ぶりで云ひながら眉をひそめた。

目の前の芝生は一條貫く小道を緣取つて蒔いた鳳仙花の、夏の間は白いのも紅いのも淡紅色のも、咲いては散り咲いては散り、あきあきする程咲いたのも、延びるがままに延びた根元から枯葉を見せ、哀れに汚れて散り遲れた花は、からからに乾いて莖にこびり着いて居る。隣家との境界に茂るライラックの垣根に近く、暑い盛りには咲亂れた天竺牡丹、松葉菊、雛菊、夏薔薇、貝殼草、金仙花、百日草などの、目に痛い程強烈な色彩を競つたのも、花の形は日毎々々ちひさく、今は見るかげもなくなつてしまつた。就中丈高く大きな花の、日輪を反射する迄光り輝いた向日葵は、此の頃の風にいたんで、倒れた莖はまだなまなましいが、僅かばかり葉うらに殘つた瘦せた花もうなだれ勝ちに、少しばかりの風にさへ心もとなく搖れるのである。

何處かで彈く洋琴が鈍く微かに聽えて來た。リリアンはそれに合せて、音には出ぬ程輕く口笛を吹きながら、靴の踵をことこといはせて居た。

日ざしも弱々しく傾いて行く夕暮前の、並木の楡の梢を透いて遙かに高い空を見詰めて居ると、その高い空を横切つて渡鳥の群が通る。一羽、二羽、三羽、四羽、五羽、六羽――七羽――八羽

まで數へた時、列が亂れて數へ切れなくなつた。群つて西の空へ流れるやうに飛んで行く無數の鳥の、親も子も、兄弟も姉妹も、友達も入りまじつた景色が懷しくて、何處迄もと見送つたが、その一群の小鳥は、見る間に遠く高い大空に吸込まれるやうに消えてしまつた。餘り一心に見送つた爲めか、涼しい風の沁みる氣持のする目には、時にふと故郷の父母を思ふ時のやうに、何時か涙さへ滲みかねなかつた。

「左樣なら、キテイ。」

突然頭の上で冴え冴えした聲が聞えた。大樹は驚いて振仰いで二階の窓を見た。

「御機嫌よう。」

と同じ聲が續いて叫んだ。長い間誰も入つて居なかつた其の室に、聞き馴れない聲を聞いたのだ。それは若い女の鋭い聲のやうにも想はれた。老人の濁つた聲のやうにも想はれた。

「誰？」

「鸚鵡よ。」

リリアンは大樹の驚きを悦ぶ顔つきでささやいた。

「鸚鵡？」

「今日から貴方のお隣室に年寄の方がいらつしやつたの。その方の鸚鵡でね、桃色の、それは可愛つたらないの。」

リリアンはさも可愛らしくて堪らないといふやうに目を細くして、得意になつて話した。

「リリイ、――リリイ。」

家の内――厨の方で娘を呼ぶ母の聲がした。

「リリイ。」

「ハイ、只今。」

娘は答へながら勢ひよく立上つて、短い袴の下から、すんなりした脚を見せて階段を馳上ると、おさげの髮を波打たせながら家の内に引込んでしまつた。

「左樣なら。」

鸚鵡の聲は暮れかかる夕方の空に反響するまで響いて聞えた。

そのむかしメイ・フラワア號に乘つて、英本國から移住して來た清教徒を祖先とする新英蘭士の、物堅い保守的な精神を今も傳へる此の土地には、一の劇場も無く、酒を賣る事は嚴禁してあつた。それは旅人にとつては隨分寂しいものであつたが、傳統のある土地に限る人の心の溫さは、

時にふと堪へ難く心を襲ふ異郷の愁ひをさへ、かへつてなつかしく思はせもするのであつた。其處いらの家はしもたやが多く、教授、軍人、役人などの隱居したのや、夫に別れた母子(おやこ)、又は此の地方の名物と云はれる老嬢(オオルドミス)といつた風の人々が住んだ。さうして、かなり有福な家でも空間があれば學生に貸すのがおきまりだつた。

ハンコツクの家も主人が死んで、母親と娘が、僅かな遺産に頼つて暮さなければならなくなつてから、同居人の叔母——亡き主人の妹——の他に、何時でも二三人の學生に室貸(まが)しをして家計を助ける事になつた。

遠い故郷に別れて、土地馴れぬ旅人の身の心細さを思ひ知りながら、大樹が此の家の二階の一室に旅鞄を下(おろ)したのは、今年の春裏庭の果樹園に林檎の花の雪よりも白い頃であつた。

故國に居れば人並よりは少し大柄な方なのだが、此の國に來ては到底比(くら)べものにならないばかりか、日本人に特有の扁平な顔つきが、見馴れない人々には、どうしても少年(こども)らしく映るのであつた。H大學の聽講生として毎日講堂へ通つて行くのだと知つてからでも、母親もリリアンも、彼を大人扱ひには出來にくかつた。それには不自由な英語の會話のたどたどしさも、一層こどもこどもして見えたに違ひなかつた。人のいゝ母親は、黄色い顔つきの、みすぼらしい異國の青年

を見ると、その風采の悪い事さへ、いかにも頼り無い身の上らしく想はれて同情された。

「日本て隨分遠いんだらうねえ。」

或時母親はしみじみした調子で娘に訊いた。

「エエ太平洋の向ふよ。」

娘は學校で地理を習つた時に、地圖をさし示す先生の鞭のさきに、ちひさい赤い島を見た事を思ひ出して答へたが、母親にはただ靑々とした波濤のうねる海洋の景色の他には何も想像する事が出來なかつた。さうしてそれが一層母親をして日本の靑年をあはれがらせる事になつた。

每日々々大樹は學校の講堂と圖書館に通つた。家に歸つても多くは机にむかつて、夜の更ける迄本を讀んだ。夏が來て、裏二階にゐた二人の學生は卒業して各々故鄕に歸つてしまつたが、大樹は一人居殘つて、酷しい眞夏の間も、全身汗に濡れながら机にむかつてゐた。歸るべき彼の父母の家は餘りに遠い海の向ふだつた。

彼は此の三月の暑中休暇を利用して、みつちり勉強しようと思つてゐたのだが、想像にも增した暑氣に、元來寒さに強いかはりに、每年夏は肉體から悄氣てしまふ彼には堪へ難いものであつた。窓に近い路傍の楡の梢の茂りに薄暗い室の中に閉籠つて、日每机に向ふにはむかふのだつた

が、襦袢一枚になつてぢつとして居ても、全身から滲み出る汗に疲れて、折角開いた本の上に、何時か額を押しつけて居眠つてしまふ事が多かつた。

いとど長く想はれたその一夏、大樹はハンコックの家の者と共に初秋を待ちあぐんだ。

「秋になつて學校が始まつたら、又二階の室はふさがるだらうか。」

と乏しい生活を心配して呟く母親には、殊更待たれる秋であつた。

新學期が始まつても、空いたままの室は空いたままに殘つて母親のおもひになつた。露に脆い並木の樹木の葉は何時の間にか黄ばんで、風も無いのに敷石の上に落ち始めた。その折柄思ひもかけ無い老人が、表二階の一室――大樹の隣室を借りた事は、餘りに平調な日ばかり續いた一家の者の心に、輕い好奇心を起させた。

翌朝、大樹はいつもの通り學校の食堂に朝餐を認めに行かうと思ひながら梯子段を下りて行くと、階下の客間の入口に主婦と立話をしてゐる老人を見た。

「ミスタア・オホキ。」

輕く會釋して通り過ぎて、そのまま扉の外に出ようとした彼の後から、宿の主婦は呼止めた。

「御紹介しませう。」

呼止めた大樹の肩に手を置きながら、
「これは私のもう一人の子供です。勉強家で、親切で、正直で……」
人のいい主婦は、何時も此の青年を他人(ひと)に紹介する時にいふ冗談を繰返した。
「オオ貴方は日本の學生ですね。」
老人は嗄(しやが)れた聲で云ひながら、珍しさうに大樹の手を握つて振つた。大兵肥滿の老紳士の、純白の髯に覆はれた顏には柔和な微笑が浮んで居た。
「いづれゆつくり東洋のお話でも聞かせて貰ひませう。」
と云ふ言葉を後(うしろ)に聞いて大樹は戸外(そと)に出た。秋の朝の眞靑な空の日輪は、並木の樹木の高い梢の黄葉にまばゆいばかり光り輝いてゐた。時折過(す)ぐる風に連(つ)れて、行人にふりかかる木の葉を浴びながら雜木林を拔けて學校へ急ぐ彼は上品な老人の顏を忘れ難く思つた。
時たまの散歩の外は、講堂と圖書館に一日を過(すご)してしまふ大樹は、同じ家に住んでゐながら、隣室の老人の顏を見ないで暮らす日の方が多かつた。夕方宿に歸つても、隣室には人の氣配も無く、籠の鸚鵡の羽ばたきと、金網を嘴でことことといはせる音が、壁の向ふに聞えるばかりであつた。それも夜が更けて、大樹が床に入る頃は、桃色の翅(つばさ)を持つといふその鳥も棲木(とまりぎ)に眠るのである

らう、ひつそりとして家の内には一切の音響が息をひそめてしまふ。

けれども曉方目を覺ますと、東の窓から射込む朝日を浴びて、勢ひよく叫ぶ鸚鵡の聲が、枕に近く聞えるのであつた。何時の間に覺えてしまつたのか、

「リリイ――リーリイ。」

と二度重ねて、二度目を少し引張つて娘を呼ぶ宿の主婦の聲を、憎らしい程巧妙に眞似する事もあつた。

「リリイ――リーリイ。」

と抑揚をつけて、返事の無いのを小じれつたさうに鳥は屢々叫ぶのであつた。

「ハアイ、只今。」

最初のうちは、ほんとに母が呼んでゐるのだと思つて、屋根裏の小部屋に寢てゐるリリアンは、狼狽しく梯子段を馳下りて來たものであつた。

「マア憎らしい。お母さんの眞似なんかして。」

隣室の戸口でリリアンの笑ひ聲につゞいて、その室の内で、

「他人様の迷惑になるやうな事を云つてはいけないよ。」

と鸚鵡をたしなめて居る老人の、もの優しい嗄れた聲を聞く事もあつた。

けれども鳥が口癖にしていふ言葉は別にあつた。

「今日は。御機嫌よう。」

「左様なら。」

は日に幾度となく繰返されるものであつた。さうしてその後には屢々キテイといふ女の名がつけ足された。

「左様なら、キテイ。」

と叫ぶ時の聲には、男が女にものいふ時のやうな情あひが籠つてゐた。

元來言葉數の少ない上に、自由には會話の出來ない心細さから、自然と人に話しかけられるのを避ける傾向のある大樹は、宿の人達とも餘り口をきく事が無かつたので、彼等からも老人の身の上については、メイン地方の學校の退職教授だといふ事の外、殆ど何も聞かされなかつた。何處に行くのか戸外に出て行くか、それでなければ自分の室に閉籠つてばかり居る老人は、矢張り宿の人達とも口をきかない方だつたから、實際誰もそれ以上深く彼を知つては居なかつたらしい。

或日の午後、大樹はW教授の講義を聽く爲めに大講堂に群る學生の中にまじつて居た。英吉利人に多く見る型（タイプ）の、心元ない程瘦せて脊の高い老教授は、講壇の上に直立の姿勢で、殆ど身動きもしないで、細く明瞭に通る聲で一時間の講義を續けるのであつた。蒼白い嚴格なその面貌（おもて）にも、流石に時間の終りには、かすかながらも血の色が上（のぼ）つた。大樹は何時も教授を見ると、清癯鶴に似たりと云ふ言葉を想ひ浮べるのであつた。

大樹は廣い講堂の中程の机に坐つて、講義の要點をノオトにうつしとる爲め忙しく手を動かし續けた。語學の不自由は一層彼を疲勞させ、時間の終りの呼鈴（ベル）がけたたましく鳴響いて、教授が參考書を折鞄に納めながら、その日の講義を終つた時は、彼は何時もの通り手首の痛くなつた手から洋筆（ペン）を放して一息ついた。何かしら大きな仕事を爲遂（しと）げたやうな滿足と安心を感じながら、彼は講壇を下りる老教授の姿を見送る心組みだつた。

老教授は講壇を一段二段下りる時は、その丈高い上半身を心持前屈（かゞ）みにして、用心深い足取を見せるが、床の上に下り立つと持前の直立の姿勢でその年齡（とし）とは思はれない若々しい大跨（また）で見かへりもしずに、校庭の芝生へ出て行くならひであつた。ところが其の日、講壇を下りた教授は戸口には急がなかつた。彼は講堂の後列（うしろ）の方に何物かを求める様子で、六尺近いのが爪立つて、一

齊に立上つた學生達の頭を越して視線を投げた。さうして其の求めるものを確めたらしく頷くとつひぞ笑顏を見せた事のない教授の顏に微笑の影が漂つた。ぞろぞろ列をつくつて講堂の外に出て行く學生の間を縫つて教授の急ぐ後列の方を、ふと誘はれて振返つた大樹は、其處に思ひもかけない隣室の老人を見出したのである。次の瞬間には、二人の老人は雙方から近寄つて固い握手を換はしてゐた。

數多い學生の全部が立去つた後迄、大樹は其場の樣子を盜み見ながら、ノオトの整理をして居るやうなふりをして居殘つたが、間も無く教授と老人は兩方から寄添ふやうに肩と肩とをつけて歩き出した。大樹もその後から、好奇心に胸を躍らせながら講堂の外に出た。

秋の午後の日のいつぱいに照りわたる芝生を教員室の方へ二人は歩いて行つた。申し合せたやうに黑地の服に黑地の外套を着て黑い帽子をかぶつて居た。何處か脚部の故障のあるらしい隣室の老人の、たどたどしい歩調に連れて、平生は大跨な教授も、一歩一歩拾つて行く。一人も隨分脊は高いのだが、づばぬけた教授の長軀を屈めるやうにして何か話しながら歩いてゐるのは、恰も相手をいたはるもののやうに見えた。

遠く遠く楡の大樹の木立の下を、遙か向ふの赤煉瓦の建築物の中へ吸込まれるやうに二人の姿

が消える迄、彼は芝生に佇んで見送つた。

町を圍む郊外の林はもとより、家々の庭にも、往來の並木にも、秋の色は愈々深くなつた。大空の藍は涼しい風の吹く度に、底の底から波立つて搖らぐかと思はれるばかり深く澄んだ。何處とも無く天地の間に、落葉と落葉のささやきかはすひそめきが聞える程、樹木の多い一町（ひとまち）に降りしきる木の葉はしげく、その落葉に埋もれた土を踏むと、秋の香はかすかに四圍（あたり）に漂ふのであつた。

時には又、此の落葉の町を濡らして時雨の過（す）ぎる事もあつた。往來の人に馴染んで、その掌の南京豆を怖氣（おぢけ）も無くむさぼる木鼠（りす）の姿も見えなくなつて、町は寂しい景色の中に、落葉にそそぐ雨の音ばかり終日しめやかに聞えるのである。遠い故郷の想はれるのは、殊にさういふ日の暮方であつた。

「御機嫌よう、キテイ。」

と隣室で叫ぶ鸚鵡の聲さへ濕つぽく聞えるのであつた。

老人は何時も何時も、物音もさせずに日を過した。その室の掃除に出入する主婦の話によると、彼は窓際につるした鳥籠の下で讀書してゐるのだといふ事であつた。雨の日には殊に脚部の僂麻（レウマ）

窪斯が老人の歩行を難澁させて、町の飲食店へ出てゆく姿は氣の毒なものであつた。

その癖天氣の日には、彼は杖を手にして散歩に出るのが好きだつた。過度の讀書に疲れた頭腦を休める爲めに、落葉の香をかぎながら歩き廻る大樹は、川沿ひの土堤の上や、雜木林の中の小道で、老人を見かける事もあつた。

「今日は。いいお天氣ぢやありませんか。」

老人は輕く帽子をとつて挨拶しながら、そのままとぼとぼ歩いて行つてしまふ。他人と口をきく事を厭ふのかとも想はれるのであつた。

それは日曜の事であつた。信仰の厚い人々の住む町の事とて、數多い敎會の鐘の、晴れわたつた秋の空を震はして鳴響く朝であつた。

大樹は敎會行を宿の主婦に誘はれるのを避ける爲め、食事が濟むとそのまゝ、學校の庭の日あたりの草原に寢ころんで持つて行つた新聞を讀んで、時間を消した。さうして母子や同居の叔母が、他所行の着物を着て說教を聽きに行つた頃を見はからつて家に歸つた。戸を開けて中に入ると、入つて直ぐの右手の客間に鳥の羽ばたく氣配がした。

「今日は。」

鸚鵡の冴えた聲がその室内から聞えた。

入口の垂帳(カアテン)を分けて覗くと、正面の黒塗の洋琴(ピアノ)の上に桃色の鳥がけろりとして立つて居た。一方の壁に寄せてある長椅子には老人が腰掛けて、鸚鵡の振舞を見てゐるのであつた。

「お早う。」

帽子をとつて大樹が挨拶すると、

「まあ此方(こちら)にお入りなさい。今日は一番よく日の當るところで、私の鸚鵡に運動させてゐます。」

と老人は樂しさうな笑顔で彼を迎へた。

「お早う。」

鳥は胸を張つて高く叫びながら、見馴れない青年を首をかしげて見守つた。頭から背中にかけて一際(ひときは)濃い紅を流したのが次第にうすれて、ふつくりと盛上つた胸と腹には、雪白の柔毛(にこげ)も波打つてゐた。

「ハハハハハハ、奴さん少々人みしりをしてゐる。」

老人は嬉しさうに目を細くして見とれてゐるのであつた。

大樹は誘はれるままに長椅子の老人と並んで掛けた。

「學校では何を勉強してゐますね。」

老人は別段かうした會話に興味を持つてもゐなさゝうな樣子で、目は絶えず鸚鵡から放さずに訊いた。

「此の頃はW教授の講義が一番面白いと思つてゐます。」

と答へながら彼は老人の顏を見た。

「ホオ、あれは私の古い友達です。」

老人はそれでもまだ鳥の方にばかり注意を向けて、かへりみもしなかつた。

「先日は講堂にお見えになつたやうですね。」

「エエ、一度講義ぶりを見度いと思ひましてね。あれは私とは同期の卒業で、寄宿舍に居る頃は長い間同じ室に寢起きしてゐたものでした。その頃からいい頭腦を持つてゐました。」

老人は流石に若い頃の事を回想するらしく、しんみりした調子で、多少感慨深く語つた。

突然鸚鵡は烈しい翅ばたきをして飛立つた。翅をひろげると客間が狹くなつたやうな氣持がしたが、天井近く上つたと見ると、一文字に下りて來て老人の肩にとまつた。恰も老人との會話を妨げる態度で、鳥は大樹にむかつて險しい目つきをした。

「おいでおいで。」

老人はなだめ顔に手を出したり、膝を叩いたりしたが、鸚鵡は不滿足な顏つきで大樹から目を放さなかつた。

「嫉妬してゐるのですか。」

「マア左様(さう)でせう。」

と老人は答へながら、無理に手を延(のば)して肩の上の鸚鵡を膝に抱下(だきおろ)した。不機嫌な鳥の胸は憤りに高く鼓動した。いくら老人がなだめすかしても、鋭い爪の鍵型に曲つた脚を踏みもだえた。

「不思議な顏色の日本人を見て驚いたのでせう。」

大樹は苦笑してその有様を見るより爲方(しかた)が無かつた。

「どうしてどうして、そんな事があるものですか。これは大變悧巧者なんですが、お馴染でない方を見ると、時々意地惡をしていけません。しかし二三度お目にかかれば直(ち)き仲善(よ)しになつてしまひます。」

と老人は取なし顔に辯解したけれど、鸚鵡の機嫌は直らなかつた。敵意を持つて險しい目附で大樹を見詰めながら、老人の手を脱出(ぬけで)ようと身をもがいた。遂には嘴を鳴らして鋭く叫び出した。

「どうも困つた。かう御機嫌の惡い時には逆らはないのが一番です。失禮ですが室に歸つて籠に入れてやりませう。」

と老人は大樹に氣兼ねしながら立上つて、我子のやうに胸に抱きしめた鸚鵡に頬擦りしながら、會釋を殘して二階に上つて行つた。

其の日以來大樹は老人と顏を合せると、以前よりは親しさを增した話をするやうになつた。さうしてその人の身の上も大凡は知る事が出來るやうになつた。

老人は大學の古い出身で、學校を出ると間も無く、生れ故鄕のメインの方の學校の教師として赴任して、最近迄敎鞭をとつてゐたが、寄る年と癇質の僂麻窒斯に惱む身體をいとつて隱退した。妻も無い一生の獨棲を慰める爲めに、性來好きな動物を飼つて居て、家には犬が五疋、猫が三疋、鸚鵡七面鳥は數へきれない程だと云つた。好きなればこそであらう、大學の庭に群る鳩も、道ばたに遊ぶ木鼠も、馴々しく老人の掌の餌に誘はれて集つた。

年齡も若く、樂しかつた日を過した大學時代が忘れ難くて、今迄にも何彼の折につけては此の町に出て來る習慣だつたが、今度は隱退して樂な身體になつたので、昔なつかしい心の起るままに、ゆつくり滯在するつもりで來たのだといふのであつた。學校を圍む籬にも、森にも、老人に

はさま／＼の思出があるのであらう、彼は不自由な足を杖に支へて、日毎に深くなつてゆく秋のただ中を歩いて暮した。

　何れは脆い木の葉の中でも、殊に散り易い楓樹（メエプル）は、燃え立つばかり紅葉したのが、今は黒く干（ひ）乾（から）びて、僅かに枝にしがみついて風に吹かれてゐる四五枚を殘して散り盡した。その大きい廣い葉の上に、楡、栗、榛（はん）、その他の大樹の高い梢から爭つて降る細かい葉は、四方八方にひろがる往來を、砂の上に打上げた波の引く時のやうな靜な音を立てて風に飛ぶ。秋の日に干反（ひぞ）つたやつは、命のあるもののやうに群り渦巻いて舞狂ふのである。就中莖の細く感じ易い白楊（ポプラ）の葉は、晴れた日の大空に銀粉をまきちらして、風のまにまに飜つた。曉の床にも、眠られぬ夜半にも、窓を打つ落葉を沁々聽く日が多く、町はただ落葉の聲に終日（ひねもす）埋れる頃となつた。

　晴れては降り晴れては降る時雨の後に、又麗かな小春日が返つて來たやうな日であつた。午後の散歩に出た大樹は、川沿ひの土堤（どて）の草を踏んで歩いた。風も吹かない、厚い冬の外套の重たく思はれる日ではあつたが、餘りに透明な空氣の冴々しさが、やがて近づく冬を想像させるのであつた。遙かなる川上の遠山の紫の頂にも雪の來る景色が目に浮ぶのであつた。彼は少年の日になつかしんだやうな、とりとめも無い空想に耽りながら、その山々の峰を越えれば、直ぐにも故郷

の父母の家はあるのだと考へた程うつつなかつた。

詩人ロングフヱロオが住んだといふ家も、雜木林の奥に落葉を浴びてゐた。彼が詩を想ひながらさまよひ馴れたといふ芝生にも、何處から飛んで來たのか種々の樹木の葉はすき間も無く落散つて居た。幾年か前、學校で習つた彼の可憐な物語の詩の中の景色を想ひながら、大樹はこのあたりを過ぎて、やがて木立の奥の墓地に踏入つた。ロングフヱロオも、ロウヱルもその墓地の何處かに葬むられてゐるのであつた。

木立の下の細道に落ちて埋めた落葉は、此の頃の時雨に濡れたまゝじと〳〵して、踏めば強く鼻をついて香つた。腐つた林檎のやうな、藥のやうな匂ひであつた。大樹は墓石と墓石と、音も無く向き合つて並び立つ間を拔けて、目の下に川の流を見る岡の上に出た。その邊にもまばらに墓はあつたけれど、西日のあたる芝原は既に乾いて、梢のあからさまになつた遙かの上の眞青な空が廣々と仰ぎ見られた。大樹は灌木の茂みを背にして、日あたりの草の上に外套のまま寢ころんでその雲も無い空をなつかしんだ。折々啼きかはす小鳥の聲と、かすかに散りかゝる落葉の他には物音もしない靜寂な天地であつた。

ふと何かしら耳近く物の音を聽いて、大樹は驚いて身を起した。なま暖い日光を浴びて、何時

の間にかうとうとしてゐたに違ひない。太陽の距離も遠くなつて、遥かの山の頂に近く赤々と傾いて行く頃であつた。

「左様なら、キテイ。」

明かな人の聲が背後の灌木の向ふに聞えた。大樹は思はず延び上つて、細かい雜木の枝を透かしてうかがつたが、直ぐに其處に或る一の墓に向つて佇む人の姿を見出した。意外にもそれは餘りに彼の居る所に近かつた。彼は再び草の上に身を伏せて、灌木のかげに潛んだ。けれどもその延上つて見た一瞬間に、目に觸れた人の姿は同じ宿の隣室の老人に違ひなかつた。さう思つた時大樹の胸は高く波打ち始めた。

「左様なら、キテイ。」

低くつぶやく聲と共に、落葉を踏んで遠ざかる氣配がした。大樹は地面にしがみついたやうに、腹這ひながらも、矢張り首を上げて見定めないでは承知出來なかつた。

黒い外套に黒い帽子の後姿は彼の老人にまぎれも無かつた。並び立つ墓石の間を、その墓石に見えかくれして次第に遠ざかつてしまつた。一度遠くの低く刈込んだライラックの垣根の上に、黒い帽子が又現れたが、それつきり墓地の外に出たのであらう、人の姿は見えなくなつて、落葉

のつく吐息か、何かしらひそめく音がひとしきり耳に觸れたが、直ぐに四圍(あたり)は靜寂に返つた。彈機(ばね)仕掛のやうに立上つた大樹は、灌木の茂みを分けて出て、今迄老人が佇んでゐた處へ急いだ。何かしら他人の祕事をあばくやうなやましさを感じながら、一基の墓の前に立つた時、彼の息は自(おのづか)らはずんだ。誰かしら其處らの木蔭から、自分が老人を覗(うかが)つたやうに、自分を覗つてゐる氣持がしてしかたがなかつた。

餘り古くはない墓ながら、濕つぽい木立の中の雫に濡れ易く、うすい綠の苔のついた石の面(おもて)には、

彼女の夫並に彼女の知れるあらゆる人を愛し、又あらゆる人々に愛されたる

カザリン・Wの墓

と彫つてあつた。大樹の胸は一層高く波打つた。

「左樣なら、キテイ。」

といふ聲が耳の底に今も聞える氣がした。それは嗄(か)れた老人の聲でもあり、又は銳い鸚鵡の叫聲でもあつた。大樹は意外の驚に脣の乾く心地を覺えながら、目を見張つてもう一度改めて墓石を見た。カザリン・Wといふ亡き人の姓名は明かに讀まれて消えなかつた。さうしてそのWは彼

が師事する教授の姓と同一だつた。

大樹の腦中にはさまざまの小說的想像が渦を巻いた。彼の目の前にはさまざまの幻が繪畫よりも明かに描き出された。六尺近いW教授の姿と、蒼白い嚴しいその顏は、現に今彼の傍に並んでゐるもののやうに思はれた。隣室の老人の雪白の髯に覆はれた柔和な顏も、疾患のある脚を引擦つて步く姿も、活動寫眞の映畫のやうに幾度と無く彼の目の前を去來した。その二人の老人が互に寄添ひながら、親しげに話しながら、步いて行つた先の日の景色を想つた時、大樹は一種堪へ難い胸苦しさを覺えたのである。

抑へ難い想像は二老人が若々しい學生時代にも誘はれて行つた。二人の青年の間に、にこやかに微笑してゐる若い娘の顏迄も大樹は想ひ浮べた。それがキテイでなければならない。誰がキテイであるか、勿論知つてる筈は無いのだけれど、どうしても一人の女の顏が浮び出すのであつた。ふとその顏は二三日前美術館で見た模寫ではあるが、レオナルドのモナリザの顏だつた事に氣が附いた。

彼は自分の餘りに想像を逞しく爲過ぎたのに驚いた。W教授の夫人の名が果してカザリンであるかどうかも知らない身ではないか。W教授の夫人が果して世を去つた人であるかどうかも知ら

ない身ではないか。W教授が曾て結婚した事があるかどうかさへ第一彼は知らないのであつた。嘘だ、みんな自分の無責任な想像の遊戯なのだと強ゐて思ひ決めて大樹は頭を振つた。しかし如何しても自ら湧起る疑念を消し去る事は無理であつた。彼は此の世の中の紛糾した人と人との關係が生み出す悲劇を想像して、何とも知れぬ涙ぐましい心地に佇んだ。

日沒の早い秋の一日は次第に黃昏に包まれて來てゐた。流石に夕暮は冷々と寒く、川の上を渡つて來る風は木立の中に流れて、落葉の上に降る落葉の音は時雨よりも微かだつた。

宿に歸ると、燈火の明るい客間に家内中の者が寄集つてゐて、隣室の老人も其處にまじつて居た。大樹はその人の前に立つて、人の祕事を覗つた心やましさに堪へられなかつた。

「突然ですが、私はメインの自宅に歸らなければならなくなりました。」

と老人は何時もの通り柔和な笑顏をして彼を迎へながら云つた。

「今度はゆつくり滯在するつもりだつたのですが、今朝留守番の者から手紙が來たので、明日の朝立つ事にして、今日はお名殘の散歩をして來ました。」

と愛想よく話をするのを見ても、大樹の心の中には、その老人の笑顏にさへ寂しい陰影が伴ふやうに考へられて來た。

「それは殘念です。折角おちかづきになりましたのに。」

「實はあちらに殘して來た犬が病氣だといふ事でして。」

云ひながら老人は心配さうに眉をひそめた。五疋の犬の中でも一番長く飼つてゐる老犬が、急に氣力を失つたといふ報知(しらせ)を受けたのだといふのであつた。

「どうか助かつて呉れればいゝが。」

と少し伏目になつてつぶやく時、それは人の親が子の病を案じわづらふ様子とちつとも異らなかつた。

翌朝老人は旅鞄を人足(にんそく)に持たせ自分はその後から鸚鵡の籠を大事さうに抱へながら、人々に別れを告げて、不自由な脚を引擦つて宿を出た。とぼとぼと歩いて行くその後姿が町角に消える迄、大樹は感慨深く見送つたが、それつきりで再びその老人には巡り逢はなかつた。

その後、W教授の講義を聽く度に、彼は一層鮮明に老人の姿を思ひ出し、同時に自分の想像が作りあげた一篇の戯曲的の場景をさまざまに描き浮べた。さういふ時は彼はその豊かな想像を樂しむ心持も否定出來なかつたが、それよりもより深く、此の陰影の多い人の世の紛糾した出來事の一切を、我身の事のやうに思ひ悩む心が強く起るのであつた。

樹木(きぎ)の葉は今は殘り無く散盡して冷い土を埋め、その落葉の上に落葉のしげく重(かさな)つたのもうす甘い香を立てながら、時雨に濡れて朽ちて行く。迫り來る寒さと共にいとど戀しさを增す故鄕を想ひながら、何時も夕暮の空を見る窓を打つて、霙の降る頃になつた。（大正八年四月九日）

紐育——リヴアプウル

出帆を知らせる銅羅がけたたましく鳴つた。船が動き出すと、棧橋に群る見送人も、甲板の上の見送られる人も、帽子を振り半巾を振つて別離を惜んだ。一尺、二尺、三尺——船側に白泡を湧立たせながら陸地を離れる船は、ハドソンの中流に浮び出て、徐に流を下り始めた。

その時だ。陸地の見送人の一團は、一齊に佛蘭西國歌を歌ひ出した。

Allons, enfants de la patrie,
Le jour de gloire est arrivé!
Contre nous de la tyrannie

甲板の上には、今、敵國獨逸の大軍に、國土深く侵入され、山河は蹂躙され、家屋は破壞され、財寶は強掠され、人畜は屠殺され、婦女は犯されて居る故國の危急に赴く若い佛蘭西人の幾人が佇んで居る。彼等は目に涙を湛へて、國歌を歌ふ同胞を見下して居た。中には若い妻女を伴ふのもあつて、女は夫の腕に縋りながら、見送りの人々と流し合つた涙を押へた半巾を、何時迄も手にした儘、失神したやうに立つて居るのであつた。

Aux armes, citoyens! formez vos bataillons!
Marchons! Marchons!……………………

愛國の歌は熱烈に歌はれながら、一脈の哀愁を帶びつつ、秋の日の午後の水の上に暫時漂つて消えた。間も無く、船は紐育の港外の、果しも無い青海原に出たのである。

一人の見送人も無く、二度と來るあてもない此の亞米利加に別れて行く自分の心は寂しかつた。往來を歩いても、顏色の黄色い、みすぼらしい日本人は、輕蔑と嘲笑の目を以て顧みられ勝だつたのだから、自分自身は感慨深く別離の情に惱んでは居ても、誰一人自分を惜んで吳れる者もあるまいと思ふ寂しさがあつた。

誰を見ても、自分とは種族の違ふ異國人ばかりの同船の客の視線は、兎角自分の一身に注がれて居るやうに思はれる。かういふ時に強く感じる反抗心と、それに伴ふ孤獨の悲哀は、涙ぐましい迄胸に沁みて來た。暫時はたださざ波の立つ海の上をわたる風に吹かれて居たが、やがて人目を避ける心地で、船室に下りて行つた。

突然の申込なので、いい室はとれなかつたけれど、二人詰の一室を、自分一人で占めたのは何よりも難有かつた。感情と感情と、ぴつたり合はない顏色の違ふ人間と、氣まづいおもひをして

一週間の航海を、寝起きを共にしないでもいいのだ。甲板の上の社交が面倒になつたら、此の船室に閉籠つて寝て居ればいいのだ。さう考へると自分の心は樂になつた。さうしてその樂になつた心持を、最も痛切に感じる爲めには、のびのびと臥床（ベッド）の上に寝轉（ねころ）ぶのが相應（ふさは）しく思はれた。亂雜に置いた旅鞄や外套を片附けて、出立の準備で疲勞した身體を、うつちやるやうに臥床（ベッド）に投げた。ふと何かしら枕の下に堅い物を感じた。手で探り出して見ると、それは小包で、しかも自分に宛てたものであつた。發信人の名は書いて無いけれど、誰かが船宛に出したのを、船室の給仕が受取つて、枕の下に入れて置いて呉れたのであらう。自分は胸を躍らせながら、くくり糸をほどいて紙包を開いた。

金文字のぴかぴか光る皮表紙の立派な本が現はれた。づつしりと重たいロングフェロオの詩集である。自分の手は好奇心に震へた。

未だに獸（けだもの）の血の通つて居る手觸りのする皮表紙をあけると、扉に數行の女文字が書いてあつた。

ふたたびは君を迎ふる事もあらじとさへおもはるる船出に際し君が住み馴れしケムブリツヂの詩人の集をささぐ

グウエンドリン・ウオルタアス

幾度も繰返して讀んだ。おもひも掛けない此の贈物は自分の心に深く觸れた。亞米利加を去る

に臨んで、自分の存在を忘れないで居て吳れる人のあつた事が、限り無く嬉しかつた。

ボストンの郊外に住む此の女の友達とは、全く不思議な縁で逢つた。

去年の夏期休暇に、首都ワシントンを訪れた時、市中を見物して廻る展望車に乘つた。自分の隣席には一人の娘を連れた上品な老人が居た。議事堂、大統領官舍、美術館、其他さまざまの、旅客が見る可き場所を見廻つたその間に、隣席の老人は、見馴れ無い日本の學生を珍しがつて頻りに話掛けた。彼は陸軍の退職將校で、自分がケムブリッヂの大學の生徒だと聞いて、其處からは餘り遠く無いボストンの郊外の家を訪問して吳れと云つて名刺を寄越した。

遠く郊外の岡の上の、ジョオジ・ワシントンの住んだといふ家も、その墓所も見た。附近の草原に下り立つて、遙かに見渡す野の中を貫いて流れるポトマック河の水の色さへ、今もありありと目に浮ぶ程自分の記憶ははつきりして居る。

足下の雜草の中には薄紫の野菊に似た花が、強烈な夏の午後の日光をまぶしさうに、花瓣を閉ぢて葉裏にかくれて居た。その花はケムブリッヂの野原にも、川の堤にも咲いて居るものであつた。殊に學校の裏手の空地には、いつぱい咲き滿ちて居たが、自分は草の名を知らなかつた。些かの風にも震へ易い、か弱い花は、日中は固く花瓣を閉ぢて居て、眞赤な太陽が西の山の背に沈

む頃、一片一片細かい花びらを開いて、夕暮の風にいきいきと咲き揃ふのであつた。日中の暑氣と讀書に疲れ切つた身體を、その花の中に埋めて、蜻蛉の出さかる空を仰ぎ見ながら、林の向ふに上る月を待つ宵もあつたのである。

それが此の觀光の旅に出て、ワシントンの岡の上にも見出したのは、友達に廻り逢つた懷しさを覺えさせた。自分は傍の老人にその花の名を訊いた。

「あゝ、それはブリユウ・セイラアでしよ。」

と老人にかはつて娘が答へた。白い着物の胸にも、つばの廣い麥藁帽子の上にも、眞紅の夏薔薇をさした十五六の娘は、くるくるした目に微笑を湛へて快活に話した。

「貴方は花がお好きなのですか。」

「エヱ殊にかういふやうな神經質な草花が好きです。」

自分がその花を神經質な花だといふと、老人も娘も手を打つて面白がつた。

それからそれと話が續くうちに、自分は春から初夏にかけて、此の亞米利加に夥しく咲くライラツクの花を好むと云つた。空も地も蒸されるやうな春光に、強烈な香を漲らすあの花の咲く頃は、人の息迄ライラツクの匂を伴ふやうにも思はれる。花を愛する故郷の姉のもとに、ライラツ

クの盛の景色を述べて、その樹を庭一面に植ゑる事を勸めたとも話した。
「まあ、ライラックがそんなに珍しいのですか。」
と圓い目を一層見張つた娘は、自分達の家を圍んで、春はその花が雲のやうに咲き匂ふのだと、女に特有の感歎詞を多く挿はさんで話した。
「是非春になつたら見に來て下さい。」
と無邪氣なほこりを感じながら勸めるのであつた。
再び展望車に同乘して、夕暮方の岡を下り、樹木の多い首都の市中を一巡して、各々の旅舍に近い四辻で別れたが、別れに際して老人と娘は、必ず一度遊びに來いと、うるさい程親切に云つて呉れた。
「ライラックの咲く頃に伺ひませう。」
と答へながら、自分は殘り惜しく手をわかつた。
上品な老人と、快活な娘の姿は、旅日記の中の一頁を占める懷しい挿話として、時にふと想ひ出される事もあつたが、忙しい學業に追はれ勝な上に、性來無性な自分は、必ず一度は訪問すると云つた言葉さへ、單に途上の挨拶に過ぎないものとして考へ去らうとしてゐた。

雪深い地方の長い冬が終つて、今年の春、遠山の肌も紫にくつきりと浮び出し、一雨毎に柔い土を破つて水仙やサフランの花の色づくのが、著しい歡喜であつたが、忽ち樹木(きぎ)の新緑は、生長の慾念に堪へ切れない狂はしさで萌え出した。此の學年が終つたら歐羅巴(ヨオロッパ)に渡らうと、豫而(かねて)計畫して居た自分には、これが亞米利加の最後の春だと思へば、印象は一層深く、草木の緑も、林檎の花の雪白も、蔓薔薇の花の紅も、目を刺すばかり光り輝き、さまざまの花の香は鼻を衝(つ)いて痛む程に感じられた。

ふと或日、學校から歸つて自分の部屋に入ると、机に一通の手紙が載つて居た。開いて見ると、それは思ひも掛けない彼(か)のワシントンの市中を見物した時、展望車に同乘した娘から來たものであつた。

ライラックの花が咲いたから、約束通り遊びに來て呉れと、子供らしい簡素な文で認めてあつた。自分はそれを讀返して、その手紙にも花の香が沁みて居るやうに思つたのである。

先方から云つて來た日の夕方、自分はボストンの郊外のウォルタアスの家を訪(おとづ)れた。なだらかな坂の起伏する町を走る電車は、樹蔭(こかげ)の暗い岡の下で止つた。うねうねと曲りくねつた坂道を上(のぼ)つて行くと、岡の中腹に並び立つ家の一軒から、白衣の娘が出て來て、半巾(ハンケチ)を振りながら坂の中

途迄馳下りて來て自分を迎へた。

「パパア、パーパア。」

と娘は家の方に相圖（あひづ）の聲をあげた。その家のポオチに釣つた釣床（ハンモック）に搖られながら、父親も待つて居て呉れた。

目の下に遙に見渡す岡や森の上にうつろひ行く夕空は露けく、そのうすら青い光の中に、眞白に冴えた三日月が浮んでゐた。

「貴方のお好きな花が咲いてるでせう。」

と娘に云はれる迄も無く、その家の庭や垣根ばかりで無く、附近一帶の家を圍んで茂り合ふ共の樹の上に、咲きさかる花は夕靄に包まれて、一樣に白い雲のやうにむらがつた。日中は歩けば汗を覺える五月も、暮れては通ふ涼しい風につれて、花の香は深く漂ふのであつた。娘は庭に下りて、兩手に抱へ餘る程、ライラックの枝を折つて來て自分の膝に置いた。

「グウェンニイ、グウェンニイ。」

娘は父親と並んで釣床に腰かけながら、家の奥に向つて呼んだ。その聲に應じて出て來たのが姉娘のグウェンドリンであつた。

夕闇の中にはつきりした輪郭をした顔を浮上らせて、脊の高い女は自分の方に手をさしのばした。妹のメリイとは違つて、上品な父親似の細面なので、低い聲でものをいふ時、少し首をかしげる癖を持つて居た。椅子を引寄せて自分の隣に掛けたが、心置の無い人々は異國人に對する同情と物珍しさから、自分を取巻いて頻りに話掛けた。

父親は太い煙管に煙草をつめては夜風の空にふかした。妹は輕い足拍子を取りながら、小聲で流行唄を口吟んだ。一番智識的の姉は、靜に少しねばる口調で、それからそれと、物の好き嫌ひなどを問ひかけた。

夕べの星が遠くに光るのを指さしては、天文學を學んだ事は無いかと訊いた。

「私はああいふ學問が好きです。高い塔の上で、晴れた夜の空の月や星を見て暮したら、さぞかしいいだらうと思ひます。」

と憧れ易い女性に特有の詩を心に描いてゐるのであつた。季節としては春もいいけれど、秋は一層身に沁みると、そんな事には頓着しない亞米利加人には似もやらず、有名な詩人の秋を歌つた句などを引いて云つた。

初めての訪問にも拘らず、勸められる儘に晩餐の御馳走にもなつた。亡き母のであらう、妹娘

にそつくりの婦人の肖像畫の壁に掛つて居る食堂だつた。明るい燈火の光で見ると、姉娘の顏には感情の浮動の現はれさうも無い堅苦しいところが見えたが、笑ふ時の目元と、話をする時の口元に、思ひも掛け無い柔い色つぽい微笑が浮び出すのであつた。

食後は客間で、姉も妹も洋琴(ピアノ)を彈(ひ)いた。自分は夜の更ける迄過(すご)して、再會を約して別れた。

それから後四月ばかりの間に、自分は屢々ウオルタアスの家に遊びに行つた。人のいい父親は、何時も喜んで自分を迎へて吳れた。妹は馴染むに從つて、惡戲(いたづら)をしては騷いだ。しかし自分が度々訪問する心持を持つたのは、姉の娘の爲めだつたと云つてもいい。世の中の浮薄な事を厭ふ心の強い姉には、心寂しい神經質なところがあつた。それが自分と話の合ふ根本(もと)だつたと考へられる。二人は屢々(よく)妹の彈く洋琴を聽きながら、客間の長椅子に腰掛けて話した。餘り近々と並んで居る若い女の肉體の溫かさを、胸苦しく感じる事もあつた。若しも自分が亞米利加人だつたら――でなければ相手が日本人だつたら、とふと考へて思ひ惱んだ事も無かつたとは云へないが、間も無く自分が歐羅巴へ渡る日は近附いて、不思議な緣でちかづきになつた人々にも、殘り惜く別(わかれ)を告げたのである。

「それではもう二度とお目にはかゝれないのでせうか。」

と最後の握手の手を放さずに、少し震へた聲で云つたグウェンドリンの目には涙があつた。
ふたたびは君を迎ふる事もあらじとさへおもはるる船出に際し君が住み馴れしケムブリッヂの詩人の集をささぐ

ともう一度口に出して繰返して、自分は過ぎた日のさまざまの場景を想ひ出して、亞米利加を去るといふ事を一層痛切に感じたのである。

その儘臥床の上に寢轉んで、とりとめも無い空想をほしいままにして居るうちに、此の頃の忙しさに疲れた身體は眠氣さして來て、何時の間にか午睡をしてしまつた。

晩餐の後で、自分は一人甲板に出て、肌寒い身に冬の外套を着込んで、遮るものも無く廣い空と水の間に掛る薄月の光を仰ぎながら、波の音を聽いた。搖れるともなく搖れる靜な航海は、自分の心を冷く澄ませて、さまざまの過去の悔恨と悲哀に、著しく感傷的な情緒に浸らせた。長い間秋の夜の濕つぽい潮風に吹かれて、骨迄も寒く凍るばかり、船端の欄干にもたれて佇んだが、ふと思ひついて、詩集を送つて吳れた人に無線電信を打つ事にした。

靜なる海の月夜に君が賜物なる詩集を讀みつつあり

電信用紙にかう認めたのを係員に手渡した。その一語一語は、目の前の青い月光の中を、透に

白く流れて行くやうに想はれた。
翌日も海は滑かに凪いで風も無かつた。同船の客は亞米利加の學生で、ケムブリツヂかオツクスフオドに入學する目的で英吉利へ行く者が多かつた。無邪氣でづうづうしい彼等は、他人の感觸を害ふ事などは氣にも止めず、船中を我物顔に横行した。甲板で遊戯をし、運動競技をして居るのも彼等であつた。喫煙室を占領して、歌をうたつたり、高聲で話したり、笑つたりして居るのも彼等であつた。その苦勞の無ささうな、物を想ふ事も無ささうな、絶えず何かしら身體を動かさないでは居られ無い國民を、羨しくも忌々しくも思つた。
圖書室の一隅で本を讀んで居ると、その學生達は無遠慮に寄集つて來て、何處に何しに行くのかなどと訊いた。話をして見ると、中には自分の居た大學の生徒だつた者もまじつて居た。日本及日本人に對して全然無理解な連中の事だから、自分が亞米利加の大學で勉強して居たと云ふ事を聞いて、如何にも亞米利加の文明のおかげで教養を積み得たのだと思ひ決めたやうな態度を見せるのであつた。さうして船中の米國婦人達に自分を紹介したりした。
その女客の中に、怖しく威張つた態度の、大兵肥滿の婆さんがゐた。凡そこれ程愛嬌の無い顔はあるまいと思はれる程、優しさを缺いた顔であつた。大きないかつい鼻の下には、男のやうな

髭が生えて居た。胸も腹もはち切れる程肉の盛上つたのが、一歩々々足を運ぶにも、苦しい波を打つてだぶついた。さうして此の婆さんには、三四人、中年のも若いのもまじつて、女ばかりの仲間があつて、それが一様に尊敬の念を形に示した叮嚀で、髭の生えた婆さんにかしづくのであつた。

婆さんは平和運動の爲めに、その同志の婦人を從へて倫敦（ロンドン）に渡るのだと得意さうに云つた。

「何故日本は獨逸に對して宣戰したのです。理由が無いではありませんか。」

と如何にもそれはお前の責任だぞと云はんばかり、詰問的な態度で自分を睨んだ。生れつき白目勝な目は、傲慢と意地惡の象徴のやうに思はれた。

誰が見ても一風變つた女が、誰の目にもつき易い黃色人を捕へて、何かしやべり出したので、其處いらに居る人々は、好奇心に滿ちた顏つきで、忽ち周圍に集つて來た。

その人々の集つて來たのを見ると、婆さんは一層得意になつて、嗄（しやが）れた聲を張上げて、戰爭の慘禍を說き、國際平和主義を宣傳し始めた。隣國に脅かされる事の無い亞米利加人に特有の樂天的な無責任と、女に特有の現在を忘れた高遠がりに、ノオマン・エンヂェルの說いたやうな打算的な非戰論をまぜて、婆さんは一堂の人を說服しようと努めた。そのだぶだぶの頰邊は昂奮して

痙攣した。

「貴方がたは此の戰爭の悲慘と無益を認めませんか。」

と婆さんは又しても傍の自分を顧みて詰（なじ）つた。その態度と、その時の迷惑な立場が自分を短氣にした。

「勿論戰爭の悲慘と損失は、世界中の誰だつて知つて居ます。しかしむざむざ損だと知りながらも、時の勢が砲火をまじへさせる場合も想像出來ませう。たとへば個人にして見ても、喧嘩の馬鹿々々しさは解り切つてゐながら、時には拳骨を振廻さなければならない場合もありますから……」

「オ、、日本人は好戰國民だから。」

婆さんは唾棄する調子で、自分の言葉を遮つて、大形（おほぎやう）に歎息して見せた。さうして又、前と同じ樂天的な非戰論を、同じ言葉で繰返し始めた。聲は益々高くなり、頰邊の贅肉は更に烈しく痙攣した。

自分は其處に居たたまれなくなつた。今は婆さんは、自分一人を相手にして居るのではなく、集つた一同に主義を宣傳して居るのには違ひ無かつたが、最初からの行きがかり上、誰人の視線

も自分に注がれて居るものとしか考へられなかつた。流石に穩當で無いと思つて、暫時は辛棒したが、婆さんの止度も無く得意の色を增して、一段力強く聲を張る度に唾の飛ぶ唇を見て居ると、むらむらと反抗心が湧いて來て、面あてがましい振舞をしてやらないでは承知出來なくなつた。自分はふいと立上つて、物も言はずに人を搔き分けて出た。

不愉快な氣持を一掃しようと思つて甲板に出ると、何時の間にか海の面は一面の濃霧に包まれて、船は折々警笛を鳴しながら徐に進行を續けて行くのであつた。ありあはせた籐椅子に腰掛けて、霧にかくれて目には見えない船側に碎ける韻律的な波の音に耳を傾けた。

「今日は。」

ふと傍に人が來て聲を掛けた。若い佛蘭西人であつた。

「如何です、あの年とつた獸の非戰論は。」

彼は同情を求めるやうに、にこにこした顏附で、自分のよりももつと拙劣な英語で話しかけた。その英語の拙なさが、自分には親しみの種であつた。

「勿論國際間に永久の平和が保證される事は、亞米利加人でなくたつて希望するさ。しかしそれは將來の希望に過ぎ無い。現在目の前で、家を燒かれ、夫を殺され、妻を犯されて見るがいい、

いくら亞米利加馬鹿野郎だつて默つてはゐられやしない。」

彼は激越な調子で罵つた。さうして、彼等が戰時の倫敦に行き、巴里に行つて非戰論を唱へるのを、自國の存在を危くするもののやうに憤つた。

「しかし別段心配する事はありますまい。平和運動は默つて居ても戰後に起る事は確かですが、今現に如何にして勝たうかといふ事ばかりに、國を擧げて努力して居る英佛の國民の耳に、生溫い理想論なんか入るものですか。あれは金持の亞米利加の女のひまつぶしの慰樂に過ぎませんよ。」

自分もいい味方を得たつもりで相槌を打つた。二人は互に下手な英語につかへながら、濕つぽい甲板に語合つた。

夕方から霧は晴れて、暮れかかる海の上の空に月が出た。船は北に行くのであらう、少しばかりの風も身に沁みて寒かつた。

日を經るに從つて、船客は互に色彩を鮮明にして來た。殊に戰爭の勃發が、人々の心に褊狹な愛國心を起させるので、一層それは強められた。八月の初め、獨逸が宣戰を布告してから、紐育から英吉利へ行く乘客專用の贅澤な汽船は數が減つた。英船は何時何時敵艦に襲はれるかわから

ないので、亞米利加線(アメリカンライン)の船は繁昌した。平生は客よりも荷物を主とした船たから、設備もお粗末で、船室も一等といふのはなくて、二等が上等だつた。その爲めに客種は意想外に惡かつた。

自分の食卓には英吉利人が多かつた。英吉利人らしく、眞直(まつすぐ)に瘦せて脊の高い醫者が、食事の時は會話の中心になつた。自分の前には、如何(どう)見ても勞働者らしい、日燒けのした、肩幅の廣い男が、禮儀作法を辨(わきま)へないで、づうづう音(おと)をさせて肉汁(スウプ)を吸つて居た。左隣には伊太利人らしいのが、いつも葡萄酒を樂みながら、訛の拔け切らない英語で、萬べんなく愛嬌を振撒いて居た。右隣には、未だ廿歳(はたち)を二つか三つ位しか出ないらしい、靑ざめた顏色の英人が居た。一卓子(ひとテイブル)に十人ばかり居る中に、誰が見ても獨逸人らしい老人がまじつて居た。

「あれは獨逸人に違ひ無い。」

と食卓の者は眉をひそめてささやきあつた。人の惡い醫者は、何氣無い風をしては、しきりに老人の身元を訊ねた。

老人は誰人にも屈しない態度で、人々が彼に對して敵意のある事を知つてる爲め、わざと弱味を見せまいとするところがあつた。

「私は市加古(シカゴ)の生れだが、紐育で三十年も商賣をして居ます。」

などと、訊(きか)れもしないのに自慢さうに云つたりした。猶太(ユダヤ)人の鼻の形で、その鼻の頭には酒さびが浮いて赤々と焼けて居た。

食卓の話題も、多くは歐洲戰爭であつた。今日も亦獨逸皇帝(カイゼル)は、惡名(をめい)の限りをしよはされて、人々の口の端(は)に上つた。

「しかし兎に角一種の英雄には違ひ無い。」

と自分は憚らずに云つた。勿論戰時の敵愾心を無理な事とは思はないが、昨日迄は左程に憎んでも居なかつた獨逸及び獨逸國民を、何一つ取柄の無い獸(けだもの)のやうに罵る一座に對して、自分の持前の反抗心と同情心は、うつかりした言葉を唇に浮ばせた。その癖自分は、日本の役人や教授や軍人が崇拜して居る獨逸を、決して特別に好んでは居なかつた。

「ハハア、貴方は獨逸贔屓(プロヂヤアマン)ですか。」

と英吉利の醫者は皮肉な微笑を浮べながら突込んだ。一座の人の注意が自分一人に集つたのは勿論である。

「イイエ、決して。」

自分は言葉の不自由を痛感しながら辯解した。

「私は獨逸贔屓(ブロヂヤアマン)ではありません。獨逸が國家として抱いて居る野望と、その國民の暴虐を憎みます。しかし同時に彼等の持つてる意力と執念の強大な事には、敵ながら感服させられます。さういふ意味で、惡く云へば稚氣を帶びて居る獨逸皇帝(カイゼル)に、英雄の面影を認めるのです。」

「フム日本も獨逸と御同樣軍國主義だからね。」

突然猶太(ユダヤ)人の鼻の持主の老人が口を出した。

「吾々亞米利加人は、獨逸のやうな自由の敵、平和の仇を、あらゆる點から憎む。獨逸皇帝(カイゼル)の如きは、戰後セント・ヘレナに流すべきものだと思つて居る。それなのに君は……」

彼は怖ろしく誇張した身振りで、四圍(あたり)の者に身の潔白を證明しようと努(つと)めながら、食卓を叩いて詰つた。餘りに仰山な昂奮が却て彼を獨逸人だと思ふ疑惑を深めて、食卓の者は寧ろ苦々(にが／＼)しげに老人を見た。中にはかへつて自分の方に味方して、密(ひそか)に目配(めくばせ)をする者さへあつた。

「どうぞ誤解なさらないやうに希望します。私は決して獨逸贔屓(ブロヂヤアマン)ではありません。第一豚の腸詰で麥酒(ビイル)を飲むよりも蝸牛(まひ／＼つぶろ)で葡萄酒の方が結構ですから。」

自分は老人が淺薄にも、聯合國人側に同情があるといふ事を、同じ食卓の英佛人に見せ度い爲めにする見え透いた態度を見ると、かへつて落(おち)ついて冗談を云ふ餘裕を持つた。人々は此の諧謔

に聲を揃へて笑つた。

「萬歳。」

と可笑しな發音で聞き噛りの日本語を叫びながら、葡萄酒の盃を高くあげた佛人もあつた。

食後、甲板に出ると、今日も亦午後の海は霧になつて、腐つた玉子の黄味に似た太陽がどんよりと西の空にかかつて居た。

「どうしてもあの爺さんは獨逸人に違ひありません。」

と自分の右隣に坐つて居た若い英人は、後からついて來て話掛けた。

「あんな、誰が見たつて獨逸人に違ひ無い者を、默つて同船させて置くやうな手ぬるさが、聯合軍の振は無い所以(ゆゑん)なんだ。」

と彼は面に血をのぼらせて息巻いた。

此の若い英吉利人はニユウ・キヤツスルのアアムストロング會社の技師だと名告(なの)つた。上役の機關長に從つて、亞米利加の或工場に臨時雇で行つて居たのが、契約期限が切れたので歸國するところなのであつた。彼はまだ二十二歳で、柄のちひさい日本人の自分を、おない年位に考へて、いい友達を得たつもりでくつついて離れなくなつた。内懷(うちぶところ)から會社の技師の證明書を大切さうに

取出して見せた。彼は彼が技師だといふ事を、何よりも自慢して、器械の智識の皆無な自分を捉へて、しきりにその道の話をした。

「酒場(バア)に行きませんか。お互の健康と航海の無事を祝しませう。」

と彼は自分の腕をつかんで促した。

「第一僕は、あの粗野な亞米利加人(ヤンキイ)の濶歩して居るのを見て居ると我慢が出來無くなる。酒場(バア)には機關長(チイフ)もゐるでせうから君を紹介しませう。機關長(チイフ)はいい男でね、非常な酒豪(さけのみ)なんです。」

彼は一人で昂奮して、隊を組んで甲板を縱横に飛廻る亞米利加の學生達を忌々しさうに睨みながら、自分を酒場に引張つて行つた。

「亞米利加がいくら威張つたつて、まだまだ英吉利の足下にも及びはしない。第一吾々にしたところで、今度なんか招聘されて行つて、萬事教へて來てやつたんだから。」

などゝ二言目には自分の專門の器械に話を持つて行つた。

舳(へさき)に近い上甲板の酒場には暗く見える程人が集つて居た。女の前では一擧手一投足さへ、愼まなければならない慣習に馴れて居る西洋人も、時にその芝居がかつた世間體(てい)の衣を脫いで、男性ばかりの飾氣(かざりけ)の無い世界を樂しまなければ堪へられないのであらう。恰度(ちやうど)女が女同士の會合には、

屢々はめをはづすやうに、此の場合男は男ばかりの交際を悦んで、盃をあげて居たのだ。

「君は麥酒ですか、それともウヰスキイですか。」

「ウヰスキイにしませう。」

技師は自分の好みを訊いて註文した。二人は盃を合せて飲んだ。

「アア機關長(チイフ)がゐる、機關長(チイフ)がゐる。紹介してあげるからおいでなさい。」

と彼は恰も英雄を崇拜する心持を面に現はして、自分の腕を引張つて、人々を搔き分けた。片隅の長椅子に掛けて居た機關長といふのは、脊の低い上に、はち切れる程肥(ふと)りかへつた老人だつた。頭の天頂(てつぺん)の薄赤く禿た、無髯の、赤々と光つた顏がちひさく見える程、幾重にも肉塊に肉塊の重なつた猪首が、眞四角ないかつい肩の眞中に蟠(わだかま)つてゐた。まんまるく飛出した太鼓腹をもてあましたやうに身體を崩して、彼は麥酒を飲んでゐた。

「機關長(チイフ)。」

若い技師は明かに尊敬の態度を示しながら、しかも懷しさうに呼掛けて、自分を紹介した。

「此の人は日本の學生で、英吉利に勉強に行くのださうです。」

「フム、吾々は大に歡迎しますよ。日本は我が英吉利の同盟國だ。」

機關長は厚ぼつたい手を出して握手を求めた。

「それは英吉利は亞米利加などとは違ふさ。君達のやうな若い外國人が、亞米利加に行つて勉強するのは間違つて居る。第一彼等は完全に英語を話す事さへ出來無い。」

機關長は自分の詭辯に相手が驚く事を豫期した態度で、得意さうに麥酒を飲んだ。

「ネ、彼等の話すのは、あれは亞米利加語さハツハツハツハ。」

笑ふとばちんとはじけてしまひさうな相好を崩して、腹を抱へて笑つた。

彼も若い技師も醉の出た顔に喜悅の情を漂はせて、亞米利加と亞米利加人を罵る心地よさを享樂した。

夕方から、海の上の霧は愈々濃くなつて、同じ船の上ながら、二三間先は灰色に包まれて見えなかつた。その濃霧は、目に沁みるやうにも思はれ、何かしらきな臭い匂ひを持つて居るやうにも感じられた。手探りで歩く手の先に、冷々と觸れた欄干につかまつて、遙の下の水を覗いたが、とぼんとぼんと船側に碎ける音ばかり聞えて、飜へる波の白さも見えなかつた。船は終夜警笛を鳴らして進んだ。

次の日も濃霧は晴れなかつた。窓の硝子は濡紙を貼附けたやうに曇り、少しの隙間からも壓力

のある濕つぽい霧は室内に侵入して來るのであらう、船中は光り無く濁つて、人々の顔の色も暗く見えた。その霧の凝つて滴る露に濡れた甲板には、流石に誰も出なかつた。時たま不安らしく扉を開けて顔を突出して見る者もあるが、忽ち渦巻いて押入る霧にむせるやうに面をそむけて、扉を閉してしまふのであつた。

この暗鬱な有様は人々の心を沈ませて、はしやいでばかり居た亞米利加人も、浮かない顔附をして圖書室に屯して居た。その聲も何時もよりは低く、その歩調も何時もよりは遲かつた。

朝のうちに船室に閉籠つて、何となくものうい身體を臥床の上に横たへて居たが、午後からはそれにもあきて、自分も圖書室の一隅に席を占めて、ロングフェロオの詩集を、何處といふ事も無く讀んで居た。ところへ、若い技師は自分を求めてやつて來て、並んで掛けて話し出した。話好きの彼は、一度捕へた聽手をなかなか放さなかつた。英吉利の偉大な事、英吉利人の才能の勝れて居る事、その品性の高雅な事、その商工業の盛大な事、扨て此の度の戰爭には正義にくみして參加した事、さうして結局は、キッチナア元帥の大軍の編成を待つて獨逸を粉碎すべき事を、彼は英吉利人に特有の常識的な論調で、しかも確信深く說き立てた。さうしてそれに比較して、亞米利加の文明の程度の低い事、亞米利加人の無智幼稚粗野野蠻な事を、此の世界を知らない日

本人に教へ込まないでは承知しなかつた。

「どうも大層話がはずむやうですね。」

とかすれた聲を掛けながら、何時も食堂では自分の前に坐る百姓のやうな英吉利人が近寄つて來た。烈しい肉體の勞働で鍛へた身體は、餘りに片寄り過ぎた力業の爲めに、癖のついた儘發育してしまつた感じを起させた。不釣合に幅の廣い肩、彎曲した脚、赤黒く日に焼けた皮膚の厚い顔、泥土の沁み込んだ堅い手が、如何見ても頭腦の働きの鋭さを想像する事の出來ない種類の人間であつた。

「どうも退屈で爲方がありません。私は貴方方のやうに學問も無いから、本を讀む事も嫌ひだし……」

何處の田舎の訛か、烈しい響を持つ言葉で、彼も會話の仲間に入つた。

「貴方は何處です。」

と技師は餘り歡迎しない、多少見くびつた態度で訊いた。

「私はウヱヱルスです。久しぶりで故郷に歸るのです。」

四十男は嬉しさうに答へた。

彼は自分で庭園師だと云つた。亞米利加の百萬長者の家に雇はれて、十年近くも紐育の郊外で働いた。

「矢張り故郷が一番いい。」

彼は金を蓄めて歸る生れた土地を懷しんだ。正直さうな、頑固さうな男は、自分よりも遙に年齡の若い者に對して、その半生の刻苦をほこる調子であつた。それが技師には堪へ難かつた。

「僕は技師です。」

と又しても內懷から證明書を出して相手に見せた。機關長と共に招聘されて、亞米利加の大工場に技術を教へに行つたのだと話した。

「亞米利加人なんぞは、いくら威張つたつて吾々英吉利人に教へて貰はなければ何も出來やあしない。」

と若者は、其處いらにうごめいて居る亞米利加人を顎でさし示して得意がつた。

「さうとも。私だつてつまり亞米利加人に園藝を教へに行つたやうなものだ。」

と一人も圖に乘つて調子を合せた。二人は亞米利加人を罵倒する快感によつて、一心に結び付いた。さうして左右から自分を挾んで、亞米利加を罵る快感を縱にした。

「吾々は日本人を尊敬して居るけれど、亞米利加人は日本人に對して、何か不正當な待遇をしようとしたのではありませんか。」

四十男は一人でも友達が欲しさうに云つた。

「アアそれは加州の土地問題だ。」

と技師は横手から話を奪つたが、そんな事は詰らないと云つた風で、

「どうです、三人で酒場（バア）に行かうぢやありませんか。飲みながらゆつくり話しませう。」

と突然立上つた。

「私は酒は飲まない。」

庭園師（にはし）は眉をひそめて興ざめた顏をした。

「酒は健康によくないし、第一浪費だ。」

と唾棄するやうにつぶやいた。

「フム。」

技師は輕蔑し切つた態度でせせら笑つて、自分の腕をつかんでその室を出た。

「あいつは百姓だね。」

彼は自分のやうな技師などとは、對等にはつきあへ無い階級のやうにくさした。

甲板に出ると、冷い濃霧は目も鼻も口も押包んで、窒息するやうな壓迫を感じるのであつた。探り足で酒場に行くと、鈍い電燈の光の下に何時もに變らない人數が集つて居たが、それが一様に額を集めて、ひそひそ私語きかはして居た。一種不安な空氣が直ぐに感じられた。

「如何かしたのですか、機關長。」

技師は其の集團の中心人物らしい機關長の傍に行つて訊いた。

「ウム獨逸の潛航艇が近くに居るさうだ。」

「潛航艇ですつて。」

「無線電信がかゝつて來たのだ。」

と機關長は不安の中にも、その消息に通じて居る事をほこる様子だつた。彼の語るところに據ると、近くの海を航行して居る汽船から、その船がリヴアプウルを出てから、敵國の潛航艇に追掛けられた事實を報じて來て、此の船の行先を戒めたのださうだ。

獨逸の潛航艇が紐育の港外迄來て居て、英船を待受けて居るといふ風説は、未だ紐育に居る頃から夙にあつたが、今現に近海にその危險が迫つて居るといふ事實に面する迄、誰人も生命の不

安を實現しなかつた。其處へ持つて來て、俄に此の電信を受けたのだから、誰人も自ら聲をひそめ、息を殺して額を集めたのも無理はなかつた。

「亞米利加の汽船を撃沈する事はあるまい。」

と口々に云ひながら、誰しもその萬全を信じては居なかつた。

「しかし間違つてやられないとも限らない。」

直ぐに不安の本心がつぶやくのであつた。

「兎に角婦人達には此の事は知らせない方がいい。」

と申合せて、彼等は酒場を出て解散した。自分達も其の場の調子から、盃を手にする氣はなくなつて、人々の中にまじつて甲板に出た。空と水を包む濃霧の中に、無數の潜航艇がひそんで居る不安を、自分の心に感じなかつたとは云はれなかつた。

女達には聞かせるなと申合せたにも拘らず、何時の間にか此の風說は、船中の隅々迄行き渡つた。喫煙室でも、圖書室でも、人々は顏色を變へて、無益な、しかし避く可からざる不安に目を光らせて、噂に噂を附加へた。平和運動の婆さんは、愈々神經質になつて、其處に居る誰彼を捉へては、戰爭の生む罪惡を力說した。

自分も暫時(しばらく)は立騷ぐ人々の間に立つて、物珍しい光景を、不安ながらも面白半分見て居たが、しまひには度胸がよくなつて、又一隅の椅子に腰を下して、ロングフェロオを開いた。

ふと、少し向ふの壁に背をつけて、一心に編物をして居る女があつた。室內の人の總てが潛航艇の恐怖に結びつけられて、一團となつて立騷ぐのを他所(よそ)にして、忙しく手先を動かして居るのであつた。沈着(おちつ)いたその態度が床しかつた。燈火の陰影(かげ)になつてゐる横顏は、暗くてわからなかつたが、此の船中で今日迄は見掛けなかつた人らしかつた。薄紫の絹の上衣は燈光(あかり)を浴びて輝いた。黑い袴(スカアト)の膝の上を傳つて床の上迄つながる赤い毛絲の玉は、細かい指の動きにつれて光る銀の針に誘はれて、彼女の靴の爪先に踊るのである。四圍(あたり)の騷々しさに無關心に編物をしてゐる人の姿は、何處かの畫廊で見た繪の中にあつた光景のやうに思はれた。

濃霧は夜に入つて雨になつた。ひそひそと甲板をうち、丸窓をうつ雨の音は、此の日人々の心を脅(おびやか)した風說が生む幻を、一層物凄く思はせた。誰の顏も陰影を帶びて、廣い船中には、物の音もひそめいた。さうして、時にかすかな衣擦(きぬず)れさへ、耳を聳立(そばだ)たしめるものになつた。自分は早く船室に下りて、臥床(ベッド)に入つたが、枕の下に遙に遠く韻律を保つて聞える波の音が耳について、その波の音が生むさまざまの聯想から、時にふと此の船と共に、水底に沈んで行く自分の姿さへ

想像した。

次の日目の覺めた時は、海には風が出たのであらう、船は些か搖れて居た。紐育を出た日から、飴のやうに重たく澱んで居た水は、騷がしく船の腹を打つた。甲板に出て見ると、雨の名殘りのちぎれ雲は、水面に近く、風になぐれて飛び、海鳥の群は、波のしぶきに濡れながら、異樣な叫聲を立てて、船の前後を飛廻つた。

今日も亦所在なさに、圖書室でロングフエロオを讀んで居ると、昨夜の女が靜に入つて來た。小柄ながら、釣合のよく取れた姿のいゝのが、自分の居る直ぐ側の椅子に掛けると同時に、手の中の毛絲の玉を床に投げて、銀の針を動かし始めた。服裝は昨夜と同じだつたが、東の窓から入る光線を眞正面に浴びた顏の、鼻梁や耳朶には血の色が透いて見え、小造の顏には少し大き過るやうな、はつきりした二重まぶたの目は濡れたやうに輝いてゐた。その躰一體に、皮膚の色に冴々しいところが無く、髮の毛も何方かといへば薄い方なので、ともすると多勢の人の中では目に立たない風情があつた。女は一心に手を動かして編んだ。その細い指のさきに絡んだ一筋の毛絲は、針にあやつられて微かに震へ、床の上の玉は踊りながら、段々ちひさくなつて行くのであつた。

室内には、向ふの隅で無器用な手つきで洋琴を弾いて居る若者以外には、別段誰も居なかつた。
船は左舷に傾いた儘進んで行き、時間は音もなく忍び足に過ぎて行つた。
突然多勢の話聲が聞えて、亞米利加の學生の一群が入つて來た。
いきなり、その中の一人は自分の前に來て云つた。
「船員の寡婦や孤兒を救援する爲めの基金を集める目的で、音樂會を開き度いのですが、是非貴方がたの賛成を願ひ度いのです。」
「勿論賛成しませう。」
と自分は簡單に答へた。
「實は貴方には何か餘興をやつて貰ひ度いのですが。」
「餘興なんて何も出來ませんよ。」
自分は驚いて答へた。
「何か日本の歌でもうたつて吳れませんか。」
世話人の學生は執拗く勸めた。明日の晩催すその音樂會は、勿論船員の家族救護の基金募集の爲めには違ひ無いのであるが、そればかりでなく、獨逸の潛航艇が出沒するといふ噂の爲めに神

經質になつて居る乘客の不安を忘れさせ、且又乘客相互の親睦をはかる目的だといふのであつた。

「なるべく此の船中に乘合せた各國民が、それぞれ餘興に出るといふ事にし度いのです。」

と側から一人の學生が加勢した。

「駄目です。うたひ度くもうたへません。」

と自分は強情に斷つた。

氣が付くと、編物の女も三四人の學生に圍まれて口説(くど)かれて居た。

「でも私は何も出來ませんもの。」

娘は困つた顔をして伏目のまま答へた。

「音樂でも、唱歌でも、朗讀でも、貴方のお好きなものを願ひます。亞米利加の御婦人方には大概御承諾を得ましたし、佛蘭西の方も多分出て下さると思ひます。」

「それにあの日本の人にも賴みました。」

と一人の生意氣さうな學生は自分の方を見ながら云つた。その態度が、自分の邪推かもしれないけれど、人種的偏見を帶びて居るやうに見えたので不愉快だつた。

「噓です。私は何もやりはしません。」

と自分は明瞭に事實を告げた。學生達は驚いて、一齊に自分を見守つた。

「私は切符は頂戴しますけれど、無藝ですから、餘興に出る事はお斷りします。」

數分間沈默が續いた。

「それでは爲方がありませんから、切符だけ買つて頂きませう。しかし何とかして願はれるものなら願ひ度いのです。」

と云ひ殘して、學生の群は何か口々に話合ひながら、中には口笛を吹くのもまじつて、やがて室外に出て行つた。その姿が見えなくなると、

「ほんとに私は何も出來ないんですもの。」

と娘は自分の方に輕く會釋しながら、辯解らしく云つた。さうして又一心に編物の手を動かし始めた。

午後から、自分は又圖書室に出かけたが、密に期待して居た編物の女の姿は見えないで、平和運動の連中と學生達が入りまじつて、騷々しく話合つて居た。自分が入つて行くと、恰も待構へて居たやうに、平和運動の連中の中では一番若い頑丈造りのがやつて來て、又しても音樂會に出演しろと、惡叮嚀に勸め始めた。わかり切つた事なのに、その催しの主意の結構な事を、繰返し、

繰返し說いたが、自分は結局承知しなかつた。

翌日は麗に晴れて、海は又靜に凪いだ。珍しく雲の無い靑空を見たので、日光を浴びて甲板を步く人の數が多かつた。亞米利加の學生と、平和運動の女達は、人々を捕へて今夜の音樂會の切符を賣りつけた。

圖書室には割合に人影が少ないので、自分は久、ろくに讀みもしない詩集を手にして行つた。今日も亦編物の女はその室の一隅に、針の手を忙しく動かして居た。

「オオ貴方は如何なさいました。私はどうしていいか困つてしまひましたわ。」

自分の足音に顏をあげた娘は、いきなり立上つて斯う訊いた。大きな目を細くし、額に立皺を寄せて、ほんとに困つてしまつたといふ表情をした。

「何をそんなに困つてらつしやるのです。」

と自分は腑に落ちないで訊いた。

「アラ貴方は勸められはしませんでしたか、執拗く。あの平和運動の御連中に、音樂會に出て下さいつて。」

「アア、それなら勸められましたが、矢張り斷つてしまひました。」

「マア貴方は強情なんですね。私は何といつてもうるさく云つて放さないので、とうとう出ると云つてしまひましたの。あの學生達だと斷り切れたと思ひますけれど、相手が亞米利加の御婦人でせう、かういふ時は女の方が執拗くていけないんですよ。」

はきはきした物言ひをして、娘は遠慮氣の無い無邪氣さで、ちひさい口をとんがらかして不平を云つた。

二人は自然と其處に並んで腰かけて、それから會話の緒がほどけた。

娘は純粹の倫敦子だつたが、三年前に、外交官の父が赴任する事になつたので、一家を擧げて亞米利加に移り住んだが、生來亞米利加が嫌ひで、どうしても生れた土地が戀しく、かねがね兩親にせがんで居たのが、今度やうやく許されて、倫敦の祖父母の家に歸る事になつたのだと云つた。

「私にとつては倫敦程なつかしい所はないんですよ。」

と日に日に近づきつつある大都の景色を、細々と物語つた。

晩餐の後で甲板で歩いて居ると、技師と庭園師につかまつて、三人並んで足を揃へて、幾度となく舳から艫へ、艫から舳へと散歩した。又しても亞米利加人に對する反抗心から、二人は今夜

の音樂會をさへ、理由も無いのに、口を極めて罵つた。雨の後の冷々とした秋の夜の空に、潮風に吹かれてかかる青白い月は、水の面に碎けて、船の廻りに躍つた。あまり明るい月あかりは、潛航艇の恐怖を忘れさせた。

音樂會の始まる時間も近づいたので、人々は誘ひ合つて會場に下りて行つた。自分は、置き忘れた詩集を取りに、圖書室へ入つて行くと、其處に編物の女が詩集を開いて讀んで居た。

「拜見して居ましたが、これは貴方のでせう。」

娘は本を閉ぢて自分の方にさし出した。

「どうぞ御覽下さい、よろしかつたら。——貴方は今晩は餘興をなさるんですね。」

「エエ今更爲方が無いんですもの。ロングフェロオでも朗讀しませうか。」

と女學生風の拔け無い飾氣の無い物言ひをして微笑した。

「音樂會が始まりますからいらつしやつて下さい。」

夜會服を着込んだ亞米利加の學生が、大きな聲で觸れ歩いた。人々はざわめいて、會場にあてられた食堂に入つて行つた。

「御一緒に行きませうか。」

といふと、娘は默つてうなづいて立上つた。

廣い食堂にいつぱい集つた人々の後の方に、自分達は席を占めた。亞米利加の學生は、何れも禮服をつけて、嬉しさうに會場を斡旋して居た。婦人客も、多くは他所行きの服裝をして居たが、編物の女――ミス・ロビンソンは質素な平生着の儘であつた。

先づ、白髮の老事務長が、船員遺族救護基金の性質を說明し、且つ今宵の催しに對して感謝の辭を述べた。それから亞米利加の學生達が、入替り立替り、歌をうたつたり、手品をつかつたり、落語をしたり、洋琴を彈いたりした。

「どうぞ御用意を願ひます。この次は貴方の番ですから。」

世話人の學生が來て、ミス・ロビンソンに私語いた。娘は顏を赤らめて、うなづいた。

學生仲間の一人の提琴が終ると、女は世話人に促されて立上つた。手には詩集を持つた儘、人々の間を分けて演壇の方へ出て行つた。一齊に湧起る拍手に赤面して、暫時はうつむいて佇んだ。その姿は氣の毒な程迷惑さうだつた。思ひ切つたといふ風で、顏をあげると、ぴたりと拍手は止んで、滿場寂然と靜まつた。娘の顏は蒼白くなつたが、手にしたロングフェロオの詩集を開くと、唇の乾きに震へた聲で朗讀し始めた。

The night is come, but not too soon;
And sinking silently,
All silently, the little moon
Drops down behind the sky.

There is no light in earth or heaven,
But the cold light of stars;

聲は低く咽喉に絡んで苦しさうだつた。

Is it the tender star of love?
The star of love and dreams?
O no! from that blue tent above,
A hero's armor gleams.

と稍高く聞えた時、胸の動悸と感情の昂奮に息は愈々苦しくなつた、遂にはかすれて聞えなくなつた。それでも暫時は途切れ途切れに續いたが、やがて、

O star of strength! I see thee stand
And smile upon my pain;

といふところ迄來た時、無理に聲を張れば張る程、唇はたゞ微かに痙攣して、言葉は咽喉に詰つてしまつた。その儘其處に、どうにもならなくなつて、立すくんでしまつた。一秒、二秒――どうなる事かと思はせたが、もう一度白けた額(ひたひ)をふり仰ぐと、默つて一禮して、詩集を閉ぢた。その苦しい立場を慰めるのと、兎に角一人の番の濟んだのをはやす拍手の中を、娘はわきめもふらずに通つたが、自分の傍を過ぎて、自席には戻らずに、詩集を胸に抱いた儘、會場の外に消えてしまつた。續いて平和運動の連中が、眞劍になつて、うたつたり、彈いたりしたが、自分の興味はちつとも起らなかつた。ただ、彼(あ)の娘は室外に去つてから如何したらうと、そればかりが氣にかゝつた。とうとう中座して、喫烟室や圖書室を覗いて見たが、その姿は見えなかつた。甲板にも出て見たが、其處にも見えなかつた。

夜更けて月は愈々白く、海も空もはるばると青みわたつた中を、船は滑にすべつて行くのであつた。

毎朝々々、起きると直ぐに行つて見る食堂の入口の海圖の上に、船の位置を示すちひさな米國

國旗は、既に著しく陸地に近づいて來た。

此の朝は、清々(すがすが)しい甲板を歩く時も、ミス・ロビンソンの姿を心に求めた。若い娘の事だから、途中で息の續かなくなつた朗讀を、無益に恥ぢて居るに違ひ無い。食堂にも圖書室にも、その姿は見えなかつた。

午後から、自分は甲板の日當りに、椅子を持出して、海を眺め暮した。昨日(きのふ)のやうな快晴では無かつたが、右舷の甲板には、甲板球戯(デッキビリヤアド)や輪投をして居る學生の聲が波の音にまじつて聞えた。白い雲の漂ふ青空の日輪は、見る限りの海に光を投げた。

「今日は。」

不意に後から聲を掛けられたので驚いて振向くと、ミス・ロビンソンが立つて居た。

「貴方に拜借した御本を御返ししようと思つて探したんですよ。」

「さうですか。私も貴方は如何なさつたかと思ひましてね。」

娘はそれが昨夜の事を意味するのだと察して、顏を赤らめて目をそらした。

「ほんとに厭なおもひをしてしまつた。生れて初めてだわ。」

と一人言のやうにつぶやきながら、傍の椅子を引寄せて腰掛けた。不快な記憶を忘れかねて、

額に立皺を刻んだまま、ぢつと海の遠くを見詰めて默した。
「潛航艇の噂は、あれは眞實だつたのでせうか。」
娘はふとそんな事を云つて、
「若しか此の船が沈められたら、吾々はどうなるのでせう。」
と訊いた。別段その調子には心配さうなところもなく、寧ろ面白さうに聞かれたのである。
「大概死んでしまふでせう。貴方も、私も。」
自分も輕い冗談のやうに答へた。此の青みわたつた海の色を見ると、潛航艇の襲撃といふやうな物凄い光景は、あり得べからざる事に思はれた。
「貴方はロングフェロオがお好きなんですか。」
暫時して、娘はその膝の上に置いた詩集を手にとりあげながら訊いた。
「イイエ別段。」
「それでは此の本を貴方に贈つた方がお好きなんですか。」
と娘は振向いて微笑した。
「サア、特別に好きだとも聞きませんでした。」

「では矢張り、此處に書いてある通り、ただ貴方の住んで居らつしやつたケムブリツヂの詩人だからといふ意味だけなんですか。」

「たぶんそれつきりでせう。」

自分は、からかはれて居るやうな氣がして、何となく氣が引けた。

「その方お綺麗な方ですか。」

娘は一層はればれしい笑顔をして訊いた。

「さうですねえ、私は綺麗だと思ひましたけれど。」

「貴方のお友だちですか。」

「エエ仲善（よし）の友だちです。」

問ふ方も答へる方も、何となく惡戯（いたづら）な氣持になつて顔を見合つて笑つた。

其處で自分は、詩集を呉れた人の事を話した。ワシントンの市中を廻る展望車で知己（ちかづき）になつた老軍人の事、そのボストンの郊外の岡の上の家を訪れた事、二人の娘の事、ライラツクの花の事などを、拙（つたな）い英語を氣にしながら、殘り無く話した。

「マア貴方は詩人ですねえ。」

と娘は口では冷かしたが、若い女に特有の、感慨深い顔をして、あても無く遠くの空を想ふ様子だつた。

夕方になると風は冷くなつて、薄暗い雲が多くなつた。海の上には浪が騒いで、船の腹を打つて高くしぶきをあげた。

愈々明日はリヴアプウルに着くといふので、晩餐の後で、大廣間で舞踏會が催された、若い技師と、庭園師と、佛蘭西人と、何れも同じ食卓の者に誘はれて行つて見た。若い女の客が少く、且客種が惡いので、踊手は少なかつた。男は亞米利加の學生ばかりで、女は平和運動の連中の二三に過ぎなかつた。

音樂は輕く賑かに流れ出るが、船の傾く爲めか、踊る者は絶えず滑つて困つて居た。幾度と無く砂を撒いても、踵の高い靴は堪へきれず、危く倒れさうになるのを、力いつぱい抱き止めるのが相手の男の役目であつた。その危なさを面白がる學生達の笑聲は、天井にも床にも響きわたつた。

恰度その最中である。

「軍艦だッ。」

大廣間（ホオル）の入口から顔を出して、船員の一人が叫んだ。叫ぶと直に身を飜へして消えた。廊下を走る人の足音が、狼狽（あわただ）しく亂れて過ぎた。

「軍艦？――」

「獨逸の軍艦か。」

誰かの愕（おび）えた聲が、立騷ぐ人の足音や、椅子の倒れる物音にまじつて聞えたが、自分はいきなり甲板に馳上（かけあが）つた。乘組の總てが、一齊に馳集つた渦の中に自分もまき込まれた。

眞暗な闇の海には、意外にも近々と、一隻の軍艦が見えた。人々は不安の息を殺して凝視した。

忽ちその船から探海燈（サアチライト）が來た。

「Hurrah!」

思はず知らず叫び出す喝采の中に船は互に擦れ違つた。それは此の大西洋を守る英吉利の軍艦だつた。探海燈は直（たゞち）に光を滅して、灰色の軍艦は闇の海に見えなくなつた。

人々は安心と喜悦に胸を躍らせて、互に手を取合はんばかり、今目前に見た壯觀を中心にして語合つた。

間もなく大廣間（ホオル）からは、前よりも一層賑かに音樂が聽えて來た。夜更けては雲の絕間から、冴

えわたつた月が出て、行手の海の波に碎けて光り輝いた。
船中の最後の夜は安らかに明けた。曉方（あけがた）の海の遠くには愛蘭土（アイルランド）が望まれた。既に內海に入つたので、靑く凪いだ海を滑る船の廻りには、鷗が群つて飛んだ。近くには汽船の數々がゆきちがつた。
取りちらかした船室を片付け、旅鞄を整理して、何時でも上陸出來るやうにした。甲板の上では、此の一週間の航海に知己（ちかづき）になつた者が、互に航海の無事を祝しあつた。
「君々、あの吾々の食卓の獨逸人は上陸出來ないらしいやうですぜ。」
と若い技師は聲をひそめて云つた。あの老人は、どうしても獨逸人だといふ見込みで、今事務長が彼一人を別室へ連れて行つたといふのである。四圍（あたり）の者は口々に、彼を獨探だと決めてしまつた。
午後は、ミス・ロビンソンと甲板を步き廻つた。
「アア三年振で私の倫敦に歸れる。」
と娘は胸を叩いて喜んだ。
「倫敦では是非遊びにいらつしやいな。私のお祖父さんもお祖母さんも、屹度喜ぶに違ひありま

せん。」

娘は手帖の端(はし)にその番地を書いて、ちぎつて呉れた。

「貴方のお好きなライラックの花はありますまいけれど。」

と別れに際して一層親しさを増して冗談を云つた。

「難有う。是非伺ひます。」

と自分は答へながら、必ず訪問して見ようと、心の中でも思つて居た。

娘がその船室に下りて行つた後で、自分は詩集を呉れた亜米利加の女の友だちに、簡單な手紙を書いた。

一週間の平穏な航海の間に、貴方から頂いた詩集は限り無く私を慰めて呉れました。一夜、海員遺族救護基金募集の演藝會のあつた時、若い英吉利の娘さんは其の詩集の中の詩を朗讀しました。私はその人と友だちになつた事を喜んで居ます。若し貴方が居たら、貴方は屹度堪らなくその人が好きになり、その人も屹度貴方を好きで堪らなくなるに違ひありません。

二三度讀返してから封じたが、何となく心寂しかつた。手紙の名宛の人には、愈々大洋を距てて遠ざかり、手紙の中に書いた人とは、此の船の安着と同時に別れなければならないのであつた。

英吉利の山は、何時しか行手に見えて來た。微かに薄紫に水平線に浮んで居たのが、次第にはつきりと目の前に聳えて來た。日が傾いて、海の向ふに沈んで行く頃は、薄霧が立籠め、その霧の底に無數の燈火が輝き出した。

「あれがリヴアプウルですよ。」

と傍に來て佇んで居たミス・ロビンソンは云つた。

誰が歌ひ出すとも無く、人々は小聲ながら、一齊に英國々歌を歌ひながら、欄干に身を寄せて、近づく港の灯に心を誘はれた。（大正八年五月十五日稿了）

大空の下

「柘植さん——柘植さん。」

廣い事務室の一隅から主席事務員の嗄れた聲が又しても高く聞えた。

「柘植さん。」

「ハ。」

受附の椅子に坐つて地方の代理店へ送り出す書類を小包にしてゐた滋郎は、額から流れる汗が目の中に流れ込みさうなので、衣嚢から半巾を取出さうと思つたが、兩手とも糊だらけになつてゐた。

「柘植さんはゐないのか。」

苛々した聲が一層高くなつたので、

「只今。」

と答へながら彼は洋服の袖で額の汗を横撫でにした。セル地の紺の背廣の右袖は、露が置いたやうに濡れた。

「何か御用ですか。」
同僚の視線は悉皆自分の背中に集中してゐるやうに感じながら、彼は主席の机の前に來て立つた。
「用だから呼んだのです。」
と主席は帖簿の上に何か記入してゐる手も止めないで云つた。
「一昨日お願ひして置いた各代理店へ出す月末勘定報告の様式改正の通知は、もう發送して呉れましたか。」
「あれは今日の午後には屹度出すつもりです。」
「困るね、それは。あれは至急を要する件ですぜ。」
「どうも手が足り無いものですからつい遲くなりまして。」
「給仕の募集は如何なつたのです。」
「それがたまに志望者はありましても、何分此頃は景氣がいいので、他の會社では隨分出すさうですから、二十錢や二十三錢では到底承知しません。もうちつと出して下さるとどうかなるかと思ひますけれど。」

「何にしてもさつさと片附くやうにしてくれなくては困りますぜ。」

主席は苛々した調子で小言を云ひながら、見向きもしないで帖簿を繰つて居た。金縁の眼鏡の下に潛んでゐる凹んだ目で、細かい文字を拾ひながら、額には疳癪筋を現はして居た。滋郎は默つて頭を下げて、愈々流れ出る額の汗を拭きながら受附の机に戻つた。

十八になるのと十六になるのと、二人の受附が居た頃は、庶務係の滋郎にも煙草を吸ふ位の閑暇はあつた。ところが恰度一ヶ月ばかり前、ちひさい方の一人は、突然退職を貰つて行つてしまつた。年よりはませた、はきはきした少年だつたが、悧巧過ぎて使ひ惡い位だつたから、滋郎は左程惜まなかつた。といふよりも始終、自分を馬鹿に爲勝だつた眼つきの鋭い、鼻の高い、口元に皮肉な皺の寄つてゐたその少年の姿が、受附の窓から消えた時は、寧ろ氣が樂になつた位だつた。

實際滋郎はそのこまつちやくれの給仕には馬鹿にされ通しだつた。二十幾年勤續の禿頭の前任者に比べて、富有な家に生れたお坊ちやんの滋郎には隨分手ぬかりが多かつた。子供の時分から金錢の事を口にすると、

「男の子はそんな細かい事を兎や角云ふものではありません。」

と母親に叱られ勝だつた癖がついて、彼は品物を値切る事が出來なかつた。みすみす掛値だと知りながら、如何しても値切れないのだ。狡猾な商人に馬鹿にされるのは隨分忌々しい事だつたけれど、それでも矢張り値切れないのだ。殊に人の惡い、嘘をつくのが商賣人の働きだと思つて居る大阪の人間を相手にするのは、人間の卑賤な根性を憎む念と、他人を尊重する心持と、兩方とも強烈に働く性質の彼にとつては何にも增して苦痛だつた。掛値はする、品物は惡くする、日限はあてにならない――小言を云はれないのをいい事にして、小言を云はない者は馬鹿にしたつて構はないと彼等はたかをくくつて居たに違ひない。

「柘植さんに買物をさせるのはさせる方が無理だ。お米の値段も知らないぼんぼんなんだから。」と古顔の金錢出納係が、正午休息の煙草をふかしながら、人を憚らない高聲で半分は戲弄ひ面でいふのに調子を合せて、事務室の人々が口を揃へて、滋郎を世間見ずのお坊ちやんにしてしまつた事があつた。

するとその人々の後で聞嚙つてゐたこまつちやくれの給仕も圖に乘つて口を出した。

「柘植さんにはただ頭さへ下げてゐればよろしいのやと商人達が云うてました。」

同僚は一同聲を揃へて笑つた。此の大會社の庶務係が、世間見ずのお坊ちやんだといふ事は世

間一般の定評であると、給仕の少年の一言で確め得たやうな滿足が、一群の人々の顏に現れてゐた。

滋郎は自分一人だけ特殊の部落の人間だつたかのやうな不愉快な孤獨感に脣を嚙んで、瘦つぽちの皮肉な顏附の給仕を睨んだ。

一から十迄人を馬鹿にした、ませた少年が退職（ひま）を貰つて行つた時は、彼は人手の足りなくなつた事を忘れて、氣が樂になつたのを感じたのであつた。殘つた方の溫順（おとな）しいのを相手にして、彼は進んで給仕の仕事を手傳つてゐた。

或日の暮方であつた。人々が退出した後でも、爲殘（しのこ）りの仕事があつたので、少し歸りの遲くなつた滋郎は、會社の石造の門を出ると、初夏の黃昏（たそがれ）の空を渡る風に熱した額を吹かれながら街の人にまじつて急いだ。ふと程も無い町角で、彼は二人の少年が、電信柱のかげに佇んで話合つてゐるのを見た。一人は今迄會社で一緒に郵便物の發送を取扱つてゐた給仕で、他の一人はつい此間退職（ひま）をとつて行つたこまつちやくれの少年だつた。

こまつちやくれは滋郎を見ると狼狽した顏色で電信柱に身をかくさうとしたが、既に見つかつてしまつたと覺悟したのか、苦笑しながら帽子をとつて頭をさげた。

「君は今何處かに出てゐるのかい。」
滋郎は足を停めて訊いた。
「ヘイ。」
少年は困つた顔附で溝の方に後退りしながらあいまいな返事をした。そのあいまいさが如何しても突込んで訊かないではゐられないものであつた。
「何處に行つてるんだい。」
「ヘイ、あの彼處の郵便局に出たりま。」
少年は少し顔を赤らめて答へた。
「郵便局？　何處の？」
滋郎は相手のかくし度がつて居る樣子を見ると、さも勝利を得たやうな氣がして迫つたのである。
「××橋のだす。」
「フウム、そりやあ結構だね。」
何故だか知らないが身を縮めてゐる相手を見ると、理由も無く勝ほこつて、滋郎はいい氣持で

下宿に歸つた。

ところが其の翌日から、殘つてゐた方の給仕も會社に出て來なくなつた。十八になつても居睡りばかりして居た溫順しい少年は、何處となく病身らしかつたから、暑氣あたりでもあらうかと、心配しながらもたかをくくつて居ると、二日たつても三日たつてもひよろ長い前屈みの少年の姿は見えなかつた。

缺勤の時は必ず缺勤屆を出さなくてはいけないと平生やかましく云つてあるのだが、いくら待つても何とも云つて來なかつた。念の爲めに葉書で問合せても見たが返事はなかつた。往復葉書を出しても見たが、矢張り何とも返事はなかつた。

夕方會社の歸途に、彼の下宿とは全く方角は違ふのだつたが、滋郎はその給仕の家を訊ねて行つた。梅田の停車場の裏手の貧しい町の、石炭殼を敷いた細い往來を、折柄方々の工場の退出時の青服の職工や女工の群にまじつて歩きながら、幾度となくゆき會ふ人に訊いても、なかなかその家は見當らなかつた。

蒸暑い日の暮方の空には、近所の工場の烟突から吐出される煙が低く流れて居た。軒と軒とぶつかりさうに傾いた町角に佇んで、屢々額の汗を拭いたが、何時の間にか其處此處の家の店頭に

は、うすぼんやりと燈火(あかり)がつき初めた。
心細い思ひをして漸く探し出した家は、暗い露路(ろち)の奥にあつた。水道の共同栓を取巻いて、手桶に水を汲込んで居る長屋の女房達に、洋服姿の顏を見られながら、滋郎は躊躇しつつも格子(かうし)に手をかけた。
「御免なさい。」
とまだ燈火もついてゐないうす暗い、人氣の無い家の内にむかつて聲をかけると、意外にも頭の上の二階で返事がして、眞暗な梯子段をみしみしいはせて下(お)りて來たのは當の少年だつた。
「今日は。——君はどうしたの。病氣かい。」
滋郎は目の前に膝つ子のはみ出る浴衣の膝をついてかしこまつた少年を見ると、道に迷つて探し出した爲めか、無上に懐しい氣持がした。
「君のところは三丁目百四十八番地ノ二地だつたねえ。會社から出した葉書は屆かなかつたかしら。」
親しい心持が現はれて、もの優しく云ふのであつたが、平生からはきはきしない相手は、默つてうつむいてゐるばかりだつた。

「病氣ぢやないのかい。」
滋郎は少し不審に思つてたたみかけた。
「ハイ——イイエ。」
少年は當惑した樣子で愈々恐縮してしまつた。
「病氣ぢやないつて。」
煮切らない相手の態度に苛々して聲が高くなつた。
「ハイ——病氣やおまへん。」
少年は黄昏の疊にむかつて、つぶやくやうに答へた。
「それぢや如何したの。たださへ人手の足りないところを、默つて缺勤んでゐられては困るぢやないか。もう會社には來ない氣なのかい。」
そんな事はあるまいと思ひながらも、言葉の勢ひでから云つた。
「ヘイ——實は他所に出て居ますので。」
「他所に出てゐるつて。」
滋郎は驚いて相手を詰つた。

「一體何處に出てゐるんだい。」
「郵便局だす。」
「郵便局？」
「ヘイ――岡田の出てゐます同じ郵便局に出たります。」
　少年は段々馴れて口が樂に開くやうになつた。
「フウム、しかし會社から退職も貰はないうちに他所に出るのは亂暴ぢやないか。――君は岡田に勸められたんだね。」
　滋郎は此間會社の歸途、町角の電信柱のかげに立話をして居た二人の姿を想ひ出した。眼つきの鋭い、鼻の高い、口元に皮肉な皺の寄つてゐる、狡猾さうなこまつちやくれの少年の顏を想ひ出した。
「郵便局の方が面白いかい。」
・滋郎は張合の拔けた所在なさに訊いて見た。
「イイエ面白い事なんかおまへん。」
「それぢやあ會社に居た方が仕事にも馴れてゐていいぢやないか。」

「けれども會社やつたら二十五錢しか貰へへんのに、郵便局やつたら三十三錢呉れはりまッ。」

少年は意外にも明瞭に答へた。

「フウム。」

滋郎は頭からぐわんとどやしつけられたやうな氣持がして、何とも云ふ事が出來なかつた。

「兵やん、誰かお客さんだつか。」

と折柄奥の臺所から母親らしい年とつた聲が聞えた。

「いんえ、先の會社の人だッ。」

少年は勢のいい聲で答へた。

「左様か。そんならな、用事が濟んだら一寸使ひに行つてんか。」

とぼやけた女の聲でつぶやくやうに云ひながら、ザアと水を流す音が聞えた。

滋郎はそれをきつかけに、

「それぢやあもう會社には來てくれないんだね。」

と別段念を押すつもりでもなく云ひながら帽子をかぶつた。

「左様なら。」

「左様なら。」

たてつけの悪い格子をがたぴしあけて外に出た。露路の中は晩飯のお菜(かず)の魚を燒く臭ひを漂はせて、とつぷりと暮れてしまつた。

「郵便局やつたら三十三錢呉れはりまッ。」

と今でも耳元でつぶやかれてゐる氣がして不愉快だつた。如何にもその言葉の前には頭の上らない權威が籠つてゐるやうな壓迫を感じた。

場末の町の上に晴れた夏の夜の空には無數の星が輝き初めた。その高く澄んだ大空を仰ぐと、日毎にいやなおもひをして暮してゐる人の世の面倒をはかなむ心持が、涙のやうに滲んで來た。

二人の給仕に逃げられてしまつた滋郎は、それ以來席を受附の窓際に移して、本來の自分の仕事の他(ほか)に、昨日(きのふ)迄は給仕のしてゐた雜用を引受けなければならなくなつた。電話がかかつて來れば取次がなければならない。客が來れば受附けなければならない。日に數十通來る手紙は、一々受信簿につけなければならない。日に數十通出る手紙は、一々發信簿につけなければならない。手を糊だらけにして小包もこしらへなければならない。舌がざらざら荒れる迄、なめては貼り、郵便物に切手を貼附けなければならなかつた。いろいろの面白くも無い手仕事の中

でも殊に彼を悩ましたのは謄寫版の印刷であつた。あのどろどろの墨汁を廻轉機に塗つて、疲れた手でぐるぐる廻してゐると、そのどろどろの墨汁が汗に濡れた指に沁みついて、洋服の袖も、カフスも何時の間にか、とりかへしのつかない程汚れてしまふのであつた。

今日も今日とて、地方の代理店へ出す事務取扱樣式改正の通知を、十枚、二十枚、三十枚――五十枚、百枚――彼は汗にまみれて刷上げなければならなかつた。廻轉機に力が入る度に全身から滲み出る汗は、肌着を濡らし、シャツを濡らし、洋服の上着の背中迄ぐつしより通る程止度無く湧出した。知らず知らず横撫でにする額にも頰邊にも、墨汁の汚點は滲み込んで、滋郎の顏は溝鼠のやうになつてしまつた。

「柘植さん――柘植さん。」

又しても主席事務員の嗄れた聲は高く事務室に響きわたつた。

「ハ。」

滋郎は眼頭に流れ込みさうな汗の玉を拂ひながら、謄寫版の手を止めた。

「北陸道支店の移轉登記の手續は濟みましたか。」

近づいて來る滋郎の方には見向きもしないで、さも忙しさうに洋筆を動かしながら、主席は苛

々した聲で云つた。
「一昨日濟みました。」
「一昨日？　それでは登記抄本はもう東京の本社へ送つたのですね。」
「それは今日取りに行く筈になつてゐます。」
「早くしなくちやいけませんぜ。大至急といふ事を特に本社から云つて來てるのですから。」
彼は眼鏡の下で目を据ゑて、輕く舌うちした。
「どうも給仕がゐないものですから手がぬけないので。」
滋郎は全く手がぬけないといふ意味を強める爲めに、墨汁で汚れた手を相手の目先に突出して見せた。
「手が足りなければいくらでも給仕を雇へばいいぢやありませんか。何も貴方がそんな墨だらけの手をしなくたつて濟むんだ。」
主席は苦り切つた顔をして、正面から滋郎を見守つて、再び舌打ちした。
「その給仕がなかなか來て呉れませんので。」
「新聞に廣告をすればいゝぢやないか。」

事もなげに主席は云ふのであつた。

「廣告も度々出しては見ましたけれど、折角應募者があつても條件が惡いものですから……」

「條件とは。」

主席は不愉快さうな顏をして遮つた。

「つまり給料の問題なんです。」

滋郎は相手の苛々してゐるのを見ると、自分の優越を感じて、かへつて落着いて口をきく事が出來た。

「此頃では出すところになりますと、十五六の子供にも、四十錢五十錢の日給は拂ふさうですから、此處のやうに初給二十錢では到底承知するものはありません。此間迄居た二人も、退職を貰ふと郵便局に出て、いきなり三十三錢宛貰つて居るさうです。」

「しかしね。」

主席は圖に乘りかけた滋郎の話を奪つて、

「それはさうかもしれないが、一面から見れば、矢張り人は使ひやうだからね――兎に角まあ、もう一度廣告を出して見給へ。それでもいけなかつたら如何にか考へて置きませう。」

と上役の落つきを見せる爲に、努めて太い聲を出して、相手をなだめるやうに云ふと、もう話は打切りだと云はんばかり、机の上の書類に眼鏡の顔を押つけて、忙しさうに仕事に取りかかつた。

「又新聞の廣告か。」

と腹の中でむしやくしやしながら、滋郎は一つ頭を下げると上役の目の前を遠ざかつた。

新聞の職業案内に給仕募集の三行廣告を出した事は度々あつた。現に今度も二人の給仕がゐなくなると、直ぐに四五日續けて出したが、折角應募者はあつても、かんじんの給料の問題で話はまとまらないのであつた。

「へエエ、二十錢ほか吳れはれしめへんのだつか。」

とさもさも輕蔑した顔附をして問ひかへす子供の態度に、彼は言句も出ない程壓迫を感じさせられた。歐羅巴（ヨオロッパ）の戰爭の影響を受けて、俄に膨脹した經濟界の好景氣は、どんな人間にも職業を與へたと同時に、極端な物價の騰貴は、多數の人間を飢餓の淵に陷れた。一錢でも二錢でも、いくらでも餘計貰へるところに行かうと思ふ心持は、女子供の心の底にも滲み込んだのだ。二人の給仕が逃げて行つたのもその爲めだ。誰一人そんな日給では雇はれようとしないのもその爲めだ。

無理は無いと思ひながら、滋郎は當惑し切つてしまつた。
何れも有り餘る資産家(かねもち)の重役共の頭腦(あたま)には、薄給者がどれ程苦しんでゐるかは想像もつかない事であつた。その重役の足り無いところを補つてゆくのが職分の筈の高給社員は、安い給料で人をこき使ふのが、その重役共に對してほこるべき手腕(うで)だと考へて居るのであつた。幾度請求しても、主席事務員は給料引上を許さなかつた。
「勝手にしやがれ。」
と思ひながら、滋郎は全身汗にぐつしより濡れて、謄寫版を取扱ふのも手荒になつた。
「誰がこんな下らない機械を考へ出したのだらう。」
としまひには謄寫版そのものが、何にも增して癪に障つた。
兎も角も念の爲めに出した新聞廣告を見て、募集に應じて來る志望者は今度もあつた。あつたにはあつたが、矢張り給料の問題で、白雲頭も鼻垂らしも、誰がそんな端錢(はしたぜに)でこき使はれるものかといふ顏附をしてさつさと歸つて行つてしまつた。その顏附を見てゐると、たつた二十錢きり出さないけちん坊は、滋郎その人であると思ひ込んでゐるらしく思はれて我慢が出來なかつた。遂にはその廣告に應じて來る者の一人も無い事を、滋郎は心中祈つたのである。

新聞に廣告を出してから三四日の間に、十四五人の志望者があつたが、例の給料の問題と、住み込みでなければいやだといふ者ばかりで、結局今度も採用は覺束なく思はれた。たださへ暑い夏の日は、兎角疳(かん)癪の起り度がるところへ、主として肉體の勞働を終日續ける間々に、主席事務員の小言を聞かなければならないので、自分の本來の性格さへ一變しはしないかと心配になる程滋郎は絶えず苛々した。小憎らしい面(つら)つきの、うす汚ない小僧なんか居ない方がいい。仕事が間に合はなければ合はなくたつて構ふものか。幾年前からか同じ給料しか出さないで、此の忙しい今日日(けふび)人間を雇ふ事が出來るものか。愈々仕事に差支へて來たら、悟りの悪い上役も目が覺めるだらう。彼はさう考へながら、いつそやけになつて一人で立働いた。

主席の小言が癪に障ると、

「此方も辭職してやらうかしら。」

と考へる事もあつた。

或日の午後、それは殊に蒸暑い雨上りの一日だつたが、何時にも増して忙しい雑務の處理に、滋郎が汗だらけになつて立働いてゐる受附の窓に二人の少年が來て立つた。

「一寸伺ひますが、新聞に廣告の出て居りました給仕は今でも募集して居(を)られますのですか。」

詰襟の洋服の十七八に見えるのは、物馴れた態度で訊(き)いた。
「エエ、募集してゐるには募集してゐるのですが。」
一目見て、その少年の物腰から口のきき方迄、如何にしても二十錢では雇ひ切れない程氣が利いてゐるので、どうせ駄目だと思つて、滋郎はあいまいな返事をした。
「それでしたら是非雇つて頂き度いのですが如何で御座いませう。」
と少年は愈々叮嚀に云ふのであつた。
「しかし給料はお話にならない程安ござんすぜ。」
滋郎はどうせまとまらないものなら早く追拂ふに限ると思つて、自分自身を嘲るやうな心持で答へた。
「ハイそれは幾何(いくら)でもよろしう御座います。實は雇つて頂き度いのは私ではなくて、此の弟の方で御座います。」
と云ひながら少年は彼の後(うしろ)に引添つてかくれて居たちひさい方のをかへりみた。
赤い糸の目立つ木綿の縞物の着物を暑苦しさうに着たのが、へそが見える程胸をはだけて、その胸に流れる汗を、鷲づかみにした鳥打帽子で拭いてゐた。痩つぽちの青しよびれたその子供は、

兄に促されて初めてお低頭をした位けろりとして立つて居た。一見して役に立さうもなく、汚ならしい姿を見ると、滋郎はかへつて安心した。これなら二十錢で雇へるだらうと直感したのである。

「それでは此方に廻つて下さい。兎に角逢ひますから。」

彼は應接室に二人を導いた。

兄の少年は有名な大銀行に給仕として勤めてゐるのであるが、弟を是非雇つて吳れと雄辯に賴むのであつた。

「學校は。」

滋郎は默つて椅子に掛けた足をぶらぶらさせてゐる弟の方に、わざと問ひかけた。

「尋常だけは濟みました。」

と甲斐々々しい兄は側から直ぐに引取つてしまつた。

「年齢は。」

「十五で御座います。」

と今度も亦兄が答へた。

「以前何處かに奉公して居た事がありますか。」

「ハイ實は道修町の藥種屋にぼんさんに行て居りましたが……」

兄はふと口ごもつた。それが如何にも先方の弱味に見えたので、

「その藥種屋は如何してやめたの。」

と滋郎はぼんやりして居る弟の方に訊いた。

「ヘイ、一向面白い事おまへんよつて。」

弟は舌の廻らない口で答へて、垂れさうになつた涎を筒袖で横撫でにした。

「つまり辛棒出來なかつたんだね。」

「ハイ。」

と兄の方は恐縮して赤面したが。弟はけろりとして鼻をすすつてゐた。これなら二十錢で大丈夫だと、滋郎はその弟の方の兄には似も似附かない間拔な顏を、一種親しいものに思つたのである。

「今度は當人も辛棒すると申して居りますから、どうかこちらに雇つて頂けませんでせうか。」

と兄は歎願するやうに滋郎を見上げた。

「しかしね、此の會社は給料は少しきり出しませんぜ。」
彼は相手の少年の間に合ひさうもない樣子を見れば見る程氣が樂になつて、何時もは給料の事を云ひ出し澁る習慣だつたのに、此の時は安心して寧ろ得意な氣持さへあつた。
「給料は幾何でもよろしう御座いますから、どうぞお雇ひなさつて。」
兄はしきりに頭を下げて云つた。
「先づ最初は二十錢きりあげられませんよ。」
「結構で御座います。」
相手は言下に答へた。
翌日からその少年は會社へ通つて來る事になつた。
目見えに來た時と同じ着物に、墨だらけに汚れた袴をはいて來たが、元來膝つきりの着物なのに、袴はそれよりも一層短かかつた。確にそれは尋常小學へ通つて居た頃穿き馴れたものに違ひなかつた。まち無しのその袴の下から、裾のぼろぼろになつた赤縞の着物が一二寸見え、痩せて青黑い脚が內輪に曲つて二本現はれてゐる姿を見ると、滋郎も流石に眉をひそめた。
「これは長谷部と云ふもので、今日から會社に勤めますから。」

と彼は先づ少年を主席事務員の前に連れて行つた。
「フウムこれが。」
主席事務員は苦い顏をして眼鏡越しに少年を見据ゑたが、その口元には吹出し度いやうな笑が影を見せて居た。少年はそんな事には頓着無く、けろりとした顏をして、高い天井に近い壁の上の大時計を見上げながら鼻をすすつて立つて居た。
今度は奥の一室に居る支店長のところへ連れて行つた。
「今日から會社に勤めます長谷部と申しますもので御座います。何分よろしく。」
滋郎は少年を前の方に押しやりながら叮嚀に云つたが、かんじんの當人は臆した色も無く、室内を眺め廻しながら、ぽかんと立つてゐるばかりだつた。
「ハッハッハッハッ。」
何と思つたのか、いい年齡をした支店長は、それが持前の、肩を搖つて高笑ひをした。
「お前いくつになる。」
「十五。」
少年は氣の無い返事をしたが、視線は横手の書架の上の、明治天皇の寫眞額の方に向けられて

ゐた。
「お父さんは何をして居るね。」
「中氣だッ。」
「何？」
「中氣で寢てまんね。」
「ハッハッハッハッハッ。」
支店長は大きな腹に波を打たせて、椅子の背に反り返つて笑つた。笑つても笑つても笑ひ足りないで、眞赤になつて額から頸から流れる汗を拭いた。
「柘植君、これは掘出物だよ。餘程珍だ。お父さんは何をして居るかと聞いとるのに中氣で寢て居るなぞは禪宗の問答だね。君も偉いものを見附けましたなあ、ハッハッハッハッハ。」
彼は思ひ出しては又全身を搖立てて笑つた。
少年は相手の笑つてゐる理由がわからないので、けげんな顏附で、はち切れる程肥つて油切つた支店長の幅の廣い顏を見守つてゐたが、滋郎は自分自身が笑はれてゐるやうな氣がして面白くなかつた。何も自分だつて、こんな低能兒を、好き好んで探し出して來たのでは無い、會社が安

い給金しか出さないから氣の利いた子供は來ないのだと、腹の中で不平に思つて居た。
「まあ兎に角使つてみるさ、ハッハッハ。」
とまだ笑つてゐる支店長に頭を下げて、滋郎は少年を促して其の室を出た。
事務室の連中の一人々々に、彼は同じ言葉を繰返して、この新規に雇入れた給仕を紹介して廻らなければならなかつた。
「非道いものを連れて來ましたねえ。」
「ちつと足りないんぢやありませんか。」
などと、帳面をつけたり算盤を弾いたりしてゐるのが、滋郎と給仕とを見比べて云つた。
「奇抜な面つきだなあ。」
とつくづく感じ入つたやうに無遠慮に云ふ者もあつた。一同の者はその少年の極端に不細工な顔つきを見ると、自然と吹出し度くなるのであつた。さうしてそれは、給仕を雇入れた責任者の滋郎を嘲笑する意味をも充分含んでゐるのであつた。
實際その給仕の顔程變てこな顔は珍しかつた。榮養不良の者に共通の、少し背中の前屈みになつた、頸筋の骨のあからさまなのが、まだ羽の生えない赤肌の雀の子の風情だつた。後腦のふく

らみの全然無い、尖つぼまりの頭の形は、どうしても悧巧者の頭ではなかつた。その癖顎の骨の四角く出張つた顏の下半部は、存外肥つてゐて、その顎が頭で、頭が顎だつたら、別段可笑しい顏ではなかつたらうと想像させるのであつた。誰が見ても失笑を禁じ得ないのは、主として此の特異な顏の形の爲めだつた。さうして、ぺちやんこの鼻を中心にして、眉毛も目尻も諸共に下つてゐながら、大きな口の口尻は反對に上に上つてゐて、笑ふ時にその目尻の皺とつながつてしまふやうに見えた。餘りに粗雜に出來上つたその顏を見てゐるうちに、滋郎はつくづくなさけない氣持を感じて來た。

それでも此の一人さへ、何かしら手助けになるには違ひ無いと思ふと、此の頃の汗にまみれた忙しさから漸く逃れた氣持もして、何となく相手を頼母しく思ふ心もないとは云へなかつた。

「それぢやあね、ここが君の席だから、その椅子に腰掛けて居るんだよ。君が馴れる迄は僕も此處にゐる。」

さう云つて滋郎は、二つ向合はせて置いてある受附の机に、少年と顏を合せて坐つた。暑い暑い夏の日の朝であつた。

新しい給仕はちつとも間に合はなかつた。受附の窓に來る客の口から出る用件を聽取る丈の頭

腦を持つて居なかつた。尋常小學は濟んでゐると云つたけれども、字を書く事には全く役に立たなかつた。何をさせても不注意で、爲る事は遲くて、手ぬかりが多かつた。殊に困つたのは、電話の取次の出來ない事であつた。

「エ、エ、何だッ？」

と幾度も幾度も聞返してばかりゐるので、大概の相手は疳癪を起して怒鳴り出す。

「オイオイ如何したんだ。何とか返事をせんかい。」

と仕事の手を止めて、堪り兼て叱る事務員もあつた。

「エ、エ、なんだッ？」

それでも彼は要領を得なかつた。

「よし、よし、僕が代つてやらう。」

滋郎は自分自身が叱られてゐるやうな氣がして、彼をかばひながら、その手から受話器を取るのであつた。

「一體貴方の所では如何したんです。先刻から繰返して云つても、何だッ、何だッと云つてるばかりで、ちつともわけがわからないぢやありませんか。もうちつと如何かした人間に出て貰はな

いと困りますぜ。」
頭から怒鳴りつけて來る相手に對して、滋郎は只管詫まる外はなかつた。
「如何も濟みませんでした。取次の者が新米で馴れませんので。」
と相手の顔の見え無い電話でも、ただただ赤面して額の汗を拭いた。
馴れれば如何かなるだらうと、最初はたかをくくつて居たが、幾日たつても長谷部は役に立たなかつた。
「あのねえ、電話が掛かつて來たら、大概先方から貴方は××會社ですかつて訊くからね、左樣です××會社ですと答へるんだ。さうすると先方で私は何處其處の誰某ですがこれこれの用事だと云ふに違ひないから、その用事を聞いて、夫々係の人に取次ぐんだよ。若し先方が誰某だと云はなかつたら、此方から何方ですつて訊くんだぜ。」
滋郎は幾度も繰返して電話の爲方を敎へた。
「わかつたかい。」
といふと、彼は默つてうなづくのである。けれども實はちつとも解つては居なかつた。
「エ、エ、何だッ？」

と相變らず、愛想も無く問返してばかりゐて、話はちつとも進行しないのであつた。
「阿呆めが。エ、エ、何だッ。エ、エ、何だッ、とばかりいうて埒明かんやないか。」
と大きな聲で怒鳴りつける社員もあつた。
「柘植さん、あの子供はあれは耳が遠いんぢやありませんか。」
と年とつた簿記係は眉に皺を寄せて注意した。
「君はちつと耳が遠いんぢやないか。」
滋郎も成程と思つて訊いて見た。
「遠い事あれしめへん。」
相手は確信を持つて、そんな事があるものかと云ふやうに、言下に答へた。
「しかしまあ、耳の掃除はよくして置かなくちやいけないぜ。」
と滋郎は苦笑しながら云つた。垢だらけの耳の中から、黄黒い耳垢が、何時もはみ出してゐるのであつた。
「耳が惡いんぢやありませんよ。頭腦が惡いんでさ。」
と金錢出納係は傍から、大きな聲で横槍を入れて笑つた。四邊の者も誘はれて一齊に笑つた。

滋郎は自分が嘲笑された氣がして赤面したが、當の少年は自分の事を云はれて居るとも思はない風で、けろりんとして居た。
實際彼は頭腦が惡かつたに違ひなかつた。何をいひつけても一度では了解しなかつた。その上用事は片端から忘れてしまつた。
「あれは少し非道過(すぎ)るね。もうちつと悧巧さうなのはないのですか。」
と主席事務員は苦り切つて云つた。
「兎に角一人では手が足りないんだから、もう一度新聞に廣告でもして、是非とももう一人雇入れなくてはならない。」
それが滋郎の責任だと、彼の言葉の調子が詰(なじ)つた。
云はれる儘に又廣告を出して見たが、應募者は矢張り少なかつた。これはよささうな子供だと思ふ悧巧らしい顔附のは、
「へエ二十錢しか呉れはれしまへんのか。」
とせせら笑つた調子でさき返して、さつさと歸つてしまつた。
結局滋郎は、鼻つたらしの涎(よだれ)くりと差向ひで、毎日毎日受附の窓際に、忙しく身體を働かせな

がら、酷しい夏を恨んだのである。

長谷部は耳が惡かつたばかりで無く、確かに鼻も惡かつた。夏だといふのに、青く濁つたはなを垂してゐた。吸ひ込んでも、吸ひ込んでも、どろどろしたやつの出て來るのを、時々袖で横撫にするので、なぐれて頰邊にこびりついてゐる事もあつた。鼻がつまつてゐる結果、彼は自然と口を開いてゐる事になつた。厚ぼつたい脣をぽかんと開けて、何處を見るともない鈍い目ざしで坐つてゐる姿は、憐愍よりも先にじれつたさを感じさせた。眞夏の午後の蒸暑さに筋肉のゆるんで來る時、彼は殆んど居睡りばかりして居た。空つぽの頭が、こくりこくりと、次第に下つて行つて、いやといふ程机の上に額をぶつけて、驚きさめる事もあつた。とうとう正體も無くなつて、かすかな鼾を立てながら、口尻から涎を垂らして眠つてしまふ事もあつた。

「オイ、オイ、起きないか。」

と肩を搖ぶると、ぼんやり目を開いて、きよろきよろ四邊を見廻してゐるが、それでもちつとも羞しさうな樣子は無かつた。その無感覺な平氣が、屢々滋郎を忌々しがらせた。

「なんだ貴様は。阿呆ッ。」

「けつたいな奴ちやなあ。」

など、口々に一同が罵つても、彼は怒りもしなければ恥辱とも思はなかつた。そんな時には滋郎の方が、自分自身叱責され、罵倒されてゐる氣持がして、口汚なく罵る者を憎んだ。

一週間、二週間、三週間――此の低能の少年は、あらゆる嘲罵の言葉を浴びながら、事務室の一隅に、平氣な顏をして鼻をすすつて居た。

或日受附の窓に金を支拂に來た客があつた。札と銀貨と取まぜて、ざらざらと出したのを、厚紙でつくつた丸い盆に受けて、長谷部は奥へ持つて行つた。

「一圓、二圓、三圓、五圓、拾圓……」

と一枚々々札を拾つて勘定して居る聲が聞えたが、

「どうしたんだ十錢足りないぢやないか。」

突然高調子で出納係は叫んだ。

「十錢足りませんと云つといで。」

と給仕に命令けてゐる聲が續いた。長谷部は尻の擦切れた草履を引擦りながら窓際に歸つて來た。

「もう十錢おくんなはれ。」

と彼は持前のぶつきら棒な調子で客に云つた。

「何？　十錢足りないつて。そんな事はありませんよ。今ちやあんと勘定して見せたぢやありませんか。」

四十格好の商人らしい客は、習慣的に浮かぶ微笑を含んで答へた。給仕は又尻の切れた草履を引擦つて奥の方へ行つた。

「だつて此の通り十錢不足ぢやないか。いいかい。一、二、三と。これで拾五圓だ。それからこれが、一圓、二圓……」

出納係は幼い子供に物を教へるやうに、順々に金を數へて見せた。

「ほらね。あとが四十八錢五厘だ。五十八錢五厘なくちやいけないぢやないか。失禮ですが、御勘定違ひでせうつて云つといで。」

性來高調子の彼の聲は、筒抜に客の耳へも入つた。

「失禮ですが、貴方の方の御勘定違ひぢやありませんか。私は今現に、その給仕さんの目の前で勘定したんですぜ。」

と客は受附の窓から首を突込んで、甲走つた聲を出した。

「ねえ、お前さんは見てゐたらう、私が財布から出して勘定するところを。」
から詰るやうに云ふと、長谷部は無言のまゝうなづいて承認した。
「さうかい。それぢやあお前は確に不足は無かつたと知つてたのかい。」
出納係は席を離れて來て、給仕の側に立つて確めた。
「私知れしめへん。」
と答へて長谷部は鼻をすすつた。
「どうも此奴はちつと足りないものですから、要領を得ませんが、兎に角此の通り十錢足りませんので。」
出納係は客の目の前に盆を突出して、その中の金を數へて見せた。
「どうも變ですなあ。私は確に間違はないつもりでしたが。」
客は腑に落ちない顔附で、自分でもその金を勘定した。矢張り十錢不足だつた。
「どうも變だ。」
彼は又首を傾けたが、
「まあ、兎に角不足なんですから爲方がありません。」

と云ひながら、改めて財布から一片の銀貨を取出した。

「どうも濟みません。」

「イイエ私こそお手數をかけまして。」

と客は商人らしく腰を屈めて挨拶して、忙しさうに歸つて行つた。

「これからはね、もつとしつかりせんとあかんぜ。金を受取つたら、一度自分で勘定して見るんだ。」

と出納係は懇々と敎へた。給仕は他人の事のやうにぽかんとして聞いてゐた。

「なんだ彼奴、自分が勘定違ひして置きながら、ぽんぽんぬかしくさつて。」

氣の短い出納係は、今立去つた客の罪にして小言を云つた。

二三日たつて、又同じ間違ひが起きた。

「オイ、オイ、五錢不足だぜ。」

出納係は金を載せた丸盆を机の上に殘して立去る給仕を呼止めた。

「此間あれ程云つといたのに、お前又勘定せんと受取つたな。御覽、五圓、十圓、一、二、三圓二十錢きり無いぢやないか。十三圓二十五錢なくちやいけないんだ。もう五錢貰つといで。」

給仕は默々として受附の窓に歸つて來た。
「もう五錢出しとくんなはれ。」
彼は窓の外に汚れた手を差出して請求した。其處には、その高い窓口にやうやく首から上だけ出る位の女の子が立つて居た。
「もう五錢出しとくんなはれ。」
長谷部は、相手が自分よりも幼いものと見てとつたのか、何時もに似ない、脅かす調子で迫つた。
「私、あんたに十三圓二十五錢渡しましてん。」
女の子はおどおどした聲で答へた。
「彼の彼處に居る人がな、もう五錢足らん云うてまんねぜ。」
長谷部は奥の出納係の方を指さして云つた。大人の云ふ事だから間違ひは無いぞといふ意味を、彼の態度が示して居た。
「私、貴方にあげましたがな。」
女の子の聲は微かに震へた。

「そないいうたかて足れしまへん。」
給仕は頑強に言ひ張つた。
「そやつたら私家へ戻つて叱られまんがな。」
訴へるやうにつぶやく女の子は、もう泣聲になつて居た。
「如何したんだ。ごてごて云うて埒あかんやないか。」
東京兒の癖に、下手な上方言葉を使ひ度がる出納係は、例の大聲で怒鳴るやうに云ひながらやつて來た。
「五錢呉れはれしめへん。」
長谷部は勝ほこつた顏を振向けて告げた。
「姐さん、如何したんです。あのね、貴方の方から會社に納めるお金は十三圓二十五錢なんですよ。ところが貴方の持つて來たのは十三圓二十錢で、五錢足りないんです。若し貴方に持合せが無かつたら、一度お宅へ歸つて親御さんなり、御主人なりへ話して下さい。」
出納係は悄れて居る女の子をなだめるやうに云つて聞かせた。
「私、此のお人にちやんと渡しましてん。」

女の子は涙組んだ目を上げて長谷部を見た。
「それぢやあお前受取つてから落したんぢやないのか。」
出納係は怖い顔をして給仕に訊いた。
「そんな事あれしまへん。」
と相手は言下に答へた。
「どうしても五錢足りないんだから、お家に歸つて貰つて來て下さいな。」
「私叱られまんがな。」
女の子は今にも泣出しさうに、涙のあふれて來る目を伏せてつぶやいた。
「村井さん。」
滋郎は先刻からの様子を默つて見守つてゐたが、その時出納係を呼掛けた。
「どつちみち五錢の事だから僕が足して置きませう。或は受取つてゐながら落ことしたのかもしれませんから。」
「およしなさいよ。なんぼ五錢ばかしだつて馬鹿馬鹿しいや。」
「でも若しちやんと受取つたのが足りなくなつたのだとすると、給仕の監督の僕の責任ですから

ね。」

「成程それもさうか。」

氣の輕い男は直に承知して、

「ぢやあね、姐さん。此の人が出して呉れるつていふから入金にしときますがね、若しひよつと家に歸つて、貴方の方の間違ひだつたら、後から直に屆けて下さいよ。」

と女の子に念を押した。

「ヘイ、かしこまりました。」

と恐縮しながらも安心して、頰邊の赤い子は叮嚀に滋郎と出納係とに一々おじぎして、

「左樣なら。大きに。」

と言葉を殘して歸つて行つた。

滋郎の出した白銅を受取つて、もう一度丸盆の中の金額を數へた出納係は、自分の机の方へ二三步步き出したが、ふと給仕の方に振返つて、

「お前盜みやせんだらうな。」

と怖い顏をして云つた。

「イヽエ。」
少年は頭を横に振つて答へた。
「さうか、そんならえゝわ。」
とつぶやきながら出納係は奥の方へ行つてしまつた。
長谷部は鼻をすすり込みながら、彼の机に胸をつけて坐つた。無神經な顏附をして、過ぎ去つた事は何も心に殘らないやうに見えた。
十數分の後、彼は心地よささうに、口尻から涎を垂らしながら居睡りを始めて居た。
「お前盜みやせんだらうな。」
と云つた出納係の言葉は滋郎の胸に堪へた。それは彼が密に恐れて居た疑念だつた。つひぞ今迄そんな間違ひは起らなかつたのに、長谷部が來て日もたたない間に、二度迄も同じ出來事があつたのは、偶然にしては不思議過ぎた。出納係が彼を詰る前に、滋郎は夙くに給仕を疑つて居た。けれども、何時に變らない、間拔けな顏をした長谷部の樣子が、その疑惑を打消す力を持つて居た。若しもほんとに盜んだのなら、かう平氣では居られるわけが無い。
「可哀さうに。こんな子供を疑つては濟まない。」

と、かりそめにも人を疑ふ心を起した自分の、よくない根性を恥ぢた。

「エエ願ひましては九十四圓飛んで五錢也。三十七圓七十七錢也。十圓飛び飛びの八錢也。」

今の今何があつたかも忘れて、大きな聲で讀みあげて居る出納係の、わだかまりの無い心持に對しても羞しかつた。見榮も外聞も無く机にもたれた儘、額から汗を流して居睡つて居る當の長谷部の無關心な寢顔に對しても羞しかつた。

「一體俺は邪推深い性質(たち)だ。なさけない。」

と考へて、滋郎は自分自身を責めた。

何の變化も無く、只管暑い夏の日は毎日毎日續いた。平生から一人では忙しくて堪らないのが、低能な長谷部一人では到底爲方(し)が無かつた。朝の九時から夕方迄、毎日同じ仕事を繰返しながら、何一つとして滿足には覺え込まなかつた。

「エ、エ、何んだッ。」

と受話器を耳に押つけて問ひ返してばかりゐる電話は、何時迄たつても埒があかなかつた。

「しつかりせんかい。」

「わやゝな。」

と仕事の手を止めて、事務員達は舌打ちしたが、しまひには小言を云ふのも張合ひが無くなつて、人々は何も云はなくなつてしまつた。

幸な事には、當分何の間違ひも無かつたが、或日の午後、例の通り受附の窓口で受取つた金を丸盆に載せて運ぶ途中で、給仕は手を滑らして落しさうになつた。狼狽ててそれを胸で押へたが、細かい銀貨の幾片は、搖れて動いて床の上に落ちて轉がつた。

「氣を付けなくちやあいけないよ。」

と云ひながら滋郎も椅子を離れて、四方に散つた銀貨の行衞を探した。長谷部は四這ひになつて机の下に潛つた。

「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ――あともう一つだ。十錢玉だぜ。」

さう云ひながら、自分も机の下へ半身潛らうとした滋郎は驚いて詰つた。

「どうした。あつたのか。」

「へイ。」

答へながら、机の下からのそのそ出て來た給仕は、帶の間に挾んだ片手を出して見せた。埃に汚れた掌に新しい銀貨は光つて居た。

「どうしたんだ、それは。」

大きな机の脚の下に四這ひになつてゐた長谷部が、紙屑籠の下から拾ひ出した銀貨をつかんだ手を、その儘帯の間に入れようとしたのを、滋郎はふと見て驚いたのであつた。彼は自分の胸の動悸を押沈めるやうにつぶやいたが、息がはずんで聲は平靜を失つて居た。

「あの彼處にありました。」

長谷部は顏色も變へずに答へた。滋郎はその間拔けな面つきを見ると、いきなり張飛ばしてやり度い程憎らしかつた。

「兎に角早く持つといで。」

と促がすと、給仕はその最後の銀貨をも丸盆の中へ入れて、奥の方へ運んで行つた。

「みんな目つかりましたか。」

と心配さうな顏をして、受附に立つ客が訊いた。

「エエ、みんなありました。」

その客には疑念を抱かせ度ないと思ふ心持から、滋郎は事も無く答へて自分の席に歸つた。

尻の切れた草履を引擦りながら戻つて來た給仕の手から、受取證を受取つて歸つて行く客の後

姿を見送り果てて、滋郎は初めて安心した。

「氣を附けなくちやいけないぢやないか。若しもなくなしたら如何するんだ。」

と云ひながら長谷部の顔を正面から睨んだが、相手は不相變平氣な顔つきで、づるづる下つて來る鼻を横撫でにして濟まして居た。

「爲様の無い奴だな。」

と心中苛々したが、思ふ事を思ふ儘に云へない不愉快に、滋郎は一層相手を憎んだ。

如何しても此の少年には盗癖がある。此間の金の間違ひも、此奴の所業に違ひ無い。今日ももう少しのところで、銀貨はその兵兒帶の間にかくされてしまふところだつた。別室へ引張つて行つて糺問してやらうかしら。疳癪の爲めにむしやくしやする頭の中で、滋郎はさまざまに思ひ迷つた。

けれども彼は、事を洗ひ立てる事を恐れた。折角自分の配下として雇入れたものを、いくら役に立た無い頓馬にしろ、盗人にして人々の目の前に曝し度は無かつた。さうする事が自分自身の手落であり、不取締であると思つた。自分の雇入れた者をかばふ心持といふよりも、自分自身をかばふ心持が強かつたのだ。何時迄も何時迄も、無表情な給仕の顔を睨みつけて居たが、とうと

う何も云はずに濟ましてしまつた。

いつたん掛けた疑は執念深く滋郎を惱ました。彼は机と机を向合せて坐つて居る少年の一擧一動に探偵の目を光らせる事になつた。今迄は唯單に間抜けに見えた相手の顏さへ、自分達を油斷させる爲めのもののやうに邪推された。涎を垂らして居睡つて居るだらしの無い姿を見ても、かへつてそれが人を欺く手段のやうに見えて來た。

「馬鹿な、そんな事があるものか。」

と打消しても、心の底の底の疑惑は動かす事が出來なかつた。如何してもその疑を確めない限りは氣が濟まなくなつてしまつた。

彼はふと一昔以前學校の寄宿舍に居た頃の記憶を思ひ出した。大學部の生徒を室長に頂いて、彼は彼よりも年下の少年と三人で一室に暮して居た。下町の大きな商家の一人子だつたその少年は、色の白い脣の赤い子供だつた。何時といふ事無しに、隣り近所の室々の學生達が、無雜作に机の曳出に放り込んで置く財布や蟇口の中の小錢が一枚二枚なくなつてゐるのに氣が附き出した。君も盗まれたのか、僕もやられたと、一同は口々に云ひながらお互に疑ひ深い目で見合つた。室長はその少年の擧動に疑を掛けた。彼は自分の蟇口の中の銀貨に、一々爪で傷をつけて、そのま

ま曳出に入れて置いた。その日のうちに、十錢銀貨が一個なくなつた。室長は何の躊躇する事も無く、同室の少年の懐に手を突込んで、その錢入を引出した。爪の痕の明かに殘つてゐる銀貨が中から出て來た。可愛らしい顔をした子供だつたが、彼は生れつき手癖が惡かつたのである。嚴しく叱責され、繰返し繰返し說得されて、涙を流して恥ぢたが、怖ろしい盗癖は、少年の弱々しい良心を以てしては打勝つ事が出來なかつた。お小遣に困るのでも無く、大金に目をつけるのでも無く、彼は再び他人の白銅貨を盗んで、横面を張飛ばされて、退校された。

その當時の光景は、現在の滋郎の胸に、まざまざと蘇生つて來た。彼は何氣無い顔をして、出納係のところへ行つて、札を銀貨に換へて貰つた。その一つ一つに密に爪で傷をつけて、故意と給仕の目の前でちやらつかせながら蟇口に入れ、その儘無雜作に机の曳出にしまつた。用事があれば席を離れて遠くへ行つた。正午の食事の時間にも、彼はその儘食堂へ下りて行つた。けれども蟇口の中は無事だつた。夕方仕事をしまつて歸る時、一つ一つ銀貨を勘定して見て、全く盗まれて居ないのを確めた時は、寧ろ張合ひがなくてがつかりした。何かしら事件が起るだらうと思ふ期待に緊張して居た氣持がたるんだのであつた。

たとへどんな相手にしろ、人を疑ふのはよく無い事だと思ひながら、翌日も亦同じ手段を試み

た。二日、三日、四日、彼は執拗く罠を掛けたが、疑は疑以上に發展しなかつた。滋郎は、無理にも罪人をこしらへようとするやうな、自分の根性の卑しさを心密に恥ぢた。

間に合は無い事は間に合はないながらも、長谷部が來てから一ヶ月は過ぎた。何と云はれても感じ無い相手の愚圖に辟易して、誰も小言は云はなくなつた。どうせ給仕は間に合はないものだと、あきらめてしまつた形だつた。

ところが或日事件が起きた。月末の給料日の朝、出納係は澤山の狀袋に、一々月給を勘定しては封入して居た。其處へ用事があつて來て佇んだ給仕は、一枚々々夥しい札を數へ、一つ一つ銀貨を數へて居る出納係の手の働きを、物珍しさうに眺めてゐた。

不意にけたたましい音を立てて、机の上に山と積んだ月給入の狀袋は、重なり合つて床に落ちた。まだ封じてないやつの口からは、いくつかの銀貨が輝きながら轉び出した。

「阿呆ッ。何しよるんや。」

出納係の怒つた聲が一同を驚かした。彼は幅の廣い顏を眞赤にして、給仕の腕をつかんでこづき廻した擧句、力まかせに突飛した。突飛ばされた給仕は、一堪りも無くよろめいて床の上に膝を折つた。

「むちやしよる。」
まだ腹が癒えないやうにつぶやきながら、出納係は床に落ちた狀袋を集めた。近くに居る者は何れも机を離れて、方々に散つた銀貨を手傳つて拾つた。
「どうしたんだ、長谷部。」
滋郎は馳寄つて、給仕を引起しながら訊いた。
「私、何もしやしまへん。」
と彼は意外にも落ついた聲で答へた。
「何だと。如何もしなかつたと。」
出納係は怖しい權幕で詰つた。
「馬鹿奴ッ。何もしないでお金が落ちるかい。貴樣が餘計なところに手を出したから崩れたんぢやないか。如何するつもりなんだ、阿呆ッ。」
と云ひながら、いきなり給仕の横面を平手でなぐつた。ぴしやんといふ厭な音が、滋郎の眉をひそませた。流石に無神經な長谷部の顏も青ざめて、目尻の下つた目から涙があふれて來た。
「如何したんです。」

と一人の社員は、息をはずませて憤つて居る出納係をなだめるやうに訊いた。

「如何したつて、私が月給を勘定して居るところへ此奴がやつて來て、折角整然（きちん）と積んどいたやつを、滅茶々々にしてしまやあがつた。ほんまにむちやしよるぜ。」

ぶつぶつ云ひながらも、彼は自分の席へ戻つて、又忙しく勘定を始めた。彼は單純に給仕の粗忽を怒つて居るらしかつたが、滋郎はその場の様子から、日頃の疑惑を一層強く感じて、一種胸苦しい氣持に惱んだ。

「オヤツ十錢足りないぞ。」

と出納係は仰山な聲を立てて、

「まだ一つ何處かに轉がつてるに違ひない。」

と椅子を離れて、床の上をあちこちと腰をかがめて探し廻つた。

「如何したんです。いくらか不足なんですか。」

と洋筆（ペン）を下に置いて訊いた者もあつた。

「エエ十錢足りないんです。」

「なんだ十錢か。」

とつぶやいた者があつた。
「十錢だつて會社の金だからね。」
出納係は机の下に首を突込んだり、椅子を持上げたりして意地になつて探した。
「オイオイ、長谷部。お前も探すんだ。一體みんなお前のおかげなんだからな。」
と彼は給仕を呼んだ。長谷部は、其の時はもう受附の椅子に歸つて居たが、呼ばれるままに立上つて、氣働の無い顏をして、床の上に四這ひになり、銀貨の行衞を求めた。
「ようく隅々迄探すんだぞ。」
と云ひ捨てて、出納係は席にかへつて、又月給の袋を體裁よく机の上に並べ始めた。
「爲方が無いや。目つからなかつたら十錢散財だ。」
輕口をききながら、彼はもう仕事の忙しさに引込まれてしまつた。
滋郎は不愉快な疑に氣分も重苦しくなつて、其處いらを機械的に這廻つて居る長谷部の樣子を凝然と見て居た。薄黑く垢のたまつた痩せつぽちの襟首を延して、別段注意深く探す意志も無い癖に、ものぐささうに動かして居る脚は、短い袴の下から突き出て居て、その格好は掃溜の野良犬を想はせた。うつむいて居る爲めに、愈々しまり無く垂れて來る青鼻汁をすすり上げ、時には

筒袖で横撫でにした。突然滋郎の疑は深くなつた。長谷部は机の下に潛る時も、青鼻汁を横撫でにする時も、片方の手で、帶の邊を氣にしては幾度となく押へるのであつた。餘り度々同じ場所に、床についた手を運ぶのが、如何してもその帶の間に或物の潛んで居る事を疑はせた。滋郎は自分のした惡事を發見されたやうな胸轟を感じながら、如何いふ處置を取らなければならないのかと思ひ迷つた。

何時迄たつても長谷部は立上らなかつた。しまひには愈々不精つたらしく、ひとつ處に坐つた儘、ぼんやりと四邊を見廻して居た。

「如何した。どうしても見付からないのか。プツ、そのざまは如何したんだ。日射病に罹つた高麗犬つて形ぢやないか。」

出納係は顧みて吹出した。

「まあいいや、爲方が無い。俺が十錢丈損しといてやら。何時迄もそんな處を這ひずり廻つてたつて爲様が無いぢやないか。他に用事もあるんだぜ、馬鹿奴。」

氣のいい彼は口では云ひながら、何の疑も無く相手を赦した。

「しかしこれからは氣を附けんとあかんぞ。」

と起上つて膝頭の埃をはたいて居る給仕をたしなめた。
長谷部は微かにうなづいたが、別段小言も身にしみた風も無く、尻切れ草履を引擦つて、自分の席に歸つて來て、滋郎と顏を見合せて坐つた。
餘りといへば無神經な樣子が、極端に圖太いものに思はれて、滋郎には忌々しかつた。一思ひにとつちめてやらうかと、ふと荒々しい心さへ起きた。彼はその頓珍漢な雜作の、ぼんやりした顏を見詰めながら苛々して居た。
「オイ、一寸此處へお出で。」
暫時して滋郎は思ひ決して呼んだ。
「手傳つて貰ふ事があるんだ。」
かういつて顎で招きながら立上つて、相手が後からついて來るのを感じながら事務室を出た。
暗い廊下へ出ると、滋郎はいきなり振返つて、驚いて見上る給仕の顏を睨んだ。
「お前盜んだな。」
「イイエ。」
びつくりしながら答へる時、長谷部の手は自ら兵兒帶の上を押へた。

「その帶の間にあるのは何んだ。」

滋郎はむづと相手の手首をつかんで引寄せた。流石に無表情な給仕の顏にも驚愕の色が浮んで、目尻の下つた目の遣場に困つてうつむいた。

「何もあれしめへん。」

それでも白ばつくれて云ひながら、つかまへられて居ない方の手で、強情に帶の間の物をかばはうとした。

「馬鹿ツ、俺はちやんと知つてるんだぞ。」

いきなり相手の帶の間に手を突込んだ。次の瞬間には、眞新しい十錢銀貨は、滋郎の指頭に輝いた。

「如何したんだ、これは。此間からをかしいをかしいとは思つて居たんだが、可哀さうだから見逃しといてやつたんだ。今日が初めてではないだらう。此間もお前がごまかしたんだらう。」

それでも此の低能兒の顏には、何の表情も浮かばなかつた。その無表情が、無闇に圖太い根性に思はれて、滋郎の心は苛立つた。彼は相手の腕を引張りながら、人氣の無い應接室へ連れて行つた。

「オイ此の十錢は如何したんだ。」
滋郎はそれを卓上に置いて、
「先刻事務室でお金をぶちまけた時ちよろまかしたんだな。」
と相手の顏色をうかがひながら訊いた。
「イ、エ、そないな事しやしまへん。」
「嘘をつけ。此間も銀貨が一つ足りないのを僕が出してやつたが、あれもお前が盗んだんだ。いくらかくしたつて駄目だぞ。」
さう云つて彼は拳骨で卓を叩いたが、相手は一向動じないで、
「そないな事あれしめへん。」
とばかりで、平氣な面をして居るのであつた。
「そんなら此の十錢は何處から持つて來たんだ。」
「私のだんが。」
答へながら、いきなり手を卓の上の銀貨に差延した。
「何をするんだ。」

滋郎は思はず大きな聲を出して、其の手を引排つた。

「だつて私のだんが。」

長谷部は強情に言ひ張つて又しても手を出した。

「馬鹿ッ。」

くわつとして怒鳴つた時、彼の手は思はず知らず給仕の横面を張飛ばした。ぴしやんといふ音と同時に、何か生温い不潔物に觸つた氣がした。彼は自分の暴行を悔む心持と、相手の圖太さを憎む念と入りまじつた昂奮に胸をどきつかせた。

「柘植さん、柘植さん。」

と廊下で呼ぶ人の聲がした。

「柘植さあん。」

「ハアイ、只今。」

彼は應接室の戸をあけて首を出して答へた。

「お客ですから直ぐ來て下さい。」

「承知しました。」

と答へながら椅子を離れた。
「今日は赦してやるけれど、これからは屹度氣をつけるんだぜ。二度と曖昧な事をすると承知しないぞ。」
何と云つても平氣な給仕を無效果に睨みつけて、滋郎は其の室を出た。ちらと振返つた時、長谷部は滋郎の言葉などには耳もかさず、卓上の銀貨を抓んで帯の間に入れてゐた。
その日は事も無く暮れた。蒸暑い午後の半日も、滋郎は汗を流し通しに流した。叱られても揶られても、ちつとも感じない長谷部は、どんな事が己の身に起つたのかも忘れて、鼻汁を垂らしたまま居睡つて居た。其の腑甲斐無い有様を見ると、餘りに手堪への無い歯がゆさと、取るにも足り無いそんなものに、かりそめの癇癪まぎれに拳を振上げた輕率を悔む心が、胸苦しい程不愉快だつた。
夕方一同が仕事を終つて、ぞろぞろ歸つて行く中に、
「ああ、今日は十錢損しちやつた。馬鹿馬鹿しい。」
と、それがさも面白さうに高調子でしやべりながら、月給日に限る浮々した足取で、出納係もまじつて行つた。

長谷部は色の褪めた鳥打帽子をかぶつて、前屈みに突出た細い頸をふらふらさせながら、西日の當る往來を、埃をあげて歸つて行つた。彼に對して腕力を振つた爲めに、怖しくひけめの出來た氣持がして、滋郎はその少年の貧弱な後姿の、町角に消えて行くのを、幾度となく振返つて見送つた。

翌日から長谷部は出勤しなくなつた。最初は、遲刻したのだらうと思つて居たが、何時迄たつても出て來なかつた。

「柘植さん、貴方のところのちんぴらは如何しました。」

と出納係は何時もの通り冗談づらで訊いた。

「如何したんですか出て來ません。」

「昨日私が張飛ばしてやつたんで怒つて來ないんぢやありませんか。」

と出納係は云つて、別に悔む樣子も無く、かへつてそれは、如何にも面白い事だつたといふ風に見えた。

しかし滋郎には、給仕の出て來ない責任は自分にあるのだと思はれて爲方が無かつた。よしんばふとした出來心で、一片の銀貨をちよろまかしたにしても、穩かにきき糺せばよかつた。何も

いきなり横面を張飛ばすにはあたらなかつた。何にしても亂暴をしたのはよくない事だつたと考へた。若しもあれが寃罪だつたら如何しよう。いいえそんな事は無い、確に盗んだのは彼の給仕に違ひ無い。ああだらうか、かうだらうか、滋郎はさまざまに想像し盡した。彼の一片の銀貨に對する長谷部の執拗な執着が、明瞭に想ひ出された。矢張り彼奴は盗んだのを發見されたので、出て來られなくなつたのだと、結局は其處に落ついた。

二日たつても三日たつても長谷部は出て來なかつた。

「栢植さん、栢植さん。」

と呼びつける主席事務員の聲が、日に幾度となく聞える事になつた。殊更暑い日照り續きに、ぐつたり弱つた身體を椅子に休めるひまも無く、次から次と雜用を云ひつけられた。

「一體給仕は如何したんです。一人でも足りないで困つてゐたのに、その一人もゐなくなつてしまつては爲方がないぢやありませんか。第一君が給仕の仕事をして居るのからして不體裁だ。」

眼鏡の下に目を光らせてつけつけと云つた。

「兎に角あの長谷部か、あれはやめたのか病氣で出て來ないのか確めるんだね。その上で又新聞に廣告でも出す事にして下さい。」

「かしこまりました。」
と答へながら、滋郎は甚しく不平だつた。誰が好き好んで給仕の眞似なんかするものか、會社がけちで給金を出さないからこんな事になるんだと、上役の同情の無い態度に憤慨した。引いてはその憤懣の遠因ともいふべき長谷部の缺勤から溯つて、その缺勤を引起した自分自身の輕擧が忌々しく回想されるのであつた。間に合はない間に合はないと苛々しながら使つて居た低能兒さへ、急にゐなくなられると困つた。あれでも矢張り手助けにはなつたのだと、全身から流れる汗に氣持惡く濡れながら、その少年の貧しい姿の目前に見えないのを、ふと寂しく思ふ事もあつた。兎に角、如何いふ理由で出勤しないのかきただださなければならないと考へて、葉書を認めたが、勿論返事は無かつた。どうせあの長谷部に、さうした回答が出來ようとは最初から考へない事だつた。
ふと氣が付いて、あの少年を目見えに連れて來た其の兄の事を思ひ出した。××銀行に勤めて居ると云つたので、滋郎はその銀行に電話を掛けてみた。
「ハイ、私は長谷部の兄で御座います。何時も弟が勝手ばかり致しまして相濟みません。」
と電話には持つて來いの、よく透る聲で、行儀のいい切口上で應對するのが、弟とは似も似つ

かない出來であつた。

「兎に角無斷で休んで居られては困るのです。病氣なら病氣、家事の都合なら都合と屆けて呉れるか、或はやめるものならやめると、はつきり斷つて貰ひ度いのですが。」

「イイエ、決してやめるなどと云ふ事は御座いませんのですが、實は御承知の通り、弟はあのやうな頭のよくない者で御座いますから、會社の仕事が難しいのかと思はれます。殊に耳が少々悪う御座いますので、電話の受附がつらいと申します。時には間違つた事もしでかしますので、お叱りを受ける事も御座いませうから、會社へ行くのは厭だと申しまして、朝になりますと駄々をこねて斷りますのです。お會社の方がつとまりませんでは、もう他所様へお願ひしても駄目で御座いますから、親共も私も、辛棒せい辛棒せいと申して居りますのですが、今朝も亦電話の受附さへなければ行くなどと澁りまして——如何もまことに相濟みません事で。」

兄は、その電話口で頭を下げて居るやうに想像される程、叮嚀に恐縮した物言ひで詫びた。

「何にしましても明日は必ず出勤させる事に致しますから、何分にも御勘辨下さいまし。」

と最後には繰返して、屹度出勤させると誓つた。

それにも拘らず、翌日も長谷部の姿は見えなかつた。あの兄があれ程堅く約束して置きながら、

矢張り來ないところを見ると、如何してもやめるのに違ひ無い。それにしても、何の挨拶もしないのは怪しからないと考へると、悧巧さうな口をきく兄の方も、うす馬鹿の癖にづうづうしい弟も、諸共に小憎らしかつた。どうしても先方の不都合を詰つて、謝らせなくては承知出來なくなつて、彼はその日の午後、再び銀行へ電話を掛けて兄を呼出した。

「へエ、そんな筈は御座いませんが。昨晩私から呉々も申し含めまして、今日から出勤するやうに納得させました。それに今朝は私と家を出まして、途中迄も一緒に參りましたが――へエ、ほんとにお會社の方には出て居りませんのですか。」

兄は全く合點の行かない口ぶりで、かへつて向ふから問ひ返した。

「途中迄一緒に來たんですつて。それは不思議ですね。だが私の方へは、兎に角顏を出さないので、もう斷然やめるのだらうと思ひましてね。」

「そんな筈では無いので御座いますが。如何も不思議な事で――どうしましたのですかしら。」

雙方ともに要領を得ないで、幾度も同じ言葉を繰返すばかりだつた。

兄の少年が、ほんとに不思議がつて居る樣子から考へて、彼が譃をついて居るのだとは思はなかつたが、それでも事情の判明しない不服で胸が納まらなかつた。何となく自分が馬鹿にされて

居るやうな面白くなさを感じたのである。如何しても曖昧にごまかされては居られない。何んでもかんでも突込んで調べた上で、閉口さしてやらうと思つた。

夕方、會社の歸りに、彼は長谷部の家を訪ねる事にきめた。日の長い夏の高い空には、重苦しい靄が薄くかかり、その靄は此の都會の四方を圍む工場の烟突から吐出される煙と、乾き切つた往來から舞上る塵埃に暗く濁つて、風の無い日を一層蒸暑くした。西に傾いて行く太陽は、靄の底に眞赤に燒けながら、家々の屋根の間から、執念深く町々を照りつけて居た。

方々の會社銀行の退出時間の、こみあふ電車に無理に割込んで、人と人との間に押詰められると、むせかへる汗の臭ひに胸が惡くなるのであつた。會社の壁に懸つて居る市街地圖で見當をつけて來た停留場で下りて、長谷部の家のあるといふ町に入つた時は、遠い旅へ出た心細さがあつた。

電車の窓から見渡すやうに思はれた一段低い埋立地らしい貧しい町の、不規則に家の並んでゐる間を通つて行くと、空地の多い町端れに出た。石炭殼や鐵屑で埋まつた地面の、あつちこつちに牛だちの長屋がいくつとなくたつて居た。家と家とが押合つて立並ぶ大阪を、かういふ景色が取巻いて居ようとは思ひもかけなかつた。

幾度となく道往く人や、小賣店の店番をして居る者に、彼が求める長谷部の家を訊いた。番地

を云つても、なかなか見當らなかつた。彼は惱ましい暑氣を堪へ難く思ひながら、少しづつ低く落ちて行く日輪をかへりみて額の汗を拭いた。

やつとの事で探し出した家は、雜草の茂つた空地の中に、一列に立並ぶ長屋の端れにあつた。廂の傾いた平家の、入口の格子戸からも、形ばかりの目かくしのついてゐる三尺の小庭の外からも、淺まな家の內は充分見透された。その目かくしの下には、延び放題に延びた蕗の葉が重なりあつてゐた。

暫時は、人の氣配のする家の內を、遠くから覗いて居たが、思ひ切つて其の格子に手をかけた。

「御免なさい。」

「誰や、傳次か。」

よく聞えなかつたと見えて、女の高い聲が問ひ返した。

「傳次やないのか。鹿三か。」

とげとげしたその聲がたたみかけて來たので、滋郎はかへつて返事が出來なくなつた。困つたなと思ふひけ目を衝いて、家の內から何かしら、さまざまのいりまじつた物の惡臭が鼻を襲つて來た。

「誰や。」
とつぶやきながら肥りかへつた大女で、白い腰巻の上に、袖無しの襦袢をはおつたのが、大きな乳房に波打たせて出て來た。
「何方(どなた)さんだッ。」
いぶかしさうに、土間に佇む滋郎を透して見たが、見馴れない洋服姿に驚いて、襦袢の前を兩手で合せながら、高い處から落ちたやうに坐つた。赤味を帶びて太い兩手は、肩口からあからさまに、偉大なる膝つ子は、破疊の上にわだかまつた。
「私は會社の者ですが傳次さんは留守ですか。」
滋郎は、自分にとつて甚しく縁遠い世界に足を踏込んだ氣まづさを感じながら、自分自身腹の立つ程おどおどした調子で切出した。
「アア貴方さんは傳次のお世話になつたる會社のお方だつか。」
相手の素性が知れたので安心したらしく、
「いろいろ御贔負になりまして。あないなやくざな者やさかい、何處へ行つても勤まりまへんのに、ようまあ使うてくれはるものや、難有(ありがた)いこつちやと云うてまんのや。」

自分のぶざまを恥ぢる事も知らない大女は、若い相手だと思つて、止度も無くしやべり出した。
「私とこもなあ、肝心のおやつさんが長い事患うて、かだらが利きまへんさかい、飯喰べるかて、尿するかて、私の手を借らん事にはあきまへんのでなあ、子供達が銀行や會社に勤務に出て、かつかつお米も買うたるやうな事てして、他人様から見たら阿呆にも見えまつしやろが、あの傳次さへいつぱし働人におまんねぜ。」
年老つた亭主が中氣で一年越寢たつきりの家の不如意な事、その爲めには親二人子供四人の一家族の糊口を支へるのはその四人の子供達で、銀行に出てゐる太一は悧巧者で、日給に戰時手當を加へると、日に四十錢の貰ひがある事、三男の鹿三は染物工場で、娘のおかめは綿絲屋の受附になつて、何れも日に三十錢以上の收入のある事を、自慢さうに雄辯に話した。
「それに比べると、あの傳次ばかりが甲斐性がおまへんでなあ、日に二十錢ほか稼ぎまへんのやけど、それもなあ、貴方さんの方にして見たら、あれが阿呆で間に合はんさかい、出しはらへんのやよつて、もそつと勉強した事には、とんとあげて呉れはるのやと、私が始終云うてきかしてまんねぜ。なんぼ阿呆やかて、今日日子供でも二十錢や二十五錢のお給金では、雇はうと云うたかて雇へるもんやおまへんがな。つづまりあれが賢う生れつかなんだ不運やとあきらめては居り

まんねやけど、何分貴方さん方があんじようお引立て下さつたらな、又如何にもして頂ける事やらうと、こない思ふとりまんのや。」

先方にとつては、別段厭味でもないのだらうが、立て續けにしやべられて、所在なさに手の置き場所にも困つて居る滋郎には、一々あてつけがましく聞えるのであつた。阿呆阿呆と口でこそ息子の半馬鹿を承認して居ながら、腹では存外自信のあるらしい態度が氣に喰はなかつた。なんだ、あんな低能兒を雇つてやる丈でも難有がつていいのだ。不足がましい口の利けた義理ではないと、滋郎は癪に障つたのである。平生は、會社の給與が餘りに僅少なのを不平に思つて、給仕や小使に同情して居るのだつたが、目の前の憚り氣の無い大女の汗臭い肉體の威壓に對する反抗的氣分は、暫時そんな心持を忘れさせたのである。

「一體傳次さんは留守なんですか。」

と話の切れ目を覗つて訊いた。

「へイ今日はまだお會社から歸りまへん。」

「會社ですつて。今日も會社には出て來ませんぜ。」

「そないな筈はおまへんがな。私がこしらへてやつたお辨當を抱へて、兄弟揃うて出かけました

が。」

女房は不審さうに云ふのであつた。

「イイエ來ません。此間からちつとも出て來ないので、如何したのかと思つて、太一さんといふのですか、あの兄さんの方に電話で聞くと、今日から出ると云ふ事だつたのですが、矢張り今日も見えませんでした。」

「そないな筈はおまへんがな。」

女房は首を捻つて、此間から會社へ行くのを厭がつて、毎朝々々出澁るのを、親や兄弟に執拗い程意見されて、今朝は兄や弟と同じ時間に出掛けたのだと云ふのであつた。その口ぶりによれば、自分の目の前で、辨當箱を風呂敷に包んで、大事に抱へて出掛けた息子の姿を疑ふ事は出來なかつたらしい。如何あつても承知出來ないといふ様子で、二重顎の猪首を捻つて不思議がつた。

「只今。」

格子の外から聲をかけて、折柄弟の鹿三が歸つて來た。詰襟の霜ふりの洋服を着た、がつしりした大柄なのは、傳次よりも兄に見えた。

「鹿三かい。お前も知つたるやろ。今朝傳次はお前達と一緒に出て行つたのやつたなあ。」

と味方を得た喜びに、女房は高調子で聲をかけた。
「アア、兄さんと私と三人で行つた。」
と答へながら、うさん臭さうに滋郎の姿を見て、格子の外に佇んで居た。
「ナアさうやろ。それになあ、此のお方の云ははるには、傳次は今日會社へ行つたれへんねと。をかしいなあ。」
と母親の云ふままに、小悧巧さうな子供も、一緒に首をかしげて不審がつた。
「何にしても今日は來なかつたのですが、來るなら來る、來ないなら來ないと、はつきり決めて呉れないと困るんです。」
「それはもう當人も納得しました事やさかい、明日はどないな事があらうと、屹度うかがはせまつさ。ほんまに遠方の處を御迷惑さんだしたな。」
とそらぞらしい愛嬌をつくつて云つた。
「それぢやあ明日は確に出て來て呉れるんですね。」
「大事おまへん。私が請け合ひました。」
念を押す滋郎に答へて、女房はその肉の厚い胸を叩いて笑つた。

「では宜しく。如何もお邪魔しました、御病人のあるところを。」

滋郎は挨拶して格子の外に出た。

「大きに御苦勞さん。」

女房の聲を後に聞き捨てて、黄昏の空地の草を踏んで歩き出した。何時の間にか日の沈んでしまつた遠くの町の物の音が、微かに震へて來るのを、聞くともなしに聞きながら、遥かに高い宵の明星を心細く仰ぎ見た。地上の人事の紛糾を厭ふ心持が、一層その大空をなつかしいものに思はせた。

貧しい場末の町の裏長屋の景色は長く忘れられなかつた。此の大都會の一隅に暮して居る一家――半身不隨のよいよいの亭主、強壯な肉體を持つてその病人につきつきりの女房、男三人女一人の子供達が兩親を養つてゐる有樣が、明瞭に目の前に浮んで來た。かういふ場合に自ら湧いて來る人間の同情は、あの低能な長谷部をさへ、親しいものに思はせた。寧ろその低能の事實が、此の心持を強めたのであつた。

次の日の朝、滋郎は會社の入口の石段を上りながら、押開く扉の中の受附の窓に、眉毛も目尻ももろ共に垂下(たれさが)つた長谷部の頓狂な顔を見るのを期待して、それが輕い喜びに感じられた。とこ

ろがその受附の窓は、硝子の下りたまゝに閉つてゐて、此の頃の幾日と同じく、主の無い机と椅子が向合つて並んでゐるばかりで、誰の顏も見えなかつた。

「チェツ又彼奴來ないんだな。來なけりや來ないで構ふもんか。あんな低能兒。」

餘り度々手數をかけられた事を考へるとむしやくしやして、わざわざ遠い貧乏町迄出かけて行つた自分が馬鹿らしくなつた。年老つた病人の父に仕へてゐる兄弟達に對して抱いた同情も、低能を憐れんだ心持もうすらいだ。そんな心持を持つた事が忌々しくも思はれて來た。又しても受附の椅子に坐つて、給仕の仕事を引受けなければならないのかと思ふと、もう額から汗が滲み出して來た。

ふと人の來た氣配がしたと感附いた時、

「今日は。お早う御座います。」

と窓から顏をつき出したものがあつた。長谷部の兄だつた。

「昨日はわざわざお出で下さいましたさうで、まことに相濟みません。今日は弟を連れて參りました。」

云ひながら振返る背中にぴつたりくつついて、長谷部の靑黑い顏がうつむいて居た。

「昨日は會社へ出るつもりで參りましたので御座いますが、途中で氣が變りまして、何處ぞほつつき歩いて居りましたさうで。まことに濟まん事で御座いますが、生れつき足らん方で御座いますから、御勘辨下さいまし。」

と兄はしきりに頭を下げて詫びた。

「マア過ぎた事は爲方が無い。そのかはりこれからは氣をつけて貰ひませう。」

滋郎は、長谷部の來た事が、自分自身の努力の結果だつたやうな氣がして、苛々した胸も納まつて、喜んで彼を事務室へ呼入れた。

「では私共もとつくり當人に申聞かせますが、何分宜しうお願ひ致します。」

と兄は眞面目な顏をして、頭を下げて歸つて行つた。

「どうしたい。まあ其處にお掛け。」

滋郎は目の前の椅子に腰掛けた貧弱な少年の姿を見ながら、冗談にその背中を叩いてもやり度いやうな輕い心持で、近々と寄つて聲を掛けた。

「どうしたんだ。此間叱られたので厭になつたのかい。」

「イイエどないにもあれしまへん。」

殆んど問ひかけられた言葉の意味も解らないやうな返事をして、相手は何時もと同じ無愛想な顔を外方に向けて居た。

「よしよし、今迄の事は如何でもいいや。そのかはりこれからは勉強するんだぜ――先づ第一に此の葉書を一纏めにして綴るんだ。」

諸方から來た書狀の整理を手傳はせる事にして、手を取るやうに用事をいひつけた。

滋郎は終日樂しく働いた。てつきり逃げて行つてしまつたのだと思つた長谷部の歸つて來た事は、少なくとも自分が心配したり、わざわざその家迄行つたりした努力が酬いられたのだと考へられた。それが非道く滿足だつた。

「オイ給仕、何してんのや。電話が鳴つたるがな。」

などと小言をいふ事務員があると、滋郎は氣輕に立上つて、自分が一々電話口に出た。耳の惡い子供をいたはる事も、張合ひのある事であつた。

「お前如何したんだ。暫時出て來なかつたぢやないか。」

と訊く者があると、

「少し家にとりこみがあつたさうです。」

と滋郎は引取つて答へた。さうしてかばつてやる事も張合ひがあつた。飼ひ馴れた主人の家を忘れて迷ひ歩いてゐた犬が、ひよつくり戻つて來た時のやうな喜悦を彼は經驗した。

夕方仕事をしまつた時は、少し疲れた身體に、何ともいへない快感を感じた。

「今日は君が來て呉れたので、仕事が馬鹿にはかどつたよ。」

歸支度をしながらも、滋郎は如何かして此の低能な相手に、自分の厚意を感じさせ、且つ今後忠實に働いて貰はうと思つてゐた。それでも長谷部はけげんさうな顔附で見返したばかりで、これも空つぽの辨當箱を抱へて歸らうとするのであつた。

それを見ると、その張合ひの無い相手に、是が非でも接近して、此方の同情のある心持を強く知らせないでは承知出來なくなつて後から呼止めた。

「オイ、君はもう歸るのかい。」

「ヘイ。」

ふり返つて答へたが、直に又向ふをむいて歩き出した。

「一寸待たないか。」

呼止めて置いて、滋郎は手早く帽子かけの帽子をとると、後から追ひかけた。

「どうだい、これから一緒に活動寫眞でも見に行かないか。」
「活動だつか。」
腑に落ちない誘引に驚いて、長谷部は滋郎の顏を見守つた。
「活動寫眞を見て、それからお汁粉でも喰べよう。――君はお汁粉は嫌ひかい。」
「エヘヘヘ。」
お汁粉の嫌ひな奴があるものかと云ひ度いやうな顏をして笑つた。
「嫌ひぢやないだらう。それぢやあ行かうぢやないか。」
さう云つて輕く背中を叩きながら歩き出すと、相手もうなづいて後について來た。
「一體活動寫眞は何處が一番いいんだらう。」
「千日前だつしやろ。」
「さうか。それぢやあ電車に乘らう。」
長谷部はもう目的地にばかり心が吸ひついてしまつた風で、西日の照りつける町中を、鼻の頭に汗をかいて、せかせか歩いてゐた。
數十分の後、こみあふ電車からはみ出すやうに押出されて來た二人は、千日前の雜沓の中に卷

き込まれた。

種々(いろ〳〵)の樂器の、賑かに、不調和に、亂雜に、浮氣らしく、絕間なく湧きかへる一區劃の、兩側に並んでゐる小芝居、見世物、活動寫眞の、毒々しい繪看板に見とれて、長谷部は幾度となく往來の人に突當つては、突き飛ばされた。

「オイ、何處の活動に入らう。」

と呼びかけても夢中になつてゐる相手は返事もしずに、地面を離れた足取りで步いた。何處も彼處(かしこ)も、彼にとつては、選擇の餘地の無い程魅力を持つて居るのであつた。

「何處でも君のいいところに行くぜ――それとも一先(ま)づお汁粉でも喰べようか。」

「エヘヘヘ。」

長谷部は嬉しさうな微笑を頓馬な顏中に漲らしてうなづいた。

「よし、そんなら第一番はお汁粉だ。」

滋郎は相手を促して後戻りした。寄席や、手輕な飲食店の並んで居る、お寺の横のせせこましい露地の中に、一度友達に連れて行かれた汁粉屋のあるのを思ひ出した。

「夫婦(めをと)ぜんざい」といふ大提灯の出て居る家の暖簾(のれん)をくぐつて、二人は土間の腰掛に掛けた。

一人に對して一時に二つづつ持つて來るのが、「夫婦ぜんざい」の名前のある所以だつた。如何にかして味を違へるか、中の餅の色を紅白にでも變へればいいのに、智惠の無い事には全く同じ汁粉が一人に二つづつ、大きな椀のふちからあふれるばかりであつた。

「サアいくらでも、喰べられる丈喰べていいぜ。」

さう云つて滋郎も箸をとつたが、長谷部はお椀の中に顔を突込んで、息もつかずに喰べ始めた。さうして、元來甘黨でない滋郎が、やうやく一つ片附けた時は、長谷部は旣に二つとも平らげて、口の廻りについた餡粉を、長い舌を出してなめてゐた。

「どうだい、そいつも喰べて吳れないか。僕は一つでまゐつちやつた。」

「エヘヘヘ。」

と嬉しさうに笑つたが、流石に滋郎の顔と汁粉とを見比べてためらつた。

「いいんだよ。僕はあまいものは駄目なんだ。」

と煙草をとつて燐寸を擦るのを見て、長谷部も安心したらしく、殘つた一つを取上げて瞬間に喰べてしまつた。お椀の底に澱んでゐる餡の殘り迄ぺろぺろなめた。

「おかはりをとらうか。」

と訊くと、

「エヘヘヘ。」

と例の通り笑ふばかりだつたが、確かにまだ喰ひ足りない顔附だつた。

「姐さん、一人前おかはり。」

と注文して、長谷部が満足して喰べて居る有様を見ると、滋郎も頗る満足して、いい氣持で煙草をふかした。

おかはりの二つも何の苦も無く長谷部は喰べた。

「どうだい、うまいか。」

相手は默つてうなづいて見せた。

「まだ喰べられるかい。」

「喰べられない事はおまへん。」

「こいつはいいや。喰べられない事はおまへんはよかつた。——姐さん、もう一人前おかはりだ。」

滋郎は驚嘆して見て居たが、長谷部はおごつて呉れる者がどんな心持でゐるか、そんな事には

頓着無く、七つ目のお椀も綺麗になめて積み重ねた。唇の廻りばかりか、鼻の頭にも、ところどころ餡粉がこびりついて居た。

「二つ、四つ、六つ、七つか。素敵だなあ。もう參つたらう――それとも未だ大丈夫か。」

「エヘヘヘ。」

と笑ふ笑ひの中には、まだ喰べ度い慾望があからさまに見えた。

「しかしね、あんまり喰つてお腹でも惡くされると大變だ。後で御飯を喰はなくちやならないから、汁粉はこれでやめて活動に行かう。」

面白づくで見てはゐたものの、あんまりがつがつ喰ふのが心配になつた。それ程貧しく育つたものの、食物に對する強烈な慾望を見せられる事は、多少苦痛を伴ふ程淺ましかつた。

「姐さん、勘定。」

「ヘイ大きに。」

と滋郞の差出した札を受取つたのが、直ぐに盆の上に釣錢を載せて持つて來た。

「サア、それぢやあ今度は活動寫眞だ。」

と促しながら、又改めて煙草に火をつけたが、一服ふかしてふと見ると、長谷部の視線は目の

前の盆の上の數片の銀貨に引つけられて異様に光つてゐた。

烈しく胸を衝かれた氣持で、手荒く釣錢をつかんで立上つた。野獸が獲物を覗ふ時の目の色を、平生は目尻の下つた白目勝の、だらしの無い長谷部の目の中に認めたのであつた。彼は甚しく不愉快になつた。

輕い、多少はいたづらな氣持だつた滋郎は、忽ち口をきくのも億劫になつて來た。自分の後から、不精つたらしく草履を引擦つて來る者のある事が、如何にも面倒に思はれた。彼は無言で、先に立つてぐんぐん歩いた。さうして行き當りばつたりに、近所の活動寫眞に入つた。

暗い場内に踏込むと、汗の臭と、白粉の匂と、安香水の香とごつちやになつた濁つた空氣が鼻を衝いた。むんむと蒸せかへる人いきれに、全身から汗がほとばしり出た。「悪魔團」といふ西洋の探偵物が、耳障りな聲を出して、陳腐な美文めかした口調で辯士の説明するのにつれて、目まぐるしい光景を展開してゐた。覆面をした強盜の一團の中には、老人もあれば、子供も居た。仲間の首領の情婦らしい素晴しい美人の活躍する時は、巧妙と大膽を極めた惡黨の所業に感激してゐる見物の驚嘆が、思はずしらず聲になつて出て來た。

狹い腰掛にぎつしり詰められて、おまけに兩側から押されてはみ出しさうになつて居る窮屈と、

愈々汗の流れて止まない蒸暑さに、滋郎は幾度となく溜息をついた。拭いても拭いても玉になつて滲み出す汗に、半巾は隅から隅迄ぐつしより濡れてしまつた。その上風通しのよく無い場内に立昇る人間の臭ひが、胸の悪くなる程濃厚に面を打つて襲つて來た。直ぐ目の前に、男まじりに並んで居る女工らしい女の一團の髮油の臭が、とりわけ強烈に彼を悩ました。同時に自分とぴつたりくつついて坐つて居る長谷部の身體から出る汗と垢のまじつた生溫い臭氣は、身動をされる度に鼻に沁み沁みと感じられた。時たま通風器で風を送る時は、一層堪へ難く場内の不氣味な空氣が渦を巻いた。

彼は幾度と無く、直ぐにも場外に出て深呼吸をし度いと切望した。けれども肝心の長谷部は、惡魔團の活躍に魂を奪はれてしまつて、細い首を差延して見入つてゐるので、折角見せてやると約束したものを、むざむざ中途で立上らせるのは氣がとがめた。しまひには、滋郎はその幾百人の見物の歡喜である寫眞の中の強賊共の跳梁を腹立しく思ひ出した。一刻も早く豪膽機敏な探偵が、彼等の巣窟をつきとめて、からめとる事を希望した。探偵は何處迄も何處迄も強盜の後を追ひかけて、激しい格鬪が屢々繰返されたが、又しても取逃しては、更に新しく探索しなければならなくなる。さうして曲者がまんまと逃了せると、滿場の見物は心中の悅びを禁じる事が出來な

いで、旺んに拍手を浴せかける。恰もそれは惡黨の應援團のやうに思はれた。

何時か場面は、月明の古城の地下室に變つた。四方から覆面の曲者共が、各々の盜み取つた獲物を運んで歸つて來た。首領を中心にして、その分配が始まるところであつた。突然強賊の仲間に立ちまじつてゐた探偵達は、一齊に覆面を取拂つて、短銃の銃口を揃へて、惡魔團を捕縛しようとした。猛烈な格闘が始まつた。傷だらけの映畫は目まぐるしく展開されて、多數の人間がくんずほぐれつ、取組みあひ、なぐりあひ、擊ちあつた。狂暴な興味に昂奮した場内の見物は、一人殘らず拍手喝采した。ぴいぴい口笛を吹く者もあつた。數分の後、見物の期待はうらぎられて、探偵達は惡魔團を數珠つなぎにした。

「…………流石に天下を震駭したる惡魔團員も、勇敢無比なる探偵の艱難辛苦の結果、一網打盡捕縛致されまして、あはれや斷頭臺上の露と消えたのであります。」

辯士が感慨に堪へ無いらしい聲をふりしぼつて結んだ時、長尺物の大團圓は吹消すやうに消えてしまつた。ぶうぶう音を立てて、通風器の送る風は、騷然とどよめく場内を吹いて廻つた。

「面白かつたかい。」

役目の濟んだ氣安さを感じながら、滋郞はかへりみて訊いた。

「よろしうおまんな。」
長谷部は感服し切つて、溜息するやうに答へた。
「まだ見て居るかい。」
と口では訊いたが、滋郎はもう充分だと、一人できめてしまつた。
「僕はお腹(なか)が空(す)いちやつた。いい加減に出て飯を喰はうぢやないか。」
「へイ。」
長谷部は充分活動寫眞に未練は殘しながら、飯を喰ふ事にも勿論心を動かした。
「ね、その方がいいぢやないか。第一此處は暑苦しくて爲方が無いや。」
滋郎は云ひながら直ぐに立上つた。
場外に出ると既にその日も暮れ切つて、千日前から道頓堀へかけての無數の燈火の中を、浴衣姿の人數が、騷々しい下駄の音をさせて、押流されるやうに歩いた。夜に入つて一層賑かになつた興行物の安音樂、電車のきしり、競賣(せりうり)の聲、あらゆる物の音は互に反響しあつて、人の足並を浮はつかせた。
「何を喰べよう。僕はほんとにお腹が減(へ)つちやつた。」

滋郎はほんとに空つぽになつた腹を叩いて繰返した。
「何でもいいや、君の好きなものを喰べよう。」
「エヘヘヘ。」
長谷部はかくし切れない滿足を顏に出して、薄笑ひした。
何處に連れて行かうかしら、丸萬の魚のすき燒か、京與の鳥鍋でもつつつかうかとも思つたが、流石に一つ鍋に兩方から箸を突込んで喰べる事は些か怖れた。出雲屋のまむしにしようか、天金の天ぷらかとも考へたが、靴をぬいで上り込むのは面倒だし、おまけにそこいらの家は無闇に暑苦しく感じられて爲方が無かつた。
「西洋料理にしようぢやないか。嫌ひぢやないだらう。」
それが一番面倒で無くていいと滋郎は考へた。
「嫌ひぢやないだらう。」
「エヘヘヘ。」
と云ふ薄笑ひに、充分長谷部の喜悅があらはれてゐた。
滋郎は道頓堀の芝居に並んだ安料理屋に長谷部を連れて入つた。

「いらつしやい。」

「おいでやす。」

四方から甲走(かんばし)つた女の聲が呼んだ。がらんとした長細い土間に、十五六ばかり食卓を置いたあつちこつちに、まばらに客が陣取つてゐる間を、眞白に白粉を塗り立てた女が、ばたばた草履を鳴らして歩いた。中には客の間に割込んで坐つて、しやべつてゐるのもあつた。

一番奧の食卓に着くと、直ぐ目の前の壁には、ビステキ、豚(とん)カツ、メンチボオル、ハヤシビイフ、ハムエキスなどと、出たらめな名前を書いた紙が貼つてあつて、扇風器の風にひらひらして居た。

「何にしませう。」

受持の女が馴々しく椅子の背に手をかけて訊いた。

「何でもいいから、兎に角僕には麥酒(ビイル)を呉れ給へ。」

「さう、それぢやあ肉汁(スウプ)の外に三品位云ひませうか。」

給仕の女は滋郎のうなづくのを見て、直ぐに大きな聲で注文した。さうして麥酒の瓶を持つて來て、いきなり隣に腰掛けた。

「貴方奥にお上りにならない。」

酌をしながら擦りつくやうに寄つて云つた。

「奥つて。小座敷でもあるのかい。」

「エヱ。お上んなさいな。」

「まあ此處でいいや。今度一人で來た時あげて貰はう。」

「よかつたな。」

と口癖らしい事を、冷々する程大きな聲で云つた。

物珍しい家に連込まれた長谷部は固くなつて、椅子の上でもじもじしてゐながらも、樂しさうに四圍の光景を眺め廻して居た。肉汁が來ると、如何していいかわからないやうな風だつたが、滋郎の勸めるままに匙を持つと、咽喉を鳴してすすり始めた。

「此の子貴方の何？」

遠慮氣の無い給仕女は食卓の上に頬杖をついた儘、滋郎と長谷部をしげじげ見比べて、長谷部の方を顎でさして訊いた。

「弟だよ。」

「よかつたな。」

又しても同じ言葉を口にして、椅子の背にそつくりかへつて笑つた。

「ちよいとお花さん、此の人ね、此の人の弟だつて。」

「嘘よ。ちつとも似てないぢやないの。」

他の客の誂物を持つて傍を通つて行く女も一緒になつて笑つた。

「隨分珍しい顏だわ。眉毛がこんなで、目がこんなで、鼻がこんなで、口がこんなで。」

給仕女は、一心になつて肉刀と肉叉を握りしめて、肉片を切つては口いつぱいに頰張つて居る長谷部の顏を見ながら、兩手で自分の目尻を下げたり、口を押ひろげて見たり、しきりに眞似をした。

「失禮な奴だな。」

滋郎は舌打して、その女の幅の廣い厚白粉の顏を見てやつた。

「だつてほんとに滑稽な顏してるわ。貴方んとこの小僧さんなんでせう。」

益々いい氣になつて、長谷部の顏を覗き込むのであつた。

一本の麥酒も空になり、順々に出て來る料理の皿も綺麗に片附けて滋郎は滿腹した。長谷部は

と見ると、あれ丈汁粉を喰べた後なのに、出て來るものも出て來るものも、添物の馬鈴薯や人蔘の切れ端迄あまさず、皿に殘つた煮汁は肉刀ですくつてなめてしまつた。さうして口のはたをぺろぺろ舌で拭きながら、食卓の上にこぼれた麵麭（パン）の屑を拾つては口に運び入れた。まだいくらでも喰べさせれば喰べさうな樣子だつた。

「僕はもう結構だが、そつちにライス・カレイを一つさう云つてくれないか。」

「カレイ一枚。」

女は立上りもしないで注文を通して置いて、何と思つたのか、

　熱海の海岸散歩する貫一お宮のふたりづれ……

と小聲でうたひ出した。

ライス・カレイが來ると、長谷部は又かぶりつくやうな勢で、山盛りになつたのを、がつがつ喰つたが、一粒も米の殘らない皿を見て、物足り無い顔をしながら、やうやく匙を下に置いた。

「姐さん、勘定。」

「おあいそ？」

給仕の女は鼻唄をひたとやめて、白い胸かけのかくしから取出した傳票に、鉛筆をなめながら

記入して出した。

「さあ、ぶらぶら歩いて歸らう。」

さう云つて、滋郎は釣錢の中の拾錢銀貨を二枚丈心附のつもりで食卓の上に殘して立上つた。その時女は積み重ねてあつた空皿（あきざら）や、肉刀肉叉などを臺所の方へ運んで行つてゐて、其處には居なかつた。

「行かう。」

もう一度促してつかつか歩き出したが、二三歩行つてから、まだ後の方で椅子をがたつかせて愚圖ついて居る長谷部を顧みた時、滋郎は慄然として立すくんだ。彼は周圍の人々の眼を憚かつて、如何していいかわからなかつた。

「如何したんだ。早くしないか。」

やうやくの事で何氣（なにげ）ない顔をして、後戻りした滋郎は、他人に疑はれないやうに、輕く長谷部の肱をつかんだ。たつた今食卓の上に殘した二枚の銀貨の一つは、既に其處には見當らなかつた。

「あら、もうお歸り。」

臺所の方から出て來た給仕女が、遠くから聲を掛けたので、長谷部の肱をつかんだまま、滋郎

は狼狽(あわ)てて歩き出した。

「今度は屹度一人で來るんでせう。」

と女は追かけて來てお愛想を云つた。

往來に出ると、滋郎は肱をつかんで居た手に力を入れて、痛い程握りしめたまま、ぐんぐん人込みを歩いた。自分自身が惡事を働いて、追人(おつて)に追ひかけられてゐる氣持がした。一刻も早く賑かな處を通り抜け度いと思ひながら、彼は橋を渡つた橋袂の空地に來て一先づホツトした。

兩岸の家々の燈火の映る道頓堀の暗い水の面を漕ぎ廻る端艇(ボウト)の赤い提灯が、目の下をあつちこつちにゆき違つた。流石に更けては、水氣を含んだ涼しい風が、何處からとも無く吹いて來た。

彼は水岸迄來て初めて手を放した。

「馬鹿ッ。如何したんだ。」

それつきり何と云つていいかわからないで、目の前にうなだれて立つ相手を睨みつけた。

「その手を開いて見せろ。どうせわかつてしまつたんだ。出せと云つたら出せ。」

息がはずんで聲の嗄(か)れるのを、睨みの利かない事に思ひながら、矢張り舌が自由にならなかつた。

「どうした事なんだ。人が折角目をかけてやつて、我慢の出來ない事も我慢してやり、此間なんかもお前が盗んだのを、人には知らさないで濟ましてやつたんぢやないか。それなのに、それにも懲りず、今のざまは何んだ。」

自分の言葉に昂奮して、滋郎は胸が痛む程のぼせた。

「さあ、その握つた手をあけて見ろ。かくしたつてかくし切れやあしないんだ。」

強情な相手の手首を、血の止る程つかんだ。長谷部は恨めしさうに滋郎を見上げながら、おづおづその手を開いた。手の平に、汗に濡れた銀貨がへばりついて居た。

滋郎は寧ろなさけなくなつた。物覺えの惡い低能の相手を、根氣よく助けながら使つて居て、怖しい盗癖をさへ他人（ひと）には知らさずに直してやらうと心掛けて來た此の頃の心づかひが、今更恨めしく思はれた。殊に遙々（はるばる）場末の町の裏長屋迄出かけて行つた昨日の自分自身の姿が、馬鹿々々しく目の前に浮んで來た。活動寫眞を見せてやつたり、御馳走してやつた事は、とりも直さず馬鹿にされてゐた事なんだと考へられた。

「いくらお前が馬鹿だつて、人の物を盗んでは惡い事位は知つてるだらう。全く自分が惡かつたとは思はないのか。」

何と云つても長谷部は、默つて手の平の銀貨を見詰めて居た。彼のその樣子には、自分のした惡い事を悔む念よりも、その拾錢銀貨を奪ひかへされる事を殘念がる心持の方が、遙かに強い事を示すものがあつた。

「お前はお父さんが病氣で寢て居るのを、兄さんや弟と一緒に養つて居て、可哀さうだと思へばこそ、此間のやうな間違ひがあつても許して置いてやつたんだ。それなのに今のざまは何んだ。他人が氣が附かなかつたからいいやうなものの、若しか他人に目つかつたら如何するつもりなんだ」

滋郎は、如何かして此の少年の心に、徹底的に後悔と謝罪の念を起さしてやらなければ承知出來なかつた。その辭言葉は徒らに、同じ事を繰返すばかりだつた、彼は所在なく賴り無い心持になつて、川向ふの茶屋の二階の灯を呆然と眺めて默した。暗い川水の上に、三味線は冴えて聞えて來た。何處かの家の二階では、舞妓の踊る姿も見えた。

「いいかい。此のままお前を交番所に引張つて行つても構はないんだ。考へてごらん、他人の物を盜めば懲役にやられるんだぜ。——しかしお前が、これからは決してこんな事は二度としない。今迄のやうな惡い事はふつつり止めるといふのなら、許せない事だけれども許してやらないもの

でもないんだ――」

何時の間にか言葉も聲も穩かになつて、滋郎は一生懸命で說き立ててゐたが、ふと氣がついて見ると、相手はまるつきりうはの空で、ぼんやりと口をあいた儘、外方を向いてゐて、何も耳には入れて居ないのであつた。彼は一時に頭に血ののぼるのを感じた。その圖太い横面を張飛ばしてやらうと思つたが、その時五六人橋の上から、不審さうに立止つて見てゐる通行人があつたので、我慢した。それでも彼は、激しい憤りに脣が乾いて痙攣するのを感じた。

「馬鹿ッ。これ程云つてもわからないのか。」

滋郎は四圍を憚かつて聲を落したが、いきなり相手を力任せに突飛ばした。不意を喰つて、よろよろと一二間けしとんで、踏堪へようとしたのが堪へ切れないで、地面の上にへたばつた。

「馬鹿ッ。」

もう一度怒鳴りつけて、思ひ切つて歩き出した。自分のした亂暴を苦々しく思ひながら、彼は橋の半迄歩いてふりかへつた。

長谷部はしばらく倒れたまま動かなかつたが、滋郎の足音が遠ざかると、そろそろ起上つた。どうするかと思つて見て居ると、彼はその場を立去りもしずに、身體を地上に屈めて、今迄手の

平(ひら)につつかつてゐたのが、突然突飛ばされた拍子に落ちて轉がつた拾錢銀貨の行衛を探して居るのであつた。

滋郎は暫時(しばらく)その有様を見守つたが、なかなか銀貨は見當らないと見えて、長谷部が何時迄も其處いらを、犬のやうに探し廻る姿が、暗い空地にほの白く見えた。

滋郎はつくづく歎息して、晴れわたつた夏の夜の更けた空を仰いだ。さうしてそのわだかまりも無く廣々と澄んだ大空の遙かの下の地面の上に、うす汚なくうごめいてゐる人間の世の厭(いと)はしさを遣瀬無く思つたのである。何時迄も何時迄も、その雲も無くうすら青くゆらいで居る大空を見つめて居ると、目には何時の間にか涙がいつぱいたまつて來た。（大正八年六月十八日稿了）

友情

「三田さん、まだ起きんとよろしうおまつか。八時半だつせ。」
遠慮氣も無く肩に手を掛けて揺振りながら、下宿の女中は彼を起した。
「エ、もう八時半か。」
三田は驚いて、昨夜の宴會の酒の殘つて居るものうい體を、不承不承起した。
「昨夜はえらう醉うてゐやはつた。」
忌々しさうに顔をしかめてつぶやく相手には返事もしずに、楊子を銜へて、わざと足音荒く、洗面場へ下りて行つた。薄汚ない洗面場ではあるが、此の朝は冷い水が、宿醉の顔に心地よく觸れた。
部屋に戻ると、寢床をあげたばかりで、掃出しもしない疊の上に、もう御膳が待つて居た。ちつとも食慾は無かつたが、冷くなつた味噌汁で、糠くさい飯粒を、兎に角一杯丈は押込んだ。
「おかはり。」
「お茶だよ。」

「マアもう一つ如何だす。」

「いらない。到底も喰へない。」

三田は渇いた咽喉に澁茶をおかはりして飲んだ。

「貴方あんまりお酒が過ぎまんねぜ。そやさかいに……」

「チエッ、もう十分で九時か。愚圖々々しちやゐられないぞ。」

何かぶつくさ云ひさうな女中の言葉を遮つて、さも狼狽ててゐるやうに洋服を着た。

暗い梯子段を下りて、玄關に出て、愈々忙しさうに編上の靴を穿いた。

「お早うお歸り。」

見送つて出た女中に極文句を云はれながら、さつさと出かけようとしたところへ、臺所の方から小婢が驅出して來た。

「三田さん、お手紙。」

前掛で手を拭きながら渡した封筒は、指のあと丈水で濡て居た。

「難有う。」

一度裏を返して、發信人を見て、なんだ詰らないといふ顔附で外套の衣嚢に入れた。

「お早うお歸り。」

「お早うお歸り。」

女中と小婢が、うつちやるやうに云ふ聲を後に聞いて往來に出た。今日も亦薄暗い大阪日和だつた。

會社へ行つて、事務室の机に向つて坐つてから、遲刻したてれくささをまぎらす爲めに、忙しさうに曳出から書類を出してひつくりかへしたが、全くごまかしに過ぎなかつた。彼は直に先刻の手紙を取出した。それは東京の友達から來たものであつた。

大變御無沙汰して居るが丈夫だから安心して下さい。扨て先日松浦の家の燒けた事は勿論御承知でせう。就而は松浦もこれを機會として長い間の倦怠生活に別れ、將來の方針を定め度いと云つて居ます。生活を根本的に改造するといふ大問題について、松浦は是非とも貴兄に相談し度いと云つて居ます。僕も贊成しました。箱根から向ふには行つた事の無い旅行嫌が、遙々大阪くんだり迄貴兄に遇ひに行くといふのです。如何か力になつてやつて下さい。

右の肩の下つた亂暴な字で書いてある戸川の手紙を讀んで、三田は輕い昂奮を感じた。

つい一週間ばかり前の事、不圖見た東京の新聞の文藝欄に、小說家松浦欣一郎の家が燒けたと

いふ記事が出て居た。二階に寢て居た欣一郎が驚いて目を覺した時は、火は既に梯子口から部屋の障子近く燃え上つて居た。彼は煙の中を、二階から地上に飛下りて、危なく命は逃れたが、長く延した頭髪は炎に焦げ、飛下りた拍子に脚を挫いたと書いてあつた。早速見舞狀を出さうと思つたが、全燒になつた松浦一家が、何處に假住居を定めたかわからないので、氣が濟まないとは思ひながら、三田は遂々その儘にしてしまつた。その松浦が遙々來るといふのだ。一身上の重要問題について相談しに來るといふのだ。三田の心は友達の懷さに震へた。

彼は早速戸川に返事を出した。

松浦が火事で燒出された事は新聞で知つた。怪我をしたさうだがもういゝのか。何處に居るのかわからないので見舞狀も出せなかつた。何しろ僕は待つて居る。早く來る事を希望する。何時來るか知らせて呉れ給へ。

三田は自分で往來に出て、町角の郵便函にそれを入れた後でも、無味乾燥な會社の書類の上に油氣無しの長い頭髪を無雜作らしく後へかき上た、額の廣い松浦の顏が浮んで來た。

三日たつても四日たつても、戸川からも松浦からも何とも云つて來なかつた。直にも友達は來るものゝやうに思ひ込んで居た三田は心が落つかなかつた。友達が一生の大事を相談に來るとい

ふのに、あても無くぼんやりと待たされて居るのは氣不味かつた。

ほんとに三田にとつては、松浦の一身上の重要問題を決するのに、自分が力にされてゐるといふ事が、たゞならず心に響いて居た。いくら遠くに別れて居ても、いざといふ時は、矢張り古い友達の事なんだと考へた。さうだ、お互にもう十五年來のつきあひだと思ふと、此の頃は友達らしい友達も無い三田は、妙に感傷的な心持にさへなつた。

松浦、戸川、三田の三人は、同じ學校の中學部の一年級に机を並べた時からの友達だつた。幼い心持ながら、文學の作品に憧れて、三人とも競爭のやうに小說本を讀みあさつた。松浦は紫雨、戸川は白夜といふ號をつけて、ホトトギスに投書などして居たが、中學の四年頃には、もう一かどの俳人らしく、句會などにも顏を出すやうになつた。それに比べると氣不精で、我儘で、おまけに妙に羞しがりの三田は、新派の歌などを手帳の端に書付て、密かに得意になつて居るばかりだつた。

中學を卒業する頃になつた。仲買人をして居た戸川の父は、大酒の祟りだつたのか、好きな將棊をさしながら卒中で死んでしまつた。その前から餘り家の方の具合がよくなかつたので、戸川は中學丈でやめて、叔父のやつて居る機械商會に入つてしまつたが、三人の交際は途絕えなかつ

た。松浦は志望通り文科に入つたが、三田は親の許可が出ないのと、密かに自分の天分を疑ふ心弱さから、志した文科には入らなかつた。

恰度その頃、學校では、他の大學に對抗して文科を盛にする希望で、文壇に名の高い作家達を迎へて教授とし、その人々を中心として、純文藝の雜誌を出した。松浦はその時本科の一年生だつたが、かねて書溜めて置いた小說の中から、主筆の手元に出した「草市」一篇によつて、忽ち文壇に認められた。自然派の作品の平淡無味に倦きて來た當時の讀者にとつて、東京の一隅に見出される廢殘の一社會の生活を、抒情的筆致で描出した彼の作は、極めて目新しく映つたに違ひ無い。殊にその頃新進の評論家の一人が、感激に滿ちた一文を以て推稱したのに對し、自然派の批評家が反對論を述べたので、雙方に味方する者が續出して、「草市」は一層有名になり、松浦欣一郎は一躍して文壇の流行兒になつた。その花々しさに最も驚かされた者は三田だつた。彼は子供の時分からの友達に、それ程の天分があらうとは思つて居なかつた。羨望に堪へなかつた。嫉妬心さへ止め兼た。同時に又、自分も奮發してみようと思つたのである。

三田の處女作「高臺の家」は數ケ月後に發表された。感情家の三田は、感激の過剩に惱まされて、松浦程の完成した技巧を示す事は出來なかつたが、少年時の純眞な憧憬の念を、歌をうたふやう

な熱烈な調子で描いたところに、人を引つける魅力を持つて居た。斯うして二人とも新進作家の群の中に數へられる身となつた。學校を卒業する前に、既に揃つて短篇集さへ出した。

卒業と同時に三田は洋行した。自分ながら意外にも、容易に文壇に地歩を占め得た事が、再び新しい希望を呼起した。自分の天分を見くびり過て、經濟學の講義などを聽いたのが腹立しい位だつた。彼は家の方の關係から、表面上は財政經濟を專攻するやうに云ひながら、實は文學、殊に創作家として身を立てる爲めの勉強に努めようと決心して日本を去つた。けれども、一度西歐の文明に接觸し、古代から現代迄の偉大なる藝術家の作品に親んで、その眞の價値がわかればわかる程、自分などがいゝ氣になつて居た事が恥しくなつて來た。自分の作品の低級だつた事が餘り明白になり過ぎた。彼は手も足も出なくなつてしまつた。彼はそれつきり何も書かなくなつてしまつた。

去年の春歸朝すると直に、父の關係して居る會社に入つたが、半年もたゝないうちに、大阪の店に寄越されてしまつた。時には創作衝動に驅られて筆を執つて見た事もあつたが、自分の力の不足ばかりが目に立つて、結局中途で放棄する外に爲方が無かつた。さうして彼の名は全く文壇から消えてしまつた。

松浦は兎に角一流の作家として許されて居たが、しかも時代の急激な變遷は、數年前の此の新進作家を早くも時代遲れと見るやうになつてしまつた。自然派が自滅し、耽美派の運動が起り、更に人道派が驚く可き勢で現はれたが、それも亦他の特色を持つ新作家達の出現と共に忘れられてしまつた。曾ては東京の下町の地方色を描出す事に於て獨歩の技倆を有するものとして盛名のあつた松浦の如きは、その特色が仇となつて、うとんぜられるやうになつて來た。氣の弱い、四圍の狀況に心を惱まされ勝な松浦は、作家としての天分に不安を抱き始めた。以前から遲筆だつたのが、愈々遲筆になつてしまつた。雜誌に出る彼の作品は、大概未完で終つてしまつた。同時に彼の生活は、極めて荒んでしまつたのである。

歸朝以來松浦とは、沁々逢ふ機會もなかつたが、三田は昔からの友達の爲めに、同情と心配を惜まなかつた。作品の價値から云へば、當今流行の新技巧派などゝ呼ばれてゐる連中などゝは、比べ物にならない程立派な物を書いても、全く默殺されてしまふのが氣の毒だつた。殊に松浦のやうに、世評を氣にし、他人を賴りにし度がる性質の者にとつては、さぞかし心細い事であらうと思つた。創作の熱が衰へれば衰へる程、家庭の關係の面白くなさが松浦の心を虐める事になつた。古い商家の長男に生れながら、帳場に坐る事を嫌つて、作家になつてしまつた彼には、人の

知ら無い苦勞があつた。年とつた父を助けて、弟の正二郎がまめ〴〵しく働けば働く程、彼の地位は不見目なものになつた。家の中にもゐたゝまれない壓迫を感じれば、又更に松浦の生活は荒さばなければならなかつた。思ふが儘に創作の出來無い恨みは、生活を荒ませ、荒んだ生活は一層創作の邪魔になつた。

今度火事にあつたのを機會として、將來の方針を定めるといふのは、かつぎやの松浦にとつては當然の事に思はれた。相談し度いといふ重大問題は、此の頃時折の手紙の中などに屢々ほのめかした通り、作家としての立場を捨てゝ、家業に就く事に違ひ無いと考へられた。

三田は只管友達を待つた。旅行嫌の松浦が、大阪迄來るといふには、餘程家にゐたゝまれない事情があるに違ひ無い。火事の後始末にしても、事務の才能の無い小説家は、屹度間に合はないに違ひ無い。何にしても久し振で逢つたら、友達の心の慰むやうにしてやらう。それにつけても當の松浦から何とも云つて來ず、何時來るのかもわからないのが、餘り無責任で癪に障つた。人の心も知らない態度が忌々しくて爲方が無かつた。

三田が戸川から手紙を受取つてから十日ばかりたつた日の事であつた。會社で仕事をして居る

ところへ、
「三田さん、電報。」
と給仕の子供が勢ひよく目の前につきつけた、發信人は戸川だつた。
マツウライマキフカウデタツタノム
讀終つて、三田の心は歡びに震へた。仕事も何も手につかなかつた。頭の上の大時計を幾度となく振かへつては仰ぎ見た。
退出時間になると、彼は下宿に飛んで歸つた。
「今日は御飯はいらないよ。そのかはり今晩は東京から友達が來るから、一室空いてるなら貸して貰ひ度いんだが。」
玄關で靴を脫ぐひまも落つかないで、女中の顏を見ると直に云つた。
「へエお客さんだつか。そんならお家內はんに訊ねて來まつさ。」
新しい客が來るといふ事に、何かしら希望を持つて、女中もいそ〳〵して、奧に驅込んだ。
部屋で着物を着換て居ると、宿の女房がやつて來た。
「あいにくなア、よろしいお部屋がおまへんよつて、お差支さへ御座りませんでしたら、此方へ

御一緒ではあきまへんやろか。」
いゝ年齢をして、皺だらけの幅の廣い顔に白粉を塗つたのが、揉手をしながらしやべるのを、何時もの事ながら、三田は不愉快に思つた。
「ア、そんなら爲方が無い。氣の置けない友達なんだから、此處でも構ひません。そのかはり夜具は何處かで綺麗な上等の奴を借て來て下さい。」
「よろしうおま。華族さんがやすみやはつても羞しうないよな、舶來の寢床を借つて來まつさ。」
濁つた聲を無理に高くして、わざとらしい笑を殘して行つてしまつた。
三田は日の暮るのを待兼た。ふだんは餘り吸はない煙草を幾本となくふかした。友達の乘つて居る汽車は、今頃は何處を通つてゐるだらう、もう彼處いら迄來たゞらうと、そんな事ばかり考へて居た。
まだ早いと知りながら、三田は所在なく待つには堪へ切れなくなつた。
「三田さん、貴方ひもじい事おまへんか。」
とからかひ面で聲をかけながら見送りに來た小婢の揃へてくれた下駄を突かけると、勢よく往來に出た。

停車場に行つても、汽車の着く迄には小一時間もあつた。人氣の少ない構内を無暗にほつゝき歩いた。夜食の時間も夙に過ぎたので、お腹も減つて居た。汽車から下りる友達を連れて何處かへ行つて、面白い話をしながら甘い酒を飲まうといふ希望が、一層強く空腹を思ひ知らせた。入場券を買つて歩廊に入ると、三田の心は尙更緊張して來た。自分一人を賴りにして來る友達のある事が幾度考へ直しても嬉しい事だつた。

やがて汽車は轟然と入つて來た。汽罐車に近い車室の窓から首を出して居る松浦を見て、彼は驅出した、先方は自分に氣が付かなかつたらしいので、一秒も早く安心させ度かつた。けれども彼が驅付けた時は、松浦は步廊に下りて、見馴ない二人の男と挨拶して居た。

意外には思ひながらも、三田は近寄つて友達の肩を叩いた。

「遂々やつて來たね。」

「ア、隨分遠かつた。」

さもくたびれたといふ形をしてみせたが、直に又松浦は他の二人と話出した。

「兎に角三田君のところへ泊る事にして來たんですから。」

「さうですか。それぢやあ爲方がありませんが、かうつと、如何しようかしら。」

一人の男はもう一人の男をかへりみて云つた。

「そんならかうすればいゝぢやないか。今晩は皆さんに御一緒に行つて頂いて、それから先の事はその上の相談て事にしたら。ね、それでいゝぢやないか。」

もう一人の男の言葉つきが、彼を憚るやうに聞えた。三田は面白くなかつた。第一、自分ばかりが頼りにされて居るのだと思ひ込んで居たのが、全く様子が違つてるので不満だつた。

「では兎に角行きませう。」

一人の男は松浦を促して歩き出した。

「こちらが三田さんでゐらつしやるんですか。」

「ア、山本さんは三田君は御存じなかつたんでしたね。御紹介しませう。三田君です。」

松浦は、不機嫌な顔をしてゐる三田をかへりみて云つた。

「手前は山本で御座います。戸川君から松浦さんのお出になる事を伺ひまして。」

二人の中の脊の低い圓顔の方が、腰を低くして挨拶した。

「戸川の店に居た人でね。今は此方の北濱の人さ。」

側から松浦が説明した。

「戸川君とはうまが合ひましてね、一頃は隨分其處いらを荒しましたぜ。」
山本はもう馴々しく三田に話始めた。
「私は大谷と申します。」
脊のひよろ長い方のも帽子をとつた。
「此の方は松浦先生のお作の愛讀者なんです。」
と横から山本が輕い口をきいた。
「冗談いつちやいけない。」
と云ひながら、松浦は滿足さうに、二人に挾まれて歩いた。
三田は甚しく不愉快だつた。松浦の一生を定める程の重要問題について相談に來た筈なのが、それ程自分を賴りにして居ないらしくて物足りなかつた。しかも見も知らない男が松浦を引張つてゐて、自分は全く邪魔者に過ぎなくなつてしまつた氣がした。彼は戸川に對してもあき足りなかつた。あんな手紙を寄越して置きながら、此の二人にも松浦の事を賴んだのに違ひ無いと思ふと、目の前に歩いて行く男達も小憎らしかつた。
松浦の呑氣さうな樣子も豫期を裏切つた。火事で燒出された不見目(みじめ)さもなかつた。それを機會

に一生涯の一轉機に切迫してゐるといふ様子もなかつた。頭髮(かみのけ)は焦げ、脚は挫いたといふが、跛(びつこ)を引いても居なければ、かき上げた頭髮(かみ)は長々と延びて居た。何時もながら丈夫さうな松浦の後姿を、三田は忌々しいものに思つた。

停車場を出ると、大谷は素早く自動車を呼んでしまつた。

「サア三田さんも何卒御一緒に。」

と云はれると、口の重い三田は挨拶の爲方もなかつた。四人は押合つて乘つた。

間も無く、自動車はいろ町(まち)に入つた。

「何處だい、此處は。」

「宗右衞門町さ。」

耳元でさゝやく松浦に三田が答へた時、自動車は或お茶屋の前でとまつた。

「いかにもちひさな家なんですが、氣は置けませんから。」

さう云つて先に立つ山本の後から、みんな續いて下りた。

水に近い二階に通されて、松浦は珍しさうに道頓堀のあかりを見た。

直(ちき)に酒が始まつた。胡坐をかいてくつろいだ松浦の姿は、愈々三田の豫想に反した。其處には

のんびりした遊蕩の氣持以外に何もなかつた。さうしてその事が、三田の存在の重大さを、一層少なくするのであつた。

盃のやりとりは最初から頻繁だつた。藝者や舞妓が後から後から出て來て並んだ。山本も大谷もよく顔が賣れてゐて、女達と樂屋落をよろこびあつた。空腹で友達を待つて居た三田は直に醉つてしまつた。松浦も、汽車の疲勞も手傳つて眞赤な顔をしてゐた。持前の早口で、山本や大谷の駄洒落に應じて女達を笑はせた。お座敷馴れた様子を、三田は輕い反感をもつて見てゐた。

「私ほんまに江戸言葉好つきやわ。」

綺麗な藝者は、松浦の流暢な言葉に聞惚れて感嘆した。

「そちらも矢張り江戸子はんだつか。」

年とつて肥りかへつたのが、默まりの三田に盃をさしながら訊いた。

「ヘエ、、貴方も江戸子はんだつか。何も言ひはれへんよつて、わからへん。」

綺麗なのは相手にもしない調子で驚いて見せた。

「つまらないから默つてるんだ。」

と三田は腹の中で答へたが、餘り默つてゐるのも流石にてれくさくなつた。

「僕は新聞を見て心配したんだぜ。頭髪を焦がしたとか、脚を挫いたとか出て居たが、別段そんな樣子も無いぢやないか。」

「そりや新聞の大げささ。」

と松浦は答へて、

「けれどもね、火事だと思つて飛起た時は驚いた。何しろもう目の前は火だつた。こいつはやられたと思つたよ。」

遭難の夜の有樣を彼は詳しく話し出した。愈々逃場を失つて、窓から往來に飛下りた時の光景迄、上手な話術はまざまざと描出した。三田には、その話の上手な事と、餘り詳し過るのが忌々しかつた。そんな危急の場合に、事細かに觀察してゐられる筈が無い。此の小說家は、女達に聞かせる爲めに創作をしてゐるんだと思つた。ほんとに女達は感服して聞いてゐた。

「マアほんまによう助からはりましてんなア。」

眉をひそめてつぶやく者もあつた。ひとしきり松浦を中心として火事の話が續いた。

何時の間にか女達は、松浦が小說家だといふ事を承知してしまつた。小說家といふ珍しい商賣人に對する好奇心が、彼等の目をみはらせた。みんなは松浦の事を先生と呼ぶやうになつた。

「先生私の事を小説に書いとくんなはれ。そりやえゝ話だつせ。大さん、貴方からもお願ひしておくれやす。」

と一人の女が云つた。

「涙のこぼれる話か。そんなら私よりも三田さんの畑だよ。此の人もこれで昔は鳴らしたもんです。」

松浦はいゝ機嫌で三田を指さした。

「さうさう。拝見した事がありましたよ。なんて題でしたかな。怖ろしく癇癪持の男が、誰とでも喧嘩してしまつて、しまひには自分の飼つてゐるむく犬丈が友達だと云つて涙を流すつてつた物でしたつけ。」

大谷がおどけた調子で云つた。

「けつたいな小説だんな。」

「そんなんはあかんわ。」

女達は口々に云つて笑つた。

「いや、あれは三田君の物ではいゝ方だつたよ。どうにかして、もうちつと感傷的でないと一寸

面白いものだつたんだが、どうだい、もう一度書いて見る氣はないのか。」

「駄目だ。僕なんざ藝術家ぢやないと心底から感じた。矢張り月給取が相應してるんだ。」

先刻からの自分の立場のまづさを氣にして居た心持がむらむらと來て、三田は不愉快な調子で松浦に答へた。暫時の間、松浦の文學談が、わかりもしない女達を感服させた。

「此の頃は劇の方はお書きになりませんか、何か斯う新しい面白い芝居はないものでせうか。」

又しても大谷は松浦に水を向けた。

「實はね、高浦の一座の者でやれる芝居を書いてくれつて賴まれてゐるんですが。」

新派の芝居の色男役を長い間勤めた高浦富美夫が、最近一座を組織した事から、その高浦とは友達づきあひをして居る關係から、是非とも援助してやらなければならないといふ事を松浦は話した。

「マア先生は高浦さんを知つてゐやはりまんの。」

「アヽ、ありやア私の友達だよ。」

かういふ場所の女にとつては自慢になる事を答へた。さうしてその一座が二三日中には京都へ來る事を附加へたので、女達の目は輝き出した。

「先生。高浦さんを連れて來ておくんなはれ。」
「高浦さんほんまにええわ。」
その役者の聲色を使つたり、身振をしたりして口々に噂した。松浦は、必ず高浦を大阪へ呼寄せる言質を與へて、みんなをよろこばせた。
三田にとつては、友達のいゝ機嫌なのが一々面白くなかつた。一身上の大問題を相談に來た筈なのが、眞赤に醉つて笑てゐるのを見ると腹が立つた。うすつぺらな唇を動かしてしやべつて居る男や女が、彼の醉眼には安つぽく、とるに足りないものに見えた。しかもその取るに足りないものに比べて、自分は一層餘計なものらしい不安が絶えずつきまとつた。彼は非道く醉拂つてゐるのを感じた。松浦も醉つてゐた。誰も彼も醉つてゐた。
「あゝ、ほんとに醉つちやつた。」
と松浦は三田をかへりみて云つた。
「僕も醉つた。そろ／＼失敬して歸らう。」
「歸らう。」
とは云つたが松浦は立上らなかつた。

「まだいゝぢやありませんか。今晩はゆつくり飲みませうよ。」

山本も大谷も引留めた。

「けれども松浦君もくたびれてるでせうから、又明日でも明後日でもお目にかゝる事にして失禮しませう。」

「さうですねえ、さう云へば松浦さんはお疲れでせう。そんならと……」

大谷は一寸首を捻つて考へて、

「ねえ、かうしたら如何だらう。」

と山本の耳に口を寄せた。

「あゝさうか。それも面白いや。ではあんまりお引留めするのも御迷惑でせうから、吾々も御一緒に出掛ませう。」

存外早く承知して一同は立上つた。

危ない足附で、女達に送られて、三田と松浦は戸外に出たが、後の二人は一寸は出て來なかつた。

「如何したんだらう。先に歸つちまはうか。」

と三田は云つたけれど、松浦は應じなかつた。暫時して二人も出て來たが、その外に醉拂つた藝者や仲居もついて來た。その連中に取巻かれて歩き出した。夜更の人通の少ない町に、醉拂の聲が賑かに響いた。

暗い横町に曲ると、連中は三田と松浦の手をとつて、一軒の家に引入れた。

「如何したんです、これは。」

「まあいゝぢやありませんか。默つてらつしやい。」

「今晩は爲方がありませんよ。」

山本と大谷は三田の言葉を打消してしまつた。門を入つてから、奥深い敷石のある家だつた。

「宿屋ですよ、これで。一寸東京には無い寸法でしてね、これもひとつの經驗でさ。」

と大谷が面白さうに云つた。

中庭にむかつた奥座敷に通された。其處で又酒が出て、藝者達は先刻よりも、一層自由に我儘に騒ぎ出した。三田も松浦も、醉拂た年増に強ゐられて、湯吞で酒を飲まされた。

「私はもう駄目だ。」

松浦は苦しさうな息をついて拒んだが、續けさまに飮まされてしまつた。彼は其處に倒れてし

まつた。

「困つたな。こんなになつてしまつて。」

三田は友達の正體も無く膝子を出してのめずつて居る姿に眉をひそめたが、自分自身も、直にも同じていたらくになりさうな豫感がした。

「濟まないけれど、自動車を一臺さう云つて下さい。此の人を連れて歸るから。」

彼は傍の年增にさゝやいた。

「何ですつて。これから自動車ですつて。冗談ぢやない、何時だと思つてるんです。」

低い聲で云つたつもりだつたが、山本に聞かれてしまつた。

「しかしね、此の人をこんな處に寢かして置いて、風邪でも引かれると困りますから。」

「そりや御心配には及びません。」

と引取つて、

「オイ、先生をあちらへお連れしておあげ。」

大谷は女達に差圖した。

「サア貴方起きなれや。オ、重た。よう肥えてゐやはるさかい。」

二人の女が兩方から抱起した。
「ム、大丈夫だ。」
松浦は目をつぶつた儘起上つたが、足下の盃を蹴飛ばしながら、女に引擦られて部屋の外に連れて行かれた。
「まあま、こないにお酒を蹴返しはつた。」
年增は疊の上を拭きながらぶつ／＼云つてゐた。
「先生は弱蟲で駄目だ。貴方は賴母しさうだから、大きいものでひとつ。」
山本は湯呑を三田につきつけた。
「もう駄目です。そんなには飮めません。」
とは云ひながら、三田は矢張り強ゐられて受けた。あふれる程の酒の匂が、重苦しく鼻をついた。
松浦を引擦つて行つた二人の女が戻つて來た。
「先生いふ方、途方(とう)無い醉うてはるし。」
「梯子段(はしご)のところでなア、足がすべつてこないならはりましてん、どないしようかと思うたわ。」

一度坐つたのが立上つて、ふら／＼した形を見せて話した。
「三田さん、頂きませう。」
せつゝいて來る山本の落つき拂つた面つきが癪に障つて、三田は苦しいのを我慢して、一息に飲干した。
「見事々々。」
はやされた時は、もう何もわからなくなつて、彼は一生懸命で立上つた。
「貴方何處へ行かはりまんの。」
「松浦は如何した。松浦は。」
「先生は二階で寢てはります。」
追すがつて抱留めようとする女の手を振拂つて、三田は廊下へ出た。
「僕も一緒に寢るんだ。」
再び女の手を振拂つて、直ぐ目の前の暗い梯子段を這ひ上つた。上り切つた兩側のどつちの部屋に友達は寢てゐるのかわからなかつた。誰かついて來るかと思つたが誰も來なかつた。一瞬間其處に躊躇したが醉の廻つた向ふ不見はいきなり右手の部屋の襖をあけた。

「誰。」
細い、脅えた女の聲で訊いた。薄暗い電燈の下に、男の頭と女の頭が並んで夜着をかぶつてゐた。
「失敬。」
ぴしやんとしめて、三田は狼狽てゝ左手の部屋に逃込んだ。あかるい電氣の光の中に敷かれた一枚の蒲團の上に、松浦は大の字になつて鼾をかいて居た。
三田は枕元に置いてある水瓶の水を傾けて飲んだ。憎らしい程規則正しい韻律を保つて鼾をかいてゐても、酒の醉の苦しさに惱ましい顏をして眠つてゐる友達の廣い額を見守つて居ると、彼の心は平靜になつた。階下ではまだ騷いで居るらしく、男女の聲が賑かに聞えて來るのにひきかへて、漸々待つた友達と、漸く二人切りになつた安心が、三田の心を涙ぐませた。何時の間にか醉はさめて來た。目の前の友達との十幾年の交際を沁々思ひ出した。一本調子の氣短な、感情家の三田は、隨分度々喧嘩もした。氣の弱い松浦の、いろんな惡友に引張られて、浮調子な生活に陷つて行くのを、執拗くいさめて煙つたがられた事もあつた。遊び友達としての彼は、松浦にとつて、決して面白い相手ではなかつた。顏の廣い、人見しりをしない松浦には、逢ふ度毎に新し

い友達が殖えて行つた。小説家、詩人、新聞記者、役者、落語家――かと思ふと華族の息子のおつちよこちよいや、藝術家をさへ政策の道具に使はうとする政治家などもまじつてゐた。さうして松浦が三田を想ひ出すのは、さういふ友達に馬鹿にされたり、疎外されたりする時に限つてゐた。しかし萬一松浦の身の上に重大な問題が起きて來る事があれば、その時こそ彼の眞の友達は自分の外には一人も無いと、三田は深くも信じてゐた。

彼は昔の、中學時代の友情の蘇つて來るのを感じながら、只管友達をなつかしむ心持に耽つてゐた。その目の前で、松浦は何もしらずに眠つてゐた。

座敷の隅に積んである座蒲團を持つて來て敷いて、三田は着のみ着のまゝで横になつた。その上に又蒲團をのせて、彼は松浦と並んで眠つた。

朝の寒さに三田は目が覺めた。下に敷いた座蒲團は外れて、體は半分疊に落ち、上にのせた座蒲團は、みんなすべつて飛んでゐた。隣の松浦は深々と夜着に埋もれて、氣持よささうに熟睡してゐた。三田は宿醉に頭は痛み、目ぶたは重く、兎もすれば又眠つてしまひさうな體を無理に起した。こんな場合にも、きちんと起きなければならない月給取の身の上を忌々しく思つた。

階下に下りて、その儘そつと歸り度いとは思つたが、帽子も外套も昨夜の部屋にある筈なので、其處の襖を細めにあけて見た。屏風を立て廻した奥にはいつぱい床が敷いてあつて、男や女の頭がいくつも並んで眠つてゐた。思はず一歩退いたが、爲方が無いとあきらめて、三田は忍足で踏入つた。外套と帽子を抱へ出して玄關の方へ行つた。大戸は下りた儘なので、横手の帳場の奥に寢てゐる女中を呼起してあけて貰つた。

「左樣なら。」

寢ぼけた顏をして、目やにのたまつた目のまぼしさうな女中は、胸のはだけた着物を氣にしながら、不平さうに送り出して又づゝしりと大戸を下した。

往來に出ると、電車はもう動いてゐた。三田は何處に行くのかわからないやうなぼんやりした氣持で下宿に歸つた。

「お歸りやす。」

玄關前の敷石に水を流してゐた小婢は、にやりと笑ひながら聲を掛けた。

「三田さん、昨夜はおたのしみ。貴方がうちをあけはることは無い事や、それに東京からお友達も見えはるさかい、どない遲うても屹度戻つてやろいうて、一時迄も起きてゐましてん。」

女房も臺所の方から、からかひ調子で聲をかけたが、三田は返事をするのも面倒臭くて、どん／＼二階に上つてしまつた。

六疊の部屋には、彼の夜具と並んで、松浦の爲めに何處からか借りて來た絹夜具が敷いてあつた。それをみると、ふと松浦を他の人間に奪はれてしまつた氣がして腹が立つた。三田はその夜具の上を、力任せに踏んで歩いた。

「三田さん、お歸り。貴方どないしやはつた。」

又しても女中は冷笑を浮べながら、火鉢に火を入れに來た。

「どないしやはつたのか自分でもわからないんだ。」

「貴方のお友達は。」

「その友達もどうしたかわからない。そんな事よりも、兎に角水を一杯飲ましてくれ。」

「ぶゝだつか。」

「おひやがいゝんだ。」

出て行く女中の後から聲を掛けたが、その儘蒲團の上に仰向に寢てしまつた。

出勤時間に遲れて三田は會社へ出た。何時迄たつても睡眠不足の頭は重く、集中力を失つて、

何もまとまつた事は考へられなかつた。書類を見て居る間にも、居睡と欠伸がたてつづけに出て來て爲方が無かつた。松浦は如何して居るだらうと思つてみる事もあつたが、それさへ連續して考へる事は出來なかつた。

午後になつて、松浦から電話がかかつて來た。彼はまだ昨夜の宿屋に山本や大谷と一緒になるのであつた。

「どうも君は怪しからない。無斷で逃出すのは非道いつて、みんなが云つてるぜ。」

「そりやあ爲方が無いさ。僕はつとめ人だから。しかし君達はこれから如何するんだ。」

彼の言葉は松浦を詰るやうな響をもつた。

「どうするつて。兎に角君はまだ退けないんだらう。そんなら君の方のおしまひになる頃、此方から會社へ出かけよう。方角も知らないけれど、車で送つて貰へばわかるだらう。」

「さうか、それぢやあ待つて居よう。一緒に晩飯でも喰べて、下宿で久しぶりの話でもしようか。」

「あゝ、君にはいろいろ話し度い事があるんだ。」

「では待つてるよ。さよなら。」

電話を切つて、事務室へ歸つた三田はいゝ心持になつた。矢張り友達は自分を頼りにしてゐるのだと思つた。

營業時間が過ぎると、同僚は仕事を終つて、明日の日曜の樂しさを胸に描きながら歸つて行つた。

「三田さんは今日は御ゆつくりですね。」

と何時もは眞先に歸つてしまふ三田に、からかひ面で言葉を殘して行く者もあつた。

三田は窓の外の暮方の空を幾度も仰ぎ見た。だんだん暗くなつて行くのが、友達の來る時間の迫つて來た事を明瞭に思はせた。

何時の間にか、當直の小使と三田の外には誰もゐなくなつた。人を待たせたり人に待たされたりする事の嫌な三田はそろそろ苛ついて來た。待たされるといふ事が、嘘をつかれたのと同じやうに不愉快だつた。人氣の無い事務室の床を靴の踵で蹴りながら歩き廻つた。

苛々し切つた三田が癇癪を起して、歸つてしまはうかと思ひ始めた頃、受附の窓に來た者があつた。

松浦かと思ふと違つた。

「一寸これを御覧下さい。」
と渡された紙片には、
　この車で來て下さい。
と書いてある丈だつた。
「チエツ。」
三田は又しても騙された氣がして面白くなかつたが、爲方がないとあきらめて、自動車に乘つた。
「一體何處に連れて行くんだい。」
「へエ直き其處です。」
むつつりした運轉手は何とも云はなかつた。忽ち自動車は暮切つた燈火の町を疾走し始めた。
道頓堀の西洋料理屋に三田は連れて行かれた。川に近い二階の欄干にもたれて、松浦は赤い顔をしてゐた。山本と大谷の外に、見た事も無い若い女が、馴々しく松浦と話をしてゐた。
「三田さん、どうも貴方つて人は非道い人ですね。今朝起きて見ると、もうゐらつしやらないでせう。昨夜のうちに歸つたんぢやないかつて大騷ぎでした。」

大谷は直に麥酒を勸めながら言つた。

「ほんとに君は今朝歸つたのかい。僕も、君は昨夜逃げちまつたんだらうつていふ說なんだが。」

「冗談云つちやいけないぜ、僕は疊の上に寢かされて、夜中君の鼾を聞いてゐたんだ。」

三田は不機嫌な顏をして松浦に答へた。

「それは御氣の毒でした。何處にゐらつしやつたのか知らなかつたものですから。」

側から山本がとりなして、

「こちらは吉村靑琴女史です。御紹介致します。」

と若い女の名を呼んだ。

「始めまして。私は三田です。」

椅子を離れて立上つて挨拶したが、女は腰かけた儘で卷煙草をふかしながら、輕く頭を下げたばかりだつた。三田は憤然として、その厚白粉の顏を見返した。餘り澤山は無い頭髮を眞中から分けて、櫛卷に似た束髮にしてゐるのが、頰紅さへさして居るらしかつた。目のくるくるした、お凸の、子供々々した顏だ。女に特有の嬌姿を、故意と振捨て、男とちつとも違はない身振をほこるもののやうに見えた。其處にゐる男達の誰よりも多く麥酒を飲んだ。

「貴方は隨分あがりますねえ。」
さも感嘆した調子で松浦がいふと、
「エヽお酒ならいくらでも頂きますわ。」
と得意さうに答へた。
「青琴さんには吾々の二人や三人寄つたつて到底もかなひません。顏も赤くなりやしませんから。」
山本は、佛頂面をしてゐる三田の方へ話を向けて、これも女の酒量に驚いてみせた。
「へエ、凄いもんですね。」
三田は半分は皮肉のつもりで云つたが、女史には通じなかつた。
「貴方がたは私を女といふ特殊のものだと思つてゐらつしやるから、お酒を飲んでも煙草を飲んでも驚くんでしよ。女だつてやらうと思へば男のする位の事は何でもないんですよ。」
愈々得意になつて、女史は麥酒の滿を引いた。
「如何です。今晩は青琴さんを、四人がかりで醉拂はしてしまはうぢやありませんか。」
大谷が浮いた調子で云ひ出した。

「そいつは面白いや。」

「まさか四人がかりなら負けやあしまい。」

松浦も大谷も面白さうに應じた。

「三田さん、貴方もなかなか見事なお手並ぢやありませんか。」

「僕は駄目です。そんな豪傑に逢つちやあ逃出す外爲方が無い。」

三田は愈々苦々しくなつて、直にも一人別れて歸らうと思つた。今日も亦松浦を、彼等に奪はれてしまつた口惜さが強かつた。友達の浮々と、誘はれれば誘はれる儘に誘はれて行く態度が、何時もの事ながら、じれつたかつた。

「サア、それぢやあ兎に角戸外に出よう。」

といきなり山本と大谷は立上つた。

「オイ、如何なるんだい、これは。」

道頓堀の人ごみの中で、三田は松浦を呼んで訊いた。

「どうなるつて、爲方が無いさ。なりゆきに任せるんだね。」

三田に對しては困つたやうな樣子をしながら、別段迷惑らしくもなく答へた。

「一體あの潑剌は何だい。」
「潑斯？」
「ウム、あの女史さ。」
三田は、女の頭髮の分方から、蜻蛉と云ひ度かつたのだが、それではあんまり月並なので、故意と潑斯と呼んだのであつた。
「ア、あれか。あれは閨秀歌人さ。」
「フウム、さうして松浦先生の愛讀者かい。」
三田はつけ〱と、當りちらすやうに云つた。松浦はいやな顏をして、又癖が出たなと云ひたさうに橫を向いた。
芝居前の賑はひを拔けて、暗い水の上の橋を渡る時、三田は又昨夜のお茶屋に連れて行かれるのに違ひ無いと思つた。恰度渡り越た處で、突然松浦に云つた。
「僕は今夜は失敬するぜ。うちに歸つてする仕事があるんだ。」
「歸る。一人で。」
松浦は驚いて、三田を見上げて立どまつた。人の感情にさからふ事の出來ない松浦には、途方

に暮れた表情があつた。三田はそれに氣はつきながら、愈々強情になつて行つた。
「ぢやあ僕は失敬すら。」
つか〳〵と二三歩戻つて、外の者にも告げた。
「そりあいけない。今更歸るなんて。」
「一寸丈でもいゝから、其處迄つきあつて下さい。」
山本も大谷も引留めたが、三田は如何してもきかなかつた。
「今日は堪忍して下さい。何れ改めてお目にかゝります。」
持前の切口上で挨拶すると、その儘みんなとは反對の方に歩き出した。
「三田君。」
後から聲をかけて、松浦は狼狽しく追かけて來た。
「あのね。あの通の次第で、僕は如何しても逃げられないが、今晩は君のところへ泊めて貰ふから待つてゝくれたまへ。直に切上げるから。いゝかい。實際、君には聞いて貰はなくちやあならない事があるんだ。」
聲を優しくして、なだめるやうに云つた。三田は默つてうなづいて、そのまゝ一人で歩き出し

た。町角で振返つて、三人の男に圍まれて行く、外套を着た女の姿を影繪のやうに見たが、それつきり暗い横町に曲つてしまつた。

關東煮でしたゝか飮んで、何もかも癪に障つて堪らなくなつた三田は、一里の道を歩いて歸つた。下宿の女房や女中に話しかけられても返事もしずに、彼は自分の部屋に引上げて、着物を着換るのも面倒臭く、冷々する疊の上に洋服のまゝ寢ころんだ。

何時の間に眠つてしまつたのか、人聲に驚いた時は、もう女中が床を敷きに來る時間だつた。

「東京のお客さんは今晩も來やはらしめへんのか。」

「來るよ。屹度來るから床を二つ敷いといておくれ。」

さもうるさゝうに三田は答へた。

一寢入りした後なので、酒はさめ際になつてゐた。三田は欠伸をしながら友達を待つた。今夜は屹度來るに違ひない。あれ程約束して待つてゐてくれと云つたのだから確かだと、時々起る疑念を無理に押へて居た。

十時になつても、十一時になつても、松浦は來なかつた。三田は持前の疳癪に惱みながらも、如何かして友達を信じたいと思つた。不愉快な時には、不知不識に寄る眉間の立皺を、強ゐても

消し度いと思ひながら、又何時の間にか皺は深く寄つてしまふのであつた。
「三田さん。東京のお客さんはどないしやはりましてんねやろ。もう十二時だつせ。」
眠さうな顔をした女中は、又不平を云ひに來た。時計を出して見ると、それ程は更けてゐなかつた。三田は憤然として答へた。
「まだ十一時半ぢやないか。――そんなに眠けりや寢たつていゝよ。」
「眠いいふ事おまへんけどな、戶をしめたら惡うおまつしやろ。」
「しめちまやあいゝぢやないか。」
時間のかけ値なんかした女中の出たらめが癪に障つた。
十二時過ぎても松浦は歸つて來なかつた。階下の時計の一時を打つのを聞いて床に入つたが、枕に顏を埋めても、友達の不信に對する憤懣に惱まされて、なか／＼眠る事は出來なかつた。
翌朝は晴渡つた靑空であつた。のび／＼とした朝の光は、障子の上に漲つてゐた。わだかまりの無い日曜の心持で目の覺めた三田は、ふと自分の横に敷いてある空つぽの蒲團の眞白な敷布を見ると、いやな氣分になつた。友達の爲めに昨夜も亦、空しく待つた馬鹿々々しさが胸にこみあ

げて來た。自分を頼りにして來たのだとばかり思つてゐた友達に、馬鹿にされてゐるのだとしか考へられなかつた。それでも彼は、松浦が今にも目の前にやつて來るやうな氣持を、消す事が出來なかつた。

いつも日曜には、朝のうちから散歩に出る事にきめてゐたが、若しも留守中に松浦が來る事にでもなると、さぞかし困るに違ひ無いと考へると、如何(どう)しても下宿の外には出られなかつた。折角の日曜をだいなしにしてしまつた不愉快は、忘れる事が出來なかつた。終日(ひねもす)、部屋の中で、立つたり坐つたり、時にはやけになつて仰向に寢轉んだりしながら、徒(いたづら)に明るい戸外の景色を忌々しがつた。

三田は、煩はしい友達なんぞを持つた迷惑に、頭が熱くなつてしまつた。ゐたゝまれなくなつてしまつた。幾度となく思ひ返さうとしたが駄目だつた。遂々(とう／＼)彼は我慢が出來ないで下宿を出た。

「三田さん、貴方のお客さんはけつたいな方だんな。」

機嫌の惡い三田を憚りながら云ふ女中の言葉は、一層彼の心持を惡くした。

「どうせけつたいな奴なのさ。」

と捨ぜりふを殘して往來に出た。

日影の多くなつた町は、少しばかり寒くなつた。重たい外套の中に身を縮めて、熱い酒を想つた。どうしても此のむしやくしやには、酒が唯一の救濟のやうに心を誘つた。

黄昏て行く町の中を、三田は目的も無く歩いた。友達を待兼てゐた苛々した心持に別れて、無責任に歩いてゐるのは氣持がよかつた。彼は灯ともし頃の賑かな町に出て、一軒の料理屋に入つた。

二言目には頂きませうと云つて手を出す丸髷の仲居を相手に、額に立皺を寄せながら飲んだ。しまひには息が苦しくなり、胸が壓されるやうに思つたが、むしやくしやのすこやけな心持は、醉はないではゐられなかつた。

戸外に出ると星屑の遙に高く散つてゐる空から冷い風が吹いて來た。三田は蹣跚として下宿に歸つた。

「三田さんだつか。」

臺所から大きな聲で呼びかけて、女中が驅出して來た。

「あんたのお客さん來てはりまつせ。途方無い醉うてるさかい寢かしてくれ云やはつて寢床敷いて寢てはりま。」

少し長過る舌のもつれる言葉で、一大事らしく告げた。

二階に上つて部屋に入ると、酒の臭が鼻を衝いた。ふかぶかと夜具をかついで、松浦は高鼾で眠つてゐた。その心持のよささうな寢態を見ると、三田は何かしら癪に障つた。荒々しく襖を閉めて、わざと足音をさせて歩いたが、相手は熟睡からさめなかつた。三田は友達の枕元に坐つて、ぢつと寢顔を見守つた。子供の頃の、まる／＼と肥つてゐた面影もなくなつて、年齢にしては老け過ぎてゐる松浦の顔が、かへつて昔からの二人の交際をおもひかへさせた。學校の運動場で、木馬を飛損なつて怪我をした痕の、廣い額に殘つてゐるのもなつかしかつた。醉のさめて來ると同時に、靜になつた心の奥底から、三田は昔に變らない友情の湧いて來るのを感じた。お互に自分々々の勝手な心持から、度々絶交に近い狀態に迄も進みかねない此の頃に比べると、心と心とがちつとの無理も無く、ぴつたりと觸合つた子供の時分が、悔まれる程戀しかつた。三田は涙ぐましい心持で、友達の枕元を離れなかつた。

女中が來て、三田の爲めに床を敷き始めた時、松浦は物音に驚いて、始めて目を開いた。

「オヤ、歸つて來たの。」

彼は待兼てゞもゐたやうに飛起きた。

「もう先刻歸つて來たんだ。」
喜んで見せてはひけ目が出來ると思つて、三田は無理にも澁い顔をして云つた。
「屹度待つてゝくれるだらうと思つて來て見ると居ないんだらう。どうしようかと思つた。」
「だつて君は、どうせ今晩もあのてあひと一緒だらうと思つたから、一人で酒を飲みに出たんだ。」
三田は意地の惡い事を云はないではゐられない氣持になつた。少しでも友達の困つた顔を見るのが、自分の立場をよくすると思つた。相手の感情を害してやりたかつた。松浦は不愉快な顔をして默した。三田も氣まづくなつて默した。
「實はね、昨夜は醉つぶされちやつたのさ。」
暫時して、松浦は沈默に堪へられなくなつて云つた。
「誰に醉つぶされたと思ひます。あの番斯さ。」
をかしさうに笑つたが、三田は又友達を奪つて行つた連中の顔を想出していやな氣がした。
松浦は、三田に別れてから、此間の晩と同じお茶屋に連れて行かれた。藝者が來て、又しても酒になると、青琴女史は男達を相手にして旺に飲んだ。みんなが小面憎く思つて、四方から盃を

さして醉つぶさうとしたが、かへつて返討になつてしまつた。殊に松浦は、眞先に醉倒れて、今朝迄何もしらなかつた。目がさめて見ると、男ばかり三人枕を並べて寢てゐた。正午近くなつて、起きようとしてゐるところへ、昨夜一人丈家に歸つた女史がやつて來て、改めて迎ひ酒になり、日の暮れる迄飲合つたが、松浦は又醉はされさうになつたので、やうやく逃げて來たのだといふのであつた。

「非道い女だね。立膝で卷烟草をふかしながら、ぐい／＼酒を飲むんだから、藝者なんざ舌を卷いちまつて言句も出ないのさ。あれでまだ年齡は若いんだつていふから怖ろしい。君がゐると面白かつたらうつて皆で云つたんだぜ。」

「僕はあんな奴は大嫌だ。」

松浦の面白さうに話すのが、三田には面白くなかつた。彼はうつちやるやうに云つて舌うちした。二人は又、火の氣の無い火鉢の上に、兩方から手をかざして默した。

三田は如何しても、額に寄る立皺を消す事が出來なかつた。重大な問題を持つて來たとばかり思つてゐたのに、連日連夜酒びたしになつてゐて、たまに差向ひになつても、眞面目な話はこれんばかりもなく、下らない事を雄辯にしやべるのが、堪らなく腹が立つた。生意氣な女なんぞに、

苦もなくもりつぶされたといふ事までも、如何にも不甲斐なく思はれて我慢が出來なかつた。

「あゝ、眠くなつちやつた。」

彼は無理に手を擴げて欠伸をした。

「又明日はおつとめだ。寢よう寢よう。」

と云ひながら、さつさと寢衣に着換て、床の中にもぐり込んだ。いかにもふてゝ寢るんだといふ事を思ひ知らせる爲めに、わざと友達に背中を向けた。直に眠つてしまつたふりをしたが、實はなか／＼眠れなかつた。いろ／＼の胸のむしやくしやが、動悸をうつて想出された。それでも息を殺して壁の方を向いてゐた。

「もう寢たの。」

餘程たつて、松浦は聲をかけたが、三田は返事をしなかつた。

翌日、三田が目をさましたのは、何時もの通り、出勤時間に近かつた。狼狽てゝ飛起きて、朝飯は空間で喰べた。彼が愈々出かける迄松浦は覺めなかつた。夜着の襟から半分出て居る顔面には、連日の酒の疲勞が、脂肪と一緒に浮いて居た。心を許して熟睡して居る友達の寢顔を、三田

は懐しさと憐愍の情をもつて見た。それが唯一のほこりだつた文壇の地位は次第に影が薄くなり、家庭の不和は愈々深くなつて行く二重の苦惱の爲めに、著しく荒んだ生活をしてゐる者にとつては、旅へ出る迄に、隨分苦しんだに違ひ無い。しかも其の歸る可き家は、火事の後の混雜に、商人としては無用で、足手まとひになるばかりの彼を、歡んで迎へる筈が無い。三田は暫時の間、弱々しい同情に胸を壓されて、枕元に佇んだが、やがて足音を忍んで廊下に出た。

朝から夕方迄の、きまり切つた勤務の間にも、三田は常日頃の苛々した心持とはうつて變つて、珍しく柔い――友達や親や兄弟姉妹のなつかしい心持が、沁々と湧いて來て、何時も程は厭でもなく、そろばんを彈いたり、帳面をつけたりした。

三田は、下宿の六疊に自分を待つてゐる友達の姿を想ひながら、誰よりも先に仕事を終つて會社を出た。

部屋に歸ると、自分の机に向つて、書かけの手紙を前に、松浦はぼんやり坐つて居た。

「今日は午過迄寢てしまつた。疲勞が出たんだね。散歩に出るのも億劫になつて今一寸戸川のところへ手紙を出さうと思つたんだが、どうしても書けない。此の頃は手紙さへ書けなくなつた。」

机を離れてむき直つて、松浦は三田の顏を見て嘆息した。

「そりやあ生活に落つきが無いからさ。あんまり交際が廣過るんだ。」

三田はつけ／＼返事をした。目の前の友達の、あまりに意氣地のなさ過ぎるのを、勵ましてやるつもりだつた。

「ほんとだね。自分でもさう思ふ時がある。」

松浦は素直にその言葉を受入れたが、その素直なのが、かへつて賴りにならない氣がして、三田は嬉しいとは思はなかつた。

「だから下らない奴とつきあふのはやめろつて云ふんだ。文壇の不良少年や、やくざな芝居者なんかとは緣を切つて、書齋に閉籠る覺悟をしなけりやあ駄目だ。」

「ウム、今度といふ今度は、僕も生活を改造するよ。遊蕩文學の足を洗つてしまはう。」

內容にそぐはない誇大な言葉を使ふのが、松浦の癖だとは知りながら、三田にはそれがちやらつぽことしか聞かれなかつた。

「駄目だよ、君は。誘はれれば否とは云へない人なんだから。人に嫌はれまい嫌はれまいとして、あんまり八方に引張られて行くもんだから、かへつて辻褄が合はなくなつちまふんだ。」

「けれどもね、今度は僕もつくづく考へた。戶川にも話したけれど、是非君に相談し度いと思つ

てね。」

「僕なんかに相談したつて爲方が無いけれど。」

口ではさうは云つたものの、三田は既に彼の感激性をそそられてゐた。

「今夜はゆつくり話をしよう。下宿の飯はまづいから、何處か靜なところへ行つて一杯やらう。」

三田は久々で、友達を持つた甲斐のある緊張した心持を感じた。彼は松浦を促して戸外（おもて）に出た。濕つぽい風の吹く薄曇の夕方だつた。黑い帽子に黑い外套の二人は、肩と肩とを押つけ合つて歩いた。

川つぷちの小料理屋に行つた。水に臨んだ二階の小部屋で、女中を斷つて盃を手にした時、澤山の友達に別れ、他人ばかりの大阪へ來た其の日以來、三田にとつては始めての遠慮の無い氣安さだつた。二つ三つ盃を重ねるうちに、忽ちいゝ機嫌になつてしまつた。今では、直接には殆んど關係のなくなつた文壇の批評さへ、いゝ氣になつてやつた。自分自身は、その文壇の落伍者だと、時には考へてもゐるくせに、三田は無責任な嘲罵をほしいままにした。

「全く此の頃の文壇は寄席（よせ）だね。手品師もゐれば百面相もゐる。せいぜいお目新しいところを見せようつて云ふんだ。松浦先生なんざ人氣はないけれど、流石に眞打（しんうち）だよ。ただ困つた事には稼

が無い。ちつとかけもちでもすればいゝんだ。」
「けれども僕のは全く書けなくなつたんだ。怠けてゐるつて云はれると、怠けてゐやあしないとも云へないが、それでも始終書かうとは心がけて居るんだ。だが、いくら原稿紙に向つても書けない。冒頭の一行が如何しても浮んで來ない。」
「だから生活を改造するつていふのか。」
「さうなんだ。自分でも考へた。いつそ商人になつてしまはうかと。」
商人の家に生れた松浦は、甚しく商人の價値を低く見積る癖があつた。さうして、自分の育つた家の周圍には、全く見る事の出來なかつた學者とか藝術家とかいふ者を、買かぶる癖があつた。自分自身が、その尊い文學者になつたほこりに生きてゐた丈、今度その生涯に別れる事は、彼にとつては限り無く苦痛だつた。三田には、友達の心持は、自分自身のもののやうによく解つた。
「ねえ、如何したものだらう。如何したらいゝんだらう。」
醉が廻つて、目のふちを赤くした松浦は、かへつて心弱くなつて來た。
「戸川にも相談したんだが、いつそ君のやうに思ひ切つて、文壇から遠ざかつてしまつた方が悧巧なんぢやあないかと思ふ。」

「さうか、それぢやあ君が僕に相談するつていふのは、それつきりの事なんだね。つまり君が物が書けなくなつたから、商人になるつていふ……」
三田は心にもない事だつたが、酒の元氣も手傳つて、事もなげに云つてのけた。内心では、ただそれ丈の事さへ、此の友達にとつては、何にも増した重大な事だと承知してゐながら。
「そればかりぢやあないさ。」
松浦は、氣の早い友達の無理解を嘆くやうに遮つた。
「その外に家の方のごたごたもあるし。おまけに……」
不圖云ひかけた言葉をやめて、盃を口にふくんだ。三田も默つて盃をとつた。彼は友達が云はうとして止めたのが、うすうす噂に聞いてゐる結婚問題なのだと感附いた。何となく二人の心のかけ違つた寂しさを、二人とも感じた。
「だけどね、僕は第一に、君は到底生活の改造なんか出來ない人だと思ふ。何故といつて、若しも眞實に生活を改造するのなら、人に相談なんかしなくたつていゝんだ。」
三田は暫時して云つた。口をつぐんでしまつた友達の腹の中が氣になつて、それをさらけ出させる爲めにも、相談なんかしない方がいゝといふ、心にも無い事を云つてみた。友達が、充分自

分を信頼してゐないのではないかといふ邪推も、此の心持を助けた。友達を勵ますつもりで、強い言葉を擇んだ形もあつた。

「自分は自分で自分を處理する丈の意力がなくては、改造なんて思ひも及ばない事だ。」

「そりやあ君と僕とは違ふ。君は昔から、人に相談した事の無い人間だ。僕はさうぢやない。君にしろ、戸川にしろ、誰かしら友達に、年が年中頼らないでは、不安心でならない人間なんだ。」

意外に眞面目になつて松浦は反對した。その言葉の力強さが、あいにく三田には、あげあしを取られたやうに響いた。

「だからその性分(しやうぶん)を直さなくては駄目だといふんだ。生活の改造には非常な意力が必要だ。友達なんぞを頼るやうぢやあ眞劍ぢやあない。」

三田は、何時の間にか酒の爲めに、聲の高くなつたのに氣が付いた。

「さう云つてしまへば、僕が遙々大阪くんだり迄來て、君に相談する必要はなかつた。」

松浦も不愉快さうに云つて、冷くなつた酒を飮干して三田にさした。つひぞ盃のやりとりなんかした事もなかつたので、三田はさされた盃が氣になつた。

「さうさ。僕なんぞに相談しようつていふ根性がいけないんだ。」

うけた盃を忽ちあけて返した。松浦はいやな顔をしてそれを受けた。
「自分自身で、物を書く事なんかやめようと思つたら、さつぱりとやめるんだ。商人(あきんど)にならうと思つたら、その日から前掛をしめればいゝんだ。」
平生から語氣の荒い三田は、酒を飲むと一層それが強くなるのだつた。
「自分の事になつてみると、さう手輕にはいかないのさ。それに女房を持たうか持つまいかといふ問題もある――……」
松浦は又口籠つた。三田の想像した通り、女の問題に惱んでゐるのだつた。女の問題になると、言葉を濁してしまふのが面白くなかつた。そのくせ第一の問題は、藝術の惱みだと見せようとしてゐるらしいのが、三田は氣に喰はなかつた。
「それも矢張り同(おんな)じさ。自分が惚れたら貰ふのさ。」
「そんななまやさしい話ぢやないんだ。」
怖ろしく依怙地(いこぢ)になつて來た三田を見て、松浦は相手にも何にもならないといふ風に嘆息した。お互の間に出來た距離(へだたり)を忌々しく思ひながら、二人は默然として障子の外の夜を見た。廣い空と、深い水の暗さが、一層二人を寂しくした。ぎいと鳴る船の櫓の音が、しやべり止んだ暫時(しばし)の間、

川の面に響いて聞えた。
三田は悔いた。折角友達が、心弱くも人を賴つて來て、一身上の相談をしようといふのに、ふとした心持のゆき違ひから、心にも無い誇張した言葉で、其の場限の意地を張る爲めに、無理解な我儘を云つた事を悔いた。如何かして、此の失敗を、とりかへさなければならないと思つた。けれどもそれは、意地張の彼にとつては、到底難かしい事だつた。三田は沈默に堪へられなくなつて來た。
折よく女中が用をききに來てくれた。
「お料理はそれ丈で御座りますが、外に何か致しませうか。」
「もういゝや。」
「それでは御酒は。」
「さあ、それもいゝでせう。――君はまだ飲むかい。」
川の方ばかり見て居る松浦に言葉をかけた。
「よさう。大分醉つて來た。」
「それではおあいそ。」

三田は女中に勘定を促した。

料理屋を出た二人は沈默を續けて歩いた。足の早い三田は、思はず知らず一二間先に進んでしまつては、氣が付いて松浦を待つた。

「このまゝ下宿に歸つても爲方がないな。」

とつぶやいたが、相手は聞かないふりをしてゐた。

「何處かで飮直さうか。」

如何かしてもう一度、松浦の身の上の問題によりを戻し度かつた。

「ひとつ滅茶々々に飮んでしまはうぢやないか。」

三田はやけになつた氣持を、その儘口に出して云つた。

「あゝ。」

松浦は氣の無い返事をした。

「それぢやあ、そつちに行つちやあ駄目だ。反對の方角に行かう。」

さう云つて、三田はくるりと向(むき)をかへて歩き出したが、松浦は立停つて考へてゐた。

「どうしたんだ。矢張り下宿に歸るのか。」

「實はね、僕は京都に行つて見ようかと思ふんだ。」
云ひ出しにくさうに松浦は答へた。
「これから京都に行くつていふのか。」
三田は思ひも掛けない事だつたので、驚いて詰つた。
「先刻高浦から手紙を貰つた。昨日京都へ來たから、大阪へ行かうと思つたが、それよりも京都で落合はう。今夜は祇園のある家で待つてゐると云つて來た。」
「高浦つて、あの壯士役者か。」
甚だしく侮辱された氣がして、三田は荒々しい語調になつた。
「それぢやあ君は、先刻から京都に行くつもりだつたのか。」
「さうぢやない。先刻は行くつもりもなかつたけれど、先方では是非逢ひ度いつていふもんだから。若し待つてゐられると氣の毒でもある――。」
「だがもう遲かないのか。」
「いゝえ遲くはない。芝居の稽古が濟んでからといふのだから、まあ夜あかしの覺悟だらう。」
「フウム。」

三田は憤懣に堪へなかつた。自分の態度の悪かつた事を悔て居たのも忘れて、友達の不埒ばかりが考へられた。人の爲めを思へばこそ、心置なく忠告もしてやつたのに、突然京都へ行くなど〻、あてつけがましく出た相手を憎んだ。

「爲方が無いや。君が京都へ行くといふのなら、僕はとめない。もと〳〵荷物は無いのだから、これから直に行つてもい〻のだらう。しかし明日は歸つて來るだらうね。」

「サア、どうしようかしら。此方にはもう來ないかもしれない。直に東京へ歸るかもしれない。」

「もう來ないつて。」

三田は友達の意外な強情に、吃驚して問返した。

「さうか、もう來ないのか。そんなら僕は此のま〻別れたくないね。」

彼はどうかして相手を困らせてやり度かつた。

「これつきりお別れなら、もう一度飲直さう。芝居の稽古を濟ませてからといふのなら、まだ時間はたつぷりあらあ。君が厭だと云つても飲ませる。又當分逢へないんだ。」

執拗く口說きながら歩き出した。松浦は何か考へてゞもゐるやうに、默つて後からついて來た。

三田は、時折友達に連れて行かれた事のある、北の新地のお茶屋に、松浦を連れ込んだ。早足

で歩いてゐるうちに、酒の醉はしげくなつて、その家の奥の間に通された時は、息切がして苦しかつた。

「まあ、どなたかと思うたら、三田さんだつか。お久しうおまんな。」

年とつた仲居が出て來て挨拶した。

「酒だ、酒だ。今夜は此の人の送別會だ。」

三田は、傍につまらなさうな顔をしてゐる松浦を紹介した。

「へえゝ、こちらさんは何處ぞ遠方へ行かはりまんのか。」

「なあに京都に行くんだとさ。二三日前から僕んとこへ遊びに來てゐたのだが。」

一語々々が友達に、あてつけがましく響いてゐる事を、三田は充分承知してゐた。

酒が出て、間も無く藝者がやつて來た。三田はその女達を相手に、埒も無い事を聲高にしやべつたが、松浦は默つて酒ばかり飲んでゐた。

お互の間の氣まづさから、二人は無暗に飲んだ。三田も松浦も全く醉つた。三田は呂律があやしくなり、松浦の體はしやんとしてゐる事を許さなかつた。

「こちらはほんまにおとなしうおまんな。」

「おとなしく見せかけてるのさ。その癖人間は悪いんだぜ。小説家だからね。」

側から三田が引取つて答へた。

「小説書かはりまんの。私の事書いて欲しいわ。」

若い藝者は物珍らしさうに云つた。

「僕が書いてやらうか。」

三田は又執拗く口を出した。

「あんたやつたらやめとこ。」

「生意氣いつてやがら。僕だつて昔は新進作家だつたんだ。失戀の小説なんか、今讀んでも涙が出ら。」

「阿呆らしい。貴方は會社の人やわ。」

「だから昔の話だつて云つてるぢやないか。昔は此の先生と肩を並べた小説家なんだ。何しろ中學校からの友達なんだ。」

何時の間にか話は横にそれて、自分達が一緒に學校へ通つた時代の話を、三田はうるさく話出した。それは藝者に話してゐるよりも、松浦に聞かせ度かつたのだ。昔の友情をはつきりと、自

分自身におもひ知らせる爲めにしやべつてゐるのだつた。彼は話に誘はれて涙ぐんで來た。
「なにしろもう、二十年近くちつとも變らない友達は此の人一人だ。」
聞えよがしにくど〳〵とつゞけた。その間松浦は、食臺に頬杖をついて、冷い盃をなめてゐたが、何時の間にか頭は段々低く下つて、坐つてはゐられなくなつてしまつた。遂々しまひには横倒しに、疊の上に寢轉んで、近くにゐた藝者の膝を枕にしてしまつた。
「チエッ、弱蟲め。寢ちまやあがつた。」
三田は得意になつて、友達の寢姿を尻目にかけたが、その當人も非道く醉つてゐて、胸苦しくて堪らなかつた。彼はおしやべりを止めて默した。
何時の間にか、藝者は一人減り二人減つて、膝枕をされて困つてゐるのと、舞妓上りのこまつちやくれが殘つてゐるばかりだつた。俄に座敷はしんとして、松浦の鼾がかすかに聞え始めた。
「姐さん、どないしましよ。枕貰うて來ましよか。」
「おほきに。私重たうてかなはん。」
目と目で合圖をしながら、若い方の藝者は立上つた。
「よせ、よせ。枕なんか要るもんか。もう直きに京都へ行つちまふんだ。起してやらう。」

「あんた、よしなはれ。」
松浦を搖起さうとしかけた三田の手は引拂はれた。
「ようやすんでゐやはるのを、起さんかてよろしうおまんが。」
「さうか。それぢやあ寢かして置かう。藝妓はんの膝枕をしてゐりやあ、京都へなんか行かなくたつていゝんだらう。」
「けつたいな人。私いやゝし。」
藝者はそれを切かけにして、松浦の頭を兩手で持上て、疊の上に下した。
「オイ／＼。自分こそ亂暴するない。大切に取扱つてくれ。僕の友達なんだ。子供の時分からの友達なんだ。」
三田は又學校時代からの仲善だつた事を、くど／＼云ひ出した。
「おや／＼、やすんではりまんのか。」
入つて來た仲居は驚いて、その場の景色を見た。
「そやつたらな。寢床敷いておよらしてあげまつさ。お風邪引かはつたらあかんよつて。」
「さうか。それぢやあ此の人は君に賴むよ。京都へ行くつて云つてたけれど、これぢやあ到底行

かれやしない。」

三田は云ひながら立上つた。

「あんたもお泊りやすな。」

「僕は歸る。明日又おつとめがあるんだ。」

彼は危ない足取でその部屋を出たが、又ふら／＼と戻つて來た。

「いゝかい僕の昔からの友達なんだから。そのつもりで賴むぜ。明日の朝起きたら、直ぐにお湯に入れてやつとくれ。」

友達が朝湯の好きな事を想出して、廻らない舌で、うるさく賴んだ。

「よろしうおま。私が引受けたら案じる事おまへんぜ。」

仲居は三田の言葉を遮つて答へた。

「さうか、それぢやあよろしく云つておくれ。」

三田は何となく涙ぐましい氣持になつて、自分に背中を向けて寢てゐる友達の顏を覗き込んだ。何時からか鼾のやんだ松浦の眼からは、涙が流れて頰を濡らして居た。三田の眼にも、忽ち涙が浮んで來た。彼は胸が迫つて、何も云ふ事が出來なかつた。

「左様なら。」
誰にともなく言葉を殘して廊下に出た。
「オヤ、雨かしら。」
格子をあけて出ようとして、彼は空を仰いだ。
「降つてまんのか。そやつたら傘をお持ちやす。」
「いらない、いらない。ほんの少しだ。」
仲居は臺所の方へ立つて行つたけれど、三田はさつさと往來に出た。存外雨は降つてゐた。大粒のやつが頭から顏を打つて落ちて來た。歩き出すと醉は愈々深くなつた。どきん／＼と口元迄、苦しさがこみあげて來た。三田は我慢が出來なくなつた。路傍の電信柱につかまつて、口の中へ指を突込むと、ひとたまりもなく大溝の中へ吐いた。したゝか吐いた。吐いて吐いて吐き盡した胸の淸々しさに、先刻から堪へてゐた涙が意氣地なくこぼれて來た。（大正八年十二月七日）

秋

家の主人夫妻は、去年嫁にやつた娘の生んだ初孫の顔を見に、遙々日本へ行つた。留守の間恰度夏休に、その家に來て泊つてゐては如何かと勸めて呉れた。暑苦しい下宿の三階の小部屋にくすぶつてゐた自分は、旅鞄を一つ持つた丈で、ボストンから汽車に乘り、紐育に近い川邊の家に着いた。それは七月の初めだつた。

廣い家の中には、料理人の千吉と、女中の登茂の二人きりだつた。頬骨の出た、蒼い顔をした千吉の額は夙に禿上つて居た。少し猫背の薄べつたい胸が、見るから喘息持らしかつた。登茂は又はちきれる程肥りかへつて、胸から掛けた幅廣の前掛が、太鼓腹をかくしきれずに大きく波打つた。眞赤に血肥りのした腕をまくりあげて、ばけつを提げ、床掃除器を持つて、玄關口から家の中、二階の段々、川に臨んだはりだしを、額から鼻の頭から、汗の玉をつぶつぶ垂らしながら、終日拭いて廻つた、怖しく疳性だつた。さういふ時に千吉は、日蔭の涼しい木の下へ、籐の寢椅子を持出して、好きな烟草をふかしながら、知らん面をして寢轉んで居た。

毎日々々退屈な日が續いた。休暇の間に讀まうと思つて買込んだ本も、手にとるばかりで讀み

はしなかつた。今年は殊に厳しい暑さで、煉瓦と石で出來た紐育の町の行路病者(ゆきだふれ)は、その日その日の新聞に載つて居た。肉體は弛緩し、氣力は腐つて、晝寢が樂しみになつてしまつた。

朝、二階の東向の寢室の窓には、向の岡を越えて上つた太陽が素早く照りつけた。窓かけを引くと、目の下の廣い庭の斜面の芝生からは、むらむらと熱氣が立昇つた。

「ア、ア、又今日も暑いのか。」

と溜息をしながら床を離れるのであつた。

顏を洗つて、着物を着換へて、階下(した)に下りて行くと、川に近いはりだしに、ちひさい食卓(テイブル)と椅子を置いて、朝の食事の支度が出來て待つて居る。一列に土堤(どて)に並ぶ白楊(ポプラ)の蔭になつて居るので見晴しもよく、涼しくもあつた。食事が濟んでも、そのはりだしの椅子に寢轉んで、新聞を讀んだり、無責任な讀書をしたりして午前中は暮らした。

日輪が廻つて午後になると、はりだしの上にも、樹木の梢を洩れて差込む日が落ちて來るので室内に引込むが、窓といふ窓をあけ放しても、風の通らない事が多かつた。さういふ時は、網床(ハンモック)を持つて、向の岡の林の中に出かけた。雜草の中には、名も知らない草の花が、つつましく咲いてゐた。春から咲殘つてゐるたんぽぽの煙のやうに白く枯れたのは、少しばかりの草の葉擦れに

も、ひとたまりも無く亂れて飛んだ。楡、山毛欅、楓、菩提樹などの、矗々と立並ぶ木立の中の釣床に揺られながら、本を讀むつもりで開いたのが、何時の間にか、午睡のうちに手を滑つて、草の中に落ちてゐる事もあつた。葉と葉と葉と葉と葉と重なり合ふ高い梢には、あるかないかの風の通ふ度に、木の葉のささやきがした。時には美しい小鳥の聲が、姿は見せずに聞えて來た。

單調な日の後に、又單調な日が來た、殆んど話をする相手も無いので、自分は所在無さに惱み盡した。千吉も登茂も無口だつた。千吉の方は、米國航路の日本船の料理人として、長い間乘組んでゐたのが、貯め込んだ小金を資本にして、此の亞米利加に移住して來る日本人相手の料理屋を始めようと決心した。或夜密かに脱船した。終夜眠らないで番をしてゐる波止場の役人の短銃の爲めに、命を落した仲間の者のあつた事も度々目撃してゐたが、華々しく料理屋を開業して、大金を儲ける將來の夢は、強烈な幻として映じるのであつた。着物と靴を風呂敷に包んで、頭の上に縛りつけた。雨の夜を幸に、彼は素裸で冬の海に飛込んだ。

「それも昔の話さあね。それからいろんな事をやりましたが、私共のやうな人間は浮かびつこはありません。」

或時彼は珍しく身の上話をしたが、別段感慨にふけるといふ樣子も無く、甘さうに烟草を吸つ

てゐた。
登茂は、此の家の主婦が嫁に來た時に、お里からついて來た女中だつた。それから二十年の間何一つ苦情も云はずに働いた。主人は百萬長者になつたけれど、登茂は年をとつて益々肥つたばかりだつた。
「はじめて此處に來た時、僕は君達を夫婦かと思つた。」
ほんとに自分はさう思つたので、二人の前で云つた事がある。
「冗談いつちやアいけません。」
千吉は苦り切つた返事をした。
「私が千吉さんのおかみさんに見えますつて。」
登茂はさもさも意外だつたといふやうに、まんまるい目をみはつて驚いて、堪へ性も無く吹出した。
二人ともこんな遠い國に來て居て、友達も何も無い寂しい同志なのに、親しい口をきく事などは全くなかつた。用事が濟んでしまふとする事が無い千吉にとつては、烟草の外に樂しみは無かつた。

「君達も随分退屈たらうね。」

と云つても、

「別段退屈つて事もありません。」

と答へるばかりだつた。

「そんなに御退屈なら、端艇を漕いで御覧なさいまし。うちの土堤の下に繋いでありますから。」

登茂は、所在なさに困つて居る自分に智恵をかしてくれた。

「だつて櫂が無いもの。」

自分も、川岸に古い端艇の浮かんでゐるのは知つてゐたが、餘り古びてゐるので、乗れるものとも考へて居なかつた。

「櫂ですか。あれは何處にあつたかしら。千吉さん、お前さん知らないかい。」

「知らない。」

千吉はつまらなさうに答へた。登茂は舌打しながら立上つて、裏の物置に探しに行つて呉れた。

「ありましたよ。ありましたよ。」

暫時して、物置の中から聲をかけながら、水に洗はれてうすべつたくなつた二本の櫂をかつい

で、登茂は出て來た。

自分はそれを受取つて、汀(みぎは)に下りた。棧橋の板も朽ち、杭もぐらぐら動いてゐたが、見掛けによらず、端艇はしつかりしてゐた。石垣に近い淺瀨には、一面に蘆が繁つて居た。その間を分けて、中流に出ると、思ひの外流は早かつたが、向ふの岸に近づくと、蘆の洲の間に入江があつて、水は靜に青空をうつして澱んでゐた。

その日から、毎日毎日端艇の中で半日を送る事になつた。七月の末から八月の中旬(なかば)へかけて、蒸されるやうな炎熱に苦しめられた頃も、自分は多くは水の上で暮らした。入江の奥の木蔭に舟をもやつて、青空を仰見ながら午睡(ひるね)に落ちてゆく事もあつた。空も水も、廣々とした懷(ふところ)に、柔かく自分を抱いてくれた。

それでも矢張り熱かつた。殊更風の無い日には、川水も油光りに光り輝き、鋭い反射は、見詰めてゐると目まひがした。最初は水ぶくれになつた掌のまめも堅くなり、櫂の運動も馴れて自由になると、遠く遠く海の見える方迄下つてゆく事もあつた。全身から流れる汗に濡れて、頭痛のする程疲れた體を、その儘船の中に倒して、流れるまゝに流れてゆく事もあつた。餘り咽喉が乾くため、知らない岸に船をつけて、野原の林檎の實をもいで澁い汁をむさぼり吸ふ事もあつた。

激しい肉體の運動と、その後の深い疲勞が無かつたら、單調な夏の日を暮し惱む外は無かつたのである。

けれどもそれも、やがて昨日の事になつた。白楊の梢に蜩の聲を聞いて驚いた事があつたが、それから目に立つて景色が變つた。空の色も日の色も、段々うすくなつた。川波の襞は細くなつて、水の上に延びた蘆の葉に、風の鳴る日が多くなつた。莖の脆い木の葉は擦れ合つて、金屬のやうな響を立てながら、未練氣も無く散りかかる。その落葉を浴びながら、下りてゆく棧橋の土堤の細道には、何處ともなく虫の音が聞えるやうになつた。時には、繋いである端艇の中で、鳴いてゐる事もあるが、姿はつひぞ見せなかつた。

水の上は、際立つて涼しくなつたが、暫時櫂を動かしてゐると、少しづつ汗ばんで來て、掌は熱くなり、額にも頰邊にも血の色のさして來るのが氣持がよかつた。夏の間、それが日課になつてゐたので、所在ない一日を暮しあぐむと、自分は屹度書齋を出て汀に下りて行くのであつた。

川に出る舟の數もめつきり減つた。此の川沿ひの家々の艇庫から夏中出たモオタア端艇の數は數へ切れなかつたが、此の頃はたまに、澄みわたつた水の面を亂して、機關の音高く走り過るのが珍らしい觀物になつた。古い端艇を漕いでゐる自分ばかりが、如何にも貧弱に見えたが、今で

は一人の天下のやうになつてしまつた。紅白の縞の日覆をかけたモオタア端艇に乘つて、川上から下つて來た若い夫婦も姿を見せなくなつた。何時も一人で、ゆるゆると艇をあやつつてゐた白髮の老人も來なくなつた。二三人の子供を連れた婦人は蓄音機を積込んで流を上つたり下つたりしてゐたが、その賑かな子供達の聲も聞かれなくなつた。その他、長い間に見知つた舟も人も、次第々々に迫つて來る秋に追はれて、家の中に引込んでしまつたらしい。

殊に自分の記憶に殘つたのは、一丁ばかり川上の、紐育の金持の別莊だといふ家の艇庫から漕いで出る桃色の端艇だつた。舟の人は、つばの廣い夏帽子に日を除けてゐて顏は見えなかつたが、若い娘には違ひなかつた。遠くへ漕ぎ出る事は殆んどなかつた。蘆の茂みのところどころに、水の澱んだところを見つけて、碇を下した。每日々々、娘は釣をするのであつた。時折は、物好きな心持で、その近く迄端艇を寄せた事もあつたが、靜に糸を垂れて、水面を見詰めてゐる人を驚かす事は出來ないで、何氣ないふりをして漕いで過ぎた。夕日が對岸の岡の向ふに沈んでゆく頃になると、終日流に浮んでゐた端艇も、忙しさうに各々の家路へ歸つて行く。自分は何時も、疲勞と空腹に櫂を動かす手も重く、船脚の鈍つた端艇を引擦るやうに棧橋をさして漕いだが、釣する人もその時分になると糸を納めて、艇庫の方へ歸つて行つた。岸に着くと、土堤の上の家から

馳下りて來る下僕に端艇を任せて、娘は釣竿と魚籠を手にしたまゝさつさと坂道を上つて行く。黄昏の光の中に、白い衣服ばかりがくつきりと浮んで、袴の裾のゆるく波打つのさへ明かに見えた。その娘の姿も此の二三日見受けなかつた。

今日も亦食後の運動に、自分は櫂を執つて漕ぎ出た。船端に寄る水の肌も、夏中よりは滑かさを失つて、冷く固くなつたやうに思はれる。雲も無い青空だつた。岡の林の黄葉が、透明な空氣の中に輝いてゐたが、水の上に落る日光も、秋は流石に白けてゐた。すべての物の音が、冴えて來た。遙かの川上の鐵橋を過る汽車の音も、高く響いて來た。兩岸の土堤の並木の枯葉の、からから鳴るのも、汀の蘆の時雨のやうな葉擦れも、親しく耳に聞えて來た。自分の動かす櫂に分れて白くひるがへる漣は、何にも増して身に沁みて秋を感じさせた。

釣する人は今日も見えなかつた。或は旣に紐育に歸つてしまつたのであらう。何となく自分一人取殘されたやうな氣がして、一つも船の影の見えない川は寂しかつた。

流を横切つて向岸に向つた。瀬の早い中流を過ると、船の腹を打つ波も靜になつて、風に靡く蘆の洲の間に、端艇は滑に進んで行つた。入江の中はひつそりとして、水には物の影も無く、蘆の葉のささやきばかりが、一層細かに反響するばかりだつた。幾まがりにもまがりくねつた水路

を漕廻つてゐると、突然目の前の蘆のかげから、高い歌の聲が聞えた。と思ふ間も無く、進んで行く船の目の前に、桃色の端艇が現はれた。端艇の中には若い女が乘つて居た。歌はやんでしまつた。大きな夏帽子のかげで、青い目が驚いて此方を見たが、微笑した顔をうつむけると、その儘手を早めて漕いで、船と船とは擦れ違つた。自分の來た水路を、娘を乘せた端艇は進んで、直に蘆間にかくれてしまつた。櫂の音ばかりが、ひとしきりかすかに聞えて來た。着物こそ紺に變つたけれど、つばの廣い麥藁帽子に見覺えのある、釣をする女であつた。

入江の眞中に端艇を浮べて、疲れた腕を胸に組んだまゝ、自分は空を仰いで寢た。小鳥の聲が爽かに、蘆の洲に聞えた。秋に限られてゐる心の疲れが、胸に淡く湧いて來た。

翌日も、その翌日も、自分は端艇を漕廻つた。所在無い一日をまぎらす爲めには違ひなかつたが、それよりも、桃色の端艇に逢ふ希望の方が強かつた。晴れた、風の無い日和が續いたが、再びその端艇は水に浮ばなかつた。たつた一度、帽子のかげに見た娘の細づくりな顔と、眞青な目の色は、はつきりと想ひ浮べる事が出來た。

或日、それは少し薄曇りの午後だつたが、空しく端艇を漕廻つて、そろそろ歸らうと思ふ頃だつた。疲れた腕に力を入れて、引潮時の早い流を、川下から溯つて來ると、櫂の先に障つた物が

あつた。手を止めて見ると、端艇の過ぎた後の渦巻の中に、沈んでは浮上るものがあつた。漕戻して拾上げて見ると、それは香水の瓶だつたが、中に紙片が入つてゐる。何心なく栓を抜いて取出して見ると、うすい鉛筆の走書で讀みにくい字が書いてあつた。

日光に透してやうやく讀了つた時、自分は思はず知らず端艇の中に立上つた程驚いた。

私は今惡漢どもの爲めに捕はれて此の川沿ひの艇庫に監禁されてゐる。助けて……

細い女文字の亂れたのが、事の危急を明かに想像させた。自分は唇の色も失つて、狼狽てて岸に漕ぎ戻つた。

土堤を上つて、臺所口から家の中へ馳込んだ。千吉と登茂が、夕餉の支度をして居た。

「大變だ。」

自分は手に握りつめた紙片と、香水の瓶を二人につきつけた。息がはずんでそれつきり何も云へなかつた。

「女がかどわかされたんだ。何處か近所の艇庫の中に押籠められてゐるんだ。」

讀み兼ねてゐる二人に云ひきかせてやつた。

「女がですつて。」

登茂はしつかりとは呑込めない顏をして息を呑んだ。

「大變だ。」

千吉も吃驚して、紙片を二三度讀返した。如何していゝかわからないで、三人とも顏を見合せて嘆息した。

「兎に角巡査を呼ばう。」

自分はやうやく巡査といふもののゐた事に氣が附いて、電話室に馳けて行つた。

「確に女の字です。惡漢につかまつてゐるのだから、早く救はないと大變です。」

言葉短に一伍一什を話して、かうつけ加へた。

「緬庫の中に監禁されてゐるといふのですな。よろしい。直に行きます。」

太い巡査の聲で答へて、電話は切れた。

不安と懸念に押默つて、三人は玄關に出て待つてゐた。雲の間からもれる薄日に照らされた門内の芝生には、ダリアやコスモスが亂れて咲いてゐた。寂とした秋の午後であつた。

自分は身近に起つた大事件を、さまざまに想像し惱んだ。若い美しい女が、惡漢共にかどわかされる活動寫眞の映畫が、目の前に展開された。さうして、その大事件を探り出したのは自分で、

娘を救ひ出すのも自分の役廻のやうに考へられた。

巡査はなかなか來なかつた。待つてゐる間の長さは自分を苛々させた。無駄に過される時間の間に、娘の生命が失はれてしまふやうな氣がした。

突然けたたましい警笛を鳴らして自動車が馳付けた。五六人の巡査が、手に手に太い棒を持つて乘つてゐた。どれもこれも、見上げるばかりの大男だつた。

「端艇を漕いでゐて、香水の瓶を拾つたといふのは貴方ですか。」

その中の一人は日本人ばかりの家に來たのが珍しさうな樣子で、吾々三人に目を配つてゐた。

自分は香水の瓶と紙片とを見せて、又最初からの顚末を話した。

「成程女の手だ。」

仲間のうちでは一番幅の利くらしいのが、紙片を讀んでうなづいた。

「惡漢どもと書いてある。複數だね。」

同僚に見せてささやきあつた。

「兎に角早速探索します。報告して下さつて難有う。」

さう云つて輕く禮をすると、巡査達は狼狽しく立去つた。門の側で、ひとかたまりになつて協

議してゐたが、二三人は自動車に乘つて走り去り、他の者はちりぢりに馳出した。

その日もやうやく暮れて行つた。捕はれてゐる女を助けに行つた巡査達は、如何したのかちつとも解らなかつた。

「どうしたでせう、その女の人は。」

登茂は幾度と無く同じ事を繰返して聞いた。食事の後も、室内の電氣が暗く思はれた。つい近頃の新聞に出てゐた紐育の殺人事件に、關係のある事のやうにも考へられた。カトリツク教の教會の牧師がその家の女中を絞殺し、その死體を切刻んで、肉はストオブで燒いてしまひ、骨はハドソン河へ沈めてしまつた。犯罪は數ケ月後に發見されたが、牧師は明白に白狀した。たゞその動機は、痴情の結果では無い、神樣のお告によつて殺したのだと云ひ張つた。未だに裁判は終らない。牧師の兇惡な顔は、新聞に出て居たが、それが、まざまざと見えるのであつた。しかし女はどんな女だらうと考へた時、自分はふと、桃色の端緃の娘を想ひ浮べた。胸が高く動悸した。

夜更けて戶外は時雨になつた。落葉の上に降る音はしめやかに、人の心の不安に深く沁みて來た。

翌朝も雨であつた。朝の食事の後で、千吉や登茂と、昨日の事件を話しながら、新聞を開いて

見た。其處に何か、此の事件についての驚く可き記事があるやうに想はれたのだ。

正午近くに、巡査が二人連れでやつて來た。

「如何でした。手がかりはありましたか。」

自分は飛んで出て訊いた。

「否。」

巡査は簡單に首を振つた。

「艇庫といふ艇庫はすつかり探したが、別狀はありませんでした。」

「それについて、もう一度貴方の話を聞かして貰ひ度いのです。」

もう一人のは手帖を取出して鉛筆をなめた。自分は又、端艇を漕いでゐた事から、ふと櫂の先に觸つた物のあつた事、拾つて見ると香水の瓶だつた事、その中から紙片の出て來た事を詳しく述べた。

「それに違ひはありませんね。」

「違ひありません。」

巡査の詰るやうな調子に、自分もきつぱりと答へた。

「わかりました。だが、ついでに貴方と、他の二人の召使に、此處に姓名を書いて貰ひたいのです。」

彼はその手帖の一頁を裂いて渡した。自分は何心なく名前を認めた。千吉も登茂も書いた。

「矢張り違ふね。」

巡査はポケットから取出した紙片を合せて見て、連れの一人とうなづきあつた。

自分は胸がどきんとした。今巡査がポケットから取出したのは、昨日自分の拾つた瓶の中から出た紙片だつた。その文字と、自分達の書いた文字を照合せたのだ。何かしら自分に嫌疑のかかつてゐる事が想像されて、不安が胸をついた。

「どうもお邪魔しました。なほ探索はつづけてやつてみませう。」

さう云つて巡査達は外套の襟を立てて、雨の中を濡れて行つた。終日雨は降暮らした。

次の日、雨上りの涼しい岡の小道を散歩しながら、自分は矢張り、川沿ひの艇庫の一つに若い女の監禁されてゐる事を信じて、探偵らしい心持を持ちつゞけてゐた。何かしら草の中からでも、證據になる物が出て來る氣がして、物の音にも心を置いてゐた。

「今日は。」

突然聲をかけられて驚いた。横手の家の裏口から、此間の巡査の一人が手に持つ林檎を皮ぐるみ嚙りながら出て來た。

「如何でしたあの事件は。」

自分は思はず知らず、つかつかと寄つて訊いた。

「あれは誰かの惡戲ですよ、ハツハツハツハツ。」

巡査は大きな口を開いて笑つたが、もうそんな事件は忘れてしまつたやうに呑氣らしく林檎を嚙りつづけた。

「さうですか。左樣なら。」

自分は侮辱された氣持がして、云ひ捨てたまゝ、さつさと岡を下りて來た。

午後からは、冷い風は吹いてゐたけれど、する事の無い退屈さに、又端艇に乘つた。雨の後の水嵩の增した川の上は、愈々秋が深くなつた。西に傾いて行く日を浴びて、白く輝いてゐる川沿ひの艇庫が浮繪のやうに見えた。その艇庫の何れか一つに、若い美しい娘が監禁されてゐるに違ひ無い。巡査どもがまごまごしてゐる間に、或は何處か外の場所に運ばれてしまつたのかもしれない。ひよつとすると、既に、命を奪はれてしまつたのかもしれない。兎に角惡戲ではないに違

ひ無いと思ひながら、何かしら心の底にやけになつたやうな氣持で、力任せに漕廻つた。

驚くばかり日の短くなつた一日は直ぐに暮れた。兩岸の蘆の洲を渡る風が、沁々秋をおもはせた。(大正八年十二月十四日)

正月

かねて病氣だつた母親の容體がよくないといふ通知を受取つた茅野は、大晦日の夜行で大阪を立つた。

ふだんから忙しい商賣に疲れた體を、暮には殊に虐待した。正月になつたら、少なくとも松の内は、世間並の交際も止めにして、思ふさま呑氣に遊んでやらうと、そればかりを樂みにして居た。それには、子供の頃からの友達の、三田との約束もあつて、心置無く飲みもし、話もしようと、柱暦の一枚々々減つて行くのを待つてゐた。ちひさい時分、指折り數へて待つたお正月の喜びが、再び彼に蘇つて來た。會社に勤めて居る時間は、商品の値段の上り下りばかり氣にして居る同僚にまじつて、彼も一かどの敏腕家だつたが、いくら商賣の道に明るくなり、自分の見込み一つで巨利を占め、會社の上役のうけがよくなつても、彼の方から考へると、自分の日常生活には、如何しても滿足出來なかつた。以前程の熱情はなくなつたけれど、五六人の友達と、文學雜誌を出して居た頃の、藝術に對する憧憬も未だに殘つて居て、會社員としての彼の心持を、屢々裏切るものがあつた。その頃の仲間の多くは、文筆の士になつてしまつた。松浦や澤の如きは、

第一流の作家批評家として、既に明治から大正へかけての文學史の幾頁かに名前を止める人であつた。たつた一人、自分と同じやうに、ずるずるに勤人になつてしまつた三田さへ、閑を盗んで書く小説を發表して、それ相當の名聲を博して居るのだ。自分も一つ奮發して見ようと、幾度も筆を執つたけれど、思想は文字に成らず、幻影は描寫とならなかつた。その創作衝動の不滿を、會社勤務(つとめ)の結果だと考へるのが、彼にとつての心なぐさめであつた。

周圍の無理解――さうだ、それが自分の寂寞だと、彼は常に考へた。誰の月給がいくら上つたとか、今期末の賞與金は月給の何箇月分だらうとか、何處其處の某(なにがし)は成金になつたとか、そんな話ばかりして居る會社の事務室にはぐくまれた孤獨の悲哀は、年と共に深くなつて行くやうに思はれた。第一大阪といふ土地が氣に喰はない。教養の無い文明といふ言葉が使へるならば、それは大阪の事なのだと、彼は人前で云ひもした。學問藝術を尊敬する心持を失ひ切らない者にとつて、學問藝術を輕蔑する人間の安つぽさは、堪へられないものであつた。外の友達は東京にかたまつて居るのに、自分一人大阪へ寄越されてしまつた事も、自分の寂寞を增し、藝術家としての自分の發達を阻害した原因に數へられた。

大阪へ行くとしいへど悲しがる

初めて支店へ來る事になつた頃、戯れに友達に送つた歌を、彼は時々酒席で、藝者の持つてる扇などに書いてやつた。

永い間、友達の無い寂しさに惱み盡して居たところへ、思ひもかけない三田がやつて來たのだつた。三田もその勤務先の會社の出張所詰になつたのだ。土佐堀の濱側の宿屋の二階に、三田の居場所を見付けてやつたのも彼であつた。

「僕はこの四五年といふもの、ほんとに自分の思つてゐる事を口に出した事が無いといつていい。相手が無いんだ。そりやあ大阪は堪らないよ。君なんか到底も辛棒出來ないぜ。」

自分自身驚いた程饒舌になつて、三田をつかまへて喋つた。癇癪持の我儘者の三田とは、今日迄に幾度仲違ひをしたかわからなかつたが、そんな事は一切忘れて、茅野は心から、友達の大阪に來た事を喜んだ。會社がひけると、眞直に住吉の家に歸るのがおきまりだつたのに、三田が來てからは、お互に誘ひ合つて、何處かで食事をする事が多くなつた。酒飲の三田につきあつて、夜を更かす事も繁くなつた。會社の取引先との、招いたり招かれたりの宴會には、ほとほと閉口してゐたのに、思ふさま勝手に振舞へる竹馬の友と一緒だと、飲めない酒さへ過すのであつた。

殊に三田が、宿の六疊に机を据ゑて、乏しい時間を惜んでは、創作に努力して居るのを見る度に、茅野も、昔描いた若々しい藝術的憧憬にそそられて、自分も文壇に打つて出ようといふ希望が旺んになつた。けれども矢張りいざとなると、彼は根氣が續かなくなつて、倚り馴れた黑檀の机が徒らに冷たく思はれるばかりで、未完成の原稿は、身の圍にうづ高くなつた。

「そろばんばかり彈いてゐちや、到底も創作なんか出來ないねえ。」

彼は三田に逢ふ度に愚痴を溢したものだつた。

「なあにそんな事があるものか。かへつてその方が藝術的良心を失はないでいいんだよ。毎日々々小說を書いて、そいつを賣る事ばかり考へてゐるのも堪らないぜ。」

三田にいはせると、藝術家の二重生活といふ事は、日常生活の外形できまる問題ではなくて、全然良心の問題である。始から終迄、低級な讀者に媚びながら通俗小說を書いて、しかも藝術家面をして居る者こそ二重生活者と呼んでいいのだと云ふのであつた。

「僕なんか晝間は帳面づらが一厘合はないとか、そろばんが一桁違つたとか云つて、齷齪してゐればゐる程、日が暮れて家にかへると、机にむかつて筆を持つのだと考へるのに張がある。少なくとも文壇の義理つきあひにまつはられて、不知不識に周圍の影響に壓倒されてしまふ危險に迫

られない丈でもいい。自分の賦性を尊ぶ者には、寧ろ吾々の生活の方が自然なんだ。」

飽迄も確信してゐるものの如く、何時もきつぱりいふのであつた。さうして三田は、その言葉通りに振舞つて、押通して行くのであつたが、茅野は如何(どう)しても心から承認する事は出來なかつた。

「君は體が丈夫に出來てるからそれでもやつて行けるんだ。」

と小面憎くも思ふのであつた。毎晩、四五時間眠れば、晝間の疲勞を回復してしまふ頑健な三田なんかと一緒にされて堪るものかと、自分のきやしやな肉體を誇る氣持もまじへて不服だつた。第一三田は獨身だが、自分には妻もある、子供もある――と考へると、彼はその妻子も亦自分の天分を萎縮させてしまつた原因だつたやうにも考へた。

「ああ、俺も愈々これで救ふ可らざる會社員になり切つたかな。」

茅野はわざと、その妻子の前で嘆息して見せる事もあつたが、相手には一向通じなかつた。兎に角、此の鬱陶しく曇つた大阪の、儲話の外には何も無い人間の中に、氣心を知りぬいてゐる三田を得た事は、彼にとつて、どれ程の喜びだつたかわからなかつた。

しかしその三田も、やつと二年ばかりゐたと思つたら、急に又東京の本店へ呼戻されて歸る事

になつてしまつた。それは十月の初だつた。
「羨しいなあ、なんて云つても矢張り東京に限るね。」
「さうでもないさ。大阪も馴れて見ると捨てられないぜ。」
　眞正直に怒りつぽいくせに、喜びと悲しみは顏に出さない三田は、別段東京へ歸る事も希望ではなかつたのだと云つたけれど、いくらかくしてもかくし切れない嬉しさが、確に見えると茅野は思つた。
「もう一寸は大阪へも來ないだらう。」
「いいえ、休暇さへあれば屹度來るよ。お正月に來ようかしら。」
　三田は眞面目な顏をして云つた。
「ほんとに來るかい。」
「來るとも、御馳走さへしてくれれば。」
　持前の冗談だか本氣だかわからない調子で答へた。その時一緒だつた田原も側から念を押した。
「屹度か。」
「くどいなあ。來るつたら來るよ。」

念を押される事の嫌な三田は、じれつたさうに舌うちした。

茅野は三田の言葉を信じて居た。來ると云つたら屹度來るのが彼の男だ。どんなに忙しくても、無理算段をしても來るに違ひ無いと思つてゐた。その後、手紙の端に、正月元日の朝梅田に着く時間までも書いて來た。十、十一、十二月と、三田が東京に行つてからの月日は、會社の方も忙しかつたが、茅野は只管正月の會見を樂みにしてゐた。三田が大阪にゐた二年の間にも、お互の我儘から、時には顏を赤くして我意を張合つた事もあつたが、東京に行かれてしまつた後は以前にも増した孤獨感が、彼の心をむしばみ始めた。それ程待つた三田だつたのに、折惡く母の病氣がよくないといふ報知を受けて、茅野は狼狽てて旅立たなければならなかつた。彼は朝早く、三田へ宛た電報を打ちに行つた。大丈夫間に合ふとは思つたが、念の爲め至急報にした。

「明日は病院に見舞に行つて、歸りには三田の新居を驚かしてやらう。」

茅野は夜行の汽車の中で、母の病氣を氣づかひながらも、友達に逢ふ樂みを胸に描いた。

その朝、三田は旅鞄をぶらさげて家を出た。親の家を離れて、女中に家事を任せ切りにしてゐる呑氣な暮しを、彼は結句喜んでゐた。氣が向かないと口をきかない質なので、殆んど女中と物

を言ふ事もなかつた。

「四五日旅行して來るよ。」

格子をあけて外に出る時始めて彼はさう云つた。

「御旅行はどちらでございます。」

女中は驚いて追かけて來た。

「何處に行くかわからない。兎に角四五日ゐないんだ。」

行く先なんか訊く必要はないと思ひながら、その儘歩き出した。

女中はぽかんとして、黑い外套を着た大きな主人の後姿を見送つた。

その日の午後、三田の家に電報が届いた。女中は、如何していいかわからなかつたが、兎に角開いて見た。

ハハビヤウキクルナソツチデアフチノ

最初は何の事か皆目わからなかつたが、幾度も繰返して讀んで居るうちに、誰かのお母さんが病氣だから來るなといふ意味丈が受取れた。けれども、それが誰から來た電報か、何處から來たものかはわからなかつた。女中は、ふだんの通り三田が會社で仕事をしてゐるとは知らなかつた。

鞄をさげて行つた姿が心配で堪らなかつた。もう汽車に乘つてしまつたに違ひ無いと思つた。いたづらに胸をわく／＼させながら、電報を讀みかへすばかりだつた。

何も知らない三田は、その晩の夜行の汽車に乘つた。蒸されるやうな室內の暖氣に、食堂で飲んだウヰスキイの醉が出て、いい氣持で寢臺に横になつた。年末の仕事の忙しさと、その忙しい間に、新年の雜誌に約束した原稿を仕上げた激しい努力の後の疲勞が、責任の無くなつた今になつて、一時に彼を襲つて來た。ごつとんごつとん、一定の間を置いて響く車輪の響さへ、心地よい韻律になつて、三田は枕に顏を埋めると眠の底に沈んでしまつた。

殆んど同じ時刻に大阪と東京を出た上りと下りの急行列車は、東海道の暗い鐵路を、次第々々に近づいて、眞夜中の二時頃、一際すさまじい音響を立てながら擦れちがつた。茅野も三田も、その物音も知らずに熟睡して居た。

翌朝、三田が目をさました時は、汽車は琵琶湖のふちを通つて居た。空も湖も眞青に澄んで、晴れた日の日輪に、比良の嶺の雪は痛い程まばゆく輝いてゐた。

「食堂にお雜煮の用意が出來て居ります。」

小ざつぱりした白の詰襟を着た給仕が、叮嚀に腰を屈めて、乘客の一人々々に知らせて行つた。

「ア、今日は元日だつた。」

三田は、どんな事も忘れ切つてゐた程のんびりした休日の心持になつて居た。暖い室内の柔い椅子にかけて、硝子越に背中に當る日光を浴びて居ると、窓の外の冬田の景色さへ寒くは感じなかつた。彼は熟睡の後の、まだぼやけてゐる頭腦の中で、行く先の大阪を想ひ描いてゐた。

宿屋の二階にくすぶつて、貧しい生活をしてゐた二年間も、今になつて見ると懷しかつた。知人も少なく、氣に喰はない事だらけだつた大阪の土地にさへ、離れて緣遠くなつて見ると、淡いながらも執着があつた。冬は西風が吹いて寒く、夏は夕日がさし込んで暑い川つぷちの部屋が、まざまざと目に浮んで來た。潮が干ると、泥土の臭が鼻をついて來たが、上り下りの舟や筏も面白かつた。冬になると、海の方から鷗が群つて飛んで來た。お小遣のなくなり切つてしまつた日暮などは、緣側の欄干に凭れて、終日水の流を見て暮した。いつも天氣のいい日には、恰度自分の部屋の下の水面に、泥龜がぽつかりと浮んでゐた。

「あの龜の子はまだゐるかしら。」

それさへ馴染の一人だつたやうに想ひ出して笑ひ度くなつた。元氣のいいおかみさんの肥つた

姿、げらげら笑つてばかりゐた女中達の眞赤な頬邊迄目に見えるやうだつた。

「突然自分が行つたら、さぞみんな驚くだらう。」

と思ふと三田の心は樂しかつた。

停車場には、茅野も田原も來てくれるに違ひない。十月の始に、大阪の停車場で別れる時にも、元日の朝の此の汽車で着くと云つたら、必ず出迎へると約束したのだつた。少し首をかしげてうつむき加減に歩いて來る茅野と肩で風を切つて大跨に歩いて來る田原の姿が明瞭に想像された。

汽車は着いた。三田は窓から首を出し度いのだつたが、それよりも、友達の方から探し出して貰ひ度かつたので、他の客が吾勝に急いで降りた後から、鞄をぶらさげて歩廊に下りた。多勢の人をわけて近づいて來る友達の居る事を、彼はちつとも疑はなかつた。

それなのに、意外にも、茅野も田原もゐなかつた。いくら其處いらを見廻してもゐないのだ。あんまりあてにし過ぎて居た事の裏切られた不滿と、如何したのかわからない不安心に、三田は暫時呆然として佇んだ。

おもてに出て、又一しきり附近を見廻したが、友達の姿は遂に見えなかつた。重たい鞄をさげたまま、彼は兎に角歩き出した。

年始の廻禮に歩く人々の間を、誰の目にも旅人らしい三田は、土佐堀の宿屋をこころざした。重たい外套と、重たい鞄の堪へる體からは汗が出て來た。何時も何時も、その川つぷちを、會社へ通つた頃の事が思ひ出された。毎日同じ時間に、この道筋で逢ふ娘があつて、その事を冗談に宿の女中に話したのが、宿屋中の評判になつた事もあつた。何處かに勤めてゐるらしい風だつたが、一寸珍しい程目鼻立の整つた娘で、歩きつきに著しい癖があつて、遠くからでもよくわかつた。

「三田さん、今日もお逢ひになりましたか。」

「どうしたんだか今日は逢へなかつた。病氣ぢやあないかと思つて心配してるんだ。」

「おやおや、そやつたら今晩は貴方御機嫌が惡うおまんな。」

女中達は、會社から歸つて來る三田をつかまへて、毎日々々あきもしずに、同じ事を繰返して冷かしたものだつた。あんまりしつつこく冷かされてゐるうちに、しまひには自分でも、その娘に逢はない日は、縁起が惡いやうな氣持さへして來るのだつた。

宿の格子を開けて玄關に立つたが、誰も出て來なかつた。そのくせ奥の方では多勢の笑聲が聞えた。

「今日は。」
二度三度、段々聲を張上げて呼んだら、やうやく廊下に足音が聞えた。
「まあま、貴方三田さんだつか。」
女中のおぬめはあきれた顔をして云つたが、
「おかみさん、三田さんだつせ。」
と奥に向つて叫んだ。續いて出て來たおかみも、
「ほんまに三田さんや。」
と黄色い聲をふりしぼつて、ばたばた式臺に下りると、三田の手から鞄を奪ひ取つた。
「貴方早うお上りやすな。」
女中達は外套の袖をとつて引上げた。その馴々しさが、お正月らしい心持を三田に抱かせた。
「僕はこんな部屋はいやだぜ。僕の部屋はあいてゐないのかい。」
此の家では一番立派な部屋に通されたが、その入口に立止つて註文を出した。
「矢張りお馴染のお部屋の方がよろしおまつか。」
二階の奥の川に臨んだ六疊に導かれた。二年間彼が居た間、春夏秋冬一日も變らずにかかつて

ゐた浪に日の出の掛物は、矢張りその儘かかつて居た。彼が古道具屋で買つて來たのを、引上の時記念に殘した古机も其處にあつた。三田は緣側に出て、ゆるく流れて行く川水をなつかしく見下した。

「お目出度う。舊冬中は何かとお引立にあづかりまして難有うございます。今年も亦相變らず。」

肥つたおかみさんが來て改まつて述べたが、それが濟むと急に砕けて、

「私なあ、おぬめどんが、三田さんがお出でになつたというても噓やと思うてましてん。三田さん、貴方何故葉書などくれはれしめへんでしたの。」

「だつて面倒臭いんだもの。」

「ほうら三田さんの面倒臭いが出ました、出ました。」

女中は、度外れな高調子ではやして笑つた。

御祝儀だといふので、お屠蘇を勸められ、上方風のお雜煮も喰べさせられた。正月の事で、客は一人も無く、親類の者や家中の者が寄集つて、雙六をして居るのだと云ふのであつた。暫時無駄話をした後で、彼もその雙六の仲間に誘はれたが、疲れてゐるといふのを口實に斷つた。

「それはさうと、茅野さんと田原さんが來る筈だから、そのつもりでゐてくれたまへ。」

「へええ、貴方さんの來やはつた事知つてはりまんのか。」
「知つてるとも。みんなと約束して來たんだからね。」
三田は女中を呼止めてさう云つた。自分が何の爲めに來たかを、一層明かにして置き度かつたのだ。
鞄の中から新年の雜誌を取出して讀んだが、ちつとも頭に入らなかつた。屹度停車場迄來てゐると思つた茅野も田原もゐなかつたのは、時間が早過ぎたからだ。元日の事だから、いくら呑氣な連中でも、少しはつきあひに廻る家もあるだらうと考へはしたが、しかし矢張り不平だつた。
三田は所在なさに、押入から丹前を出して、横になつた。雨漏のあとの壁の汚點も、天井の板の木目も、毎日それを見て暮した頃を想ひ出させた。ぼんやりと追想してゐると、いつかしら汽車の疲勞が出て來て、思はずしらず、うとうとして來るのであつた。裏の川を通る船の櫓の音か、枕の直ぐ下に微かに聞えた。
「三田さん。」
ふいと呼ばれて目をさますと、鼻のさきにおぬめが坐つて居た。
「貴方もうおひるだつせ。御飯はどないしませう。」

「もうおひるか。おひるはぬきだ。友達が來れば一緒に外へ出て喰べるし、來なければ晩迄寢て居よう。」

「貴方何しに大阪へ來やはりましてん。」

「寢に來たのさ。」

それつきり目をつぶつて、女中が手持不沙汰らしく、捨せりふを殘しながら、行つてしまつた足音を聞いた。

無理に目はつぶつたけれど、もう眠くはなかつた。これぢやあほんとに大阪迄寢に來たやうなものだと思ふと、馬鹿々々しく腹が立つた。茅野や田原は、一體如何したんだらうと、又しても友達の事が氣になつた。住吉の松林の中にある茅野の家も、蘆屋の濱邊の田原の家も、ありありと想像された。しかし彼はどつちにも、此方から行くのは殘念だと思つた。如何しても遥々來た自分は、先方に出迎へられる役でなければならない。此方は默つて懷手してゐれば、先方でいろいろ頭を捻つて、此の四五日を呑氣に暮らさせてくれなければいけない。彼は友達と日を暮らすさまざまの場面を空に描いたが、何時迄たつても空想は盡きないかはりに、空想では我慢が出來なくなつた。

三田は勢よく飛起きて、外套を着て階下に下りて行つた。
「お出かけだつか。」
女中が追かけて來て下駄を出してくれた。
「どちらへ。」
「どちらつてあてもないのさ。」
「お早うお歸り。」
といふ聲を後に聞き流して往來に出た。あてはないと口では云つたが、腹の中では、茅野か田原の家に行つて見ようと考へてゐた。ただ、その二人のどつちにしようかといふ事が決まつてゐなかつた。何處かに氣難しいところがあつて時とすると、妙に冷たい感じのする茅野のところへ行くのは、此方が當然出迎へて貰ふ筈だつた丈、腹を見透されさうでいやだつた。さりとて、何時も何時も、用事の手紙をやつても返事も寄越さず、此間も向ふから、工場の監督にいい人があつたら世話をしてくれと賴んで來たので、折角一人見付けて、履歴書迄添へて意向を聞いてやつたのに、それにはちつとも返事もしないやうな、氣まぐれの田原のところへ行くのは、馬鹿にされ切つてゐるやうでいやだつた。自分はその爲めに紹介しようとした人に對して、どの位氣まり

の悪い思ひをしたかしれないのだ。三田は決し兼て、ぶらぶら歩いてゐるうちに、電車道に來てしまつた。全く反對の方向に住んで居る友達の、どつちを訪れようか、彼は又其處に佇みながら迷つた。どつちでもいい、電車の早く來た方にしよう、咄嗟に彼はさう決めた。

北へ行く電車が先に來た。三田はそれに乘つて、田原の家に行く事にした。阪神線に乘つてから、彼はまだ茅野の方にも心を引かれて居た。しかし、まあいいや、お天氣やの感情家の田原は、自分が行つてやつたら、茅野よりももつと喜ぶに違ひ無い。線の細い顏中を笑にして迎へるに違ひ無い。忽ち大きな聲で喋り出すに違ひ無い。自分に口を開かせない程、あれからそれと移つて行く話を、一人で引受けてしまふに違ひ無い。彼が經營してゐる工場の話――それを勞働問題に結び付けて、社會改革者を以て任じる彼は、自分の工場の新施設を誇るに違ひ無い。三田は暫時の間、すべてを忘れて、友達との歡會を心に描いた。

海邊は流石に風が強かつた。電車を下りて松原を拔けて行く間も、向ふから來る潮風は容赦なく砂を捲いて吹きつけた。後に聳える六甲山の上の方には、雪が眞白に光つてゐた。やがてその松原を通り越さうとするところに、田原の家はあるのだつた。三田は、一瞬間、門前で躊躇した。のめのめと自分の方からやつて來たのが、今更不甲斐なく思はれたのだ。國旗の出てゐる門を入

つて格子を開けると、女の子が、むきかけの蜜柑を持つて馳出して來た。
「今日は。お父さんは。」
と云つたけれど、先方はもう見忘れてゐた。うさんくささうに、じろじろ此方の顔を見てゐる。
「彌生(やよひ)さんはもう私を忘れちやつたの。」
ときいても、矢張り默(だ)んまりで、鼻を垂した顔で見詰めてゐる。誰でも、俺の顔は怖いといふから、その子供も怖がつてゐるのだと考へて、三田は自分の怖ろしい顔を想像して赤くなつた。
「お父さんは？　お留守？」
少し氣まりが悪くなりながら、三田はもう一度繰返した。
「お留守。」
女の子は、につこりともしないで、口の中で答へた。
「お留守？――お母さんは？」
「ゐる。」
それつきりで、又此方の顔を上目(うはめ)で見ながら、蜜柑を一袋ちぎつて口に入れた。
チエツ無表情な子供だなと、少し癇癪を起しながら、三田は途方に暮れた。もう一度大きな聲

で、御免なさいと怒鳴つて見ようかと思つたけれど、現に目の前に女の子が立つてゐるのに、大きな聲を張上るのも可笑しいと考へて止めた。彼は爲方が無いので、名刺を出して子供に渡した。

「これをね、お父さんが歸つて來たらあげて頂戴。」

女の子は默つて受取つて、矢張り三田の顔を見て居るのであつた。

三田は額に立皺を寄せながら田原の家を出た。こんな事なら茅野のところへ行けばよかつたと思つたが、それにしても、自分の來る事を知りながら、田原は何處に行つたのだらうと憤慨した。日が山の背にかくれ初めたので、潮風はあてつけがましく寒くなつた。彼は路傍の石つころを、力任せに蹴飛ばしながら歩いた。

大阪へ歸ると日は暮れた。寒さと空腹にへこたれて、三田は力無く宿に歸つた。

「何方らへ。」

「散歩して來た。留守中に田原さんか茅野さんは來なかつたかしら。」

「どなたもお見えになりません。」

三田はおかみさんと、二言三言口をきいたばかりで、二階に上つてしまつた。

年始廻りを濟ました田原は、妻子の待つて居る顏を想像しながら歸つて來た。暮の忙しいさなかに、工場に起つた怠業も、時間の短縮と勞銀の引上で、無事に解決はしたものの、一時は隨分心配させられた。正月になつたらゆつくり寢轉んで、無責任に小說でも讀まうと、それを樂しみにしてゐたが、元日は矢張り廻禮に出なければならない身の上だつた。飮めない酒を強ひられ、窮屈に坐つて、きまり文句のお目出度うを繰返した今日の一日の馬鹿々々しさに疲れてしまつた。今晚は早寢だと思ふと、もう睡氣がさして來る程だつた。格子を開けて玄關の燈火の色を見ると、俄に彼は蘇生した氣がした。

「おかへり。」

妻は乳呑兒を抱いたままで出て來た。

「今日三田さんがいらつしやつたんですよ。」

「エツ三田さんが。ほんとか。來たか。――待たせてあるのか。」

田原はせき込んで、家の內へ入る事さへ忘れてしまつた。

「それがねえ、私はちつともしらなかつたのですが、彌生が、お母さんこんなものつて、名刺を持つて來たんでしよ、見ると三田さんぢやありませんか。直におもてに出て見たのですけれど、

もう見えませんでした――ねえ彌生さん。」
母親は背中につかまつてゐる女の子をかへりみて云つた。
「フウム、ほんとに來たのか。」
田原は嘆息するやうにつぶやきながら上にあがつた。
「けれどもお前も氣が利かないぢやないか。こんな子供を取次に出すなんて。女中達もゐなかつたのかい。」
「だつてほんの一寸の間なんですもの。三田さんだつて、子供に名刺を渡して行かなくたつていいぢやありませんか。何とかして私を呼んで下さればいいんですよ。」
「其處が三田さ。」
「いくら變つてゐたつて、遙々東京から來たんぢやありませんか。」
不平らしくつぶやくのを、田原は上の空で聞き流した。彼はほんとに三田が來たと聞いて恥入つた。三月前別れる時に、屹度正月は遊びに來ると云つては居たけれど、忙しい體で、それ程面白くもない筈の大阪迄、わざわざ來るとは信じられなかつた。平生から三田は、自分の事を疑深いといつて攻撃し、何時迄つきあつても友達を了解しないと云つて罵倒したが、ほんとに自分は

その通りだ。彼の男が來ると云つたら、來るものと信じてゐればよかつたのだ。來ると云つたら意地にも來るやうな男には違ひ無いのだから。田原はぼんやりと考へ込んでしまつた。彼の男の事たから、折角此處迄やつて來ても、自分がゐなかつたので、さぞかしぷんぷん怒つてゐるだらう。今度顏を合せると、例の口調で、面と向つて憎まれ口をきくに違ひ無い。それに對して、自分は一言も返答が出來ないのだ。田原はすつかり悄氣てしまつた。しかも彼は、大阪の宿に一人つくねんとしてゐる三田を想ふと、直にも飛んで行つて逢ひたかつた。ふだんから書かう書かうと思ひながら、性來の筆不精で、返事も出さないでゐた用件なども、一時に頭に浮んで來た。三田の一本調子に怒つてゐる顏附が、いつそ懷しいものに思はれた。

「貴方御飯になさいませんか。」

「ああ」

妻に促されて始めて食臺に向つたが、不規則に飲み喰ひした元日の腹は空いてゐなかつた。

「何を考へてゐらつしやるの、三田さんの事？」

妻は目元に笑を含ませて訊いた。

「さうよ。屹度三田さんの事を考へてらつしやるのよ。貴方は隨分非道い事を云はれても、不思

議に三田さんがお好きなんですね。」

「ううむ、さうでもないさ。」

あいまいな返事をしたが、あまり適切な事をいふ妻の言葉が意地悪のやうに聞えた。

「いいぢやありませんか、明日(あした)行つてあげれば。どうせあの方の事だから、今晩は何処かで飲んでるでしよ。」

「茅野が一緒かもしれないな。」

さう想ふと、田原は一しほ三田に逢ひ度かつた。

「あいつもなかなかいいとこがあるよ。」

直ぐにも家を出て、大阪迄行かうかとさへ考へたが、それも妻の手前羞しかつた。言葉数の少ない女の子が、茶碗の中につつこんでは飯粒をかき込んで居る顔をあげて、時々父親の方を見るむつつりしたその顔さへ、何となくひけ目を感じさせるやうであつた。

「ああ疲れた疲れた。」

箸を置くと、田原はわざと欠伸をして、そのまま食臺の下に、頭を抱へて横になつた。

「貴方そんなところで風邪を引きますよ。」

妻にたしなめられたけれど、默つて目をつぶつて居た。

「爲樣のない方。」

さう云ひながらも、妻は炬燵を持つて來て、柔かに蒲團をかけた。ぽかぽかとあつたまる火のぬくみに、三田の事をおもふ氣力もなく、彼はほんとに寢てしまつた。

朝早く三田は目をさました。暫時の間、障子の外の硝子戸のがたがた鳴る風の氣配を聞いてゐたが、床の中に居るのもつまらなくなつて起きた。

「お早う。よう寢られましたか。」

隣室を掃除してゐた女中が聲をかけたが、三田は返事をするのも面倒臭かつた。顏を洗つて部屋へ戻ると、直にお膳が出て來た。

「昨夜はほんまに面白うおましたなあ。」

「僕はちつとも面白い事おまへんでしたぜ。いく度やつても負けるんだからね。」

正月の事で、客の無いのを幸に、宿の娘や女中達が、遊びに來てゐる親類の子供達と、雙六や歌留多をする仲間に、彼もたうとう引込まれたのだ。晩酌に飲んだ少しの酒が空腹に廻つて、存

外上機嫌で騒いだけれど、今朝になつて見ると馬鹿々々しかつた。

「今晩も亦やりまほか。」

「やりまほ。」

出たらめな返事をして、膳をさげて行く女中を見送つた。なあんだ、大阪くんだり迄、宿屋の女中のお相手に來たのかといふやうな不平が欠伸と一緒に出て來た。

昨日は如何したのかしらないが、今日は茅野も來るに違ひ無い。殊に田原は、あの名刺を見た筈だから、早くからやつて來るに違ひ無いと、彼は心待に待つて居た。

「三田さん、おひるはどないしましよ。」

女中がさう云つてききに來た頃は、三田は苛々して坐つてゐられない程だつた。

「いらない。」

ぶつきら棒に答へて、速かに女中との交渉を斷たうとした。

「茅野さんも田原さんもお見えになりまへんな。」

相手は慰めるつもりで云つたのだけれど、三田には手痛く響く言葉だつた。

「え、今此方(こつち)から出かけようと思つてゐたのさ。」

彼は額に立皺を寄せながら立上つて、壁にかかつてゐる外套をとつた。

「お出かけだつか。」

女中は狼狽しく擦りぬけてあたふた階下に下りて行つた。玄關に出ると下駄が揃へてあつた。

「今晩は皆さんとつらつておいでやすな。又雙六でまかして、白粉を塗つてあげまつさ。」

をかしくも無い事を高聲で笑ふ女中に送られて、からつ風の吹く往來に出た。川の中にもさざ波の騷ぐ、心の落つかない日で、馬糞まじりの砂塵が、容赦も無く渦巻いて來た。わざわざ昨日は行つてやつたのだから、飛んで來るに違ひ無いと思つた田原が、午近く迄來ないのを憎めば憎む程、三田には茅野が戀しいものになつた。矢張り向ふから來べき筈だと思ふ不平はあつたけれど、それよりも友達の顏を見度いと思ふ方が強かつた。彼は躊躇しずに電車に乘つた。

住吉の松原には風が鳴つて、下駄に踏まれて崩れる砂は、さらさらと亂れて飛んだ。大阪に居た頃、うるさがられはしないかと思ふ程度々來た門を足早に通つた。

「御免下さい。」

「はい。」

襖のかげで細君の聲がした。

「まあお珍しい、三田さんですか。」
奇麗な目をした茅野の妻は、その奇麗な目を見張つて驚いた。
「さあどうぞお上り下さい。」
勸められる儘に、何の疑もなく三田は上り込んだ。
「ヤア、三田さんだ、三田さんだ。」
腕白の男の子が、奧から馳出して來て、三田の胸に飛付いた。
「菜ちやん、三田さんが來たよ。」
母親と挨拶してゐる三田の背中に馬乘になつて、妹を呼んだ。直に臺所の方から、慈姑の取手のやうな頭を振り立てて、顏中おできだらけの女の子が出て來た。
「三田さん。」
その子も歡聲をあげながら抱きついて、三田の懷に顏を埋めた。
「茅野さんはお留守ですか。」
「オヤ、御存じありませんの。」
細君の吃驚した樣子が、三田を一層驚かせた。

「電報は御覽になりませんでしたの。」
「電報つて？」
「實は東京の茅野の母が惡いといふしらせが參りましたので、大晦日の晩汽車で東京へ參りました。貴方とお約束があるからつて心配しまして、自分で電報をうちに參りましたのですが。」
意外だつたといふ風で、細君は一部始終を話してきかせた。
「それでは電報は屆きませんでしたかしら。」
幾度も眉を寄せて、氣の毒がられると、三田は愈々ゐたたまらなかつた。
「をかしなものですね、汽車は何處かで擦れ違つたのですから。もつとも私はぐうぐう寢てゐましたが。」
三田は冗談を云つて笑つたが、その笑は自分ながら、とつてつけたやうに聞えた。
「三田さん、遊ばうよう。」
「何して？」
「何かしてさ。」
子供は兩方から手を取つて迫つた。

「ね、遊ばない、三田さんたら。」
「遊ぶよ。だから何して遊ばうつていふんぢやないか。」
「ぢやあね、紙のお相撲しよう。」
男の子は馳出して行つて、小箱を抱へて來た。蓋をあけると、中から澤山の相撲取の繪をかいた切抜が出て來た。
「いいかい、これが土俵だよ。さうしてねこいつとこいつと斯う取組ませるの。」
その相撲取を雙方から寄かゝるやうに立てゝ子供は疊を拳固で叩き始めた。
「三田さんも叩くんだよ。」
「かうか。」
三田も云はれる儘に疊を叩いた。
「ほうら東が勝つた。大錦は強いよ。」
子供は夢中になつて、いくつもある相撲取を、順々に取組ませるのであつた。茅野がこしらへてやつたのだといふ相撲は、かなり丹念に出來て居た。一々化粧褌に名前が書いてあつて、横綱大關などは強くする爲めに、一倍大きくこしらへてあつた。子供を喜ばせる爲めに、茅野が工夫

したおもちやさへ、その時は馬鹿々々しさの限りに思はれた。いい年齢をして、こんなものをこしらへてゐるのかと、恰も友達は、毎日そんな下らない事にかかはつてゐるかのやうに受取れた。
女の子は人なつつこく、縋りついて離れなかつた。つぶつぶ一面に腫物の出來てゐる顔を擦りつけて來るのが氣持が惡かつた。こんなうるさい子供達と遊ぶ爲めに、遙々來た自分なのかと思ふと、又しても額の皺が深くなつた。
「三田さあん、もつとしようよう。今度は栃木山と鳳ぢやあないか。」
男の子は、何時迄たつてもあきずに、疊を叩いた。
「又今度しよう。今日は御用があるからね。」
「御用なんて構ふもんか。」
「まあ、あんな事をいつて――けれどもまだよろしいぢやありませんか。」
細君も子供と一緒に、お愛想に引とめたけれど、三田は到底もゐたたまれなかつた。
「實は田原さんと約束がありますので。」
彼は思ひついたままを口にして座を立つた。
「どうもほんとに御氣の毒様でございました。」

まだ同じ事を繰返してゐる細君に別れて、三田は松原の道に出てほつとした。一分間も休ませずにひつついて來た子供のお相手を逃れた安心から、冷い風も氣持がよかつた。三田は又大阪へ戻る電車に乘つた。

恰度その時東京では、三田の新居を驚かすつもりの茅野が、母の入つてゐる病院の門を出たところだつた。元日の朝病院を見舞つたところ、豫期したよりも病人は元氣だつた。肝臓肥大症の手術の後、どうしたものか熱がとれなくて、殊に押つまつた暮には、その熱の出具合が面白くなかつた爲め、茅野を呼寄せる事にしたのだつたが、ひとつには久しぶりで、息子や孫達の顔が見度かつたのだ。

「オヤ、お前一人かえ。子供達もみんな一緒に來てくれるのかと思つたら。」

さぞかし苦しんでゐるだらうと思つた病人は、茅野の姿を見ると、枕から顔を上げて、存外元氣な聲で云つた。茅野は裏切られた心持がしたが、母の衰へを見なかつた嬉しさに涙ぐんだ。

「私はもつと惡いのかと思ひました。」

彼はその裏切られたと思ふ心持の方丈(だけ)を、口に出して云つた。

「そりやあね、四五日前はほんとに惡かつたのですよ。ちつとも熱が下らなくて、お腹は痛むし、又手術のやり直しでもしなければならないのかと思つてねえ……」

母は一生懸命で、病氣の惡かつた事を説明して、呼寄せられて不服がましい息子を納得させようと努めた。

茅野は病院でお雜煮を喰べた。人づきあひの廣い母を見舞がてらに御慶に來る人が澤山あつて、これが又久々で東京に出て來た茅野を珍しがつて、長々と喋つて行くのであつた。母にとつては、成人して口髭さへはやした末つ子が、遙々大阪から見舞に來てゐるといふ事が、何よりの自慢だつた。旅疲れで氣力のなくなつて居る茅野は、それからそれと盡きない話をしながら、母の枕元を離れる事が出來なかつた。その晩は兄の家に行つて泊るつもりだつたが、氣力がなくなつて、病院に泊つてしまつたのであつた。

幸ひ今日は、母も一層氣分がいいといふので愈々安心したが、矢張り相手が手放し度がらないままに愚圖々々して、晝の御飯も病院で喰べてしまつた。やうやく思ひ切つて、母には一寸出て來るといひ置いておもてに出たのだつた。途中で兄の家に寄つたが、廻禮に出かけて留守なので、暫時の間嫂と話をしてゐた。その間にも彼は三田の事を忘れなかつた。

「姉さんは三田君は知りませんかしら。あの小説を書く。あれが今度うちを持つたのですが、麻布の簞笥町つてのはどの邊でせう。」

「三田さん？　名前は知つてゐますがね――私麻布つてとこは、ちつとも行つた事がないのですよ。」

「さうですか。しかし行つて見れば直きわかるでせう。」

それを切つかけにして茅野は兄の家を辭した。四辻で赤い旗と靑い旗を振つて居る信號手に、電車の方向を敎はつて、彼は麻布に出かけた。知らない土地が喚起す輕い不安の中には、友達はさぞかし自分を待つてゐるだらうと思ふ樂しさが強かつた。氣短な三田の事だから、昨日自分が訊ねるに違ひ無いと思ひ込んで、待暮したに違ひ無い。彼の男の事だから、顏を合せても、さも怒つてゐるやうな素振りを見せるかもしれない。しかしそれは彼の男の本心ではないのだ。自分にはよくわかつて居る。茅野はそんな事を考へながら一人で微笑した。

やうやく探し出した粗末な新建の二階家の前に立つて、茅野は又をかしくなつた。何時迄たつても書生時代の腕白の面影の殘つて居る三田が、いかに兩親の家の方が手狹になつたからと云つて、家を持つのは似合はなかつた。夙の昔に家を持ち、妻を持ち、子供を持つた茅野は、その時、

いかにも見らしい心持で友達の事を想像した。
三田正太郎と、番地も何も書いてない名刺を貼付けてあるのも三田らしかつた。
「御主人は御宅ですか。」
茅野は、わざと、御主人といふ、いかにも三田にからかつてやるやうな心持のする言葉を口にして笑ひ度くなつた。
「どなた様でございますか、主人は旅行中でございますが。」
「旅行？　何處へ行きました。」
驚いて茅野は詰つた。
「それが何處ともおつしやいませんのですが、大晦日の日にお出かけで、四五日留守になるといふ事でございました。」
「四五日？　まさか大阪へ行つたんぢやありますまいね。」
云ひながら名刺を出した。
「私はかういふ者ですが、私の打つた電報は屆きませんでしたかしら。」
「電報は參りました。參りましたには參りましたが、もうお出かけになりました後で、どちらに

ゐらつしやるのかわかりませんものですから……」

女中は奥へ馳込んで、皺くちやになつた電報を持つて來て見せた。妙にねばりつ氣のある言葉で、しかも細々と廻りくどく、自分の手落ではない事を説明した。

「そいつは弱つたなあ。」

茅野は全く途方に暮れてしまつた。大阪へ行つた三田も困つてゐるだらう、田原はゐてくれるに違ひ無いが、それにしても彼の癇癪持は、又ぷんぷん怒つて八當りをして居るに違ひ無い。彼は暫時の間、あだに心配するばかりで佇んで居た。

「如何も爲方が無い。お歸りになつたらよろしく。」

茅野は力の拔けた氣持で往來に出た。直ぐにも大阪へ引返し度い、引返さなくては氣が濟まないと思つた。

日の暮の早い山の手の夕空を仰いで、その浮雲の向ふに、三田が所在なく佇んでゐるやうに想ひながら、目の下の町の、早くもきらめき初めた燈火の中へ足を向けた。

茅野の留守宅を訪れた三田が、大阪の町へ歸つて來たのは、恰もそのひともし頃であつた。昨

日も今日も友達を訪問して、二度ともすかを喰つた自分は、のめのめ宿屋へ歸られないもののやうに考へられた。わざわざ東京から、人の留守宅をたづねに來た自分だと、往來の人迄も嘲笑してゐるやうな氣がした。エ、今晩は一人で飮んでやれと、何かしら強烈な刺戟が欲しくなつて、宿屋近くを通り越して、新地のお茶屋の門をくぐつた。

「誰かとおもうたら三田さんやおまへんか。」

大丸髷の仲居は、仰山に後へ身を反して、吃驚した表情を見せた。

「その三田さんさ。」

彼は答へながら、さつさと上つてしまつた。

「貴方何時おいでやしたの。」

「昨日來たには來たのだが、約束しといた友達が一人も居ないので、どうして暮さうかと迷つてゐたんだ。」

「そんなんやつたら私とこで引とりまつさ。」

仲居はわざとらしく笑つたが、急に改つた顏をして、

「お目出度うございます。昨年中は毎度御贔負にあづかりまして……」

と馬鹿叮嚀に頭をさげて、年頭の辭を述べ出した。

酒が出て盃を手にしても、三田の心は浮かなかつた。顔馴染の無い藝者が並んで、自分達ばかり勝手なお喋りをしながら、つきだしの鯛煎餅やするめを、せつせと喰べてゐた。面白くも無い洒落を聞かされたり、自分なんかには到底もわからないお客の噂や、仲間うちの蔭口などを聞いてゐるうちに、愈々深く相手の無い寂しさを感じて來た。

「貴方、どないしやはりましてん、とうない沈んでてだんな。」

藝者は不思議さうに覗き込んだ。

「つまらないんだよ。」

その時三田は、又しても友達の事を考へてゐた。茅野は東京に行つて、自分に逢へるつもりで居たのださうだから、行違ひになつたと知つて、屹度がつかりしてゐるだらう。しかし田原は如何したんだらう、若しかすると留守中に、宿へ來たかも知れない――と思ふと、こんなところでつまらなく酒を飲んで居るのが、益々面白くなくなつて來た。眞直に宿へ歸ればよかつた、と彼は悔いた。

「おいおい、誰か僕の宿屋に電話をかけてくれないか。」

彼はその番號を教へて、果して留守中に田原が來たかどうかを確めさせた。

「姐ちやん、あて行つて來まつさ。」

狐のお面のやうに眞白く光つた顏の藝者がついでに空つぽのお銚子を持つて立上つた。

「あのなあ、その田原さんといふ方なあ、先刻にから貴方さんのおかへりを待つてゐやはりまんねと。」

「なに、田原が待つてゐるつて？」

思はずしらず勢よく立上つた。

「それぢやあ歸らう。」

「田原さんやつたら私かて逢はして欲いわ。」

「貴方歸らんとその方を呼んだらよろしうおまつしやろ。」

女達は口々に引とめた。

「さうか、それぢやあ直に來いつてさう云つてくれたまへ。」

三田は緊張した心持になつて、今にも元氣のいい友達の顏が、目の前に現はれるのを像想しながら盃をふくんだ。

朝のうちに三田の宿へ行かなければならないと思ひながら、田原は工場の職工達が、かはるがはる酒を飲みに來る相手になつてゐた。何かしら目の前に新しい事が起れば、それを振切つては行かれない性質の彼は、ふだんから可愛がつて居る職工達を捨てて置いて、家を出る氣にはなれなかつた。やうやく午後になつて、客の絶えた時、狼狽てて家を飛出した。

玄關に見送る妻は一本釘をさした。

「三田さんと御一緒だと、どうせ今晩は遲いのでせうね。」

「なあにそんなに遲くはならないつもりだ。」

「駄目ですよ。貴方は直き醉つてしまふんですもの。」

あんまり本當の事を云はれたので、田原は返事が出來なくて、そのまま歩き出したのだつた。

三田は屹度、額に深い皺を刻んで、苦り切つてゐるに違ひ無い。いきなり顏を見ると、遠慮會釋もなく、やつつけやあがるんだらう。田原の目には、友達の顏が憎らしい程はつきり見えて來た。

大阪に着くと、自動車を雇つて、土佐堀の宿屋へ急がせた。

「三田さんゐますか。」
田原は、それが癖になつてゐる附元氣で、音高く格子を開けた。
「田原さん、お久しうおまんな。」
顔馴染の女中が出て來て、年賀の祝詞を述べさうなので、彼は愈々せき込んでたたみかけた。
「三田さんはゐないの。留守かね。」
「三田さんだつか。三田さんは貴方さんとこへ行かはつたのと違ひまつか。」
「僕のとこへ？」
度外れに大きな聲を出してききかへした。
「それでなければ茅野さんのお宅だつしやろ。」
「フウム。」
田原は首を傾けて考へた。
「兎に角僕は待つて見よう。」
「そんならお上りやす。」
女中は彼を三田の部屋へ案内した。

若しも自分のところへ行つたのなら、彼は直に引かへして來るに違ひ無い。萬一茅野のところへ行つたにしても、彼は自分の來る事を豫想して歸つて來るだらう。うつかり後を追つて住吉迄行つて見たところで、かへつて行違ひになるかもしれないのだ。――しばらく待つのが得策だらうと考へた。机の上にある雜誌を讀みながら、田原は其處に待つてゐたのだ。

燈火がついて、縁先の空も暮れ、川の水も暗くなつたが、三田は歸つて來なかつた。幾度となく歸つてしまはうと思つたが、昨日自分をたづねてくれた三田に對して、今日は飽迄も待つて居るのが、自分の酬ゆべき友情だと考へた。遲くなつて歸つて來ても、此處に自分が居るのを見たら、彼は必ず感じるに違ひ無い。そんな事迄田原は考へてゐた。

「田原さん、貴方御退屈だつしやろ。」

女中は心配して、時々顏を出したけれど、彼は取合はないで雜誌を讀んでゐた。さうして三田からの電話の取つがれた時迄、辛抱強く動かないで、待つてゐたのだ。女中は大きな聲でよびかけながら、階下から馳上つて來た。

「さうか、それぢやあ直に行かう。百川だね。ようし、今晩は三田公を醉拂はして遊んでやるぞ。」

あんまり長い間つくねんとしてゐた自分の立場を見よくする爲めに、わざと景氣のいい事を云つて立上つた。

よそ目には元氣のいいくせに、その實非道く羞しがりの田原は、この年になる迄、一人ではお茶屋の門口を入れなかつた。お正月の事とて、門口に高張提灯を出し、定紋を染出した幔幕を張つたお茶屋の、軒並に並んでゐる新地に足を踏入れると、それが男だらうが女だらうが、ゆきあふ人の一人々々に、しげじげと顔を見られるやうな氣持がして、甚だ氣まりが惡かつた。

「御免。三田公ゐますか。」

氣まりの惡いのをまぎらす時、わざと突拍子も無い聲を出したり、心にもない惡ふざけをして、その場をごまかさうとするのが彼の癖だつた。

「先刻にからお待兼だつせ。」

こつちの高調子に應じた甲聲を出して、醉拂つた仲居が出て來た。

「田原さん、お久しう――あけましてお目出度う。」

「ヤア、お久しう。先づあけましてお目出度うございます。ええと、それからなんだつけな、舊冬中はいろいろだつたかしら。」

その仲居の顏に見覺えもなかつたが、さも知つてるやうな顏をして、わざとらしく、をかしみたつぷりでやつたつもりだつた。

二階の座敷では、三味線太鼓で、陽氣に騷いでゐて、舞妓の黃色い聲や、助平つたらしいお客の笑聲が聞えて來た。廊下で擦れ違ふ客も、藝者も、仲居も、どれもこれも醉拂つてゐて、その家中が酒にひたされて居るやうに思はれた。

一杯も酒を飮まないうちから、田原は醉つてしまつた。

「どうぞこちらへ。」

導かれるままに襖をあけて入ると、正面に床の間をしよつて、いやに悠然と坐つてゐる三田の苦い顏が見えた。奴さん、御機嫌斜めだなと思ふと、田原には、眞當面に相手の顏を見る事が出來なくなつた。折角遙々自分に逢ひに來たのに、必ず來ると云つた言葉を本氣に受けないで、出迎へにも行かず、わざわざうち迄來てくれれば留守だつたし、重ねがさね氣の毒な事をしたのも、みんな自分の落度だと、彼の心はしきりに責めた。

「イヨウ皆さん、あけましてお目出度う。」

彼はいきなり藝者達の方に向つて平身低頭した。さうして頭を持上ると、今度はてれかくしに、

目の前の食卓の上に三つ四つ、女達の飲みかけて置いた盃のあるのを、順々に素早く干した。

「酌をしてくりやれ。」

誰が飲んだのか、コップに半分ばかり冷水の殘つてゐるのを盃洗の中にあけると、彼は見覺えのある藝者の前に手を差延して、太い聲を出した。

「河内屋ア。」

とその藝者は酌をしながら云つたが、田原自身は左團次の聲色のつもりだつたのだ。

「オイオイ、此方には挨拶もしないのかい。」

壓服するやうな幅廣い聲で、澁い顏をしてゐた三田が云つた。田原の、とつてつけた振舞の一つ一つが、いかにもごまかしくさくて片腹痛かつた。なんといふ灰汁の拔けない人間だらう、柄にも無くはしやいでゐるのは、例のてれかくしなんだ。よせよせ、そんなてれかくしは通用しないぞと云つてやり度かつた。相手は自分に對してひけ目を感じてゐるのだと直感して、自分の優勢を確め度かつた。

田原は、しまつた又やられたなと思ふと、その拍子に手にしたコップの酒を仰いで飲んだ。

「見事々々。」

手をうつて藝者ははやしたけれど、強烈な酒の臭ひに鼻をつかれて、田原は見苦しく咳入つた。
「プツ、よせばいいのに、飲めもしないくせに。」
三田は、友達のあくどいごまかしに、ぴりぴりして、あからさまにつぶやいた。
「默れ默れ、默りをらう。」
咳入ると同時に全身に醉が廻つて、ほんとの高調子になつてしまつた。さうして、どうかして此の不手際をとりかへし、三田の機嫌を直してやらうと考へてゐた。それがかへつて、三田には苦々しい事だつた。
「馬鹿だねえ。此の男は羞しいものだから、てれかくしに騷いでゐるんだぜ。おきまりなんだ。」
「へええ、羞しい時に騷ぐのだつか。珍しいお人やなあ。」
年增の藝者は口をとんがらかして調子を合せた。
「威張るない三田公。こいつはねえ、おつかない面をして、小言ばかり云つてやあがるが、實は俺に惚れてるんだ。だから遙々東京からやつて來やあがつた。」
田原は、いふまいと思つて居たのだが、ついつい、友達が自分に逢ひに來てくれた事を感謝する心持を、それとなく示し度くなつて來た。

「嘘をつけ。こんな奴に惚れる奴があるもんか。」
もう出たらめはよせといふやうに、三田は話を中斷した。
「なんでえ、なんでえ、畜生。」
醉へば必ずいふ癖で、田原は駄々子らしく繰返した。
「なんでえ畜生、威張るない。」
「空威張はそつちの事ぢやあないか。」
「なんでえ、なんでえ。口惜しけりやあこれで飮んで見ろ。」
自分ながら脈絡の無い事を云つてるなと思ひながらも、田原には別にいふ事がなくなつたので、空のコツプを三田にさした。
「いやだよ、コツプなんかで飮んだつてうまくないや。」
三田は、先刻から飮んだ分量をおもひやつて斷つた。彼も充分醉つてゐた。
「ざまあみやがれ。弱卒め。」
田原は圖に乘つて、そのコツプに酒をつがせて、一息に飮んだが、今度も亦はげしくむせかへつた。

「コップ酒はかうして飲むんだ。」

彼は又しつつこく三田の鼻さきにつきつけた。少ししつこ過るかと思はないでもなかつたが。

「よし、そんな事はわけなしだ。」

三田はコップをグイと取ると、手酌でついで飲干した。

「こんなものさ。コップ酒はかうして飲むんだ。」

さう云つて田原にかへした。その飲振りのあざやかさに、田原は又してもやつつけられた氣持がして、如何にかして氣勢を回復したかつた。

「なんでえ、畜生――お酌だ、お酌だ。」

くすくす笑ひながら傍觀してゐた藝者達の方に、性懲もなく長い手を差延した。

「田原さん、貴方はもうやめにしときなはれ。」

「飲みつくらやつたらあかんわ、三田さんはタンクやし。」

女達はしきりにとめたが、止められれば止められる程、意地を張り度かつた。

「大丈夫だよ、なんでえ畜生。」

さういひながら、お銚子を持つてる藝者の手をつかんで引寄せた。

「あれえ。」
と口では云ひながら、藝者は馴れた手つきで酌をした。
「もうよせよ。馬鹿々々しい。」
三田は口では荒々しく云つたが、眉を寄せて心配した。自分のやうな大酒でなく、直に酔拂つてしまふ友達に、飲ませた後が心にかかつた。
「サ、そいつを此方に貸したまへ、僕が飲んでやらう。」
彼は手を延ばしてコップを奪ひ取らうとした。
「なんでえ畜生。」
田原はその手を振拂つたが、その勢にゆすぶれて、酒は波うつて胸に溢れた。
「あああ、こないにべべを濡らして。」
輕く舌うちしながら、年增の藝者は半巾(ハンケチ)を出して拭いてやらうとした。
「なんでえ、なんでえ。」
舌も廻らなくなつた口でつぶやきながら、田原はコップに口をつけて仰むいた。自分では、見事に飲んでやらうと思つたのだが、酒は大概膝の上にこぼれてしまつた。

「爲様がないなア。」

相手が醉拂ひ切つてしまつたので、何時の間にか自分の方が、介抱人になつてしまつた迷惑を感じながら、三田は憐れむやうな心持でつぶやいた。

「なんでえ、なんでえ、畜生。」

ぶつぶつ一人で云つてゐた田原は、ふらふらと立上らうとしたが、足がもつれて倒れてしまつた。

「なんでえ。」

ままにならない體(からだ)を、いつたんは起したが、

「ああもう目が見えない。」

と叫ぶと同時に、頭をかかへて横倒しに寢轉んでしまつた。直に鼾が聞えて來た。

「馬鹿な奴だなあ。」

とり殘された寂しさを感じながら、三田はまだ盃を放さなかつた。目の前に意氣地なく倒れてしまつた相手を見るとどうしても心からは憎めなかつた。自分などに比べて、邪氣の無い心持を持つてゐる友達が、寧ろ羨しかつた。

「ほんまに田原さんは面白いわ。」

と藝者達も、何時迄たつてもむつつりして、酒ばかり飲んでゐる三田よりは、はしやいで、騷いで、醉拂つて、寢てしまつた田原の方が、比べ物にならない程扱ひよかつたのだ。一人減り、二人減り、何時となくこつそりとぬけて行つて、藝者の數も少なくなつた。二階座敷の騷ぎも止んで、正月らしい早仕舞の町々の靜な氣分が、此の座敷にも忍び込んで來た。

「このまま寢かしとくと風邪を引くから、何かかけてやつてくれないか。」

三田は氣づかつてさし圖した。派手な友染の夜着を抱へて來て、仲居がそれを田原にかけた。その夜着の重たさに氣がついたのか、田原はむくむく起上つて、兩手を擴げて欠伸をしたが、どう思つたのか、いきなり立上つた。

「三田公、俺は歸るぞ、失敬。」

いふかと思ふと、ふらふらと部屋の外に出て行つた。どすんどすん其處いらの襖にぶつかる音がしたが、荒い足音は玄關に消えてしまつた。

「それぢやあ僕も歸る。」

三田も狼狽てて立つた。

「まだ早うおまんが。」
お愛想に聲をかけた者もあつたけれど、別段強ひて止めようともしなかつた。
「オイ、歸るなら一緒に歸らう。」
もう下駄を履いて、歩き出した田原の後から聲をかけたが、相手には聞えなかつたと見えて、返事もしずに行つてしまつた。
それを追かけて三田も出た。後の方で仲居の聲が、何か云つたらしかつたが、それには頓着しなかつた。五六間先を操人形の足で歩いて行く友達に追ついて、その肩を叩いた。
「どうした。しつかりしないか。」
田原は一寸ふり向いて、とろんこの目を見張つて三田の顔を見たが、何も云はなかつた。
「苦しいのか。」
三田は心配して、柔かに訊ねたが、矢張り返事はなかつた。
二人はお互に、足下がきまらないので、寄つたり離れたりしながら四辻へ出た。田原は北へ、三田は南へ行くからだだつた。
「大丈夫かい、僕は此方だ。左様なら。」

三田はさういつて左へ曲つた。

「三田公。」

後から田原が呼んだ。

「明日又逢はう。」

「よし、宿に來てくれるか。」

「行く。朝早く行くぞ。それから京都に行かう。島原のおいらんを見せてやら。」

夜更の町に響き渡る高聲で、存外はつきり云つたが、そのままつんのめるやうに歩き出した。

「大丈夫か。」

三田は心配して呼びかけた。人通りの絶えた町筋を、奴凧のやうにふらついて行く友達の、丈高い後姿の見えなくなる迄立ちつくした。晴れて高い星空を吹いて、冷たい風が白く流れてゐた。

午（ひる）近く迄三田は寢込んでしまつた。昨夜の酒が少しばかり頭に殘つてゐて、起上つた時は、一寸ふらついたが、晴れわたつた朝の空に、いつぱい漲つてゐる日光を見ると、急（たちま）ち氣分は清々した。

「昨晩はおたのしみ。」

とからかひながら、女中がお膳をつきつけた時は、流石に胸がむかむかしたが、無事にお茶漬を流し込んだ。

「今日は何處かへお出ましだつか。」

ときかれて、始めて彼は昨夜田原と京都行の約束をした事を思ひ出した。さうだ、もう直き田原が來るに違ひ無いと思つた。

「今日はね、田原さんと京都へ行くんだ。」

「へえ、よろしうおまつしやろな。」

女中に相槌をうたれると、友達と此の晴れた日に京都へ行くのが、一層樂しみになつて來た。硝子戸の外の青空を見ながら、今來るか今來るかと待つてゐた。

その日は東京の空も晴れてゐた。茅野は高臺の病院の一室で、母と話をしながら、窓から入つて來る日光に背中を溫めてゐた。まるで小春日のやうな日であつた。それからそれと聞きたがる母の質問に答へながら、自分達の暮しむきの事、妻子の健康の事、子供達がいかに悧巧であるかといふ事を繰返してゐるのが、張合ひの無い事に感じられて來た。若し大阪にゐたら、今日あた

りは三田を引張つて、溫泉場にでも行くか、それとも泊りがけで京都へでも行つたのになどと、とりとめもない考へにふけつてゐた。何時だつたか、三田が、一度は見度いと云つた島原の太夫の道中の事なども、はからず彼の頭腦に浮んで來た。藝者を呼んでも藝者扱をするのが嫌ひな三田は、太夫に側に坐られたら如何するだらうと想像すると、武骨な格好をしてゐる友達の樣子が、ありあり浮んで來て、彼は思はず微笑した。

「ほんとに此の次には、みんな連れて來ておくれ。賢ちやんも葉ちやんも見違へるやうになつてるでせうからねえ。」

母は又しても孫達の事をいひ出した。

「ええ、いたづらになりましたよ。」

外の事を考へてゐた茅野は、狼狽して返事をしたが、又かと思ふと、思はずも欠伸が出た。それにもかかはらず、彼も亦自分の家に遊び狂つてゐる子供の姿を想ひ起させられた。おもてに出てゐて、うちに歸ると、兩方から抱きついて來る二人の樣子を想像すると、今でも首筋に絡みつく柔かい手を感じるやうだつた。今日も終日母の枕元で、ろくに身動きもしないで坐つて居るのかと思ふと、彼は俄に大阪へ歸り度くなつた。母の容體が意外によかつた事も、わざわざ來

たのを馬鹿らしく思はせた程だつた。
「お母さん、私は今晩歸らうかと思つてるんです。」
幾度も躊躇した後で、彼はたうとう切出した。
「え、今晩？　私はもつとゆつくりしてゐてくれるのかと思つてゐたら……」
母の言葉は怨言(うらみごと)めいてゐた。
「實は少しひつかかつてる用事もありましてね――いづれ近いうちに、今度はうち中揃つて來ますよ。」
「ほんとにみんなで來てくれるの。」
「ええ、その頃はお母さんもすつかりよくなつてゐるでせうから。」
茅野は子供をすかすやうに、暖くなつたら、必ず妻子をつれて上京すると、繰返し繰返し約束した。やうやく母を納得させると、安心して一息したが、既に彼の目の前には、明日の朝大阪の宿で、三田の寢込(ねごみ)を驚かす計畫が躍つてゐた。
午後になつても、三田は只管友達の來るのを待ちながら、苛々(いらいら)して、宿の二階に坐つてゐた。

あれ程固く約束して置きながら、一體田原は如何したのだ、又出たらめを云つたのかしらと考へると、昨夜の田原の振舞が、一々癇癪の種だつた。なんだあの態は、座敷に入つて來ても、自分を出迎へもしなかつた氣まりの惡さから、とつてつけたをかしみでお座を持たうとしてゐるのが見え透いてゐた。かんじんの此方には、遂々一言も眞面目な口はきかないで、自分の工場の監督を採用する用件なんかも、當然返事をしなければ、ならないのに、これつぱかしの挨拶もなく、飲めもしない酒を飲んで、急ち醉拂つてぶつ倒れたのだ。もうあんな奴とはつきあつてやらないと、三田は大きな聲で歌でもうたはなければ、此のむしやくしやのやり場がないと思つた。そのくせ矢張り、今來るか今來るかと待つてゐた。

部屋の中には、もう西日がさして來た。幾度となく出して見る時計の針先が、人を馬鹿にしてゐるやうで小憎らしかつた。火の氣のなくなつた火鉢に噛りついて、彼は體のやり場に困つてゐた。

「三田さん三田さあん、お電話だつせ。」

梯子段の下から大きな聲で呼ばれて、彼は廊下に出た。

「田原さんからお電話だつせ。」

「よし來た。」
ばたばた馳出して電話室の方へ下りて行つた。
「どうしたんだ。今朝早くから待つてるんだぜ。」
受話器をとると直に怒鳴つた。
「もしもし、三田さんでゐらつしやいますか。」
細い金屬性の聲が三田を恐縮させた。しまつた、田原の女房だと思ふと、おもはずしらず汗が出て來た。
「宅に電話がございませんので、遲くなつて濟みませんが、昨晩歸つて參りましてから、少々發熱致しまして、折角でございますが、今日はお伴出來ませんので、どうぞ不惡……」
「御病氣ですつて？　餘程熱でも高いのですか。」
「ええたいした事もございませんが、九度少し越しまして、それが下りませんのです。それだもんですから、折角お誘ひ下さつたのですが、お伴出來兼ますので……」
「いゝえ、どう致しまして。毎度辭拂はせて濟みません。どうぞお大事に。」
一刻も早く切つてしまひたかつた。

「もしもし、それから病人が心配して居りますのは、貴方様は今日はお一人で京都へお出かけで御座いませうか。」
「さあ、どうするかわかりません。」
「まだ四五日はこちらの方にお出でゞございませうか。」
「それもわかりません。」
「まことに勝手な事を申して、をかしいのでございますが、若し今回はこれぎりお目にかかれないかもしれませんが、東京へお歸りになりましたら、澤庵のあさづけを送つて頂き度いと申して居ります……」
「あさ漬ですか。承知しました。」
三田は荒々しく答へて電話を切つた。
馬鹿にしてゐやあがると思ふと、一時に血が頭に上つて來た。だからコップ酒なんか飲むなと云つたんだ。それなのに、あんなにぐでぐでに醉拂やあがつて――彼は又しても昨夜の田原の醉態を忌々しく思ひ出した。おまけに京都へ行かうと云ひ出したのは田原自身なのに、今の細君の言葉では、いかにも此方から誘つたやうな事になつてゐる。彼の男は女房の手前、そんな風に話

をしたんだな、と考へると、今の電話で、誘つたのは貴方の御亭主ですよと、云つてやらなかつたのが残念で堪らなかつた。なんのこつた、あさ漬を送れとは、三十九度の熱に惱んでゐるといふ病人のそれがせりふか。餘りの事に、三田は額の皺を深くして苦笑した。

彼は口に出してつぶやいて、手を叩いて女中を呼んだ。

「馬鹿々々しい、東京へ歸つちまはう。」

田原は惡感に震へながら、吐いて吐いて吐きつくした後の、疲れた體を床の中に埋めて、電話をかけに行つた妻の歸つて來るのを待ちながら、つくづく自分の意志の弱いのがいやになつた。三田に逢つたら、眞面目に話し度い事が澤山あつたのだが、つまらないその場限りのてれかくしから、しまひには調子に乘り過ぎて、飮めもしない酒に前後もわからなくなつてしまつた。四辻の角で別れる時、京都へゆく約束をしたの丈は、妙にはつきり覺えてゐるが、外の事は何もわからない。電車に乘ると直に、密閉した車内の空氣に胸を壓されて、急ち吐氣を催した。我慢しようと思ふ腹の底から、二度三度口元迄逆行して來たのを堪へたが、遂に窓をあけて吐いた。車掌が來て、何かぶつぶつ云ひながら、首を引込めさせたが、又暫時すると吐き度くなつた。しまひ

には到底も我慢が出來なくなつて、何處だかわからないが、途中の驛で降りて、停留場のかげの畑で吐いた。冷たい夜の風が吹いて通る度に、少しづつ正氣に返る氣持だつたが、もう大丈夫だと思つて電車に乘ると、又しても酸つぱい液が鼻をついて來た。何處かの松林の中で、松の木の幹に體を支へながら吐いてゐた自分の姿がおもひ出される。暗い梢を透いて、星がきらきら光つてゐたつけ、それから後は、どうなつたのか考へ出せない。又更に電車に乘つたのか、その儘遠い夜道を歩いたのか、どつちだかわからない、氣の付いた時は、自分の家で惡感に震へながら寢てゐたのだ、妻が枕元に坐つてゐて、朝の光が障子にさしてゐた。子供が出たらめに彈くオルガンに合せてうたふ歌の聲が、隣の室で聞えた。

「只今。」

さう云つて妻が戻つて來た。

「どうしたい、三田公は怒つてゐやあしなかつたか。」

「どうなんでせう、私にはあの方は、年中怒つてるやうに思はれるんですもの。」

妻は別段三田の事なんか氣にもしないで云つたが、田原には氣がかりな事だつた。

「あさ漬の事もさう云つたのかい。」

「ええ、承知しましたつて。」

よせばよかつた、そんな事迄云はせなくてもよかつたと、田原は悔いた。屹度三田は怒つてゐるに違ひ無く、その怒つてゐる三田に、思ひもかけない事を云つて、吹出させてやらう、と彼は考へて、先刻は、あさ漬の事を妻に云はせたのだつた。そんな冗談で、少しでも三田に對して濟まないと思ふ心持を、樂にしようと思つたのだ。けれども、今になつて考へて見ると、そんな事を云つた爲めに、一層三田の氣持を惡くしやあしなかつたかしら。彼は頭から夜着をかぶつて、すつぽかされて宿の二階に、癇癪筋を立てながら、立つたり坐つたりしてゐる三田の姿を想像した。どうしたものか、その三田の姿さへ心寂しくおもはれた。

その日も遂々暮れてしまつた。枯柳の枝にかすかに鳴る程の風の出た銀座の町を、茅野は子供のお土産を買ひ集めながら歩いてゐた。黃昏の微光の間の極く短い冬の日は、見る間に暗い夜になつて、はなやかな灯の町は、水底のやうな氣持がした。詩人らしい感傷的な氣持を失はない茅野は、何となく涙ぐましく、兩手に餘るおもちやを抱へ、家に待つ妻や子や、今頃は何處で何をしてゐるかわからない大阪の三田の事を考へながら、東京驛へ急いだ。

恰度その頃三田も宿屋を出た。女房も女中達も、突然歸るといひ出した彼の言葉に驚いて引留めたが、どうしても歸ると云つてきかなかつた。乘物の嫌ひな彼は、例の通り旅鞄をぶらさげて歩いた。昨日にもまして冴えかへつた冬空に一つ一つの數を増して輝き始めた星の方に、何かしら心を引かれてゆく氣持で、彼は一人を寂しく感じた。

「いつたい自分は何をしに大阪に來たんだ。」

と思ひかへして苦笑したが、愈々東京へ歸るとなると、それ程腹も立たなかつた。それよりも東京に行つたら茅野に逢はうと考へると、樂しみだつた。病氣の母を看護してゐる友達の姿が懷しく想像された。同時に又、妻に看護されて寢てゐる田原の事も、まざまざと想ひ浮べる事が出來た。あの弱い男に酒を飲ませたのは、自分の所業だつたとしか考へられなくなつて來た。無理にもコップ酒なんかやめさせるのが、自分の役目だと思ふと、友達に對しても、その友達の妻に對しても、申譯の無い心持に責められた。さうだ、東京に歸つたら、直ぐにあさ漬を送つてやらうと思ふと、そんな些細な事でも、友達を慰める事が出來るやうに思はれて微笑まれた。彼は珍しく靜かな心持になつて、夜行の汽車に乘つた。（大正九年三月十四日）

祭の日

晝

六月十七日はバンカア・ヒルの激戰の記念日だつた。西部の方から來てゐる同宿の二人の亞米利加の學生に誘はれて、午後から下宿を出た。

晴切つた夏の空は、重苦しく澱んでゐた。港に近い場末の町は、軒毎に國旗を掲げ、亭主も、女房も、息子も、娘も、子供達も、何時もよりは小ざつぱりした服裝(みなり)をして、何かしらおちつかない、祭日の心持を全身にあらはして、往來を群り歩いた。男はみんな酒氣を帶びてゐた。軍港の事だから、水夫達は醉拂つて、ゆきずりの女に戲れた。ふだんは帽子をかぶつた事もない貧しい娘達も、今日は大きなリボンを結んで、おない年位の友達と、肩と肩とに手を置きながら、わざと人ごみを突切つては、からかはれるのが嬉しさうだつた。海に臨む岡の上では、しきりに花火が上つた。

英吉利の兵士が死守するのを九箇月の間包圍して、遂に陷れたといふ古戰場は、六月の太陽を浴びて輝いてゐた。岡の芝生には屋臺店が並んで、菓子、果物、冷氷菓(アイスクリイム)、曹達水などを賣つてゐた。それを取圍んで、子供達は手々(てんで)に癇癪玉を握つては、石に叩きつけて脅しあつた。喇叭を吹く者もある。笛を吹く者もある。太鼓を叩く者もある。若い男女が抱合つて、岡の斜面を踊りながら、上つたり下つたりして居るのもあつた。

頂(いただき)には花崗石の方尖塔(オベリスク)が聳え、岡を廻(めぐ)る家々の屋根の向ふには、光り輝く海が見えた。

見馴ない日本人が、二人の學生に挾まれて、馴々しく談笑しながら歩き廻つてゐるのを、人々は遠慮會釋も無く、小癪な奴だといふ目附をして、見かへり、見送つた。

「日本奴(チヤツプ)。」

忌々(いまいま)しさうにつぶやきながら、嚙烟草(かみたばこ)の赤黑い唾に惡意を含めて、目の前の土に吐きつけて行く者もあつた。

「五仙(セント)頂戴、遊んでやるよ。」

色氣付いた小娘が、二三人かたまつて、節をつけてはやしながら行くのもあつた。

誰の目にも、顏の黄色い、ちんちくりんの日本人を、輕蔑する色が、意地惡く働いてゐた。誰

の態度にも、からかはれて口惜しければ、むかつて來いといふ、優者の滿足が現はれてゐた。肩身の狹い寂しい心持と、向つてもかなはない敵に對する憤に疲れて、二人の友達の後から、初夏の午後の日も傾きかけた岡を下つた。

町の賑はひは一層はげしくなつた。軍樂隊を先頭に、銃をかついだ兵隊、水兵、少年軍團の行列が通る。往來の兩側に並んでゐる見物は、一齊に拍手し、家々の二階三階の窓からは、女達が半巾（ハンケチ）を振つて歡迎した。行列の中の者も、彌次馬も、みんな醉拂つてゐた。兵士は銃をかついだまま、若い女と見ると、卑猥な事を云つてからかひ、女の方でも、負けず劣らず罵り返した。喇叭を吹く者、口笛を吹く者、メガホンの聲——あつちでもこつちでも、爆竹の音のあがる度に、子供と犬が馳出した。仰げば青い空だが、群衆の中に漂ふものは、塵埃（ほこり）と酒精（アルコオル）と汗の臭であつた。

歩き廻つてゐるうちに、其處此處の酒場（バア）で立飲をした麥酒（ビイル）の醉は、祭日の浮々した心持に誘つて行つた。故鄕の遠い、不如意勝な下宿の生活に、何時（いつ）となく鬱屈してゐる、遣場（やりば）もなければ、あても無い若者の氣力は、何でも構は無い、新しい刺戟を求めて、全身をあげてぶつかり度い氣持になり切つてしまつた。運動家のクラアクは酒氣の出た紅い額の汗を拭きながら、太い手で自分の腕をつかんで、引擦るやうに急げば、もう一人のセイヤアは、遠ざかつて行く軍樂隊の行進

曲に合せて、口笛を吹きながら歩いた。

「何處へ行く。」

「何處でもいいさ。なんでも人間の出さかるところへ行つて見よう。」

クラアクは答へながら、醉拂つた一群の水兵が、往來の若い娘達を誘つて、騒いで行く後から、横町へ入つて行つた。

酒場、料理屋、藥屋、煙草屋、水菓子屋などの並んでゐる汚ならしい横町だつたが、人出は馬鹿に多かつた。その群衆を押分けて行くと、思ひもかけない空地に出た。濕地らしい廣場の、斑に草のはえた中に、假造りの小屋がけをして、見世物、射的、玉ころがしなどが、賑かに客を呼んでゐるのであつた。

「こいつは面白い。」

學生は勢付いて、力強い腕を空に振つて叫んだ。

喇叭の音ばかり際立つて高く響く安音樂や、古び傷ついた蓄音器の入りまじる騒々しさに、罵りわめく醉漢や、笑ひ騒ぐ女子供の聲は、あらゆるものに反響し、陽氣で間抜な騒音に、場末の祭らしい別天地を描き出してゐた。

「陶器破碎戲(せともののこはし)がある、やつて見ようぢやないか。」

「やらう、やらう。何でもいいから叩き壞せ。」

子供らしい歡喜の聲を擧げて、一隅の店をさして馳出した。

射的場と同じ店構へで、正面の壇の上には、いろいろの陶器が、いろいろの形に積重ねてあつた。天井から大皿を釣下(おろ)したのも、一際高い壇の上に、美々しい花模樣の大花瓶を置いたのもあつた。そいつに向つて、野球用の球を投げつけて、滅茶々々に叩き壞す遊戲なのだ。上手も下手も無い。誰がやつても出來る。ただ冷然と並んで居る陶器を割るばかりだ。風を切つて飛ぶ球に當つて碎けて、ちやららんと鳴るばかりだ。

「君もやつて見給へ。」

「やらう。」

三人は並んで立つて、球をつかんでは投げた。花瓶も皿も茶碗も、見る見るうちに、音高く破(こは)れて飛散した。

「愉快々々。」

額の汗を拭きながら、息を切らして叫んだ。それは全く癇癪の遣場だつた。何といふ事もなく

滿足しない胸の中が、奇麗さつぱりと晴わたる氣持がして、心地よく幾片の銀銭を拂つた。同時に又、肉體の運動に、血の廻りのよくなつた身內に湧かへる血氣は、もつと痛烈な、一層獸的な遊戲を欲求する衝動に驅られて來た。

「飮まうか。」

「飮まう。」

何に誘はれても拒み度くない心持が、同じ遊戲に結びつけられた友達のつきあひを、一層深くしたのであつた。

三人は、空地の草を踏んで歸らうとしたが、四五間行くと、思はず知らず、一齊に立止つた。自分は、身內の汗の冷たくなるのを覺えた。一瞬間、その場の光景は凄愴なものであつた。突當りの袋地の奧の黑塀から、黑奴の顏が、曝首のやうに現はれて居たのだ。蒼黑い額に西日を受けて、燻銀色に光つて居るのが、曾て自分の見聞した繪畫や物語の、殘虐な光景を、咄嗟の間に想起させたのだ。

「なんだらう。」

不思議に思つてつぶやいた時、目の前にかたまつてゐた一團の人の中から、流れるやうに球が

飛んで、黒奴の顔の直ぐ側の羽目板に、非道い音を立ててぶつかつた。どつとあがる人々の笑聲が續いた。

「なあんだ、黒奴に球をぶつけてゐるんだ。」

「痛快だね。やつて見ようぢやないか。」

二人は平氣な顔をして、面白さうに、その方に進んで行つたが、自分の心持は暗かつた。それが曝首でもなく、死刑の場所でもなかつた安心はあつたが、これも亦陶器を壞すのと同じ程度の遊戯だと知つた時は、憤懣の情に堪へなかつた。

荒削の厚板で出來た塀の上の方に、恰度首丈出る穴をあけて、たぶん臺にでも乘つて居るらしい黒奴の陰慘な顔は、人々の前に曝されてゐるのだ。それに對して、十五間ばかりの間隔を置いて、低い柵が出來てゐて、その手前から、球を投げつけるしくみになつてゐた。

「エ、ためしにやつてごらんなさい。球一個が十仙、十仙。」

柵の側に机を控へた、亞米利加人の興行師は、咽喉を涸らしてわめき立ててゐる。

「今のは惜しいところでしたぜ。もう一個おやんなさいな。」

醉どれの水兵に、球の入つてゐる籠を押つけて勸めた。

「よおし、今度こそは叩きつけるぞ。」

水兵はズボンのかくしから十仙玉を出して、球をつかむと、指に唾をつけて握りしめた。手が上つたと思ふと、黒奴は顔をかばつて頭を下げた。力任せに投げられた球は唸つて行つたが、狙ひはそれて、黒奴の頭の上の板に當つて落ちた。

「畜生ッ。」

危ない足を踏みしめて、醉漢は口惜しがつた。

「エ、球一個十仙。」

首をあげた黒奴は、興行師の眞似をして、からかひ面でわめいた後で、けろりとして舌を出した。見物は又一齊に笑つた。

「プッ、俺あ二弗半ばかり損しちやつた。」

水兵はかくしに突込んだ手を出して、掌に殘つてゐる銀貨を數へたが、ペッペッと忌々しさうに唾を吐き散らしながら、同伴の水兵達を促して行つてしまつた。

「いらつしやい、いらつしやい。しやあい、しやあい。」

客足が薄くなつたので、興行師は又あらん限りの聲で叫び出した。

「エ、一個が十仙、十仙。」
「ひとつやつて見るか。」
クラアクは邪氣の無い顏で、セイヤアを誘ひながら、球の入つてゐる籠に手を差延した。
「しやあい、しやあい。十仙、十仙。」
興行師は景氣付いて、空を仰いで聲を張つた。黑奴は疲れてゐるのだらう、蒼黑い顏をだらりとうなだれてゐたが、客が來たと見てしやんとして、につたり笑つた。鈍く濁つた瞳の色……。途端にクラアクの手を離れた球は風を切つた。きらきらと西日に輝いて一線を描いたが、見當違ひの板塀に當つて、地面に落ちた。黑奴は白い齒を見せて笑つた。
急ち第二の球が飛んだ。あつと思つた時、黑奴は僅かに首を左にそらした。危く耳をかすめた球は、又しても羽目を打つた。自分は全身に寒氣を感じた。
「ア、もう一寸だ。」
と見物の一人が、ため息をつくやうに、つぶやくのが聞えた。
「殘念。」
舌うちをしたと思ふと、第三の球を投げた。

「おつともう三寸。」
首を持上げた黑奴は、ぶつきら棒に、しかも充分惡意をこめて叫んだ。
「畜生ッ。」
手當り次第、續けさまに、クラアクは球を投げつけたが、呼吸が亂れてしまつて、狙はどうしても つかなかつた。
「しやあい、しやあい。一個が十仙、十仙。」
「一つ、二つ三つ——おい來た四つ。」
興行師のわめきたてる間々に、黑奴は冷然として嘲笑しながら、愈々投手をいら立たせるのであつた。
「待て、待て。今度は僕がやつて見よう。」
齒ぎしりをして口惜しがつてゐるクラアクの振あげた手をつかんで、セイヤアが云つた。彼は靜に柵の側に進んで、おちついて球を持つたが、野球の心得の無い彼の姿勢は、到底成功しさうには見えなかつた。
「さあさあ、狙をつけて。」

興行師も馬鹿にした調子で叫んだので、見物の娘達は、之に合せて笑つた。當のセイヤアも誘はれて、手を振上げたままで吹出してしまつたので、球は板塀迄も屆かずに、地面に落ちて轉がつた。又しても笑聲が高く起つた。

「もう一個おやんなさい。今度は屹度うまくいきますよ。」

興行師はいい機嫌で笑つてゐた。第二の球は、ふはふは飛んで行つたが、これは途方もない見當で、力無く羽目に當つて落ちた。黑奴はとりすました顏をして舌を出した。人々は愈々笑ひ崩れた。

「おい、君もやつて見ないか。野球はやつた事があるつて云つたぢやないか。」

友達は籠の中の球を鼻さきに突つけて勸めたが、自分は首を振つて拒んだ。自由平等を口にし、正義人道を唱へながら、黑奴に對して殘酷な遊戲をほしいままにする人間に對して、面白く思はなかつた。若しも此の塀の穴から首を出して居るのが白人だつたら、彼等は急ち人道問題を叫び出すに違ひ無い。自分なども、顏色の黄色い人種に生れた爲めに、兎角對等の人間扱ひはされない日頃の憤懣が、機會を得て內に燃えて來た。

「やつて見給へ。ひとつも當らないなんて口惜しいぢやないか。」

熱心に勸められたけれど、自分は承知しなかつた。友達といへども、此の野蠻な遊戯を興がる間は、憎む可きだと思つてゐた。

「おやんなさいな。一個が十仙ですぜ。」

興行師も、日本人と見て珍しさうに口を出した。あれは日本人だ、などといふささやきがゝ見物の間に聞えた。

「いやだ。」

明白に斷つて、自分は口を堅く結んだ。板塀から、のめのめと首を突出して居る黑奴と、同じ侮蔑を受けて居るやうな淡い反抗心と共に、屈辱をさへ感じたのである。

「それぢやあ、もう一度僕がやつて見よう。」

とクラアクが又前に出た。

「さあさあ、ようく狙をつけて。」

勢付いた興行師は、柵を叩いてはやした。

クラアクは身を捻つて投げたが、力が入り過ぎた爲めに、かへつて見當がはづれて、低い熱球は地面を擦つて、はずんで板塀に當つた。えぐれて飛んだ土塊(つちくれ)も、その塀をばらばら打つた。黑

奴は意地の悪い顏を突出して、白い齒を見せた。

口惜しがつて、又しても力の限り投げた球もはづれた。

「いらつしやい、いらつしやい。球一個が十仙、十仙。」

第三球も惜しい處でカアブして當らなかつた。

「しやい、しやあい。上衣をぬいだ、ぬいだ。」

興行師が圖に乘れば乘る程、クラアクはあせつて見當がつかなくなるのだつた。いくつも、いくつも、球は徒らに羽目を打つて、地面に落ちてころがつた。

「おつと惜しいとこ、惜しいとこ。」

黑奴は嘲弄をほしいままにして、一層投手をあがらせた。屈辱の身を恥ぢもしないで、到底自分は黑人だと、氣力も無く思ひあきらめて、ただその日の食糧を得る爲めに、殘忍な慰み物に甘んじてゐる洒々(しやあく)した面(つら)つきが小憎らしかつた。

「えゝい、もう一つやつつけろ。」

のぼせかへつたクラアクは、汗に顏を光らせて、血走つた眼をして、滅茶苦茶に投げた。

「いらつしやい、いらつしやい。しやい、しやあい。」

棒切で柵を叩いて、興行師は躍り上つた。何時の間にか、いつぱいの人だかりになつてしまつた。

「口惜しいなあ、もうこれつきりでやめるぞ。」

最後の一球を投じたが、これも亦板塀にはねかへされてしまつた。

「もう一個、もうひとつ。一個が十仙、十仙。」

さかんにはやし立てたが、クラアクは頭を振つて、蟇口から出した幾枚かの銀貨を渡した。

「もうおしまひかい、お若いの。」

板塀の眞中の黒奴の首は、皮肉な聲をかけて高々と笑つた。

「なんだと。」

いきなり引返したクラアクは、籠の中の球をとるが早いか、力任せに叩きつけたが、見當はづれに飛んでしまつた。

「おつと、失敗、又しても。」

黒奴はすましして、からかつた。

「おい君、是非やつてくれ。畜生め。」

クラアクは、いきなり自分の後から、ぐんぐん柵の前迄押して行つた。

「よせ、よせ。僕は駄目だよ。」

自分は赤面して拒んだ。

「ハロオ、チヤアリイ。」

いきなり黒奴は、挑戰的に聲をかけた。見物はどつと笑つた。どういふわけか、日本人を見れば誰を見てもヂヨンと呼び、支那人だとチヤアリイにしてしまふ此の國の慣習から、彼は自分を支那人と見たのであらう。眞白な歯をむき出して嘲笑した。自分は嚇として脅しに球に手をかけたが、はしたないと思つて躊躇した。

「しやい、しやあい。十仙、十仙。」

耳もとで興行師にはやしたてられたので、今更球を放す事も出來なくなつた。

「しやい、しやあい。十仙、十仙。」

眞似をして黒奴も叫んだ。愈々それは自分に反感を抱かせたが、しかも尚彼に球をぶつけようとは思はなかつた。わざと狙をそらして、自分は遂に球を投げた。眞直に流れて、板塀に當つて、ぽたりと落ちた。

「もひとつおいで、チン、チン、チャイナマン……」

黑奴は憚もなくうたつて、眞赤な舌を出して見せた。見物も興行師も一緒になつて笑つた。一度でやめる筈だつた自分も、いきなり第二の球をつかむと、力任せに叩きつけた。しまつた、當つたぞと悔いた時はもう遲かつた。黑奴が縮めた頭の天邊に、球は見事に命中した。何となく、いやな手堪へがして、不氣味な音が聞えたが、手を叩く者、笑ふ者、――人々は一齊にはやした。

「命中々々。」

友達は左右から自分の手をとつて、固く握つて振り立てた。

興行師の叫ぶ聲も、人々の止度もなく笑ふどよみにかき消されてしまつた。

「しやい、しやあい。エ、一個が十仙、十仙。」

自分は全身に冷汗を覺えて、顏をあげる事も出來なかつた。二枚の銀貨を其處に置くと、しつつこく勸められるのを振切つて立去らうとしたが、ふと振返つて見ると、黑奴は何か呼かけてゐるらしかつた。愈々こつちが立去らうとするのを見ると、もう商賣にはならないと思つたのだらう、がつくりと疲れた首をうつむけて、蒼黑い顏に皮肉な苦笑を浮べたまゝ、凝然と此方を見詰めて居た。沈みかけた夕日の中に、恨をのんで私刑に處されようとする罪人に似て、不氣味だつ

た。人々を押分けて廣場に出ると、後から聲をかけながら追かけて來る友達をふりむきもせずに、自分はさつさと歩き出した。

夜

黄昏の長い初夏の夕も暮れた。遠くの方に月の出の薄明の漂つてゐる空には、まだ打止まない花火の音も聞えたけれど、遊び疲れた人達は、家に歸つたのか、休息の場所を求めて立去つたのであらう。賑やか過ぎた後の町は、妙に寂しく靜まりかへつてしまつた。

吾々も疲れてゐた。さめかかつた酒の醉が、その疲勞を一層深く感じさせた。

「あゝお腹が空いた。」

一人が生欠伸を噛殺しながら云つた時、他の二人も誘はれて欠伸をした。一切の感興が失はれて、だるい肉體ばかりが殘つたのである。直に相談がまとまつて、兎に角腹をこしらへる事にした。

入つたのは町角の薄汚ない料理屋で、酒場を兼ねた家たつた。まがひ大理石の卓子の、しみだ

らけになつたのが、暗い電燈の下に並んでゐて、醉拂つた男や、あやしげな女が、てんでんに麥酒(ビイル)の大杯を並べてゐた。錢を入れると鳴り出す洋琴(ピアノ)が、騒々しく室中に反響してゐた。罵るやうな話聲、叫ぶやうな笑聲は、霧より深く立籠めた煙草の煙の底に、混亂して聞えてゐた。腐つた果物の匂に似た、下等な酒場に限る臭氣が鼻をついた。

「隨分非道(ひど)い處だね。」

「爲方(し)が無いや、僕は素寒貧(すかんぴん)さ。」

「あの黑奴にも隨分とられちやつた。馬鹿々々しい。」

一隅に割込んだ三人は、物珍しく四邊(あたり)を見廻しながら、又しても麥酒の杯を取つた。惡油の浮いてゐる肉汁(スウプ)をすすり、堅い肉片(きれ)を嚙んだ。

入りかはり立替り、客の出入は繁(しげ)かつたが、それよりも、向ふの卓子(テイブル)の女が、此方(こつち)の男に誘はれて來て飮んだり、此方の卓子の男が、向ふの女に出かけて行つて一緒になつてしまつたりするのが、一層室内を混亂させた。それが商賣の女は、飮かけの麥酒を目の前にして、あつちこつちと目を働かせながら、引かかりさうな男を物色してゐる。その多くがいい年をした婆さんで、中には息子のやうな水兵をつかまへて、頰邊(ほつぺた)を押付けてゐるのもあつた。水兵の中には、騒々しい

安音樂に合せて、男同志抱合つて踊り廻り、危ない足下を支へかねて床の上に倒れながら、まだ抱合つて轉がつてゐるのもあつた。餘りに荒つぽい其場の空氣が、時折入(はい)つて來る若い女には、とつつき場の無いものに思はれてか、まんまと相手を見付けて納まつてじまふのは、かへつて婆(ばゞあ)の方だつた。

「あの雛子(ひよつこ)は可哀さうに、隅つこにかたまつたきりだね。」

クラアクがさゝやきながら目くばせする方を見ると、吾々から餘り遠くない席に、二人の若い女が、相手欲しさうに坐つて居た。此方の三人が一齊に見たので、あまりはつきりと顔を合せた拍子に、女は二人とも目で笑つてうなづいた。クラアクもセイヤアも、若い學生に特有の、冒險的興味を感じて、面白さうに笑つた。

いつの間にか、其處いらの人々の頭を越えて、向ふの女と此方の卓子とは、目顔でからかひ始めた。他の醉拂に比べては、服裝もよく、何處かしら場違ひにおとなしく見える學生を、これも四邊(あたり)の亂暴に辟易してゐた先方は、しめたと思つてからかふのであつた。猶太(ユダヤ)らしい顔附の蓮葉女は、殆んどからつぽの杯をあげて、此方の健康を祝す爲めだといふおもはせぶりをして飲んだ。それに應じて、此方も同時に杯を口に觸れた。猶太の女は、何處かに初心(うぶ)らしいところの殘つて

ゐる同伴の小造の女の肩を叩いて、さもをかしさうに笑つたが、直に手をあげて、おいでおいでをして見せた。

そんな風な探索を入れて見ても、學生らしい冗談ばかりで、眞に受けないのを齒がゆさうに、顏をしかめて、腹の立つ眞似もしたが、直に又手をあげて、小器用に指を動かして招くのであつた。同じ事を幾度となく繰返してゐるうちに、氣の輕いクラアクは、その女のする通りに顏をしかめながら、手をあげて、おいでおいでをした。女は腹を抱へて笑つたが、笑ひ止んだと思ふと、いきなり立上つて、人々の間をぬけてやつて來た。

「今晩は。」

いきなり空椅子を引寄せて、吾々の間に割つて入つた。

「麥酒！」

腰を下すと直に給仕を呼んで、平氣な顏をして命じた。運ばれた五つの大杯は、五人の手にとられて、互に觸れて空になつた。

つばの廣い帽子の下に半分かくれてゐる顏に、眞白に白粉を塗り、頰紅をさした二人は、かなり醉つてゐた。面白くもない事を話して仰山に笑つた。

「貴方がた書生さんですか。」
「貴方も？」
一人がいふと、もう一人は珍しさうに、じろじろ見ながら自分に訊いた。
「お國は何處？　フイリツピンから來たの？」
「さうぢやないわよ。日本だわよ。」
自分達ばかり勝手に喋つて、あひ間あひ間にはからかひ面で、どぎまぎしてゐる學生の初心を笑ふのであつた。
「ね、もう一杯飲むわ——私お腹が空いてるのよ。」
何かおごれとせがむのだつたが、誰も取合はないので、又麥酒をいひつけて飲んだ。何時の間にか、クラアクもセイヤアも——自分も醉つてしまつた。四邊近所の物音も苦にならなくなつて、誰にも遠慮の無い心持が躍り出した。
「貴方達これから如何するの。」
「寄席に行かないこと。」
段々あつかましくなつて、耳のはたに口を寄せて、ささやきながら、ちよいちよい手を握る事

もあつた。

「だつて、そつちは二人で、此方は三人ぢやないか。」

セイヤアがからかふと、

「そんなら私達のお友達をもう一人つれて來るわ。」

と無雜作に答へて、猶太の方のが席を離れて、奥の方の卓子に、四五人かたまつて騷いでゐる男女の仲間の、一人の女の耳もとに囁りついて、暫時の間話をしてゐたが、忽ち其の女を誘つて來た。今迄のつれの男達が、怒つた聲で怒鳴つてゐたけれど、そんな事には頓着なく引張つて來てしまつた。

「この人私達の仲よし。」

さういつて紹介したのは、髮の毛も目も黑い伊太利の女だつた。ぴつたりと體にくつついた白い上衣の下に、血色のいゝ肥つた肌が透いて見えた。又しても麥酒の大杯が並んだ。

その時だ。クラアクは突然卓子を叩いて叫んだ。

「おい、あれは先刻の黑奴ぢやあないか。畜生、あいつだぜ。」

何時來てゐたのか、直ぐ近くの卓子を前に、悠然と腰掛けて、此方を見ながら、にやにや笑つ

てゐるのは、まぎれもなく先刻の黒奴だつた。

派手な格子縞の折目正しい服に、赤い襟飾を結んで、眞新しい夏帽子を横つちよにかぶつた姿は、板塀の眞中に、日ざかりの日光を浴びて、首を曝してゐた時とはうつて變つて得意さうだつた。麥酒に口を觸れながら、惡意のある微笑を含んで、こつちを見るのだつた。

「あいつはお金を持つてるよ。」

女達は見知つてゐるのだらう、後から後からと運ばれる料理を喰べてゐる黒奴の身の上を羨む樣子だつた。黒奴の方でも、ちらちらと顏をあげては、横目で女の方を睨んだり、意味ありさうに笑つて見せたりするのだつた。

「畜生、あいつの爲めに損しちやつたんだ。」

「まだ人を馬鹿にしてゐやあがる。」

二人は、晝間球をぶつけそこなつた口惜しさに、黒奴を憎らしく思ふのだつたが、自分にとつては、その頭に熱球を命中させた時のいやな記憶がひけ目になつて、彼の顏を正視するのは心がとがめた。友達の心持と、自分の心持との間には、黒奴の冷たい笑が、別樣の意味で横たはつてゐた。

黑奴は立上つて洋琴に錢を入れた。急ち鳴出す輕い舞踏曲に合せて、床の上に靴の踵で拍子をとりながら、彼はしげじげと女の方にながしめを送るのだつた。一の譜がおしまひになると、又立上つて錢を入れた。洋琴は絶間なく、騒々しく響き出した。

伊太利の女は立上つて、今しも洋琴のところから、舞踏の身ぶりで戻つて來た黑奴の手をとると、いきなり抱合つて、二三べん大きく輪を描いて踊りながら、そのまゝ黑奴の席に行つてしまつた。急ち其處で新しく麥酒の杯を擧げるのであつた。

「なんだあいつ、失敬な奴だ。」

クラアクは醉眼を見張つて睨んだが、黑奴は一人の女を奪つた幸福に笑ひ崩れてゐるのだつた。伊太利の女は、彼に寄添ひながら、無遠慮にその仲間の二人を手招し始めた。猶太の女もそれに應じて笑顔を見せると、黑奴も亦女と一緒に手招して呼ぶのだつた。

「馬鹿。」

セイヤアもいきりたつて、あからさまに黑奴に對して怒鳴つたが、相手はにやにや笑ふばかりで、少しも態度を改めなかつた。

伊太利の女は、彼にせびつて食物にありついた。厚ぼつたい肉片を口にほほばりながら、肉刀

を持つた儘の手で、此方の二人の女に誘をかけてゐる。黒奴も亦眞似をして、その通りに振舞ふと、遂々猶太の女も立上つた。
「行くのか、あんな奴のところに。」
クラアクは外聞も忘れた高聲で呼止めた。
「又直き歸つて來るわよ。」
ふりかへりながら云ひ捨てて、ついでに一人殘つてゐるのを手招した。それつきり黒奴のところに行くと、彼はいきなり抱寄せて、飲みかけの麥酒を女の口に持つて行き、女が一口つけたのを、さもうまさうに飲干した。さうして又給仕を呼んで、猶太の女の爲めにも、何か料理を注文するのだつた。
「どうしてやらう、あん畜生。」
二人は火酒のやうに怒つた。晝間もおひやらかされ、今もからかはれて居るのだと思ひ込んでゐるのだ。自分には、それが彼の意地の惡い復讐としか考へられなかつた。
「何をするんだ。よせッ。」
突然クラアクが怒鳴つたので、驚いて見ると、又しても黒奴は殘りの女を招いて、その女もお

尻を持上たところだつた。喰物にありついた猶太は、肉叉にさした馬鈴薯を見せびらかしながら、これも矢張り手招してゐた、さうして黒奴と一緒に、二人の女は聲を揃へて笑つた。

「およしなさいよ。默つとく方がいいわよ。」

もう一人の女は、怒つて立上らうとしたクラアクの肱をつかんで止めた。

「私が行つて、みんなつれて來るからさ。」

小造りな女は小走りに、向ふの卓子に出かけたが、二言三言その仲間とうなづきあふと、そのまゝ其處に空椅子を引張つて行つて腰かけてしまつた。

「麥酒！」

黒奴は勝ほこつた顏を見せながら、彼を取巻いた三人の女と共に、祝盃をあげたのだつた。一齊に大杯を干して卓子に置くと、黒奴は一人の女の首に手をかけて、引寄せて、接吻した。

「馬鹿ッ、獸物ッ。」

「張飛ばすぞ。」

二人の學生は椅子を離れると、猛然として黒奴に飛びかゝらうとしたが、女達に支へられてしまつた。

「いけない、いけない。」

「どうしたといふんだ。」

給仕が二三人、客まじりに馳付けて、雙方を押へだてた。

「あんまり失敬な眞似をしやあがるからさ。」

クラアクは人々に押戻されながら、息をはずませて憤慨した。

無理やりになだめられて、二人は又椅子にかけたが、今の今迄賑やかに、女まじりの卓子だつたのが俄に空漠として風の吹く心持がした。何としても一座の手前、其處にはゐたたまれなくなつた。

「行かう。」

といふかと思ふと、クラアクは荒々しく立上つた。

「行かう。」

セイヤアも應じて席を離れたが、それと見てやつて來た給仕に渡した勘定の釣銭を待つ間も、甚しく面ぶせに、長い時間に思はれた。

「お互に健康を祝さう。」

際どいところで、自分自身を嘲笑する諧謔を弄して、セイヤアは麥酒の殘つた杯を取上げた。

「馬鹿な。」

口では友達の冗談を叱りながら、クラアクも思はずしらず吹出してしまつて、是も杯を手にとつた。

「健康と幸福を祈る。」

自分も誘はれて立上つて、三人は目よりも高く捧げたのを、一息に飮干したが、飮干すと同時に、クラアクとセイヤアは、申合せたやうに、その大杯を床の上に叩きつけた。はげしい音を立てゝ、硝子の破片は散亂した。

「お釣錢で賠償だ。」

さういふと、兩方から自分の腕をつかんで、眞直にその酒場を出た。あつけにとられた滿座の者は誰一人聲も立てなかつた。

戸外に出ると、二人は聲を揃へて笑つた。海の風の通ふ高い空には、あかるい月がかかつてゐた。ふと、酒場の中から、又も陽氣な洋琴の音が聞えて來た。（大正九年三月二十二日）

水夫の家

「寒いねえ。」

「寒い。」

電車を降りた二人は、積つた雪を踏んで歩き出した。二人とも、兩手に鑵詰を抱へてゐた。

耶蘇降誕祭の前夜から降出した雪は、止んでは降り止んでは降り、降り續いて積もつた。自分達の住んでゐる學校町の、楡の並木をさしはさんだ兩側の家は、窓を殘して、すべて雪に覆はれた。窓ばかりが際立つて黑く見える。向側の家の窓の硝子に額をつけて、その家の足萎の娘は、何時も何時も、往來を見てゐるのであつた。橇が通る。厚ぼつたい外套に着ぶくれた男が乘つて居る。馬も寒さうに馳出して行く。暫時の間、その鈴の音が微かながら冴えて聞えるが、それも束の間で、又しても音もなく、たゞ降る雪の景色になつてしまふ。家の內でも物音がしない。自分も窓の硝子に額を押付けて、何となく心はかなく、往來を見て暮した。

昨日も終日そんな風に、力強く大地の上にのしかかる雪景色を、賴りなく眺め暮してしまつた。

夕方――突然扉を叩いて、

「郵便が來ましたよ。」

娘の甲高い聲が呼んだ。

「難有う。」

急いで窓際を離れて扉をあけると、階下に下りて行く娘の靴の音ばかり聞えて、姿はもう見えなかつた。閾の上に置いてある小包を手にとると重かつた。誰から來たものかわからなかつた。開いて見ると、鑵詰が四個出て來た。餅の入つたのが二つ、蒲鉾と澤庵だつた。けれども、誰が送つて呉れたのか、結局わからなかつた。破いて捨てた上包の油紙を引延して見たが、菊の花の切手の上の消印さへ、薄く汚れてゐてわからなかつた。母かしら、姉かしら、叔母かしら、友達かしら――机の上の四個の鑵を眺めて、遠い故郷の人のすべてが戀しい心持になつたが、それも何時の間にか寂しい苦笑に變つてしまつた。もう一晩寝ると正月かと思ふと、折角誰かゞ送つて呉れた心づくしさへ、どうにもならない下宿住居が寂しかつた。

元日といつても、平日と何の變りも無い今日も、机の上の鑵詰は、物も言はずに並んでゐた。雪は止んだけれど、青空も見えない雲の低い空の下に、ちいつぽけな自分はいぢけてゐた。

午後になつて、須田が遊びに來た。

「お目出度う。」
勢よく云ひながら外套を脱ぐと、
「素敵な物があるね、如何したの。」
直ぐに机の上の鑵詰に目をつけて訊いた。
「日本から來たのだが、誰が送つて呉れたのかわからないんだ。こんな物をくれたつてしやうがないぢやあないか。」
「しやうがない事があるもんか、お波さんの所へ持つて行つて、お雜煮をこしらへて貰はう。」
「お波さんて。」
自分は始めてお波さんの名を聞いたのだつた。
お波さんの家は港に近い處にあつて、主に米國船に乘組んで働いてゐる日本人の宿をしてゐるのださうだ。前身は新橋の藝者で、維新の三傑とうたはれた人の寵妾になつたが、主人の友達で、これも名高い政治家だつた人のお伴をして來る學生と夫婦になる約束をした。學生は、學校を卒業すると、お波さんの仕送りで渡米する事になつた。一年二年三年とたつうちに、男の態度が變つて來た事に氣が付いた。お波さんは遂に男を追かけて亞米利加に渡つた。ありつだけの貯蓄も、

男の爲めにつかつてしまひ、遙々異郷に來たのだつたが、來て見ると男には、目色の違つた妻が出來てゐた。自殺しそこなつたお波さんは、それ以來港の町で、日本人の世話をして暮す事になつた。永い間の事だから、澤山世話になつた者があつて、「水夫の叔母さん」といへば名高いといふのであつた。

「しかし氣の毒な人だねえ、男の方は出世してゐるんださうだぜ。」

須田は話終つて憤慨してゐた。

日が暮れてから、土地馴れた須田につれられて下宿を出た。地下鐵道で小一時間もかゝる場末の町に來て、凍てた往來の雪に滑りながら、二人は兩手に鑵詰を抱へて、「水夫の家」に急いだ。

眞暗な露路の澤山ある、泥棒やかどわかしの巣窟らしい、薄氣味の惡い町だつた。雪の道には燈火もささず、人通りもなかつた。

先に立つた須田は立止つて、一軒の家の扉を叩いた。暗い扉が開いて、人の姿が見えると同時に、醤油の煮詰つた匂が甘つたるく鼻をついた。

「今晩は。」

須田は聲をかけながら家の内に馳込んだ。

「須田さんですか。珍しいんですねえ。」

太い男のやうな聲で云つた。絞の浴衣を洋服の形に仕立たのを着たのがお波さんだつた。新橋の藝者で、維新の三傑の一人の寵妾だつたといふ事ばかりが、鮮に想像されて、その間に二十餘年の歳月が過ぎてゐる事なんか考へもしなかつた自分は、目の前の人を見て驚いた。

「お目出度う。今日はお雜煮をこしらへて貰はうと思つて友達を連れて來たんですよ。」

須田は云ひながら兩手に持つてゐた鑵詰をつき出した。

「へえゝ、これがおかちんですか。」

お波さんは珍しさうに手にとつて見た。

客室の食卓には、大皿の上に、數の子ごまめ煮豆などが、うづ高く盛上つてゐた。

「兎に角お正月ですからね、何もないけれど、こんな眞似事をして見たんですよ。――貴方がた勝手に召上つて下さい。」

お波さんは一隅の椅子にかけて、長烟管（きせる）で烟草をふかし始めた。

「生憎日本のお酒はなくなりましたが、あがるんなら麥酒（ビイル）はありますよ。」

「ぢやあ麥酒を下さいな。それからその鑵詰を開けて見て下さい。」

「お雜煮でもこしらへてあげませうか。」
烟管を置いて立上つて、臺所から鑵切を持つて來た。
戸外の寒さとはうつて變つて、室内は暖く、少しばかりの麥酒の醉さへ、急ち顔にあらはれて來た。
狹い客間の壁には、安物の日本の品物が、すき間も無く飾つてあつた。日の丸の旗、日章旗、明治天皇の寫眞額、文藝倶樂部の口繪、お雛樣、瀨戸物――さうして掛物が眞中に懸つてゐたが、それは石版刷の福澤先生の修身要領だつた。
「オヤオヤ、これは駄目ですよ。まるでからからに乾いちまつて。御覽なさい、こんなですもの。」
お波さんは鑵の中からつまみ出した餅のかたまりを、鑵切で叩いて見せたが、干乾びてねばり氣の無くなつたやつは、ぼろぼろになつて碎けて落ちた。蒲鉾も薄くかびが生えてゐた。澤庵丈が滿足だつたが、鹽からいその味は決して懷しいものではなかつた。
二階には下宿人が居るらしく、重たい靴を引擦る音が聞えたが、間も無く荒々しく階段を馳下りて臺所の方に行つた男があつた。客間の前を通る時、ふりかへつてそれとなくのぞいて行つた。

一瞬間の事ではあつたが、不氣味な人相の男らしく思はれた。

「權ちやんですか。御馳走はまだ此方にどつさりありますからね、そのつもりで澤山喰べて下さい。」

お波さんは聲をかけたが、男は返事もしなかつた。

「オヤオヤ權ちやん今日は御機嫌が惡いんだよ。」

お波さんは、その男にからかふやうにつぶやいて、

「いろんな人がゐるんですからね。」

と今度は自分達の方に云つた。

「さうでせうとも。」

須田は聲をひそめて、

「彼の人は？」

と目で奥の方をさして訊いた。

「あれはね、軍艦の砲手なんですよ。ちつとしつかりして呉れるといいんですけれど、醉拂ひで、からだらしが無いんですからね。」

お波さんは太い聲で、聞えよがしに答へた。
「オイオイ、餘計な事を云つちやあいけないぜ。」
荒々しい聲で奥の男が云つたと思ふと、何時の間にか、のつそりと此方の室に入つて來た。
「小母さん、お客様の前で醉拂ひ醉拂ひつて云はなくたつていいぢやないか。」
「だつてお前さんは醉拂ひぢやないか。御覽なそれを。」
お波さんが烟管でさしたのを見ると、だらりと下げた手に、麥酒の瓶と洋杯を持つてゐるのだつた。男は頬に切傷のある日に燒けた顔を崩して、子供のやうに笑ひ出した。荒々しい口はききながら、お波さんに甘つたれてゐるといふ風だつた。
「御免かうむります。ひとつお相手をさして貰ひませう。」
吾々に挨拶して席に着いた。
「どうもお正月といつても、こんなところに來てゐちやあ爲方がありませんね、お屠蘇ひとつ飮めないんだから。」
「けれども君なんぞは面白いでせう。軍艦に乘つてゐるんぢやないんですか。」
「面白い事もありませんよ。今更日本にも歸れないし、外にうまい仕事もないもんだからやつて

るだけでさ。」

さも面白くない世の中だといふ顔をして、額に深い皺の寄るのを振仰いで洋杯（コツプ）を干した。

「けれどもよく日本人を軍艦に乗せますねえ。」

自分も傍から口を出した。

「乘せますとも。支那人もゐれば黒坊（くろんぼ）もゐる、比律賓（ヒリツピン）もゐれば墨其西哥（メキシコ）もゐる、だらしのないものなんです。」

日本人に特有の、褊狹な愛國心から、その男はしきりに此の國の海軍を罵倒し始めた。軍艦ばかりは立派だが乘組は義勇も奉公の念も無いといふ事を、くどくどと繰返した。

「それぢやあ、いざ戰爭といふ時に役に立ちますまい。」

「そこなんです、吾々日本人と毛唐の違ふところは。」

待つてゐたとばかりに、彼は頬張つてゐた蒲鉾を呑込んで、

「私も最初は不思議に思つたんですが、奴等に云はせると、愈々戰となれば、誰だつて命は惜いから、自分の命を助かる爲めにも、一生懸命に働くに違ひないといふんです。どうです、呑氣なものでせう。」

彼は醉の出た赤い顔を崩して高々と笑つた。
「ところが吾々日本人には大和魂がありますからね。萬一日米戰爭とでもいふ事になりやあ、ふん、軍艦ぐるみ沈んでやるんだ。」
呂律が亂れて來ると共に、愈々雄辯になつて、昂然として卓を打つた。
「ね、例の大和魂つて奴が承知しませんや、――しかしね。」
急に聲を落して、何かあたりを憚るらしく、
「流石に砲手丈はおいそれとしては呉れませんぜ。」
彼は自分自身が砲手だといふ事を、此の時餘程得意さうだつた。
「一朝實戰になつて御覽なさいな、いくら軍艦が大きくたつて、砲手が敵方のものぢやあ如何にも爲樣がないや、ね。其處で砲手に採用する時は宣誓つてのをやるんです。神かけて誓ふんです。」
彼は何時の間にか、吾々の麥酒の瓶を逆さまにして滴も殘らないやうにしてしまつた。
「いいかね、たとへば僕がなつた時は、若しお前の國と此の國が戰爭する事になつたら、お前はミカドに對して大砲を打つ事が出來るかつていふんです。この時ばかりは僕も弱つた。何しろミ

カドですからね。日本人としてミカドに砲先を向けるつて事は、かりにも云へない事でせう。」
今もなほ其の時の困惑が殘つてゐるかのやうに、彼は額の皺を深くして暗い顏になつた。
「さあ、それが出來なければ砲手にはなれないぞつていやあがる。畜生、まゝよ如何ともなれと思つて、一朝事ある時は、ミカドにでも大砲をぶつぱなすと誓つちやつた。」
いかにもそれは一大事だつたといふやうに、此の時の彼の笑は、半分はその一大事を冒した得意と、半分は大それた事をした良心の苛責に引擦られた震へ聲であつた。
「だが怖ろしいもんです。その晩は夜中眠られませんでしたぜ。心がとがめるんだね。」
彼は洋杯に殘つた麥酒にかすれた咽喉を濡して嘆息した。
「しかし、安心して呉れ給へ。お互に日本人だ。いくら僕が墮落したつて、いざとなつて見ろ、あべこべに此の國の軍艦に砲口を向けて、片端から沈めてやるから。」
自分のした行爲を辯護して、やうやく安んじた樣子だつた。
「それでなくつてどうするもんか。其處が日本人の偉いところなんだからね。」
默つて片隅に引込んでゐたお波さんが聲をかけた。何時讀み始めてゐたのか、膝の上には和譯の聖書が載つてゐた。

男は益々得意になつて、それが此の國の海軍の眞相だと彼が信じるところ、彼自身の日本人としての覺悟——やがては日米戰爭の避け難い事迄止度も無く喋り出した。ただ長い間亞米利加をうろついてゐた經驗以外には何も無い男の、獨斷的な話振りには此方もやうやくもてあまして來た。お波さんはと見ると、大きな鼈甲緣の眼鏡をかけて、一心に聖書を讀んでゐるのだつた。

折柄、入口の扉が開いて靴の音が聞えたが、此方には入つて來ないで、梯子段を上る樣子だつた。

「誰？　何方です。」

お波さんは立上つて廊下に出て行つた。急に、甲高い——殆んど泣聲に近い程甲高い女の聲が聞えて來た。それに對して、おちつき拂つたお波さんの低く太い聲が、うけ答へしてゐたが、二の聲は爭ふやうに入まじつて、近付いて來たと思ふと直に、室内に入つて來た。發音の惡い英語で、しきりになだめてゐるお波さんを押のけて、大きな亞米利加女が泣聲でわめきながら、權ちやんの方に向つて行つた。

「駄目だよ、權ちやん。お前さんは留守だつて云つてやつたんだけれど、此の權幕だからね。——オオ痛い。人を力任せに突飛ばすんだもの。」

お波さんは肱のところを擦りながら、その癖事も無げに煙草を吹かし始めた。

一寸見ると長屋のおかみさんのやうでもあり、安賣女のやうにも見える女は、下等な言葉使ひで男に喰つてかかつた。權ちやんは苦り切つて、不機嫌な顏附でその女を睨んでゐるばかりだつた。

「困るねえ、お客さんの前で。第一みつともないぢやないか。お前さんがそんなものに手を出すからいけないんだよ。何とかして歸しておしまひな。」

お波さんの言葉が終るか終らない瞬間だつた。猛然と立上つた男は、いきなり女の横面を張飛した。

「來やあがれ。」

先方には通じない日本語で怒鳴りつけて、女の腕をつかんで引立てた。女は聲をあげて泣出した。泣きながらも喋りつゞけて、むせびながら罵り返した。

「來いつたら來い。」

男はもう一度力任せに引立てようとしたけれど、大兵の女は動かなかつた。殘忍な表情に變つて、忌々しさうに舌打したが、そのまゝ室を出て、女に聞えよがしに靴の音をさせながら二階に

上つて行つた。

「さ、お前さんも二階に行つて話をしておいで。」

お波さんは泣いじやくつてゐる大女の背中を抱へてなだめた。泣聲は一層高くなつた。だぶだぶした肉體は波を打ち、大型の帽子につけた紅い薔薇の花も激しく震へた。泣きながら切々に訴へるところによると、男は女の外套、指輪、時計などを質に置いて飲んでしまつたのらしい。それを取戻しに女は來たのだ。

「兎に角二階に行つて、さし向ひで話をつけておいで。」

お波さんは、子供のやうに泣いてゐる大女をすかしながら室の外に連れ出した。二抱へもあるのが、泣いじやくりながら行く後姿が、梯子段の方に消えると、直にお波さんは引返して來た。

「どうもおやかましくつて濟みませんでした。」

「一體どうしたんです。」

「どうしたつて。よくやるんですよ。貴方がたのやうな學生さん達には無い事なんですが。人間てものは爲方の無いものですからね。」

食卓の上の汚れ物を片附ながら、お波さんは此の世の中にあき果てたやうな物の言ひ方をした。

「須田さんは知つてるでせう。日本人會の留守番をしてゐたお繁さん——あの人が又御亭主を持つんですよ。」
「へえゝ、つい此間亭主が死んだばかりぢやないんですか。」
「えゝ、まだ一月とたちますまいね。しかも今晩が御結婚なんですつて。うちに居る人達も、みんなその爲めに會の方に行つてるんです。——私が知つてからでも、これで三人目ですからね。野田さんていふ人と一緒に西部から馳落してやつて來たんですが、その人に捨てられて、林さんとこに轉がり込む。その林さんは肺病で死んでしまふと、まだ息のあるうちから出來てたつていふんですが、今度は後藤さんてのと夫婦になるつていふんでせう——あゝいふ人は一生に何人御亭主を持つものかしら。」
お波さんの人の世に疲れてしまつた心持は愈々深く察せられるやうな氣持だつた。僅かばかりの日本人が、廣い大都の一隅に巣を喰つてゐる間にも、悲哀も歡樂も罪惡も存在するのだ。男と一緒に逃げたのが、間もなく男に逃げられ、新しい男とくつつくと、それには死なれてしまふ、又更に新しい相手を探して、一緒になるといふまだ見ない女の噂が、暫時の間自分の腦裡に渦巻いた。

「もう貴方がたも御飯になさいまし。ゆつくりしてらつしやつてもいいんですけれど、正直にいふと私のうちは學生さん達の來るところぢやありませんよ。隨分よくない人間もゐますからね。」

お波さんは權ちやんのゐた椅子にかけて、眞面目にいふのであつた。近々とあかりの下で見ると、淺黑い顏に寄る皺は、單に年齡の爲めばかりでなく、半生の苦勞が、不自然に深くしたもののやうに見えた。その爲めか、一體幾年位なのか、全く想像がつかなかつた。みすぼらしい服裝をして、髮も薄く、日にも燒け、あらゆる人生の疲勞の出た顏ながら、昔の偲ばれるところがあつた。よく整つた雜作で殊に目がよかつた。どうかした拍子に若い時は艶々と濡れた瞳だつたらうと思はれる事があつた。飾氣の無い言葉で、太い聲を出していふ物言ひにも、齒切れのいいところがあつた。幾人の放浪者、ならず者を世話して來た丈あつて、親切さうなしたしさもあつたが、とつつき場の無い程手強いところも見えた。

「麥酒もまだあるにはありますが、御飯を召上つて、學校の方にお歸りになるのが一番ですよ。」

さういひながら立上つて臺所に行つた。どうしても御飯を喰べて歸らなければならないやうな心持が自ら與へられるのだつた。

啗主のわからない鑵詰の澤庵で、お茶漬を喰べた箸を置いた頃、又新に客が入つて來た。三人

の男と一人の女だつた。

「今晩は。」

眞先に入つて來た女は、頭を包んだ頭巾をとつて、まんまるい赤ら顔を出した。三十近い下種な女で、派手な裾模様の日本服を着て、踵の高い靴を穿いてゐるので、見てゐる方が羞しかつた。

「ア、さうさう、お目出度うつていふんだつたわね、小母さん。」

「お目出度うはお繁さんの方でしよ。お嫁さんは如何でした。」

「お繁さんたらね、すまあして後藤さんと並んでるんでしよ、憎らしくなつちやつたね。林さんが病氣で寢てる頃から出來てやがつたくせに……」

「お前さん燒けるかい。」

お波さんは卓子の廻りの椅子を新來の者にゆづつて、又片隅に引込んで烟管をとり上げた。

「あゝあ、くたびれた。まるでまをとこの御祝儀によばれて行つたやうなものだぜ、馬鹿々々しい。」

續いて來た男は朱面のやうに醉つてゐた。長椅子の上に投出されたやうに仰向けに寢轉んで鼻唄をうたひ出した。

「羨しいのかい、田所さん。あんなお古が。」
裾模様の女がからかふと、
「あたりめえよ、お古だつて無えよりやあましだ。」
「いやになつちやふね。」
女は舌打して、靴の尖で床を蹴つたが、
「私お腹が空いてるんだよ。喰べてもいいだらう。」
といふと、直に手を出して、大皿の中の數の子をつまんで、二つ三つ續けさまに頬張つた。最後にやつて來たのは、足も眞當面には進まない程醉つた一人が、もう一人の素面の方の首に手をかけて、運ばれるやうに倒れ込んだ。
「爲様がないね、岡さんは又圖武六かい。」
お波さんは立上つて、床の上に倒れたまゝ起上らない醉拂ひを引立てて椅子に坐らせた。坐らされた方は、卓子の上につんのめるやうに肱を突いて、鼾をかいて眠つてしまつた。
「ひどい目に合はされちやつた。」
醉拂ひを運んで來た若い男は混血兒で、曲つた襟飾を直し、亂れた髮を氣にして撫上げながら、

裾模様の女の隣に腰かけた。
「譲次さん、随分暫時顔を見せなかつたね。又新しい女でもこしらへたのかい。」
「冗談いつてら。」
「冗談ぢやないよ。私はね、お繁さんが又御亭主を持つつていふから、今度こそはてつきり譲次さんだと思つたんだよ。」
「冗談いつてら。」
「だつてお前さんも、ちよいちよいお繁さんとこに入り込んでたつていふんぢやないの。」
「冗談いつてら。」
お波さんが、別段面白いといふ調子でもなくからかふのに、混血児はてれた顔をして、目のやり場に困つてゐた。
「へええ、さうかい、譲次さんも張りに行つた一人なの。いやな奴。」
裾模様の女は混血児の背中を、手非道くぶつた。
「へん、おさめさんも譲次にほの字かい。よく出來てやがらあ。」
長椅子に寢てゐた男は欠伸をしながら起上つた。

「あゝあ、相手の無いのは二階に行つて寢るかな。――權公ももう寢たのかしら。」

「權ちやんかい。權ちやんは大變さ。肥つたのが來て、泣いたりぶつたりの大騷ぎをやつてね……」

「それで出て行つたのかい。」

「出て行くもんかね、今頃は二階で仲直りさ。」

「ちえつ、馬鹿々々しいなあ。」

男は又欠伸をして、お波さんの方を見て苦笑した。

「矢張り田所さん丈だよ、手腕の無いのは。」

裾模様の女が敵討らしくいふと、

「爲方が無えや、獨身者は隣の室の物音でも聞きながら寢るとしよう。」

それをきつかけに、その男は二階に上つて行つた。

「私もそろそろ歸らなくちやあならないや。いやだなあ、電車の道中が隨分長いんだもの。」

「僕が途中迄送つて行かうか。」

「さう、難有いね。」

裾模様の女と混血兒は一緒に席を離れた。

「貴方がたはどちら。」

「その方達は大學の生徒さんですからね、方角違ひですよ。」

吾々が答へようとする横からお波さんが引取つて答へてしまつた。そんな連中と口をきくなといふやうな、吾々をかばつてくれる態度だつた。

「へええ、大學の生徒さん。偉いんですねえ。」

と女は出まかせをいひながら、頭巾を頭からかぶつた。

「それぢやあ左様なら。」

「左様なら。」

混血兒と一緒に室を出て行つた。

「譲次さん、途中で口説(くど)かれちやあいけないよ。」

お波さんが後から聲をかけると、

「冗談いつてら。」

といふ混血兒の聲が廊下で答へたが、直に表の扉の開いて閉(しま)る音がして、

「おゝ寒い。」
といふ女の聲が、かすかに往來から聞えて來た。
「僕達も歸らうか、大分遲くなつたぜ。」
「歸らう。――お波さん勘定してくれませんか。」
「よござんすよ。今日はお正月ですから。」
「だつて僕なんか始めて來たんですからね。」
「いゝんですよ。これが每年のしきたりなんです。」
お波さんは自分の言葉などは受附けないで、さつさと不用の皿小鉢を片附け始めた。
「それぢやあ二三日內に出直して來ませう。」
「およしなさい、こんなところには來るものぢやありません。ほんとですよ。」
とつつき場もなく首を振つて、お波さんは又、若い學生の來る場所ではないと繰返して云つた。
「さ、電車のなくならない內にお歸りなさい。」
とせき立てられて、
「それぢやあ御馳走になります。」

二人は叮嚀に頭を下げた。

雪にかこまれた家の夜更けはしんとして、卓子によつかゝつて眠つてゐる男の鼾は益々高くなつた。

「左様なら。」

「おやすみなさい。」

扉口に送り出したお波さんに別れを告げて、雪の夜道に出た。

「もう來ちやあいけませんよ。」

扉のすき間から首を出して見送るお波さんは後から聲をかけたが、ふりかへつた時は、重い扉はづつしりとしまつて、人の姿は見えなかつた。

「左様なら——おやすみ。」

自分は心の内でもう一度別れを告げて、先に立つて行く友達に追ついて歩き出した。自分などの知らなかつた世の中を見た好奇心は、寒さに震へながら、その數奇な世の中の方に誘はれてゆく心持になつてゐた。

友達は何を考へてゐるのか——二人とも外套の襟に顔を埋めて、凍りついた雪の上に、黒い影

を落して歩いた。（大正九年五月十八日）

隣室の犬

七月の太陽は、鐵と鐵とが擦れ合ひ、觸れ合つて、石と煉瓦に反響する、騷々しい紐育の上に燃えてゐた。

自動車、電車、馬車、自轉車が、しつきりなしにゆきかふ往來を、その車輪に誘はれて、忙しい足取りで、男も女も汗に濡れて歩いた。眞新しい夏帽子、雪白の女の着物――それもこれも、痛い程強烈に目を刺戟する光であつた。短い袴(スカアト)の下に、すんなりと延びた女の足の動く度に、薄い絹の靴下さへ、遍羅(べら)の背のやうに光を反射した。頭の上には高架鐵道が轟然と走り過ぎ、過ぎ去つた後迄、鐵路に殘る物凄い音響は、靑空の靑い空氣を震はせる。歩く度に靴の踵に手痛く抵抗する堅い敷石は、乾き切つて、むらむらと火氣を立上らせ、日に幾頭の馬車馬が、その上に昏倒した。その敷石の下からも、地下鐵道の急速力に通り過(すぎ)る響が、地震のやうに震へて來る。遙かに高い空を仰げば、數十階の建築物の幾百千の窓硝子(ガラス)が、生物のやうに日光を反射した。靜かなニユウ・イングランドの木立の多い學校町から來たばかりの志野(しつ)は、此暑氣と音響の大都の一隅に、呆然として汗に濡れひたつてゐた。

亞米利加に來てからの二年間を過した學校生活を終つて、これから歐羅巴へ渡らうと思つてゐたのだが、兎にも角にも此の國の代表的の都會を見て置き度いと考へたのだつた。充分の學資を持つてゐる身分ではなかつたから、彼は上町の大學の裏手のアパアトメントに、やうやくのおもひで、ささやかな一室を見出して住んだ。

照りつづく毎日を、志野は殆んどもてあました。部屋を貸す丈で、食事は一切世話をしないといふ約束だつたから、朝は町角のランチオンで濟まして、直に町中の圖書館に行く事にした。恰度其の頃から調べ始めた仕事があつたからでもあつたが、ひとつには、暑苦しく、狹苦しい室內に居るよりも、靜かに廣い閱覽室に電氣扇の廻つてゐる、圖書館の方が、遙かに居心地がよかつた爲めであつた。夕方迄其處で暮らして、夜も、貧しい懷を氣にしながら、何處かで食事をして歸る事が多かつた。汗に汚れた體を水風呂で洗つて、その儘室內の燈火を消し、素裸で寢臺の上にころがつたまゝ、ハドソンの向ふ岸の岡の上の、暮れて行く空を見てゐる事もあつた。裏の空地の蟲の音が、月の頃は殊に繁かつた。

時には暑さに負て、疲れ切つて、何をする氣力も無く、體を動かすのも億劫に思はれて、終日寢て居る事もあつた。風通しの悪い部屋のなかの空氣に、絶間無く汗が出るので、日に幾度とな

く水風呂を浴びた。たて切つた扉の外とは殆んど交渉も無く、宿の主婦ミセス・シヤアマンの顔を見る事さへ、全く無いと云つてもいい程だつた。

シヤアマンはひとり暮らしで、部屋貸をして生計をたてて居た。おもての方の二間は、年とつた夫婦者が借りて居た。裏手の部屋には、どんな人がゐるのか、彼はおしまひ迄知らなかつた。最初、志野が部屋を見に來た時空(あ)いてゐたのは、横手の、ハドソンに面した二間であつた。學校の近所には、學生相手の安い家があるに違ひ無いと目星をつけて來たのだつた。入口を入つて行くと、昇降機の中で居睡をしてゐた黑坊は、足音に驚いて立上つた。

「貸間を見に來たのだが、いい部屋が空いて居るかしら。」

「さうですねえ、ミセス・シヤアマンのところが空いてゐたかしら。」

黑坊は一人言らしくいひながら、日本人の珍しさをかくし切れないで、まじまじと見守りながら、昇降機を動かした。一階、二階、三階、四階、五階目で止つた。

「難有(ありがた)う。此の突當りがミセス・シヤアマンです。」

志野の與へた銀錢を掌に受けながら、黑坊は指さして教へた。

扉を叩くと、直に出て來たのは肥(ふと)つた婆さんだつた。細かい白煉瓦を敷詰めたつるつる滑る廊

下を、重たい體を左右に動搖させながら、大きな木札のついた鍵を手にした主婦は、始めは大きい方の部屋を見せたが、彼の經濟では、少しでも安い方を望まなければならなかつたので、その隣のちひさい方を擇んだ。疊ならば四枚位しか敷けないところに、寢臺と椅子と小机が置いてあるので、體を横にしなければ、自由には歩けなかつた。けれども、意外な事には、そのちいつぽけな部屋に、湯殿がくつついて居た。栓を捻ると、湯でも水でも、自由に勢ひよく迸り出た。如何して、そんな小部屋に、その部屋よりも廣い位の贅澤な湯殿がついてゐるのか不思議に思つたが、愈々荷物を運び込んで、部屋の主人になつて見ると直ぐ解つた。その部屋は、本來は、最初見た大きい方の部屋と、二間つゞきの次の間なのを、間の開閉扉を釘づけにして、別々に貸す事にしてあつたのだ。外國の小說や、日本人の海外旅行記などによくある、隣室をのぞいて、思ひもかけないなまめかしい光景に驚かされる機會を想像して、開閉扉の鍵穴に目を押付けて見たが、それは完全に塗りつぶされてゐた。

同じ建築物の中にゐながら、幾組の家族が、別段ゆききするのでもなく、一人の主婦の持つて居る部屋を借りてゐる幾人が、お互に顏を合せる機會もなく、廊下であつても挨拶もしないで濟む氣儘な生活を、志野は殊の外喜んだ。

河に面してゐるとはいへ、水を見る位置にはなかつたが、河岸の並木の綠は目に心よく、遠い對岸の岡の上の公園には、夜になると見世物の灯が、林の中にきらめいた。流石に夜は河風が、僅かながらも吹込んで來て、狹苦しい部屋の中も、居心地がよくなつた。その裏窓をあけ放して、寢臺の上迄もさし込む月光を浴びて眠つた。

或日、何時もの通り圖書館で、居睡をしながら讀書して、晩の食事も濟まして歸ると、直に水風呂に飛込んだ。體を拭いて、その儘燈火も無い暗い部屋の寢臺の上に横になつてゐると、隣の部屋から微かな物音が聞えた。それは獸のやうだつた。其處此處とおちつきなく歩いて居る四足の、忙しく、柔かく床を踏む音だつた。

突然、靜かに、しかしよく透る、線の細い女の聲が聞えた、と思ふと椅子を離れて立上つた氣配で、靴の踵がことこと鳴つた。

「ルルウ、ルールウ。」

隣の部屋がふさがつたなと思ふ好奇心が、輕いあてのない期待を起させた。聲の主は、手飼の畜生を抱き上げたのであらう、母親が赤坊の頰邊にささやくやうに、何かしきりに低い聲でいひ聞かせてゐる様子だつた。

その日から、隣の部屋に、女と犬の居る事丈はわかつたが、どんな女が住んで居るのかはわからなかつた。たつた一人きりなのか、誰か外にも居るのか、それもわからなかつた。

昇降機の黒坊にきくと、

「えゝ、若い御婦人一人きりです。」

と答へて、意味ありさうに二つ三つ目をしばたたいて、卑しい微笑を洩した。

朝は遲かつた。志野が圖書館に行く頃は、物音さへもしなかつた。夜も亦遲く、何處に出かけて行くのか、留守番のルルの馳廻る足音がうるさく耳について、讀書を妨げられた。時には一緒に散歩に連れて行く事もあるらしかつたが、大概は殘つてゐて、退屈し切つた犬の、椅子に上つたり下りたりする氣配も屢々聞えた。

日曜の朝、町角の藥屋で、朝飯のかはりに珈琲を立飲みして歸つて來た。昇降機で五階迄運ばれて、部屋に入らうとすると、廊下を馳廻る小犬を見た。黑い毛深い額に、茶色の星の二つ並んでゐる頓狂な顏つきをしたのが、部屋の外に放たれた肉體の自由を悦んで、兎のやうに躍り狂つてゐた。何時つけたのか、首輪の鈴がちやらちやら鳴つた。犬もそれを珍しさうに、小首を傾けて聞き入つてゐた。

志野が部屋の扉を開けると、犬は少しばかりの隙間から、先んじて飛込んでしまつた。見馴れない部屋の中を物珍しさうに嗅いで廻つたが、そのくせちつとも人見しりをしないで、いきなり志野の寢臺に飛上つて、ひつくりかへつてふざけた。

「ルルウ、ルールウ。」

隣の女の聲が、廊下の壁に反響して聞え、つづいて、かすかな口笛が聞えた。

犬は吃驚した樣子で、起返つて、短くつつ立つた耳を一層そばだてたが、別段馳出しもしないで、又仰向にひつくりかへると、いたづらつ子らしく四足を空にあげて、身をもんでふざけた。

「ルルウ、ルールウ。」

心配さうな女の聲が扉に近くなつて來た。

「叱ッ、叱ッ。」

志野はその主人の方にやらうとしたけれど、犬はわざととぼけた面をして、氣儘な身振をしてゐるばかりだつた。

「ルルウ、ルールウ。何處に行つたの、うちの坊やは。」

首輪の鈴の音で、居所はわかつてゐる筈だから、女のつぶやく聲に志野は心がとがめられた。

二度三度叱つても、犬は寢臺を下りなかつた。抱上て床に下すと、又勢よく飛上つて、一層わるふざけを始めるのであつた。

「ルールゥ。」

聲高く女の叫ぶのが、愈々心苦しかつた。

畜生、爲方の無い奴さんだなと思ひながら、志野は椅子を離れて、兩手で犬を抱上て、少しばかり氣おくれしながら、部屋の扉をあけた。

「貴方のルルは此處に居ます。」

口をきいて、かへつててれてしまつたが、兩手で小犬を捧げて差出した。

「おゝ、ルルウ。」

いきなり受取つて胸に抱上ると、抱しめて頰擦りした。その後で、始めて氣がついたやうに、

「難有う。どうもいたづらつこで困ります。」

と禮を云ひながら愛想笑をした。教會にでも行くのであらう、黑つぽい他所行の絹の着物の胸に、犬は首をうづめてしがみついた。厚白粉に頰紅をさしたのが、思ひもかけない顏色の違つた人間を見て驚いた表情をかくし切れず、大きな目をみはつて、しげじげと見た。どつちかといへ

ば小柄で、子供らしい可愛らしいおでこに、黒味の勝つた毛をまきちゞらせてゐるのが蓮葉に見えた。

「難有う。」

もう一度禮を云つて、犬に頬擦りしながら、隣の部屋に歸つて行つた。

間も無く、女は犬をつれて、戸外に出て行つた。昇降機の降りて行く音が、段々遠くなつて行くのを聞きながら、志野は窓から首を出して往來を見下してゐた。つばの廣い帽子を斜にかぶつた女の前になり後になり、ルルは細かく足を刻んで馳廻りながら、河岸の散歩道の方に上つて行くのであつた。

隣の部屋に、若い女がたつた一人で居るといふ事は、好奇心を伴ふ興味になつた。ささやかな物音さへ、あだには聞過さない心持だつた。別段何處かに勤めに行くといふ風でもなかつた。夜は不相變遲く歸つて來る事が多かつた。留守番のルルの鈴の音が、相手のない寂しい犬の姿を想像させるばかりだつた。

暑氣は愈々酷しくなつた。秋になつたら行かうと思つて居た歐羅巴には、誰一人待受けなかつた大戰爭が起つて、諸國は國を擧げて鬪ひつつあつた。伯林や巴里にゐた友達からは、みんな倫

敦に避難した事を知らせて來た。あらゆる國の移住者が、既に根を植ゑてしまつた紐育は、戰報の度毎に熱狂した。今にも巴里が陥れば、やがては倫敦も襲はれるであらう。さうすれば渡歐の時機は、何時來るのかわからなくなる。志野は、永久に此の暑苦しい煉瓦と鐵の大都會の一隅に、動きのとれなくなつた自分かと、思ひ危ぶむ事さへあつた。

肉體は暑氣に疲れてしまつた。或は終日何もしずに、水ばかり飲んで、ごろ寢してしまふ事もあつた。じつとしてゐても汗の滲み出る體は、幾度水風呂に浸しても涼しくならなかつた。

矢張り暑氣の堪へ難い一日、氣力も無く寢ころんでゐた夕方から、漸く日かげを擇んで外に出て、冷い麥酒に元氣を囘復したのが、ハドソンの河岸を散歩して居るうちに、むらむらと水の上が戀しくなつた。日が沈んで兩岸の岡の影の暗くなつた中に、ほの白く流れる大河の面に、渡船の灯の映るのが、涙ぐまれる程心をひいた。

目的もなく、只管水の上に浮び度い願から、志野はその渡船に乘つてしまつた。ゆらゆらと中流に浮んで出た時は、何とも云へない愉悦で、船側を洗ふ水の音に耳を傾けた。やがて船が向側に着くと、如何しても下りなければならないので、一度は下りたけれど、又直に切符を買つて、かへりの船に乘込んだ。彼は遂に二囘つゞけさまに往復してしまつた。

新しい慰を發見した喜びに、明日からは、毎晩必ず渡船に乘つて涼まうと、たのしみの殖えた豐かな心持で歸つた。入口を入らうとすると、反對の下町の方から來た隣の女と出あつた。輕い挨拶をして、一緒に昇降機に乘つた。

「どちらへいらつしやいましたの。」

「渡船の上で涼んで來ました。」

「どちらですつて。」

豫期しない返事だつたので、女は直にききかへした。

「私は水が好きなので、水を見てゐたら、どうしても船に乘らないではゐられなくなつてしまつたのです。乘つて見ると氣持がいゝものですから、遂々二度往復してしまひました。明日からは、毎晩行かうと考へて居る位です。」

「そんなに面白いでせうかしら、私もつれて行つて下さらない。」

意外な事を聞くものだといふ風で、はしやいだ聲で笑つた。黑坊も白い齒を見せて笑つた。

昇降機が止まると、女は先に廊下に出たが、その部屋の扉をあけながら、

「ほんとに明晩は、御一緒に船に乘りませうか。」

と首をかしげて笑つた。

室内は蒸暑かつた。涼しい水の上を想ひながら、窓に腰かけてゐると、隣の部屋からは、主人の歸宅に浮立つたルルの飛廻る物音が、鈴の音と共に聞えて來た。

その翌日、志野は圖書館で日を暮らして歸つて來た。湯に入つてから、町に食事に出ようと思つてゐた。身支度をして廊下に出ると、隣の部屋の扉が開いて、後から呼止められた。

「もしもし、今晩の御約束はお忘れになりやあしないでせうね。」

首ばかり扉の外に出した女が、にこにこして、多少からかふ調子で云つた。

「約束ですつて。」

「アラ、忘れてらつしやるわ。渡船に乘るんぢやありませんか。」

女は愈々いたづらつこらしく笑つてゐた。

「ほんとに行きますか。そんならお誘ひしませう。」

まさかと思つてゐたので、からかはれてゐるのだとは思つたが、若しからかつてゐるのなら、誘つて困らしてやるのも面白いと考へた。

「ほんとですとも。今からでもおともしますわ。」

「それでは直ぐに出かけませう。」

志野も乘氣になつて應じた。

「では一寸待つてて下さい。直き行きますから。」

そのまま引込んだが、暫時（しばらく）すると、帽子をかぶつて、ルルを抱きながら出て來た。

昇降機の黑坊は不審さうな顏をして二人を見たが、女には知れないやうに、志野の顏を見ると、意味ありさうな冷かし笑を口もとに浮べて見せた。

志野は、暮切らない往來の人目をくすぐつたく思つたが、女はそんな樣子もなく、ルルの首につけた革紐を手にして、志野と肩を並べて步いた。

「何處かで食事をし度いと思ひますが如何でせう。」

渡船に乘るには夜がいいし、第一彼は空腹だつた。

「難有う。私もお腹が空いてゐるのですよ。」

女は何の遠慮も無く同意した。

顏色の黃色い、體格の貧弱な、人目を引き易いばかりで無く、ともすれば輕蔑の的になり勝な日本人だと云ふひけめから、志野は料理屋に行つても、肩身の狹い心持を消す事が出來なかつた

か、殊に素性の知れない、派手づくりの、夜の女と見ても間違ひのないやうな若いのと一緒なので、愈々あたりが憚かられた。食事の間にも、女は他愛も無い話をしかけ、日本人の友達は始めてだなどと、親しい口をきいて面白がつた。

志野の方からは、女に對して立入つた事も訊かれないので、兎角うけこたへするばかりだつたが、相手はそんな事には頓着なく、根強く彼の身の上をききだした。その間には、自分自身の身の上もほのめかした。加奈陀の生れで、母は佛蘭西人だと云つてゐた。紐育に來たのは餘り以前ではなく、別段知人もなくて寂しいと云つたが、何の爲に一人で、知らない土地に暮してゐるのかは、想像する事も出來なかつた。

夜になつて二人は渡船に乘つた。女は、想像もしなかつた事を喜ぶ日本人の珍しさからか、船の中ではしやいで、小聲で歌をうたひもした。その晩も亦二度往復して、宿に歸つたが、志野の心には、女の素性を疑ふ影が、しつつこく絡りついてゐた。

又次の日も、志野は隣の女を誘ひ出し度いと思つたが、食事につれて行くのは到底負擔に堪へられないので、圖書館の歸りに自分一人で濟ましてしまつた。部屋に歸つても、女はゐるのかゐないのか、物音もしないので、扉を叩いて見ようかとも考へたが、あんまり馴々し過ると思ひか

へして差控へた。ルルの鈴の音が時々微かに聞えて來た。

その日は殊に蒸暑い日で、西日のほとぼりのさめ切らない部屋の中には居たたまれなかつた。何となく張合の抜けた、だまかされたやうな氣持もして、一人で戸外に出た。少しやけな足取で河岸を歩いて、渡船に乘つた。兩岸の船着場の改札口で顔を見られる心持に責められはしたが、意地になつて四度往復した。月に照らし出された水は、いきもののやうにさざ波を立てた。

夜更けて部屋に歸ると、隣の部屋に微かな物音がする。おもひもかけない話聲だつた。密かに抱いてゐた疑の追及に、志野は嫉妬がましい耳を聳立（そばだ）てた。

もともと二間（ふたま）續の部屋だつたのを、間の扉でしきつて釘づけにしたのだから、普通の隣同志よりも壁が薄かつた。言葉はわからなかつたけれど、太い男の聲が、ひそめいて話す女の聲と入混（いりまじ）つて聞えて來た。志野はその間の扉の鍵穴が塗つぶされてゐる事を知りながら、隙見の機會を其處に期待する心持を禁じ得なかつた。

話聲が止んだと思ふと、窓かけを靜に下す氣配がした。絹の着物の擦れてしゆうしゆう鳴るのが聞えた時は、志野は目の前のあかりの下に、眞白な肌襦袢に胸も腕もあらはな女の姿を、明瞭に想像する事が出來た。靴をぬいで下に置く様子もわかつた。重みのかかつた寢臺の脚の、床の

上にきしむ音がして、さうしてひつそりした。
と思つた時、俄にルルの鈴の音が忙しく聞え始めた。くるくる室内を馳廻る足音だつた。
「叱ッ、叱ッ。」
あたりを憚りながら、しかも男の太い聲で叱つた後で、まだぶつぶつ小言を云ふのであつた。犬はしきりに動き廻つた。
「ルルッ、ルールッ。」
今度は女の聲でたしなめたが、犬はかへつて低くうなりながら、なほ更騒々しく馳廻つた。靜寂を期待してゐる空氣の中に、鈴の音は一層冴えて響いた。
女に向つて男は腹立たしげに小言をいふ樣子で、女の辯解してゐる光景が續いて想像出來た。
「ルルッ、ルルッ。」
二度三度、いふ事をきかないのがかへつて可愛らしいと云ふ風で、女は繰返してたしなめたが、畜生は一層甘つたれて、しきりに床の上に足を踏鳴らした。
疳癪を無理に押殺した男の聲が暫時つゞいた。輕く舌うちして女は起上つたらしく、寢臺から飛下りる音がした。犬を抱上げたのであらう。ルルの騒ぐのは聞えなくなつた。女は又ひとしき

りいひきかせた上で、部屋の扉をあけて廊下に出してしまつた。男をなだめる爲の女の輕い笑聲がして、そして再び靜かになつた。

廊下のルルは、其處いらをうろうろしながら、しきりに低くうなり續けた。鈴の音迄が苛立たしく響いた。嫉妬と不安と焦躁に、ルルの心は平かでなかつたのだ。

暫時（しばらく）して、二人の立上る物音につづいて、

「ア、暑い。」

とつぶやく女の聲がはつきり聞えた。二人の聲が一緒に笑つた。

やがて男は歸つて行つた。そのあと暫時は、ルルを抱締めて物を言ふ女の聲が微かに聞えたが、何時かそれも止んで、更けた夜は靜かになつた。蒸暑く、寢苦しい夜であつた。

その晩から、殆んど毎晩隣には男が訊ねて來た。太く低い、重苦しい男の聲が何時も變らなかつたから、同じ男には違ひ無かつた。さうして、その男の來る時は、犬は必ず部屋の外に出されてしまふ事になつた。根氣よく嫉妬してゐるルルの姿を、志野はしまひには哀れとも思はなかつた。それ程彼は、手に取る如く聞える隣の部屋の場面を、尋常茶飯の事に思ひ始めた。ア、又來てゐるなと思ふばかりで、好奇心は次第に淡くなつてしまつた。

志野が疑つたのとは違つて、女は夜鷹ではないらしかつた。一人の男と限つて居るのを見ると、單に愛人との逢引かとも推察されたが、それにしては女の方に、餘りに感激が無さ過(すぎ)るやうに思ひかへされる。――妾かしらと思ひついた時、志野はその解答に滿足して微笑した。妾だ、妾に違ひ無いときめてしまつたが、しかし何時からさうなのかは想像も出來なかつた。兎に角最初のうちは、男は遊びに來なかつたから、或は往來で求めた口かもしれなかつた。

女は時折廊下などで、志野に逢つても平氣だつた。矢張り馴々しく、輕い冗談を云つて、散步にさへ誘ふ事もあつた。相手の邪氣の無い態度にひかされて、志野も平氣でつきあつてゐた。實はその後は餘り行かなかつたのだが、會話のひつかかりから、又しても一緖に渡船に乘つた事もあつた。男の來ない晚なのだらう、隣から聲をかけて、活動寫眞に誘はれもした。無智で無邪氣な相手を、退屈しのぎにはいい友達だと思つてゐた。

彼に對する女の態度は、物珍しさが第一だつた。氣のおけないのも嬉しかつたらしい。西洋人に比べては小柄な志野を、まだほんの子供だと思つてゐるらしくもあつた。彼が大學の卒業生だと知つた時は、何とも云へない驚いた表情をした。ほんとですか、ほんとですか、と繰返して念を押した。

一緒に下町の繁華な通を散歩して、少し疲れて公園の共同椅子に腰かけて休んだ事があつた。女は突然志野にきいた。

「貴方はちやあんとわかつてるんでせう。私の事。」

志野は吃驚して相手の顔を見た。

「知つてらつしやるんだわ。知らないつてわけがないんですもの。」

不相變無邪氣な笑顔をして、たたみかけて云つた。

「サ、知つてるつておつしやい、知つてるつて。」

志野はやうやく、何をいふのかがわかつた。女はその身の上を、かくすともなくかくして居るのさへ氣がとがめてゐるのだと推察された。それでも、何と返事をしていいのかわからなかつた。知つてるといふのも變だつた。知らないといふのは餘り嘘つき過る。彼は女の顔を見詰めて默つてゐた。

「知つてる癖に――卑怯者ッ。」

わざと叱るやうに云ひながら、目と口許は笑つてゐたが、ふと暗く沈んで、

「それが世の中なんだわ。」

とつぶやいて嘆息した。

樹立の向の芝原には月の光がいつぱい流れてゐたが、二人が並んでかけた共同椅子の邊は暗かつた。風も無い草むらに、蟲の音がしきりだつた。

重苦しい沈默が續いた。志野は、意外な場面の中に見出した自分をもてあまして、てれかくしに、晴れわたつた薄青い空に目をそらした。かすかにかすかに、噴水の水の散る音さへ聞えて來た。

I'm only a little girl,

Till I met you…………

突然輕い調子で、女は流行唄をうたひ出したが、驚いて振向いた志野を見ると、痙攣するやうに笑ひ出して、なかなか笑ひ止まなかつた。

暑い日はなほ續いた。時々夕立の來る事もあつたが、大概は燒つく太陽に炎を吐く大都の景色に、息も詰まる程のおもひだつた。志野は毎日圖書館に通つた。さうして、夜部屋に歸つて來ると、隣の部屋に男の聲を聞く事も變らなかつた。しかしどんな男なのか、不思議に一度も見た事が無い。締出されたルルが鼻を鳴らしてついて來るので、部屋の中に入れてやる事もあつたが、

犬は矢張りおちつかないで、隣との境の扉の邊を、胡散臭さうに嗅いで廻つた。そんな景色を見てゐると、不思議な世界もあるものだと、至極輕い感慨が浮ぶ丈で、別段何の反響をさへ、心持の上には受けなかつた。

或日、志野は彼の父の友達で、紐育の日本雜貨店を經營してゐる人から電話で呼つけられた。月の始には其人の手から、學資を渡される事になつてゐたが、その用事の外には餘り行つた事も無かつたので、何の爲の呼出かちつとも見當がつかなかつた。

ブロオド・ウヱイの店に行つて見ると、その人は最初から不機嫌さうに見えたが、志野の此頃の身持を難詰した。短氣な老人は、志野がよくない女と同棲してゐるのだと思ひ込んでゐた。

「そんな事は斷じてありません。第一私の懷で、そんな事が出來る筈がありません。」

つい此間、もう少し學資を增して貰はなければやり切れないと要求した事を思ひ出しながら、あてつけがましくこたへた。

「そりやあ金の問題ぢやあない。」

相手は簡短にかたづけてしまつて、

「君が怪しげな女と步いてゐるのを見たといふ者が澤山あるのだ――怪しからん。」

と憤りに震へる聲で追及した。
もとより志野とても、女のけばけばしいみなり、紅白粉の濃過るのには閉口して、多少人目を避け度は思つたが、持つて生れたていさい嫌と、何事に限らず、わざとでも平氣を裝ひ度がる根性から、人ごみでも、あかるみでも憚らずに、隣の女と歩いてゐたのだ。口やかましい日本人に見つかつたら、うるさい評判になるだらうとは、豫々覺悟してゐたのであつた。少しもやましい事は無いのだといふ心強さが、持前のふてぶてしい根性と一緒になつて、彼をおちつかせた。
「いつたいその女といふのは何者です。」
「たぶんひとの妾だらうと思ひます。」
志野は待構へてゐたといふ風に答へた。
「妾?」
老人は吃驚して、眼鏡の下の目をみはつたが、やがて苦々しげに舌うちして、それから諄々と、若い者の愼む可き行爲を說いて止まなかつた。志野は默然として辛棒してゐた。
「なんだ馬鹿々々しい。」
さんざん油をしぼられた後で、やうやく彼は解放された。世間體ばかり考へてゐる人間のうる

さい口を憎んだ。妾だらうが、賣女だらうが、友達にしてつきあつて惡いわけは無い、構ふものかと思ひもし、あんまり人の噂に上るのも堪らない、差控へようとも考へた。
けれども矢張り隣同志で、顏を合せた時に聲をかけられると、今更態度を改めるわけにも行かなかつた。連立つて、河岸の散歩に出ながら、人目を憚る心持に惱む事も多かつた。
或晩も、隣の部屋には何時もの男が來てゐた。いつたん下した窓かけをあけて、寢臺を下りたのが、長い間しきりにひそひそ話合つてゐた。それが急に高い調子に變つた。
「私は彼奴は大嫌なんだ。」
男の疳癪を起した聲が、はつきり聞えた。
「私は大好なんです。」
女の細く透る聲が、これもはつきりと應じた。
「私があれ程彼奴を嫌つてるつて事はわかつてゐるぢやないか。」
「だつて私があれ程大好だつて事も御存じぢやありませんか。」
女も負けずに調子が高くなつた。二人はお互に、相手の言葉には頓着なく喋り出したが、矢張り多少は氣兼をしてか、急ち又元の低いささやきに變つてしまつた。ぷりぷりしてゐる女の機嫌

をとるのか、嘆願するやうになだめてゐる男の聲が續いた。何を爭つてゐるのか、たぶん嫉妬喧嘩だらうと、洩聞いた言葉の、大好き、大嫌から推察して、多少好奇心は覺えたが、しまひには仲直りしたらしく、夜更けて男は歸つて行つた。

それから數日後だつた。志野が何時もの通り圖書館から歸つて來ると、一通の手紙が扉口に落ちてゐた。

隣の女からのものだつた。

我友よ。

私は今日俄に海岸へ旅立つ事になりました。

彼の人はわからずやです。犬が大嫌なのです。私の哀れなるルル、善良にして正直なルルは、一人留守番をしなければならないのです。私は私の可愛いルルに、一日たりとも別れてはゐられません。けれども――オヽ、私にとつても、ルルにとつても、何といふしあはせでせう、貴方は私の留守中、私のかはりにルルを愛して下さる事と信じます。ルルは貴方が大好です。それは私が貴方が大好だといふのと同じ程度に大好なのです。どうぞ私の留守中ルルを預かつて下さいまし。遲くとも一週間の後には、私は私の友達及私のルルのもとに歸つて來るで

せう。さよなら。

志野は讀終つて呆然とした。餘りに思ひもかけない事だつた。女の呑氣な邪氣の無いやり口が、想像の外だつた。

「ルル、ルールウ。」

ふだん女が呼ぶやうに、壁にむかつて呼んで見た。ひつそりしてゐた隣の部屋の、椅子か寢臺か、高い處から飛下りる犬の動作が聞えた。鈴の音が人懷しさうに聞えた。

廊下に出て、隣の部屋の扉を押してみたが、鍵がかかつてゐてあかなかつた。一週間目一週間目に間代を拂ふ時の外は、つひぞ口をきいた事も無い主婦を呼んで來なければならなかつた。

「ア、あの人は、犬は貴方に頼んであると云つてゐましたよ。御親切な事で……」

肥りかへつた婆さんは、胸にも腹にも波をうたせて笑つた。志野は赤面して、てれかくしに口笛を吹いて犬を呼んだ。

扉があくと、犬はころがるやうに馳出して來た。差出した掌を、くひつくやうになめ廻した。

志野はいきなり抱上て、自分の部屋につれて來た。膝の上にちよこなんとかしこまつて、短い尻尾を振つてゐる頓狂な小犬の顔を見てゐると、これから一週間の間、此の畜生を引受けなければ

ならなくなつた出來事の意外さに、志野は額に皺を刻んで苦笑した。（大正九年九月三日）

辻君

近頃倫敦から歸つて來た男の歡迎を兼ねて、四五人の同窓の友達が、築地の或る待合で、小宴を催した時の話である。

盃の數が重なるに從つて、みんながお喋りになつて來た。何といふ取止めた話も無く、あつちでもこつちでも、勝手な事を話あつて居たが、如何いふ續きあひからか、一座の話題は、此頃の新聞に傳へられた、大日本婦人矯風會と藝者の問題に落ちて行つた。

それは、先頃東京で開催された萬國日曜學校大會に參加する爲に集つて來た外國人に對して、在留外人の一人が「藝者とは何者なりや」と題する小冊子を配布しようとしたのを知つて、婦人矯風會の幹部が、周章狼狽して哀訴歎願し、漸く止めて貰つたといふ事件である。その日本馴れた、しかも基督の教を說く職に在る外國人は、新來の客に、日本名物の藝者は醜業婦であるといふ事を知らせて、彼等の道德觀念から、之を顰蹙させようと企て、矯風會は、藝者の內幕を外客に曝露するのは、日本婦人の恥辱だと考へたのである。

その座敷には勿論藝者も居たし、酒氣を帶びた一座の者が、その外國人の所業と、矯風會の行

動を、併せて罵倒したのは勿論である。
「それぢやあ、西洋には藝者は居ないんですか。」
中では一番年増の藝者が、話の中に割つて入つた。男ばかりが氣焔をあげて居て、空しく膝に手を置いて居る自分達の立場の無いのを如何にかしようとする努力で、別段きき度てきいた質問ではないらしかつた。
「あら、ほんとに居ないんですか。それぢやお客様が困るでしよ。」
ひねこびたお酌が、眞面目に念を押した。
「困るとも。だから僕は藝者の居る國に歸つて來たのさ。」
新歸朝者の藤瀨は、話の緒をつかんで、面白さうに盃を乾した。
「藝者を國辱だといふ矯風會の婆さんは、倫敦のピカデリイ附近の夜の景色を何と見たのだらう。紐育の大通に出沒する女の群を、目にもとめなかつたのかしら。」
酒の機嫌がさせるのか、憎む可き僞善者が目の前にでも居るやうに、彼の語調は銳どかつた。
藤瀨に云はせると、西洋人は自分達内輪の不道德についてはお互に知らん面をしながら、他國人――殊に彼等が自分達よりも劣等な國民だと思つて居る者に對しては、甚しく道德家面をして、

他の不道徳を許し難いものとして攻撃する。彼等の國には吉原は存在しないであらう。彼等の國の賣春婦は、此の國の藝者の如く宴席に侍する事は無いであらう。しかし、夥しい白人奴隷と、殆んど街上を行列して歩く無數の女の存在は、到底かくし切れない筈だ。ただそれを公然口にしない丈である。問題にする事を怖れて居るのである。知つて知らない振をして居るのである。不人情も甚しい。

外國の都のさかり場の景色を話の中に描出しながら、新歸朝者は、何時迄たつても矯風會の問題を離れなかつた。

友達も、最初は相槌を打つてゐたが、餘り何時迄も續くので、少し白けた顏附になつて來た。女達には、話の意味さへ半分は解らなかつた。その氣配を見て取つた年増は、言葉の切目を見付て口を出した。

「つまりあちらはすべて引張りなんですか。早い話がさ。」

「さうさ、引張りなんだ。往來で行違ふ。今晩はつて云ふから、今晩はつて返事をすると、直にお値段の掛合が始まるんだ。」

「其處でイエス・オーライつてな事になるんですか。至極簡單だわね。」

どうにかして話を賑かにしようとして、頓狂な聲を出して一座をかへりみた。
「異人さんの引張りなんですか。珍しいわねえ。」
一人の藝者は吃驚した様子で眞顔だつた。
「珍しいも何もありやあしない。異人ばかりなんだもの。」
友達の一人が、その若いのをたしなめた。
「だつて西洋なんぢやないの、豆菊さん。」
もう一人の藝者が側から口を出して納得させた。
「ところがね、倫敦にもたつた一人、日本の女が居るんだ。隨分あつちに長くゐる人でも知らないらしいが、僕は不思議な事で、その巣迄突止めたんだ。」
「おやすくないわねえ。」
申合せたやうに二三人の聲が揃つた。
「そんなんぢやないんだ。結局振られた形なんだから。」
と言つて、今の今迄藝者論から引續いて、言葉も荒々しく論じて居たのとはうつて變つて彼は靜に話始めた。

倫敦の霧といへば、世界に鳴響いた霧だけれど、ほんとに其の限も無い深さと、果しも無い廣さは、到底實際に出つくはして見なければわからない。時には、數限も無く輝いてゐた町中の燈火をすべて押包んで、瞬間に一寸先も見えない密度の濃い霧が、音もなく降りて來る事がある。殆んど往來は途絶してしまふ。何が目の前に在るか、足下にあるかもわからない、並んで歩く道連さへ、影よりも薄くなつてしまふ。霧に迷つて途方も無い方角に行つてしまふ事もあれば、自分の家の周圍を、空しく幾度も廻つて入口に氣のつかない事もある。

耶蘇降誕祭に近い年の暮の事であつた。倶樂部で夜を更かして戸外に出ると、先刻迄は寒空に月がかかつてゐたのに、何時の間にか深い霧が降りてゐた。夜更の裏町は、車馬も通らず、時々行違ふ人の姿も、水底の魚に似て、霧から出て霧に吸込まれてしまふのであつた。四辻の地下鐵道の停車場の方に歩いて行くうちに、霧は愈々濃くなつて、一切の光はその奥底に消えてしまつた。手には觸れない癖に、鼻や口を、故意にふさがうとするやうな闇が、濕つぽく顏に當るのであつた。自分の足音を頼りにして、とぼとぼ歩いてゐるうちに、藤瀬は全く方角を失つてしまつた。正しい道を來たつもりだつたが、いくら行つても四辻には出なかつた。それればかりでなく、

大通に出る筈なのが、非道く敷石の並びの惡い、息苦しい程兩側の迫つた横町に迷ひ込んで居るらしかつた。足場をあやまらない用心に、人家の壁を手がかりにして一歩々々運んでゐたが冷い煉瓦の觸覺は、革の手袋をはめた指の尖から、不氣味に全身に沁みて來た。物音は何も聞えなかつたが、むらむらと湧いて漂ふ煤烟のやうな霧の中を、何かしら猫のやうな獸が、群つて驅廻つてゐるらしい氣配さへ感じられた。寢靜まつた町には、戶の隙間をもれるあかりもなかつた。

「あゝ燐寸が欲しい。」

と思ひながら、持合せてゐないとは承知しながら、それでも氣やすめに外套のかくしを探つた拍子に、突然壁に突當つた。足場の惡い時の姿勢で、少し前かがみになつてゐたので、堅い石の壁の面に、思ひ切つて額をぶつけてしまつた。驚いて立直つたが、又手さぐりで樣子を見ると、どうやら其處は袋地らしかつた。舌うちしながら、彼は突當りの壁を蹴飛ばした。途方にくれて、嘆息して佇んだが、どうしても引返す外に道が無かつた。段々底の方にずり落て行く心持で歩き出した。聲をあげて泣度いやうな、その癖どうしても聲は霧に壓されて出さうも無い胸苦しさを感じて來た。

突然、目の前の霧がゆらゆら搖らいだ――と思つた時、その黑い影はもくもく大きくなつて迫

つて來た。ぴたぴたぴたぴたと、水の滲むやうな音が聞えた。途端に人にぶつかつた。

「失禮。」

彼は狼狽てゝ頭をさげて、道を讓つて通つた。

「もしもし。」

二三間行過たのが、あたりを憚る女の聲で、呼びかけながら戻つて來た。

「今晩は。」

さぐりを入れる樣子で、不安らしかつた。

その女の素性は直に想像する事が出來たが、場所が何處だかわからない上に、霧の底の出來事なので、探偵小說の中の陰慘な光景をおもひうかべて不氣味だつた。

「貴方、私と一緒にいらつしやらない。」

愈々あたりを怖れる樣子で、ききとりにくい程早口でささやいた。

藤瀨の心は旣に動いてゐた。此の濃霧の中に、何時迄も迷つてゐなければならないやうな心持もしてゐたので、人の姿を見、人の聲を聞く丈でもなつかしかつた。女と一緒にその家に行けば、其處には屹度燈火があるに違ひ無い。暖爐には火が燃えてゐるに違ひ無い。暖い寢床があるであ

らう。何よりも戀しいものは、輝くあかりと燃える火であつた。それにも拘らず臆病な動悸が胸を打つて、彼は返事が出來なかつた。

「ね、いらつしやいよ。」

もう逃がしつこはないと思つた風で、相手はからだを寄せかけて促した。さうして直に手をとつて歩き出した。

藤瀨は、女の體に近づくと、俄に人心地がついたやうな、此の世らしい氣持を囘復した。小柄な女の肩に身を寄せかけながら、又袋地の底に連れて行かれた。家の戸口で女は鍵を取出しながら、

「叱ッ。」

物音を愼めと合圖した。その時、生溫い息がほの白く顏にかかつた。

重い戸が開かれると、暗い電燈の照らし出した梯子段が目の前に見えた。執念深い霧も、二人にまつはつて、僅かの隙間から、むらむらと家の中に侵入した。

足音を忍んで女の上つて行く梯子段を、彼も密かに上つて行つた。二階三階——四階目の部屋が女の住居だつた。扉をあけて、とつつきの部屋に手探りで入り、スウヰッチが撚られると同時

に、眞赤な壁紙の色が、電燈を反射してぎらぎらした。小部屋の中には、寢臺と椅子と鏡臺があつた。彼は救はれた氣持で椅子にかけた。霧の沁みた目は、あまりあかるい燈火の爲に、づきづき痛むやうな心持がした。

と思ふひまも無かつた。顏を見合せた二人は、同時に胸を打たれたのである。帽子をとつた女は、驚きの聲をかくし切れなかつた。日本の女だつたのである。

藤瀬は椅子の肱をつかんだまゝ、身動もしないで相手を見詰めた。あんまり意外な出來事が、到底口をきかせなかつた。女は表情を失つた顏をして佇立してゐた。激しい動悸が、胸に波を打つてゐた。

「失禮ですが、どうぞ此儘お歸り下さい。」

暫時して、女はやうやく口を開いた。矢張英語で續けたが、唇が震へて聲はかれてゐた。

「どうぞ見逃して下さいまし。誰にもおつしやらないで下さい。」

筋肉の強張つてしまつた顏の色も蒼ざめて、みひらいた兩眼から、涙は頰邊をつたはつて落ちて來た。同胞の目に觸れた汚辱の身を恥る心と、さういふ身の上に落て行つた半生をかへりみる感慨に堪へられなかつたのか、堪へようとしても、涙は止度なく目頭に滲んで來た。遂には、寢

臺の上に突伏して、枕に顔を埋めたまま、身を揉んでむせび泣いた。洋裝した時殊に目立つ、日本の女に特有の、小柄の癖に胴の長い體に、水の湧くやうに悲が背筋を傳つて波打つた。

藤瀨は、その場に居るのは自分自身だとは信じられない氣持で、しかもどうしていいか手のつけられない場面に當惑しながら、泣きつづける女を見守つてゐた。

「歸つて下さい。歸つて下さい。」

女はただそれ丈を繰返すばかりだつた。

「どうしても歸れといふなら歸るが、この夜更にこの霧では、どうする事も出來やあしない。第一私には、此處が何處なんだか見當もつかないのです。」

相手は決して日本語をつかはなかつたけれど、藤瀨にはわざとらしくて英語は話せなかつた。女だつて日本語は知つてゐるのだけれど、あくまでも同じ國の人間だといふ感情から遠ざからうと努めて、無理にも英語で押通してゐるのだとしか考へられなかつた。

「濟みません――けれども後生です、歸つて下さい。」

強情にいひ張つてきかなかつた。間歇的に嗚咽に咽喉がふさがつた。

藤瀨は全く困つてしまつた。窓かけの隙間からのぞいて見ると、戸外の霧は愈々暗く、大地の

上にのしかかつて居た。その奥底の知れない霧の底を、盲目の魚の如くさまよふ自分の姿を想像すると、何時迄も日の目を見ない世界に陥つたやうな戰慄さへ感じた。

「あゝ、霧はなかなか晴れないな。」

聞えよがしに嘆息したが、女は返事もしなかつた。泣き止んでしまつたのに、また枕に噛りついて、顏をあげなかつた。實際彼は思ひもかけない女の姿に對して、何の慾情も持つてゐなかつた。ただ此のあかるい部屋の外に出るのは堪らなかつた。

「許して下さい。どうぞ歸つて下さい。」

女はどうしてもきかなかつた。長い沈默が續いた。

「爲方が無い。それでは歸りませう。」

目の前の女の身の上を、小說らしい筋道に組立てゝ、その想像が當るかどうかを確め度いと思ひながら、同胞とは同じ部屋の內にゐる事さへ厭がつてゐる相手の心根に對して、身の上話などは強ひられなかつた。彼は決心して立上つた。

「濟みません。かんにんして下さい。」

乾いた聲で云ひながら、やうやく顏をあげた。白粉も頰紅も濡れた頰邊に、わざと縮らした揉

上の毛がぴつたりくつついてゐた。
「私はハイド・パアクの側迄歸るのだが、一體此處は何處です。」
霧の爲に方角を失つたので、全く見當はつかなかつたのだ。
「それもきかないで下さいまし。」
歎願するやうな寂しい笑顏をした。
「でも、それではどつちの方角に行つたら家に歸れるのかわからない。」
藤瀬は苦笑したが、女はうつむいて答へなかつた。
彼は輕く舌うちして、何の未練もないといふ樣子でその部屋を出た。入口の扉をあけて、暗い廊下に出ようとすると、女は起上つて追かけて來た。
「お願です。誰にも私の事はおつしやらないで下さい。」
切迫した一大事のやうに狼狽てて云つた。
「承知しました。――では左樣なら。」
「さよなら。」
女は手を差延した。藤瀬はその手を強く握つて振つて別れた。

戸外に出ると、果して霧は、目も鼻も口も、すべてをふさいでしまへといふやうに力強く取巻いて來た。なまじつか明い部屋に馴れた爲か、先刻よりも一層闇は深く思はれた。ふり仰いで見ると、女の部屋の窓ばかり、霧の空にほのかに映つたが、それさへも四五間歩くひまもなく、濃霧の中に消えてしまつた。漸くのおもひで大通を探しあてて、彼が下宿に歸つたのは曉近かつた。

翌朝、藤瀬は露臺に出て、昨夜の女の家が、どの方角にあるのか、朝の光の下に見る大都の景色を見晴しながら想像したが、どうしても見當がつかなかつた。怖しい濃霧の底に、信ず可らざる不可思議を見せられたやうな、此の世らしくない景色にさへ考へられた。

約束を守つて、誰にも此の話はしなかつた。廣い倫敦の何處かに、さういふ女のひそんでゐる事を知つてゐる日本人は自分きりだといふやうな、人にかくれたほこらしい心持をいだいてゐた。ところが或日友達と散歩に出た繁華な町の人込の中で、白晝その女と行違つた。向ふは驚の色をかくし切れなかつたが、連れがあると見て視線をそらした。人目を引く、けばけばしい服裝が、如何してもただものとは見えなかつた。

「日本人だね。まるで辻君見たやうな風をしてゐるぢやあないか。」

友達はその女の後姿を幾度も振かへつて見た。

「娘かしら。人の女房かしら。兎に角あの風はいけない。日本人の恥だよ。眞面目な女の風俗と、商賣人のとは全く違ふものだつて事を知らないんだね。」

彼は後々迄繰返して心配してゐた。

共後も二三度往來で出つくはした。彼が一人の時は、それとなく輕い挨拶を素振に見せた。職業的に媚を賣る笑に、憐愍を乞ふやうな表情をまぜて、心持顏を赤くして過ぎた。目のくるくるした子供のやうな顏に、眞白に白粉を塗つたのが、小刻に足を運んで、物馴れた樣子で人込をわけて步いてゐた。

藤瀬は話終つて盃を差出した。

「それぢやあ、日本人の癖に、日本のお客はとらないつていふんですか。いやだねえ、異人さんなんか、眞平だね。」

年增はその盃に酌をしながら、若い藝者達をかへりみた。

「だけど偉い方だわねえ、一人で西洋に出かけて行くなんて。」

「私達のやうな者ではとても眞似は出來やしないわ。」

口ではさう云ひながら、外國でそんな事をしてゐる人間をさげすむ調子だつた。
「だけど考へてみると恥だわねえ。」
「そうら矯風會が出て來たぞ。」
友達の一人が突拍子もない大きな聲を出したので、一座は又賑かな笑になつた。男も女も、口々にその女の身の上を臆測したり、それからそれと自分達のおもはくを喋りながら、又盃は蘇生したやうに廻り始めた。
その時、先刻から年增の後に控目に聞いてゐた若い藝者が、膝の前のお銚子をとると、藤瀬の側に來て坐つた。
「貴方、おひとつ。」
心持擦寄つて酌をしながら、しんみりした調子できいた。
「その女の人はいくつ位の方ですの。」
「さうだねえ、西洋にゐると日本人は誰でも子供のやうに見えるけれど、あれでも二十二三かしら。それとも五六かしら。」
「名前も苗字もわからないんでせうねえ。」

「わからない。」
何心なく手短に答へたが、ふと氣が付くと、女の目には涙がいつぱい溜つてゐた。
「どうしたの。どうかしたのかい。」
一方で騷いでゐる連中を憚かつて、低い聲で訊いた。
「いゝえ、何でもないのですけれど。」
と答へた時、涙はあふれさうになつて來た。女は狼狽てて半巾を目にあてた。
「そつちの方は非道くお話がもてますね。」
醉拂つた友達が遠くの方から聲をかけた。
「おや、いやだよ。お前さん泣いてるのかい。」
年增が氣が付いてから云つた。別段泣いてゐるとは思はなかつたのだが、女が半巾を目にあてたのを見てからかつたのに過ぎなかつた。
ところが、若い藝者は何時迄たつても顏にあてた半巾を離さなかつた。
座敷の中に、輕い不安と好奇心が漂つた。みんなの視線が、その女の全身にそそがれた。一座が急にしいんとした途端にかすかに半巾の中ですすり泣いてゐた。

「あら、ほんとに泣いてるの。」

「どうしたつてのさ、此の人は。」

珍しさうに朋輩は聲をかけたが、女は靜にすゝり泣くばかりだつた。

「みなさん、御免なさい。」

暫時たつて、やうやく涙をのみ込んだ女は、濡れた顏に羞さうな無理な微笑を浮べて頭をさげた。

「あたし、お話を伺つてる中に、何だか他人の事ぢやあないやうな氣がして來ちやつたもんですから……」

「いやだよ、他人の事ぢやないなんてさ。西洋のお話なんぢやないか。」

年增はたしなめる調子だつた。

「えゝ、だから他人の事ぢやない氣がするんですわ。」

どつちかといふと、少しきちんとしすぎた顏立のが、寂しい笑顏で答へた。

「それぢやあ、西洋に御親類でも行つてるの。」

「行つてるつて、生きてるんだか死んでるんだか、それもわからないんですけれど。」

言葉を切つて、膝の上の濡れた半巾に目を落したが、

「あたしに姉があつたんです。顏も知らないのですけれど、輕業師に貰はれたのが、博覽會とかの時に西洋に行つたきり歸つて來ないらしいんです。なんでも人の噂では、輕業師は伊太利とかで夫婦とも流行病で死んでしまつたといふのですが、私の姉さんて人はどうなつたのかわからないんです。」

話しながら、又胸が迫つて來て、きれの長い目に涙があふれて來た。

「だもんですから、今のお話を伺つてる中に、なんだかその人が私の姉さんぢやないかと思はれて悲しくなつて……」

堪へられなくなつて、又半巾に顏をかくした。

「へえ、だつて何もその人に違ひ無いつてわけでもないぢやないの。」

年増は面倒臭さうに額に皺を寄せて云うちした。

「第一その人と、此の人と似てますか。」

「似てないね。そんなに綺麗な人ぢやあなかつた。」

藤瀨は答へながら、記憶をたどつて、二つの顏を並べて考へた。まる顏の、どつちかといへば

頓狂な倫敦の女に比べて、面長で、表情は乏しいけれど、目の前の藝者は誰が見ても美しいといふに違ひなかつた。
「御覧な、ちつとも似てないつておつしやるぢやないの。」
勝ほこつて、年増は一層聲を強くしてたしなめた。
「でも、私はお母さん似で、姉さんはお父さん似だつたさうですから……」
女は自分の言葉に又感動を新しくして、いつ迄もむせび泣いた。（大正九年十一月二日）

失職

鳩ぽつぽ鳩ぽつぽ
　ぽつぽぽつぽと鳴いて遊べ

低く、ものうく、間拍子の合はないオルガンが聞えて來た。女の子の甲高い聲でうたつてゐるのを田原はぼんやり聞いてゐた。

會社をやめてからの毎日程、所在無いものはなかつた。朝から晩迄、何も用事の無い一日をもてあました。暗いうちから起きて、出勤して、事務室の裏手の工場から聞えて來る機械の音を耳にしながら、書類を見る、人にあふ、電話がかかる、營業部の見廻に自動車を飛ばして行く――さうして夜は、取引先を招いて御馳走をする。それが此の二三年間の生活だつた。忙しい仕事に、讀書の閑も無く働いた時は、一日でも半日でも、何もしないで居られる事にばかり憧れた。青空をさへゆつくり仰見た事もない身の上を、生甲斐も無く感じたものだつたが、突然職を投出してしまふと、その忙しかつた頃よりも、一層生甲斐のない事になつてしまつた。彼は只管工場の物音に憧れた。

去年の暮が決算期の會社の成績は、別段惡くはなかつたのだが、創業以來日の淺い會社として、多分の配當は出來なかつた。三朱や四朱の配當をするよりは、當分今迄通り無配當で通して、會社の基礎を強固にするのが、株主にとつても利益だと、多少は浮調子な世間一般の景氣に反感を持ち、堅實をほこる氣分もあつて、田原はしきりに目ぼしい株主の間を說いて廻つた。殊に勢を極めた勞働問題に連れて、勞銀は高くなり、夜業は廢止しなければならなくなり、おまけに、養老疾病積金迄もして置かなければならない羽目になつて居た。自分自身、社會改革者の一人だと夢想し、學生時代から演說をして廻つた立場としても、斯ういふ事は率先してやらなければ、友達にも顏むけの出來ない事になつてゐた。彼は職工側の要求の內輪なのを、齒がゆく思つた位で、密かに、要求を持出す機運に誘ひをかけた形がなくもなかつた。さうして愈々八時間勞働、日曜祭日全休、賃銀値上等の問題を、職工側から持出した時は、彼は眞實働甲斐のある心持で勇んだのである。職工の代表者と膝組で話して、自分一個としては直にも全部承認するばかりでなく、尙一層徹底的に、利潤分配制度さへ採用しようと口外した。職工の中の口ききは、夜分彼の家に集つて來て、酒を飮んで歸つて行つた。醉つたあげくに、常務さん萬歲などゝ叫んで、彼を胴あげした事もあつた。職工達に人氣があるといふ事が、何よりも嬉しかつた。

けれども、それも他の重役や大株主の反感をかふ原因だつた。
「どうも田原さんのやうに、職工にばかり儲けさしてゐたら、お互資本家は浮ぶ瀬がおまへんぜ。損をしたら責任はおはんならんし、おまけに此の景氣のえゝ時に、儲けさして貰へへんのやつたらどもならんがな。」
大株主の岩井甚兵衛は、冗談らしくこんな事を云つたが、それが冗談でない事は、その態度に明白にあらはれて居た。老人の息子は、矢張り取締役の一人として、主として營業の方にたづさはつて居た。亞米利加歸りの若紳士で、美しい妻君が新派の歌よみだといふ關係から、此頃非道く文學を口にする事を好んでゐた。息子はおやぢの側に坐つて、一語々々にうなづいてゐた。
多年の世渡りから、甚兵衛老人は、どんなに腹を立てても忘れない猫撫聲で、田原をさとした。
「しかたがありません。私は私の信ずるところを、他のすべての株主にきいて貰ひます。それでいけなければ、乍遺憾辭職する以外に途がありません。」
興奮した田原の聲は高かつた。
「それは致方ありません。けどなあ、外の株主も私と同じ意見やいふ事は天道樣お見通しだつせ。」

苦り切つた顔ながら、矢張り物柔な調子で、老人は答へた。

田原はしつつこく爭つた。かねての約束通りもう二三年辛棒してくれ、立派に會社を仕上て見せると、時には熱し過て議論がましくもなつたが、我慢して歎願して、自分の聲に感激して、涙さへ流したのである。

「いや、議論はまことにお立派です。しかしなあ田原さん、金の世の中でごわすぜ。あんたも私も商人や。そろばんの合はん話やつたら、手を引くのが當前でごわせう。」

老人は、相手の物わかりの惡いのに困じ果た風だつた。

田原は株主を戸毎に訪問する決心をした。自分の正義と熱誠は、必ず人を動かし得ると信じてゐた。熱して來ると、直に自分に醉つてしまふ傾のある彼には、自分の言葉以外は耳に入らなかつた。

けれども、戸別訪問は何の效果も無かつた。效果が無かつたばかりでは無い、寧ろ不信用を深めたに過ぎなかつた。恰も世の中を騒がした民衆運動、社會主義——何かしらさういふ、老人や金持の目から見れば、危つかしい主義をいだいてゐる人間としか考へられなかつた。

「あれ程物わかりが惡いとは思ひませんでした。」

「おやつさんも心配だつしやろ。」
そんな事迄あからさまにいふといふ事が、誰の口からともなく、田原の耳に入つて來た。
結局辭表を出さなければならなくなつた。しかも彼が密かに期待してゐた戯曲的の場面も見る事が出來なかつた。誰一人止める者も無く、張合ひなく、餘り自然に職にはなれた。
一縷の望は職工にあつた。日頃可愛がつてやつた職工、常務さんの爲なら何でもすると口々に云つた職工である。しかしそれも空頼みに過なかつた。田原の退社と同時に常務になつた岩井の息子は、能率增進といふ名の下に、夜業を復活し、日曜も働かせ、一日の勞働時間も十時間に引延したが、しかも何の不平も起らなかつた。職工達の給料は一割あげて貰つたのである。田原は憤るより先に悄氣た。
辭表を出した日の夕方、家に歸ると、
「おい、今日から又浪人だよ。」
玄關に出迎へた妻にむかつて、彼は元氣よく云つた。
「まあ、ほんとですか。皆さんのおつしやる通りになされぱいゝのに。」
妻は心配さうな顔をして云つたが、もう餘程前から、事の成行は話してあつたので、それつき

り何も云はなかつた。云へば一層夫を苦しめるに違ひ無いと考へたのだつたが、田原はもつと妻から立入つた質問を受け度かつた。それを待つて、自分の立場を明かにし、同情して貰はうと思ふ心持が胸にあつた。

其後も、その問題には觸れ度がらない妻を見ると、

「こいつは餘り無神經過る。」

と腹立しく感じるのであつた。

人一倍羞しがりの田原は、昨日迄がかなり得意だつた丈世間體が悪かつた。毎朝、洋服を着て停車場に急ぐ姿を見送つた近所の人の目に、終日ぶらぶらして居るのを見られるのは堪らなかつた。白晝散歩する丈の勇氣もなかつた。

父のところにだけは報告に行かなければならないと思つたが、これで三度目の浪人なので、愈々面目なかつた。それでも妻に口説かれて出かけて行つた。

「ハハハハハ又駄目か。」

父は大きな聲で笑つた。煙管を持つ手は痼質の僂麻窒斯で震へてゐた。田原は默然としてうなだれた。老年の父の前に、自ら涙が湧いて來た。

學校を出ると直に、學校の世話で入つた保險會社では、些細な事で課長と喧嘩して、半年も居ずに出てしまつた。その次の紡績會社では、職工の味方をして、勞働問題の演説などをやつた爲めに、お覺えが目出度なくなり、しまひには自分の方から辭職しなければくびになりさうな形になつたのだつた。奉公は到底駄目だ。當分本でも讀んでゐようと腹をきめて籠城したが、折柄機械製作會社が出來るといふので、彼は父親を代表して、いきなり常務取締役になつた。親の勢力で出世をするといふ事は、隨分恥しかつた。當座は、友達にあつても、就職の事はおくびにも出さなかつたが、それからそれと知れてしまふと、宴會の席などで、

「社長さん、社長さん。」

とからかはれた。

「あんさん車掌さんだつか。」

とちいつぽけな舞妓が、眞面目な顏をして訊いた時は、同窓會の席上だつたが、彼は座にゐたたまれなかつた。一時に醉が發して、その場で非道く吐いた事があつた。

その社長さんが浪人になつたのだ。どうしても友達には知られ度なかつた。

殊に最近迄、目と鼻の大阪に居た三田――學校時代からの友達で、誰よりも度々仲違ひもしな

がら、何時の間にか又仲よしになり、就中その勤務先の出張所詰になつて、江戸堀の宿屋に友達のゐた三年間は、殆んどお互の顏を見ずに五日と過した事もなかつた――その三田には知られ度なかつた。

その癖三田から手紙でも來ると、氣がとがめて爲方が無かつた。近況を報じるにしても、海の色が春めいて來たとか、山の緑が濃くなつたとかいふやうな、氣羞しい程つまらない事の外は書けなかつた。

家の内も事毎に不愉快だつた。浪人してゐる爲めに苛々して居るのだとは思はれ度なかつたから、つとめて平和な顏附をして居ようと心がけても、つひぞ氣にした事もなかつた些細な事さへ、癇癪の種になつた。女の子ばかり續けて生んで、今又お腹の大きい妻が、又しても女の子を孕んでゐるやうな氣持がして、それも堪らなかつた。

長女がまだやうやく歩く頃だつた。

「なんだ。おやぢにそつくりで、しかも一切の表情を、お母さんのお腹の中に忘れて來たやうな子供だなあ。」

と三田は何時もの無遠慮な口をきいたが、その言葉は親の身には隨分こたへた。そんな事を云

はれる迄は、別段無表情だとも思はなかつたが、それ以來、見れば見る程表情の無い子供に見えて來た。

「なんぼなんでも、三田さんもあんまりですよ。」

母親は流石に口に出して怒つたが、それでも其の言葉を噓だとは云はなかつた。あんまりほんと過るので腹が立つたのである。

「今にごらんなさい、とし頃になれば、自然に表情が出て來るわねえ。惠美子ちやん。」

そんな事をいひながら、妻が子供を抱きしめて頰邊を吸つてゐるのを、田原は度々見せられた。その子供は、何時迄たつても表情の無い顏だつた。二番目の女の子も、どうしたものか、矢張り表情に乏しかつた。目鼻立は決して惡くなかつたが、笑ふ時でも、心底から笑つた顏らしくない堅苦しさが消えなかつた。

「おやぢがあんまり表情があり過る反動だらう。」

と又しても三田は毒口をきいた。

田原は机にもたれながら、ぼんやりそんな事を思ひ出してゐた。自分自身を嘲る苦い笑が浮んで來た。

二人の子供にねだられて、つい此間買つてやつたオルガンも、うるさく耳について困つた。

　鳩ぽつぽ鳩ぽつぽ
　ぽつぽぽつぽと鳴いて遊べ

そればかり繰返してゐるのが口惜しい程氣になつた。田原は舌うちしながら立上つて、階下に下りて行つた。

「惠美子ちやんも、加壽子ちやんも、いゝ子だからちつとおんもで遊んでおいで。」

どうかしてオルガンをやめさせようとも思ひ、退屈しのぎに子供にからかつても見ようと思つて聲をかけると、いきなり飛んで來た長女は、膝に絡りながら、

「お父ちやん、今日も日曜？」

と甘つたれて聞いた。田原はぎよつとして返事が出來なかつた。

「お父ちやん、今日も日曜？」

次の女の子も姉の眞似をして、肩につかまつてゆすぶりながら云つた。此頃何處にも行かない父親を、子供ながらも不審に思つたのだつた。

二人が戸外に出て行つた後で、田原は柱にかゝつてゐるめくり暦を、紙屑籠の中に叩き込んだ。

「馬鹿ッ。」

自分自身を罵つて、紙屑籠の中の暦を見詰めて立盡した。

ふとその暦の幾枚かをめくれば、東京から三田の遊びに來る日の近い事を思ひ出した。今年の正月あつた時、日曜と祭日の續く日にはきつと來ると云つた。約束をすると、どんな事をしてもやつて來るのが三田だつた。

田原は手を延ばして暦を拾ひあげた。一枚々々めくつて行くと、直に出て來た。「此の日東京より三田來る筈」、心覺えに書いた鉛筆の字を、彼はなつかしく讀んだ。

つけつけと毒口をきくし、時には思ひ切つて人を突放してしまふ三田ではあつたが、いざとなると古い馴染だけあつて、一番頼りになるのだつた。自分のうちの子供に迄馬鹿にされたやうな氣持になつた田原は、一瞬間、友達の戀しい心持にひたつた。けれども、自分の失脚――殊にそれを、幾月か三田にかくして來た事を、鋭い批評の前に曝すのは恥辱にも考へられた。

何時の間にか、又子供達は歸つて來た。父親に聞いて貰ひ度さうに、時折此方（こつち）をふりかへりながら、長女の弾くオルガンに合せて、おぼつかなく次女が歌ひ出した。

お寺の屋根から下りてこい

豆をやるからみな喰べよ
たべてもすぐに歸らずに
ぽつぽぽつぽと鳴いて遊べ

ものうい樂器は、しつつこく家中に響いた。田原は涙ぐんだ顏をして、いつたん捨てためくり曆を、又柱にかけて、二階の居間に引上げて行つた。

三田の來る日は一日々々と近づいて來た。曆の紙の減つて來るのを、田原は毎日怖れてゐた。一月、二月、三月と、所在無い日の續いたのを、長つたらしく感じ惱んだが、此の頃の日のたつのは、馬鹿に早く思はれる。

又しても就職口を頼むのは、隨分屈辱を感じたけれど、神戸の叔父にも、大阪の先輩達にも頭を下げて廻つた。

「もう俺はこりこりだ。」

と父は笑つてとり合はなかつたのだ。父が分けて呉れた財産の全部だつた機械製作會社の株式を賣拂ふ外には、差當つて收入の途（みち）もなかつた。ほんとうに金錢の苦勞をした事の無い者には、

金の無い心配が一倍強かつた。平生金には淡白だつた丈、親にも他人にも頭をさげて、融通を頼む事は心苦しかつた。會社の株にしても、世間が不景氣に向ひかけた折柄で、おまけにいい配當も出來ない狀態なのだから、到底もまとまつた買手のある筈が無かつた。若し買手があるとすれば、岩井一派に違ひ無い。矢張り人に頼んで、就職先を見附る以外の途はなかつた。

「今度こそは辛棒します。もう一度小僧から出直して修業します。」

自分の覺悟と言葉に感激しながら、しかも冷汗を覺えていふのであつた。二度三度、同じ言葉を繰返して、無闇に頭をさげて恐縮して見せるのは辛かつた。さういふ日には、家に歸つて機嫌が惡かつた。岩井一派の言ふ通りになつて居ればよかつたと、つい意氣地の無い事を考へて、密かに恥入る事もあつた。

いつそ三田に頼んで、東京に出ようかしらと思ふ事もあつた、顏の廣い三田のおやぢなら、何處かにはめ込んで吳れるだらうと考へたが、今日迄も音沙汰無しに、失職の事を祕しかくしたやましさが、書かけた手紙を破かせてしまつた。

遂々三田の來る日になつてしまつた。いはれも無い不安と羞恥に、一切の事が手につかなかつた。

約束通り行く。一晩泊まる。

出迎へには及ばぬ。

三田の下手な字で書いた葉書を、何遍も手にとりあげて見た。大阪迄出向いてもいいと思つたけれど、又つけつけと、出迎へには及ばないと云つたぢやないかと、やられさうな氣がしてやめた。電車道迄は行かなければ氣が濟まなかつたので、下駄を穿いて往來迄出たが、一面から考へると、一刻でも三田に顔を合はすのを延し度い氣もあつて、愚圖々々引返してしまつた。二階に上つたり下りたりして、迫つて來る時間を怖れてゐた。

今にも三田の太い聲が聞えるに違ひ無いと、動悸の高く打つのを氣にしながら、机の前に坐つて居た。そんな壓迫を感じる事を、忌々しく思ひながら、矢張り卑怯な氣臆れは振切れなかつた。

何となく階下に人聲がするやうに思つて、尚更胸をどきつかせてゐると、

「お父ちやん、お客さま。」

梯子の下で長女の呼ぶ聲がした。彼は附元氣に立上つて、馳下りた。

出迎へた妻と挨拶しながら、玄關に突立つてゐる黑い外套を着た幅の廣い友達の姿を見ると、流石になつかしかつた。

「ヤア、ほんとにやつて來たな。」
　持前の調子に乗り易い性質から、三田の手をとつて引上げた。
「兎に角二階に上つて呉れ。いろいろ話があるんだ。」
　自分の聲に浮々して、思はず失職の事迄も口元迄浮んで來た。
「荷物は無いのか。」
「あるもんか。一晩で歸るんぢやあないか。」
　三田はむつつりした顏をして答へた。彼の額の立皺が、主人のはしやいでゐるのをたしなめるやうに見えた。
「茅野（ちの）は君の來る事は知らないのか。」
「知つてる。今梅田で逢つた。夕方迄用事があると云つてたから、晩に落合ふ場所をきめて來た。」
「用事があつちやあ爲方が無いが、彼奴（あいつ）にも逢ひ度いな。隨分久しく逢はないんだ。」
「向ふでも同じ事を云つてたよ。」
「何か僕の事を云つてやしなかつたか。」

「なんて。」
「何といふ事もないが、あんまり御無沙汰してるからねえ。」
茅野は、既に何處かで自分の失職の噂を聞いて知つて居やあしないかと、ふと疑つて訊いたのだつた。何も云つて居なかつたと云はれると、そんな事を三田にきいたのは馬鹿々々しかつたと思つた。しかし、今にも一切の事實を、自分から打あけなければならないと思ふ豫感が胸にいつぱいになつた。
「いいなあ此處いらは。海くさい匂ひもするし、山も手近に見えるし、こんな處で何もしないで暮してたら、人間の根性もちつとはきれいになるだらう。」
裏手の窓に立つて六甲山を眺めながら、三田はそんな事を云つて居た。何の氣も無く相手のいふ言葉が、田原には一々自分に當つて來るもののやうに堪へた。
「さうでもないさ。何もしないといふ事は、決して人間の根性をきれいにはしないよ。寧ろあくせくしてる人間よりも、もつと根性は汚くなるだらう。小人閑居して……」
「古い。」
力強い聲で、三田は相手の口をふさいでしまつた。

「自分が金儲にばかりあくせくしてるもんだから、そんな事をいふんだらう。」

「決して。實は僕は……」

田原は、もう默つて居たたまれない心持になつて居た。議論好の彼には、如何しても自分の說を相手の耳に入れなくては承知出來なかつた。

「實は僕は、此頃何もして居ないんだ。」

緊張した場面に遭遇した心持で、相手を見守つた。

「何もしてゐないとは。」

「會社をやめたのさ。」

田原は意氣込んだ調子だつた。

「何時。」

「この正月だ。君が大阪に來たらう。あれから一週間とたたなかつた。」

三田の額には癇癪筋がむらむらしてゐた。

「何故今迄默つてたんだ。」

苦り切つて、正面から田原を見返した。

「さう云はれると一言もない。しかしまあきいてくれ。」

田原はひどく悄氣(しよげ)た風だつたが、直に氣を變へて、事の始末を話し出した。人々が想像した程、會社に於ける自分の地位は安固なものでなかつた事、營業狀態が配當を許さなかつた事、株主ばかりが利益を壟斷すべきものではない事、職工の爲めに盡した事、しかも蛸配當を迫られた事、大株主に壓迫された事――結局其處に辭職の外に途が無くなつた事を、今目前にその問題が再燃したやうな勢で、自分の主張を是として說いて止まなかつた。田原は白い額に血をのぼらせ、目を涙に輝(かがやか)して、全く演說口調になつてゐた。

三田は最後迄默つてきいて居た。相手が意見を求めるつもりで口をつぐんでも、矢張り默然と腕を組んで居た。

「それについてだね。僕は君に賴むんだが、今度といふ今度は自分の非力を思ひ知つた。もう一度小僧から出直すつもりだから、何處でもいい、何處でもいいから奉公口を探して吳れないか。」

自分の身の上に感激してしまつた田原は、あれ程迄に惱まされた羞しさを忘れて、此の頃、人々の前に屢々頭をさげたのと同じ態度で、友達の前に甘んじて己を低くした。

「しかし君は默つてたつて喰へるんぢやないか。」

暫時して三田は口を切つた。
「ところがさうはいかないんだ。」
田原は又、どうしても新しく收入の道を得なければ喰つて行かれない事を說いた。
「何しろ親子四人口だからなあ。」
「馬鹿な奴だなあ。又妻君は孕んでるぢやないか。マルクスなんぞをかつぐひまに、新マルサス主義でも奉じればいいんだ。」
三田は、うるさい問題を唾棄する調子で、云ひ捨てて立上ると、緣側の日向に出してある籐の寢椅子に橫になつて、目をつぶつてしまつた。それつきり、ほんとに眠つてしまつたのか、わざ・と意地惡をきめて居るのか、何時迄たつても起きなかつた。

夕方、田原は三田に引張られて大阪に來た。茅野の待つて居る家に行くと、友達は既に盃を前にして陶然としてゐた。
「どうした社長。」
さういひながら田原に盃をさした。

「社長は失職さ。重役の職に離れたの程始末の悪いものはないぜ。てんでつぶしが利かないんだからね。」

側から三田が素早く口を出してしまつたので、田原は爲方なしに受けた酒を飮んだ。

「ほんとか。どうしたんだ。ちつとも知らなかつた。」

茅野は驚いてたたみかけてきいた。

「知らない筈さ。かくしてるんだもの。」

又しても三田が引取つて、意地の惡い口をきいた。中學時代からの友達同志の事だから三人の間には、何の遠慮も無いのがほんとだつた。けれども田原は持前の羞しがりから、三田や茅野のやうな態度には出られなかつた。彼は三人寄つては酒を飮んだ時代にも、兎もすると口達者な二人に戲弄されて居るやうなひけ目を感じ易かつた。まして今、浪人の身を羞てゐる時に、女達の居る席でつけつけやられるのは心外だつた。彼は忽ち醉つてしまつた。

「三田さん、あんた東京へ歸らはつて、ええ嫁はん貰はつたのと違ひまつか。」

顏馴染の藝者が冷かしたのを待構へてゐたやうに、田原は調子づいた。

「三田公のところになんか來る奴はありやしない。酒は飮むし、勤は怠けるし……」

「重役にはなれないし、配當も出來ないし。」
三田は直に奪ひ取つてしまつた。
「矢張り女子もおめへんのか。」
「おめへん。旦那になるには金が無し、情人になるには腕が無し。」
三田は意地惡くかさにかかつて繰返した。
「無しといふ字を數ふれば」
年增の藝者は節をつけてうたひ出した。
「よせよせ面白くもねえ。そいつはあんまり曲が無しだ。」
田原は少し悄氣てゐたが、醉つた元氣で聲を高くした。
「無しといふ字を數ふればか。」
藝者はおとなしくやめてしまつたが、三田はまだしつつこく繰かへした。
「田原の子供は表情無し。」
「ひでえ奴だなあ。」
田原も思はず吹出してしまつた。

「その表情無しが此の頃はかういふんだ。お父ちやん何故何處にも行かないのつて。」
冗談めかして云ひながら、田原はふと子供の姿を想像して寂しかつた。腹を抱へて笑ふ一座の中で、泣き度いやうな氣持もまじつて、苦笑した。一刻も早く、さういふいやなおもひをしない身の上に歸り度かつた。
「三田公。俺を助けて呉れ。どんな處でもいいから、辛棒するから東京につれてつて呉れ。」
舌ももつれて來たのが、相手の膝に膝をつきつけて談じ出した。
「駄目たよ。君は羞しいつて事は知つてるが、恥は知らない男だ。責任感を缺いてる奴に何が出來るもんか。」
三田の言葉は烈しかつた。
「どうして俺に責任感が無いつていふんだ。」
田原は相手を詰つたけれど、何となくそれはほんとだとも思はれて、勢は惡かつた。
「第一に義理知らずだ。友達づきあひを知らない男だ。もともと身上不相應な重役になんかなつてたんだから、間に合はなくてはふり出されるのは當前さ。それなのに、なまじつか羞しがつて、友達にも知らせないのは如何したんだ。今更奉公口を賴むのは虫がよすぎらあ。」

一座はしいんとしてしまつた。鼻唄をうたつてゐた茅野も、驚いた顏をしてかへりみた。とりまきは、あつけにとられて見守つた。
「堪忍して吳れ、三田公。俺が惡かつた。」
酒に疲れてぐつたりうな垂れてゐた田原は、いきなり三田の手を握つて疊の上に額を擦りつけた。
「しかし、今度といふ今度は俺も覺悟をきめた。お前の命令通りになるから東京につれてつて吳れ。」
彼は芝居がかつた調子でいひながら、眞實感激してすすり上げてゐた。
「馬鹿な奴だなあ。」
三田は白けた一座を見てつぶやいたが、意外にしんみりした物言ひだつた。
「よせよ田原。みつともないぢやあないか。」
「みつともなくても構はない。俺はどうせみつともない人間なんだ。」
「よしよし、わかつた俺が引受けたよ。しかしねえ、はつきり言つとくが、此の不景氣に、おまけに重役の落第生と來ちやあ一寸拾ひ手は無いぞ。その上正直のところ、君の長所つてものが何

處にあるんだか、僕にもわからないんだ。友達が美點だと思ふところも、世間から見れば缺點だらう。羞しがりも可愛いや。だらしの無いのもこすいよりはましだ、と友達ならば考へる。だが世の中には通用しないよ……」

三田の聲も何時の間にか涙組んで來た。たしかに酒に醉つてゐる事は、その大きな目の据(すわ)つた事でもわかつた。

「難有(ありがた)う、三田公。」

田原は感激して友達の手を握りしめた。何といふ事も無しに、よくはわけもわからない藝者や舞妓迄、感傷的な氣持になつて、座敷はうそ寒くなつた。

「どうしたんだ。みんなしゆんじまつちやあ困るね。」

暫時(しばらく)して、茅野が氣を利かして口を切つた。

「ほんまにいな。先度のやうに汽車ごとしまほか。」

「しまほ。」

茅野は直に立上つて、いきなり羽織を頭からかぶつた。

「ピイイ……ポツ、ポツ、ポツポツポツポツ。」

停車場を出てゆく汽車の物音を眞似ながら、座敷の中を廻り始めた。その後から、藝者達も、つながつて驅出した。
「ポツ、ポツ、ポツ、ポツ。」
口々にさういひながら、茅野の行くまゝにうねつて行つた。
「三田さん。あんたもおはいり。」
「いやだよ。」
「そんなら田原さん。」
「僕か。」
田原は、涙に濡れた顏を振りあげて、汽車ごつこの始つてるのを初めて知つた。
「早う乘らんと出まつせ。」
「よし來た。」
彼はもう一度三田の手を強く握つて振つて、立上つた。
「おゝ危い。」
「なあに大丈夫だ。」

ふらふらする足を踏しめて、田原はその汽車の最後に加つた。

「ピリピリピリピリ。ゴツトン、ゴツトン、ゴツトン。」

汽車は賑かな笑聲を立てて動き出した。

「馬鹿ッ。」

誰にともなく、ぶつけるやうに云ひながら、冷くなつた酒を手酌で飲んでゐる三田の廻りを、からかひ面で廻るのであつた。しまひには調子づいて、廊下に出て行つた。帳場から臺所の方へ、一列になつた笑聲は流れて行つた。

翌日、田原は自分の家に寢て居る自分を見出した。頭がづきづき痛んで、起きられなかつた。

たべてもすぐに歸らずに
ぽつぽぽつぽと鳴いて遊べ

子供達の歌ふ聲につれて、オルガンの重い響が、韻律を保つて頭に響いて來た。

自分が自宅に寢てゐた事は意外だつた。三田と茅野と、三人で酒を飲んで居た時の景色の外は、何も記憶に殘つて居なかつた。錆のある低い聲で、何からたつて居た茅野は思ひ出せる。毒口を

きゝながら、始終盃を放さない三田の姿も思ひ出せる。しかし肝腎の自分の事は、何も思ひ出せなかつた。

就職の事を、熱心に三田に頼んだのはおぼえて居るが、それは晝間自分の家で話をしてゐた時の事のやうでもあつた。その癖三田が彼を非難した手酷しい言葉は、悉皆忘れなかつた。責任感の無い男だと云つた。義理知らずだと云つた。友達づきあひを知らない奴だと云つた。何もとりどころが無いと云つた。それが一々思ひ當つた。今迄つひぞ自分で氣のつかなかつた、しかも否定出來ない弱點だつた。値うちの無い自分自身を顧みて寂しかつた。

幾度も、起きよう起きようと思ひながら、立上る氣力が無くて、ふらふらしながらも床を離れたのは晝過だつた。

「どうなさつたの。おつむでも痛むのですか。」

氣づかはしさうに、妻は眉をひそめてきいた。

「少し飲み過ぎたよ。」

顏を洗ふ氣力も無く、田原は緣側に足を投出して、又横になつてしまつた。

「少しでは無いぢやありませんか。三田さんと御一緒だと何時でもそれなんですもの。」

妊娠すると機嫌の惡くなる妻は、夫の青ざめた顔を見下して、ぶつぶつ云つてゐた。

「一體何時頃歸つて來たんだらう。」

「今朝の三時頃ですよ。どうして歸つてゐらつしやつたんでせう。又途中で電車を降りて、狐つきのやうに歩いてらつしやつたに違ひありませんよ。馬鹿々々しいぢやありませんか。」

田原はぐるりと寢がへりをうつて、海老になつた。日が西に廻つたので、緣側の足が寒かつた。

「今幾時だらう。」

「もう四時頃でしよ。」

妻は舌打ちしながら立上つて、次の間の時計を見に行つた。

「四時十分前です。」

襖の向ふでいふ聲が聞えたが、臺所の方へ行つてしまつた。

今日は一日飲むのだと云つてゐた三田の、東京へ歸る時間も近づいてゐた。その時間迄、一緒にゐる約束をした記憶が蘇つて來たが、到底も大阪迄出かけてゆく元氣は無かつた。自分が出かけて行かない爲めに、愈々不機嫌な顔をしてゐる三田の樣子は見えるやうだつたが、それでも體を持上る事は大儀だつた。特急の汽車の時間を氣にしながら、あかりがつくと、彼は又寢床に潛

り込んでしまつた。

東京に歸つた三田からは、何の消息も無かつた。田原は又味氣ない日を暮しあぐねた。少しばかりの貯（たくはへ）も底が見えて來た。愈々いけなくなつたら、恥を忍んで、機械製作會社の持株を、少しづゝ賣りに出さう。そんな事を考へる丈でもくさくさした。始終顔をつき合せてゐるので、妻の機嫌の惡いのも、あてつけがましく受取れた。つまらない事を、雙方で云ひ募る事も珍しくなくなつた。

「お父ちやん、何故何處にも行かないの。」

或時も、女の子は不審さうに首をかしげて、父の肩につかまつてのぞき込んだ。

「馬鹿ッ。」

田原はいきなりその横面を張り飛ばした。女の子は驚いて、暫時（しばらく）は泣く事も忘れて、父親の顔を見守つたが、いきなり茶の間の母親のところに驅込むと、火の付くやうに泣き出した。

「何をなすつたんです。ちひさい者をつかまへて。」

母親は青くなつて飛んで來た。唇が震へて、滿足には物もいへなかつた。田原は甘んじて妻に

叱られてゐた。

或日、神戸の叔父から話があるから來いと云つて來た。

「どうだ。ほんとに辛棒してやつて見る氣になつたか。」

叔父は、自分の計畫してゐる仕事に使つてやらうと云ふのだつた。

「今度こそは大丈夫です。今度と云ふ今度は全くいい經驗でした。もう二度と御心配を懸る様な事は斷じてしません。」

田原は勢づいて、心を入替へたといふ意味の言葉を繰返した。

「それでは他の者にも話をして見るが、但し此の不景氣の時代だから、おいそれと事は運んで呉れないかもしれない。その邊の事も考へないといけない。」

叔父は田原の早呑込を押へるやうに、ながながと世に處する道迄説いてきかせた。

近いうちに又逢ふ事にして、田原は晴々した氣持で家に歸つた。此の頃は全く知らなかつた輕い氣分で、子供へ土産のおもちやも買つた。

家に歸ると、机の上に三田の手紙が待つて居た。彼はなつかしく思つて封を切つた。

奉公口を見付けた。金ばかり持つてゐて、頭腦の空つぽな年寄に頭をさげて廻つた結果だ。

重役の癖に、職を失ふ樣な友達を持つた事を悔んだ。それ程厭な思ひをした。何事によらず、他人に賴むのは厭な物だ。二度とこんな思ひはさせてくれるな。扨て奉公口は三つある。紡績會社と、電氣會社と、製糖會社だ。どれがいいかわからないが、取捨は君の自由だ。友達がいやだと云つたらお斷りしますと、先方にも明白に言つてある。

直ぐ東京に來い。待つてゐる。

讀終つて、田原は息も出來なかつた。三田はほんとに引受けてくれたのだつた。折角遙々來た時に、自分は醉拂つて怒らしてしまつたと思つてゐたが、あの不精者が自分で先輩の間を頭を下げて廻つてくれたのか。田原は涙に胸が迫つて來た。

けれども、叔父の話が既にあつた。殊に先刻、あれ程立派な口をきいて、是非とも自分を使つて吳れと賴み込んで來たのだから、今更斷る顏が無い。三田の話もいいけれど、どんな會社なのか、その內容もわからないし、第一家を擧げて東京に行かなければならない。おまけに三田の事だから、ほんとに小僧仕事をさせるつもりでゐるかもしれない。田原はああだらうか、かうだらうかと、考へ迷つて、あげくの果は、愚圖々々に、友達への返事は延ばす事にした。

叔父の話は進んで來た。けれどもその計畫の信託會社が、何時創立を見るかは豫想出來なかつ

た。兎に角株式を引受ける顏ぶれも見當はついて、愈々設立の上は、田原は重要な地位に置いて貰ふ事にはなつた。

三田に對しては、始終心がとがめてゐた。氣短の癎癪持は、青筋を立ててゐるに違ひ無い。しかし此方の話のきまる迄はうつかりした事は云へないのだ、田原は濟まないとは思ひながら、二週間近く、遂々返事を出さなかつた。

近いうちに、仕事が出來るといふ事は、彼の心持を強くしたばかりでなく、家の內を明るくした。恰度二番目の女の子の五度目の誕生日で、赤飯を炊いた日は、田原の就職の前祝も含めて、妻は大きなお腹を抱へて、御馳走に苦心した。

田原は、長い間の不愉快な浪人生活に、新しい轉換期の來た喜悅に醉つてゐた。殆んど生れて初めてのやうな、賑かな晩餐の卓を、親子四人で圍んだ。機嫌のいゝ父親を見て、子供達は殊にはしやいだ。

ところへ女中が電報を持つて來た。田原は箸をおいて開いた。

ナシノツブテニハラヲタテホウコウグチコトワツタクルナ

三田から來たものだつた。返事をやらなかつたのに立腹してゐる額の立皺迄、ありありと見え

るやうだつた。
「三田さんですか。しかたがないぢやありませんか。」
妻はのぞき込んでさういつたが、田原は默然として沈んでしまつた。三田の怒るのも無理はない。俺は責任感の無い男だ。義理知らずだ。友達づきあひを知らない奴だ。三田は屹度、絶交狀のつもりで、この電報を寄越したに違ひ無い。田原は永久に、その友達に見捨てられた氣持がした。
けれども爲方が無い。暫時して彼は些か思ひ返した。兎に角自分は職業にありついたのだ。もう二度と、他人に迷惑をかける事も無い。此の頃のやうな不愉快な日を送る事も無いであらう。さう考へて來ると、隨分古い友達だつたが、三田を失ふ事よりも、職業を得た喜びは、心の中にいきいきと芽を吹いて來た。
子供達にせがまれるまゝ、
鳩ぽつぽ鳩ぽつぽ
ぽつぽぽつぽと鳴いて遊べ
田原は長女の彈くオルガンに、聲を合せてうたつた。（大正九年十二月二日）

葡萄酒

學校から歸ると、机の上に博士夫人の手紙が載つてゐた。

おはなしし度い事がありますから今日お出で下さいませんか。晩餐を差上ます。

手短に用事ばかり書いてあるのだが、それでも氣がかりだつた。何時からともなく、自分に對する夫人の態度に恐怖を感じてゐたのが、此の頃は人目にもただならず映ると見えて、日本人の學生の間で、勿論冗談には違ひ無いが、屢々からかはれるやうになつた。つい此間の日本人會の時も、少し廻つた酒の醉は、人々の話を放縱にして、夫人と自分の間柄を、あられもない事のやうにはやし立てた。極力それは否定しながら、しかも自分に恐怖の念をさへ抱かせるに至つたさまざまの過去の場面が、まざまざと浮んで來る。殊に夫人の目——絶えず注意深く四方に働いてゐる癖に、時には凝然と動かずに自分を見詰る目、その色つぽい目を夢にも見た。

一度帽子かけにかけた帽子をとつて、又戸外に出た。到る處の草木の綠が濃くなつて、むせつぽい、甘酸つぱい匂ひが町中にも漂つて居た。道端の芝草の日向に、木鼠や鳩が群つて遊んでゐた。

川岸の博士の家にも、午後の日は惜み無く漲つて、家を取巻く灌木のしげみから、小鳥の聲が震へながら、青空に流れて來た。

入口の呼鈴(ベル)を押すと、何時もの通り黑坊の女中が出て來て、西瓜の色の厚ぼつたい唇の間から細かい眞白な齒を見せて、無意味な微笑で迎へながら、直(すぐ)に客間に案内した。

夫人は、白地に桃色の縞の入つた袴(スカアト)の上に、薄紫の毛糸の短衣を着て、特徴のある小刻(こきざみ)の速足で、近々と寄つて握手した。

「失禮。少し風邪を引いたやうで、こんな風をしてゐます。」

椅子に掛けながら、その短衣の襟をつまんで見せた。

「先日は難有(ありがた)うございました。おかげでみんな愉快に遊びました。お留守をいい事にして、隨分無遠慮に騷ぎました。」

「貴方(あなた)も日本の歌をうたつたのですか。私にも聞かせて下さい。エラがさう云つてゐました。」

「私は駄目です。歌なんかうたへません。」

「矢張り貴方は羞しがりん坊——でせう。」

夫人は小首を傾けて、美しい襟首を見せながら、よく響く聲で笑つた。

「博士はお留守ですか。」

「えゝ散歩。」

「先刻程御手紙を拜見しましたが、何か御用でせうか。」

「えゝお話があるのです、博士ではありません。私ですの。」

夫人は自分の夫を、此の家に出入する若い學生達には、彼等が呼ぶやうに博士と云つてゐた。

「貴方、怒つてはいけませんよ。」

急に眞面目な顔附になつて、椅子を乘出して來た。

「はつきりいひますとね、これから每月の日本人會ですね、あれを他所で開く事にして頂き度いのです。突然こんな事をいふと變にお思ひでせうが、先日、みなさんお酒に醉ひ過ぎたのではありませんか。」

何かしら自分達が失策をしたのを咎められてゐるのに違ひ無いと、見當の付かない懸念で、默つて夫人の顔を見守つた。

「勿論貴方は御存じない事なのです。けれども、お友達の中に、少しいけない人がありました。」

強ひても小言をいふ時にふさはしい嚴しさを裝はうとしながら、しかもその目は笑つてゐた。

「誰か、何か粗相でもしましたのですか。」

「誰といふ名は申しません。けれども、集つた人の中の一人が、臺所に行つて、エラに接吻したのです。」

夫人のいふところに據ると、先頃、海岸へ遊びに行つた博士夫妻の留守中、日本人の學生が集つて、月次會を開いた時、麥酒にでも醉つたのであらう、中の一人が、此家の黑坊の女中を捉へて、強ひて接吻したといふのであつた。

博士といふのは、數年前に大學を退隱して、今では專門の心理學よりも、深い趣味と造詣を持つ東洋美術の硏究に沒頭してゐる老教授であつた。博士は、外國から勉強に來てゐる學生を可愛がつた。印度人、支那人、殊に日本人は、別段博士の硏究してゐる美術の智識の無い者迄、何かしら傳手を求めては、その家に出入して、萬事賴りにしてゐた。數多い中には、學資の蔓の切れた時泣きついて、しかも迷惑をかけつぱなした者もあつた。胡麻鹽の髯の中に、固く結んだ博士の脣は、殆んど無駄話の爲めには開かれた事がなかつたから、そんな學生のあつたといふ事も、博士自身は云はなかつた。

夫人はまだ若かつた。親子よりももつと夫妻の間には年齡の距があつた。それがやがて、心の

距であつたかもしれない。あらゆる點に於て、博士と夫人とは氣質が違つてゐた。夫人はかなり派手好だつた。異邦の學生達に對しても、機會さへあれば、奴隷に對する女王の態度をとる事を喜んだ。

博士も夫人も二度目の結婚だつた。書齋の壁に古びて懸る脂色の油繪の肖像に、先夫人は笑顔を止めてゐる。田舍の百姓の娘のやうな、がつしりした、無邪氣な顏附である。決して今の夫人のやうな美しい人ではなかつた。

自分は多少美術鑑賞の目も持ち、斷片的ながらも智識もあつたので、曾て博士が日本迄出かけて行つて集めた浮世繪の整理の手傳を頼まれて、殊にしげじげ出入した。傍ら夫人に日本語を教へてゐた。來年の夏は夫人をつれて、又日本へ行くのだと博士は云つてゐた。

日本人の學生は、毎月一度會を開いてゐた。一番古參だといふので、會長といふ名の下に、自分は世話人に選ばれてゐた。何時も會場に困つて、多くは素人下宿の三階の自分の室に集つたが、その不自由には惱んでゐた。話をきいて、博士はその家を提供すると云つて吳れた。月に一度や二度は、夫人と共に海岸に行く事になつてゐるので、留守中なら、何時でもいいといふ事だつた。吾々は喜んで好意を受けた。

博士の家では、夫婦者の料理人が、毎日通つて來る事になつてゐたが、主人が留守の間は、黒坊の女中の外には誰も居なかつた。エラは漸く女らしくなつた體をしなしなさせながら、日本人會の時にも、お茶の世話などをしてくれた。西瓜色の脣の間から白い齒を見せて、いつも笑つてゐた。そのエラに接吻したといふのだ。

最初のうちは遠慮もあつたけれど、段々馴れてしまつて、罐詰類を買集め、麥酒瓶迄持ち込んだ。國際法の研究に來てゐるのだと云ひふらしてゐる海軍士官、私立大學の英語の教師、牧師、經濟科の生徒、つい近頃西部から來た法科生、それに自分を加へて六人だつた。議論もし、雜談もし、少し醉つて歌をうたふ者もあつた。平生は人目に觸れ易く、肩身の狹いヂヤツプの身の、不知不識いぢけてゐたのが、誰に遠慮もいらないところから、はめをはづした事は爭へなかつた。けれども、誰かゞ、エラの脣に接吻したといふ事は思ひもかけなかつた。食器の出入には、自分も幾度となく臺所に通つた。陽氣な異邦の學生の集會を、珍しさうに、一人寂しく眺めてゐる彼女に、菓子や果物を分けてもやつた。引張つて來てうたはせようと云ひ出した者もあつたが、それが誰だつたかも忘れてしまつた。兎に角、エラに接吻を強ひた者があつたといふ無作法を、自分達の仲間全體の行爲として恥入つた。

「わかりましたか。」

うつむいてゐる頭の上で、多少からかふやうな調子でいひながら、夫人は椅子の儘近々と寄つて來た。短い袴（スカアト）の下から、肌の色の桃色に透いて見える白い絹の靴下と、白い靴を穿（は）いた二（ふたつ）の足が、何時の間にか、自分の伏せた目の前に來てゐた。

「どうも濟みませんでした。」

咎められた不始末を詫びながら、心持身を退（ひ）いて夫人を見た。濡色の大きな瞳が、動かずに自分の目にそそがれてゐて、しかも二人の間隔は、身動きも出來ない程迫つてゐた。惡寒に似た震撼が、身内を波打つて走つた。

會の時も會の時で、男ばかりの無遠慮と、殊に下（しも）がかつた話の好きな日本人の事とて、いろいろな戀愛の冒險と、慾情の經驗が話材になつたが、一番年少の自分は、今目の前にゐる夫人の寵愛者として、しつつこくからかはれた。

「何しろ博士に強ひて葡萄酒を飲ませる奥さんなんだからね。」

二言目にはさう云つて冷かした。誰が誰から聞いた話か、博士が夜の食卓につきものの葡萄酒は、老齡の夫に滿足しない夫人の強要するものだといふ噂は、學生の間に知れわたつてゐた。元

來酒をたしなまない博士の食卓に杯を見るやうになつたのは、今の夫人が來てからだといふ事だつた。屢々晩餐によばれて、家族の一人のやうに扱はれる自分は、老博士の蒼白い顔に、一杯の葡萄酒の薄紅に色に出て、凹んだ目の光の俄に輝いて來るのはよく知つてゐた。まさかにとは思ひながら、イブセンの戯曲にあるやうな夫婦間の場面を想像して、そんな噂さへ、頭から否定する事は出來なかつた。

今も亦そんな事迄思ひ出して、自分に對する夫人の親し過ぎる態度に、一層不安を増して、自分は體を固くして、羞恥と怖れに赤面した。

「つまりお酒の上の事なのですねえ。」

夫人の聲は優しかつたが、自分の耳には重苦しい壓迫だつた。

「私はそんな事は構はないのです。勿論いい事ではありません。けれども博士は、さういふ事は大嫌です。」

「御尤もです。吾々はあんまり博士にも貴方にも馴れ過ぎました。お詫の申上やうもありません。」

「いいえ、貴方の知つた事ではないのです。輕いいたづらなのです。けれども、日本人會丈は當

分別の場所にして下さい。矢張りお酒は人の愼みを奪ひますからねえ。」
「濟みません。」
あやまる言葉に窮して、同じ事を繰返しながら、しかも醜い黑坊の西瓜色の脣を想ひ浮べた。
「みなさんにも誤解の無いやうにして下さい。今迄通り遊びに來る事は構ひません。ただ集會丈はお斷りし度いのですから。わかりましたか。氣持を惡くしてはいけませんよ。」
夫人の聲が愈々滑かに、耳近く響いて來るのを怖れて身を固くしてゐた。凝然と見詰める瞳は動かずに、しかも微笑してゐた。重たい沈默がつづいた。
「矢張り寂しいんでせうね。遠く故鄕を離れて、寂しいからこそ、あんな黑坊にもからかふ氣になるのですね。」
又からかひ氣味にたたみかけて來た。
「貴方も寂しくはなくつて。」
「いいえ私は……」
それつきり言葉が脣を離れなくなつてしまつた。
日が川上の山の背にかくれ初めたので、室の内は俄に暗くなつた。玻璃戸の外の川水も、うす

ら寒く光つて來た。面はゆさをまぎらす爲めに、自分はその川の景色に視線をそらした。
「貴方は寂しくはないの。」
暫時して云つた夫人の聲は微かに震へてゐた。自分の胸の動悸は急に高くなつた。
「……私は寂しいわ。」
嘲るやうな夫人の笑が、その美しい顏に電波の如くひらめいた。と思つた時、夫人の膝頭は自分の膝頭に接して、その肉體の感觸と同時に、二人のどつちが震へるのか、自分は肌寒く身震ひした。
「…………………」
一生懸命で立上らうとした肩の上に、夫人の手が重たくかかつた。暑い息が波を打つて額にかかつて來た。
「いけません、いけません……」
咽喉を塞いで出ない聲を、口の中で叫びながら、ふりもぎらうとした甲斐も無く、靑ざめた額の上に、狂暴な脣が燃えた。
烈しく犬が吠えながら、眞一文字に室内に驅込んで來た。夫人も驚いて手を放した時、ちひさ

い犬は、室中を驅廻つて吠えた。老いたる博士の姿が、玻璃戸の外に、影のやうに現はれた。

「臆病者。」

夫人は自分の方に皮肉ながしめを投げてつぶやきながら、何事も無かつた風で、博士の側に小刻にかけて行つた。

博士は痼疾の僂痲質斯で硬直した脚を引擦りながら、靜に室內に入つて來た。

「今日は。」

黑いつば廣の帽子をとつて椅子にかけた。何時に變らぬ無愛想な、その癖目もと口もとに、慈愛の皺を深く刻んだ顏を、自分は自分の混亂した心持から、正視する事が出來なかつた。

夫人は少しも平靜を失はず、夫の側に寄添つて、膝の上の小犬にたはむれて居た。

あかりがついた。夫人が食卓の準備に行つてしまつた後は、愈々博士の前には居惡かつた。何時も斯うして、ぽつりぽつりと東洋美術に就ての博士の意見をきかされる外は、殆んど何の話も無く過すのではあつたが、今日丈は居たたまれない心持を消す事が出來なかつた。今にも詰責されはしないかと思ふ恐怖が、自分の心の平靜を奪ひ去つた。

そんな事には頓着無く、博士は此の頃買集めた浮世繪の整理から得た種々の智識と疑問を、犧

牲の羊の如く只管をののいてゐる若者の前に展開しながらあきなかつた。

「お食事で御座います。」

エラが迎へに來る迄の小一時間を、自分は終始良心の反射に苦しみ通した。食事の用意の整つた事を聞いた時は、全く救はれた氣持だつた。西瓜色の厚ぼつたい脣からもれる白い齒を、一層印象強く見た程である。

食卓には、暖い湯氣の立昇る肉汁の入つた器を前にして夫人が待つてゐた。あけ放した窓からは、夜風がライラックの香を運んで來た。杯には葡萄酒が注がれた。

會話は夫人が主になつて、此の頃讀んだ佛蘭西の小説の筋などを面白さうに話した。博士はそれを聞いてゐるのか、或は何か外の事を考へて居るのか、默々として食事をしてゐた。僅かばかりの葡萄酒に、額から頰邊迄あかかつた。

自分は夫人の話に相槌を打ちながら、實は浮の空できいて居た。先刻の出來事に驚いた胸を打つ高い動悸は、何時迄たつても消えなかつた。意外な場面を、博士は果して見なかつたのだらうか。夫人は自分とは違つて、博士は何も知らないものときめて居るのだらうか。知つてゐても平氣で、かうまでおちついて居るのだらうか。

ほんとに夫人は、何時もに變らなかつた。若々しい聲が、葡萄酒に濡れた脣から、澱無く連續して來た。或る伯爵夫人の若い美術家に對する戀の物語を、夫人は夫人自身が脚色したのではないかと思はれる迄、濃い色彩で描出した。

「いかがです、おひとつ。」

話終つて、又葡萄酒を勸めた。

「貴方は召上る口でしたねえ。」

瓶の口から流れ出る酒は、杯のふちよりも高く、あふれるばかり盛上つた。

「それ程澤山頂ける方ではありません。」

「でも、もうひとつ位はいいでせう。博士のやうに一杯で眞赤になるやうな事はありますまい。そのくせお酒は吟味しないとやかましいのですよ。」

夫人は博士の方に顔を向けて云ひながら、いたづらな横目を自分の方にそそいだ。

「それは……」

博士は何か云はうとしたが、思ひかへしてやめてしまつた。

ふと話が途絶えて、岸をうつ水の音が聞えたが、夫人は沈默を打消すやうに、又しても小說に

話を戻した。
「お城のやうな家に住んで、常に新しい戀を求めてゐる、並びない容色で、しかもその容色の衰へを感じ初めた伯爵夫人――貴方は如何思ひます。」
とたんに食卓の下の自分の足を、夫人の靴のつまさきが強く押へた。
自分の心の動揺は、恰度取上げた杯を持つ手に傳つて、なみなみと湛へた酒は、狹い杯の中にゆらゆらと大きく波を打つてあふれた。
「酒は愈々古きを求め、戀は日に日に新しきを求む。さういふ諺を知つてゐますか。ハハハハハハハハ。」
博士は、一度口籠つた言葉を口にしたのであらう、つひぞ笑つた事の無いのが、嗄れて咽喉にからんだ聲で、一人高々と笑つたのである。
驚いて博士の顔を見ながらも、夫人の靴は一層強く自分の足を押へて放さなかつた。
博士の笑に胸をおされた自分は、冷い身震が全身に流れるのを感じた。杯の酒はゆらぎやまず、雪よりも白い卓布の上に、血の色を染めて流れた。(大正九年十二月十日)

虫の命

一

霜に荒れた庭の中にも春が來た。竹藪の垣根の際の崩れた土の間から、蕗の薹が萌え、雜木の木立には、終日小鳥の聲が聞えるやうになつた。死んだ妻の慰みだつた花壇は、手入れもしないのに一面に綠になつて、見てゐるうちに、いろんな草花がすくすく延びた。

雪や霜や木枯に壓迫されながら、土の下に根を張つて潛んだのが、新生の喜悅に力の限り生長し初めた自然の不可思議を見れば見る程、彼は自分の氣力の衰へを、ひしひしと思ひ知つた。梅が咲き、櫻が咲き、桃が咲き、沈丁花の强烈な香が庭中に漲るのも、堪へ難い刺戟だつた。頭は痛み、體はものうく、晝は何事も手につかず、夜は熟睡出來なかつた。たまたま深い睡に落ちれば、きまつて亡き妻を夢に見た。

元來虛弱な體質ではなかつたのだが、感じ易い生れつきが、何事にも憧憬の念をいだかせ、且つ何事にも失望させた。意志も感情も人並以上に强く、しかもその二つの力の調和を缺いてゐる

事が、彼の半生を不幸にした。世の中の一切の事にうら切られたと思ふ寂寞が、完全に彼を孤獨にした。僅かに心を許した妻に死なれた事は、やがて肉體をも不健全にした。父親の外の誰の手にも行き度がらない子供を抱へて、彼は此の人生をやりきれなく思つた。

子供の時分から好きだつた文學に對する熱情から、役人上りの實業家の父の意志に逆つて、大學では文科の學生となつたが、卒業の時期の來る前に、早くも自分の才能に疑惑を抱き始めた。年少にして出した處女作が、浪漫主義全盛の時代の文壇に認められ、新進作家としてもてはやされた時は、自分も急ち有頂天になつたが、年を經ずして其作品の無價値な事を、誰よりも先きに、自分自身明確に認めたのである。そればかりで無く、無上に美しく想像した藝術家の生活が、いざ内輪に入つて見ると、彼が平生蔑視した小商人のやうにけち臭い掛引があり、雜誌や新聞の記者の機嫌を兼ね、仲間ぼめの爲めの交際もしなければならず、互に批評しあふ時も、相手によつて強くも出ればお世辭もつかふ心持迄、一切が彼の潔癖に手痛く觸れた。新進作家の花形として迎へられたのが、急ちにして如何なる流派集團からも孤立し、同時に其の作品迄、極めて簡短に、坊ちやん藝として批評にも上らない事になつた。

卒業と同時に、彼は又經濟科の一年生として同じ學校に通ひ出した。主として社會問題の研究

をこころざしたのであつたが、單に遣直(やりなほ)してでも經濟科に籍を置くといふ事が、その頃既に健康を害してゐた父の滿足だつた。幼い時に母を失つて、父親の手で育てられながら、少年の日の彼は事毎に反抗した。けれども、父の齡が傾き、自分の方が大人になつて來るにつれて、父を憐れむ心が深くなつた。母の亡くなつた後、小間使を引上げたお多代の肩につかまつて、坐骨神經痛の足を引擦つて歩く父の姿を見ると、何の理由も無く、單に亡き母の地位を盜んだもののやうに憎んだその妾にさへ、荒い言葉は使へなくなつた。廣い屋敷の中に、親と子は、何一つ爭ふ事も無く、しかし寂しく暮してゐた。

嫁の話も方々から持つて來た。門閥と金力とを第一の條件として數へられる女の寫眞も、度々見せられたが、現代の功利的な教育を受けた女の、厚白粉の下にあらはな Vulgarism が堪らなかつた。寧ろ無智な女——例之(たとへば)藝者とか、女工とかいふやうな、彼が生れて育つた家の空氣とは全く別種の世界に住む者に對して、愛憐の情を感じる事が多かつた。

それでも、心寂しい時折に、茶屋酒も飲み習つたが、其處でも彼は人々が興がる遊蕩を、完全に享樂する事は出來なかつた。野獸のやうに慾情の對象としてのみ女を見る男の群も、その男達に甘んじて自身を賣る女達も、內輪に入(はい)れば入る程、あき足りなく思はれて來た。

「貴方はお遊びにいらつしやつて面白いんですか。」
と待合の女中に聞かれる程、酒を飲んでも心は沈むばかりだつた。
「どうかして面白くなり度いと思ふのだが、矢張り駄目だ。性分なんだから。」
「それつてのが、つまりは極まつたお相手が無いからですよ。」
誰彼と相手を取持たうとする親切が、あさましく思はれて爲方が無かつた。
その癖、つまらないつまらないと思ひながら、築地の其の小待合には長い間通つた。長い間に、何時とはなしに、小夏に丈は密かに愛着の心が動き出した。
向合つて見ると、寂しいながらに全體の線の細くなだらかないい顔だつたが、人々の間に坐つて居ると、何から何迄控へ目で、口數の少ない、目立たない女だつた。笑ふ時にも、二重目蓋の切れの長い目尻に皺を刻む外は、微かな笑聲が口許に浮ぶばかりで、聲を立てた事はなかつた。
その控へ目なそぶりの中に、眞實の籠つてゐる事を感じた時から、彼は相手に對して眞當面に口をきく事が出來なくなつた。自分の心の内を見透かされさうな初心い怖れが胸を震はせた。長い事、二人は誰の口の端にも上らず、表面は全く無關心で過ぎた。しかしお互に、憧憬に似た若々しい心持を、他人には知らせずに、打あけていふ事も出來ないで、密かに感じあつてゐた。

幾月かの間に、彼はたつた一度女の手に觸れた事があるばかりだつたが、肱かけ窓の障子をあけて、少しばかりの酒の醉にうつとりしてゐた時、俄に激しい地震があつた。側に坐つてゐた小夏は、夢中で彼に縋りついた。平生取亂した事の無いのが、眞青になつてゐた。縋りついた手を握つて、地震が止んでも放さなかつた。放すまいと思つてゐた。何時の間にか、握り合つてゐる二人の手が、怖れと羞しさに震へて來た。彼はわくわくする胸の動悸に堪られず、手を放して、てれかくしに笑つた。相手も顏を紅くして笑つた。目と目を見合せた二人の目に、涙がいつぱいたまつてゐた。

それつきり二人の間は近づかなかつた。若しも續いて逢つて居たら、どうにかなつたのかもしれなかつたが、小夏は間も無く其の土地にゐなくなつた。

「あの人も可哀さうに、お母さんてのが繼母で、お父さんてのが呑んだくれなんですからねえ。」待合の女中は、よくある話さといふやうな平氣な顏で、ていさい丈に眉をひそめた。朝鮮に行つたといふ噂だつたが、それつきり行衛を知ら無い。

小夏の事は、隨分長く忘れなかつた。その面ざしが似て居るといふので、途上で見た娘を妻に貰ふ事にさへなつた。

學校の二度目の卒業も近づいて來た頃だつた。或日散歩の歸りに、何時の間にか曇つた空が、灯ともし頃に雨になつた。彼は電車に急いで居た。ある橋の際だつたが、雨具の用意の無い人が狼狽てて駈け出して行くのに、盲目の乞食が、橋の上に佇んだまま濡れて居た。濡れるのを怖れて馳出す人の誰が振向くものか。それでも乞食は皺だらけの掌を差延ばして待つて居た。幾何かやらうかな、と思ひながら、自分丈が進んで働くのを氣がとがめるやうな躊躇があつた。ふと、彼の前を、何時から同じ方角に歩いて居たのか、矢張り濡れて行く娘があつた。裾を端折つたり、足袋を脱いだり、肩に手拭を掛けたりする女とは違つて、草履なのに、觀念した風でおちついて濡れてゐた。橋の上を五六間行過ぎたが、戻つて來て、帶の間から錢入を出すと、いくらかを乞食の掌に置いた。彼はその間に後から追ひ越したが、雨にも頓着しないで、わざわざ戻つて來た娘の姿が心に殘つた。振向いて見た。思はず聲を出しさうになつた程驚いた。小夏にそつくりだつたのである。彼は或る商店の軒に立つて、さつさと通つて行く娘を、もう一度見直した。首の細い姿迄、姉妹と云つてもいゝ程似て居た。不思議な因縁が、その時の彼の心をそそのかして、彼は娘の後から歩いて行つた。少し行つて横町に曲つた娘は、露路の入口のしもたやの格子をあけて入つた。翌日彼はわざわざその家の前を通つた。二度三度、その後も通つた。

學校を卒業して、父にしづつこく妻帶を勸められた時、彼はその娘を選んだのである。或る大きな地主の差配人の娘だつた。半生の閲歷から、そんな人間を輕く見るやうに馴れた父は、親類の者を味方にして反對したが、彼の生れつきの片意地は、その反對の理由の無い横暴に一層つのつて、昔の腕白に歸つたやうに、父の激怒の前にも肯んじなかつた。

山の手の高等女學校を出たには出たが、もともと育ちの違ふ新妻は、お屋敷風の家の内にはふさはしいものではなかつた。氣むづかしい舅の目には、その立居迄が腹立たしかつた。自分の最愛の一人兒を、手練手管でたらされたやうな、見當違ひの憤懣さへ感じてゐた。素直に弱々しい心を持つて生れた妻は、ただ涙組むばかりだつた。彼女には、先天的に、反抗も怨恨も惠まれてゐなかつた。おどおどしたその風情が、彼には一層いとほしかつた。自分ばかりを頼りにして、身の置所も無い世界に投入れられた哀れなものを、涙をもつて愛したのである。

翌年男の子が生れた時は、初孫の可愛らしさに、頑くなな舅の顔にも喜悦の情がかくせなかつた。

「難有う。難有う。」

難産の後の産褥に靑ざめてゐる嫁の手をとつて、老人は嬉し涙を流した。

家の内は赤坊の泣聲で賑かになつた。生れ變つたやうに機嫌のよくなつた老人は、その赤坊がよちよち歩き初めた頃、突然腦溢血で死んでしまつた。

廣い家やしきの主人は若夫婦に變つた。靜に平和な日のたつに連れて、子供は育つには育つたが、如何したものか物におびえ易い性分で、二度三度、些細な事に驚いて、ひきつけた事さへあつた。

「私のちひさい時も斯うでしたさうです。」

妻は行末を案じて暗い顏をした。

彼は父の關係してゐた銀行に通つて居た。形ばかりは勤人になつて居たが、彼の對人的、對社會的潔癖と、纖細な神經が、到底心底からの勤人にはさせなかつた。上役の機嫌をとる事、心にもない世辭追從、嘘僞でかためたつきあひに、己れを卑屈にする丈の根性も、又物質上の勞苦の無い身の上として、その必要もなかつた。曾て文壇の裏面の醜惡に面をそむけたと同じ心地から、彼は再び寂しい孤獨を、銀行の一隅に保たなければならなかつた。又してもお坊ちやん扱ひをされて、お坊ちやんに生れた悲哀を、沁々味はう事になつた。そんな厭なおもひをして迄、世間體を氣にして安月給を貰ふにはあたらないと考へて、幾度となく退職の意をもらしたが、心弱い妻

の涙に止められて、愚圖々々に過してしまつた。
一年、二年、單調にものうい世の中をよそにして、彼は只管妻と子の爲めに慰められて來たのであつたが、元來丈夫でなかつた妻は、何時の間にか、肺を病む身になつて居た。
「私が死んだら、優しい方を貰つて下さいまし。それでないと子供が可哀さうですから。」
何時も涙組んで、嘆願するやうに云ふのであつた。
「死ぬなんて、そんな事があるものか、早くよくなつて呉れなくちやあ困るぢやないか。」
さう打消はするものの、如何いふわけか、妻は到底死を免かれないといふ氣持が最初からした。眉と眉の間に寄る憂皺の爲めか、首筋のか細い姿の爲めか、薄命の相は明かだつた。
「いゝえ、ほんとに私は死ぬに違ひないと思ひますの。」
平生はつひぞ自分を主張した事の無い妻が、此の事に限つて執拗にいひ張るのであつた。
「やさしい人で無いと子供が可哀さうですから……」
「そんな事をいふものぢやあないよ。若しもお前が先きに死ぬやうな事があつたら、僕は決して二度と女房なんか持ちはしない。」
あんまり妻がいひはると、彼は斯う答へるのを常とした。妻は寂しい顔に感謝の色を浮べて、

堪へようとして見張つた目から、堪へ切れずに涙を流すのであつた。
妻が死んでしまつてからの彼の生活は、全く慘めなものであつた。父親以外の人には馴染まない病弱な子供を抱へて、暗い家の内に沈んでしまつた。今迄は、僅かながらも強ひて世間の交際にも顔を出す事のあつたのが、そんなつとめ氣さへわづらはしくなつた。いやで堪らなかつた銀行もやめてしまつた。墓參に行く時の外は、戸外に出るのもいやになつた。庭の中を時折歩き廻る事もあつたが、それさへ、光の強い空を見れば、魂に迄も壓迫を受けるやうな堪へ難さが伴つた。妻の一周忌が來る迄に、彼の健康は著しく衰へてしまつた。
その一周忌が過ぎるか過ぎないのに、平生は變物扱ひにして寄付かない親類共が、後添を持てとうるさく勸めに來た。彼にはさういふ希望はちつとも殘つてゐなかつた。閨の寂しさはあつても、それは慾情の爲めではなく、單に亡き妻のやうに心底から愛し、憐れみ、いたはる事の出來た相手の無い寂寞に外ならなかつた。屢々夢に、亡き妻と眠る事があつた。さういふ事のあつた翌朝の疲勞が、愈々心身を腐らして行つた。
つい昨夜も、彼はありありと妻を抱いて眠つてゐた。樂しく、溫く、柔かい肉體の接觸さへ感じてゐた。不意に、物におびえた子供の泣聲に、その樂しい快い夢からさめた。

「如何したの。夢でも見たのかい。」
ふとんの中ですすり泣いて居る子供の背中を叩いて訊いた。
「母ちやんは。」
子供はすすりあげながら、身の周圍を見廻して、母の姿を求めた。
「母ちやんが――如何したつて。」
愕いて、彼は子供の顔をのぞき込んだ。
「もう行つちやつたの？」
子供は涙のいつぱいたまつた目をあいて云つた。
慄然として、思はずしらず手を放したが、直に又抱きしめた。
「夢を見たんだよ。夢なんだよ。」
なぐさめる聲もかすれて、身内に惡寒を感じた。
子供は又寢入つたが、彼は目が冴えて眠れなかつた。子供も矢張り亡き母に夢で逢つたに違ひ無かつた。溫い胸に縋つて寢たと思つて居たのであらう。彼は疲れた體に滲み出した冷たい汗を拭いて嘆息した。

二

夜中に安眠の出來なかつた爲めか、子供は父親の膝を枕にしてうたゝ寢をしてゐた。翌日の午後の事である。疊の上に投げ出した右の手には、天井に近くふはふはしてゐる紫の風船の糸を結んだちひさいボオル紙を、固く握りしめてゐた。晝前は、無理にも守と遊ばせたが、どうしても父親を戀しがつて爲方が無かつた。眠つてゐる時に屹度浮ぶ眉と眉との間の立皺が死んだ母親にそつくりだつた。彼の心に、それは儚ない懷しさを誘ふ事もあり、時には世の中を堪へ難く思はせるよすがともなつた。

何時來たのか、大きな蛾が障子にぶつかりながら飛んで居た。ばたばた鳴らす兩方の翅から、薄黄色い粉をちらして居るやうに見えた。春の日の當つてゐる戸外に出る道を失つて、狼狽してゐるやうに思はれた。死物狂になつて、障子にぶつかつてゐるのであつた。いつ迄たつても同じ運動を繰返してゐる虫の存在が、彼を苛々させて來た。膝の上の子供の寢顏がなかつたなら、直にも追ひ出したに違ひ無い。

さう思つてゐる時に、蛾は力いつぱい頭をぶつけた障子からはねかへされて、彼の身近に狂つ

て來た。毒々しい翅の上の粉が、子供の身に危險なもののやうに考へられた。彼は手をあげて振拂つた。

その身じろぎに子供は目をさました。うつとりと、うるんだ瞳で父親の顔を見上げたが、直に虫の羽音に耳を立てた、障子につき當つてははねかへされてゐる蛾の姿に、凝然と目を据ゑて、手にした風船の糸巻を捨てると、起上つた。

「およし、殺すんぢやないよ。」

手をあげて忍び足で近寄つて行く後から、彼はあわてて帶をつかんで引戻した。

子供は頭を振つた。

「ウウン逃がしてやるの。可哀さうだから。」

手を放すと、蛾の飛んでゐる障子の下に爪立つて、ちひさい兩手を叩いた。けれども虫は逃げなかつた。急速な羽ばたきをして、障子に全身をぶつけてゐた。子供はだんだんあせつて來た。わけなく追ひ出せるものと信じてゐたのが、意の儘にならないので、踵で疊を踏んだり、障子に手をかけてゆすぶつたりした。

「叱ッ、叱ッ。」

蒼白い頬邊を薄紅くして、仰向いて云つても及ばなかつた。

「障子をあけてごらん。ずうつと向ふ迄。」

彼は見兼ねて智恵を貸した。

云はれるままに、子供は兩手で重たい障子を左右にあけた。それでも虫は執念深く障子に羽ばたいてゐたが、暫時して、流れ込んで來る外の空氣を感じたのであらう、一度は反對の室(へや)の奥の方に飛んだと見えたが、眞直に庭に飛び去つた。引かれるやうに縁側に出て、行衛を見送り果てて、子供は初めて安心して父親をかへりみて笑つた。

何時の間にか空は曇つてゐた。縁側に出て見ると、遠くには靑空が見えながら、初雷でもしさうな黑い雲が大地に陰影を落してゐた。雨に違ひ無いと思つた時は、もう降り出した。大粒の、雹のやうなのが、乾いた土に斑點を打つて落ちて來た。

「あれ先刻(さつき)の虫ね、――あれ。」

縁側に佇んで空を見てゐた子供の指さす方に、恰度桃の花の雨に打たれて散りかかる花壇のあたりを、大きな蛾は雨に惱んでゐるのであらう、高く低く濡れた翅を動かして飛んでゐた。

「濡れて困つてゐるの？」

子供は深い憂皺を寄せて父親を仰ぎ見た。今しがた、虫を家の外に追ひ出した事を悔いてゐる色が見えた。

「つれて來て。可哀さうだから。」

袖に縋つて下から顔をふりむけた。

その時、雀が一羽、逆落しに下りて來た。と思ふと、蛾を追つかけた。蛾は、命の危急に狂つた線を描いて逃げたが、雀の嘴は容赦なく迫つた。傷ついて地に落ちると、雀も直に土に下りた。虫は一生懸命で又飛上る。雀も續いて後を追つた。雨は音高く土を打つて降つた。

子供はいきなり縁側から驅出さうとした。眞青になつて、上ずつた目は殺されさうな虫の命に注がれてゐた。

「およし。雨が降つてるぢやないか。」

彼は驚いて抱き止めた。

「助けてよう。助けてよう。」

身を揉んで子供は云つた。聲が涸れて咽喉(のど)にからんでゐた。

「駄目々々。又風邪を引くよ。」

踏石に下したかぼそい足に手を添へて、彼は子供を縁側に引上げて、無理に自分の膝の上に腰かけさせた。抱き締められたまま、子供は動かずに、雀と蛾の爭を見詰めてゐた。虫はもう飛ぶ丈の氣力を失つて、雀の嘴の下に苦しい翅を動かしてゐた。

通り雨の晴れた時には、雀は夙くに飛び去つて、庭には又春の日がいつぱい漲つてゐた。子供は父親の膝に身動きもしずに、矢張り虫の命の消えた邊を凝視してゐた。

彼は子供がおもひをかけた虫は、旣にゐない事を示して、外に心を轉じさせようと考へた。庭下駄を穿いて、手を引いて庭に出た。乾き切つてゐた土の上を濡らして過ぎた雨のあとは、掃除をしたやうに奇麗だつた。

父親よりも先きに、子供は先刻から目を放さない一點に驅けて行つた。大きな蛾の翅が二つ、裂けてちぎれて落ちてゐた。あたりには、苦痛の格鬪の名殘りの、虫の翅を濃くいろどつてゐた毒々しい粉が、薄黃色く散つてゐた。驚くばかり夥しく散つてゐた。

あゝ助けてやればよかつた。と、彼が子供に對して濟まない氣を起した時、子供はその哀れな翅を指さして何か云はうとしたが、云へなかつた。默つて指さして父を見た。大きく見張つた目の中に淚がいつぱいたまつてゐて、彼を恨むやうに見えたのである。彼は一瞬間に、孤獨な自分

と、薄命な妻と、その間に生れた先天的に不幸なひよわい子供の一生を感じて胸を打たれた。生活力の乏しい親の子に、生活力の缺除してゐる事は當前だ。到底世間の人として生れる力を恵まれなかつたいとしいものの手を強く握りしめた。

その晩、子供は父夢に母親を見た。

「母ちやん……」

枕にしがみついて、すすりあげて、泣いて泣いて泣き止まなかつた。

「夢だよ。夢なんだよ。」

彼は子供の背中を叩きながら慄然とした。自分の胸をさするのに等しいおもひだつた。

それでも子供は母親を呼んで泣き止まなかつた。

「そんなに母ちやんに逢ひ度いのかい。」

堪らなくなつて、耳に口をつけてささやくと、すすり泣きながら頷いた。

「死んでも？」

子供は父うなづいた。

生きてゐても、いづれは父母の不幸をうけついだ一生に違ひ無い。此の荒々しい人生に、生甲

斐のある人となる事は無い。死なう。親も子も死なう。彼は机の曳出(ひきだし)の中に祕めてある短銃(ピストル)を想ひながら、［十一字略］。

「お父ちやんも死ぬから、坊やも死ぬかい。」

子供は目を見開いて、一瞬間父の顏を凝然(じつ)と見詰めたが、その時はもう泣かなかつた。暫時考へる風だつたが、矢張りうなづいた。

「死んで母ちやんのところに行かう。」

子供は目をつぶつて微かに又うなづいた。彼は［十八字略］、妻の笑顏に迎へられて、父と子が手を引いて行く、桃の花の咲いてゐる暖い樂園を目の前にありありと見ながら、その他の一切の苦痛や悲嘆を忘れて恍惚(うつとり)とした。（大正十年三月十五日）

霙

眞木は、事務室の大時計が四時を打つと、さつさと机の上を片附けて、會社を出た。蒸氣で溫めてある室内にひきかへて、丸の内の夕方は身に沁みて寒むかつた。どんよりと曇つて、今にも降り出しさうな空だ。自分の家の方角は殊に暗く、もうそつちの方は降つてゐるやうに見えた。急いで電車に飛乗つた。

其の日は終日氣持が惡かつた。昨夜、些細な事からお互に旋毛を曲げて、どつちも口をきく氣を失つたまゝ、背中を見せ合つて床に入つたが、今朝も何となくばつが惡くて眞木は洋服を着て靴を穿いて家を出る迄、妙にすねて居る鼻の低い妻の横顔を憎んだ。

年末の決算期が近づいて、會社の仕事は忙しかつた。居殘つて夜業をして居る者も多いが、歸りの遲いのを厭がり、差向ひの夜食の時を一番樂しみにして居る妻の爲にも、彼は早く我家に歸りたかつた。そこで、書類をうちに持つて歸つて机にむかつたのだが、妻にはその心持ちがわかつて居なかつた。折角うちに歸つて來たのに、こつ／＼仕事をして居られては心寂しく、平氣な顏をしてそつぽうを向いてゐる夫が面憎くかつた。自分もその机の横に座蒲團を持つて來て、實

家の兒の子供にやらうと思ふ、靴下を編み始めた。ぴか／＼光る銀の針の動く度に、紅い毛糸の玉は疊の上で踊つてゐた。

「ねえ、あたし寫眞をうつさうと思ふんですけど……」

何か口をきいて貰ひたくて、一心になつて書物をしてゐる夫の横顔を憚かりながら、編物の手は休めないで、わざとうつむいたまゝ云つて見た。

「實母が丸髷の寫眞が欲しいつて云ふんですの。をかしくはないでせうか。」

「え、そりやいゝだらう。」

ふり向きもしないで答へたが、その返事は上の空で、つぼにはまつて居なかつた。

「ひどいわ。あなた聞いてらつしやらないんですもの。」

顔をあげて、目に情を籠めて夫を見たが、相手は、

「聞いてるとも。寫眞の事だらう。」

氣の無い口をきいて、矢張り洋筆を走らせて居た。何と云ふつれない人なんだらうと思ふと、妻の目には涙がいつぱい溜つて來た。自分の手先で動いてゐる銀の針さへ、涙の中に滲んでしまつた。ふだんから口數の少ない人ではあるが、それがみんな自分を可愛がつて居ない證據なんた

と考へられた。それつきり妻は口をきかなかつた。
「なあんだい、怒つて居るのかい。」
暫時たつて、夫は様子が變なのに氣が付て振かへつて訊いた。妻のふくれかへつて居る顔が馬鹿々々しくも思はれた。妻は何んとも返事をしなかつた。
「馬鹿な人だねえ。そんな事で怒るやつがあるもんか。」
なだめる積りで云つたのだが、その調子には冷いところがあつた。唇を固く結んで一生懸命で堪へて居た妻は、熱い涙が頬邊をつたはるのを感じて、いきなり編物をうつちやると、彈機仕掛のやうに立上つて、手荒く襖をあけて次の間に逃込んでしまつた。噎泣きが聞えて來た。
「なんの事た。」
夫は餘り意外なので馬鹿にされた氣がして腹を立てた。もう何てつたつて口をきいてやらないぞと思ひながら、不愉快で鈍つてしまつた頭腦で、無理に仕事を續けてゐた。
夜が更けて、夫は自分で床を敷いて先に寢たが、間もなく妻もやつて來て、隣に床を敷いてもぐり込んだ。少し舊式な大きな束髮を見せたまゝ、向ふむきになつて動かなかつた。
「おいまだ怒つてゐるのかい。」

餘程たつてから聲をかけて見たけれど、強情に返事をしなかつた。

そんな些細の感情の行違ひを、今日迄持越して、眞木は終日不愉快だつたので、妻はどんな風に暮したらう――と思ふと一刻も早くうちに歸りたかつた。しかし、若しも未だ、佛頂面をして居たら如何しようと考へると、決して自分は弱味を見せてはならない、此のまゝ家に歸らずに、何處かで酒でも飮んでやらうかしら――とも思ふのであつた。

電車は相變らず込んで居て、眞木は兩側から壓されながら釣革につかまつて居た。ふと氣がつくと、目の前の窓硝子を打つて雨が降つて居た。虎の門、溜池――その次の山王下でおりると、外套の襟を立てゝ早足で横町に曲らうとした。霙まじりの固い雨が、鼻の先に鋭い冷たさで降りかゝつた。

おや、見たやうな――さう思ふひまも無かつた。道端の電信柱のかげに、人目を避けて佇んで居たのは彼の妻だつた。雨の日の黃昏にも、濃い白粉の顏がくつきりと浮き上つて居た。

「傘を持つて來ましたわ。」

羞しさうに、自分のさしてゐるのゝ外に一本持つて來たのを夫に渡した。妻は丸髷に結つてゐた。

「難有(ありがた)う。こんなところに立つて居ちやあ、寒むかつたらう。」

「いゝえ、それ程待ちもしませんでしたわ。」

二人は幸福な氣持で歩き出した。これ程苦も無く仲直りが出來ようとは、兩方とも思ひも及ばなかつた。

待合や藝者屋の多い區域を拔けると、附近の小料理屋の板場から往來に流れ出る物の臭が鼻をついて來た。湯屋と水菓子屋の間に、近頃出來たおでんやは殊に繁昌してゐた。店口に下つてゐる柿色の暖簾(のれん)の中は、いつぱいの人で、賑かな醉拂ひの笑聲が聞えて來た。其の時、向ふから來て擦れ違つて飛込むやうにおでん屋の暖簾をくゞつた男があつた。眞木は思はず知らず立ち止つて振返つた。傘を持たない爲め、帽子の庇を深く落して、顏は半分以上もかくれてゐたし、低い下駄でぬかるみを拾ひながら驅込んでしまつた瞬間の姿ではあつたが、まぎれもない橋口三郎だつた。

「どうなすつて。何方(どなた)？」

「誰でも無いんだ。なんだか昔の友達に似てゐるやうな氣がしたけれど。」

眞木は、追ひついて妻と並んで歩き出した。その友達に見つからなくてよかつたと、心の中で

喜んでゐた。
「丸髷に結つたね。」
あかるい表通りを横に切れて、大きな屋敷の土塀について歩きながら、人通りの無いのを見定めて云つた。
「えゝ、をかしくつて。」
妻は薄暗の中で首をかしげて聞き返しながら、寄添つて來た。
「をかしい事があるもんか。」
眞木は妻の滿足した笑顔を認めて微笑した。雲は愈々強く、音高く二人の傘を打つた。

「おい、一本つけて呉れないか。」
おでん屋の暖簾をくゞつた橋口は、土間に下駄を脱いで、めい／＼お膳を前にして飲んで居る人々の間を跨ぐやうにして、一番奥の隅つこの羽目板にくつついて腰を下した。
「召上り物は。」
ちいつぽけな女中が、水つぱなをすゝりながら、直ぐに客の前にお膳を置いて訊いた。

「何が出來るんだい。」

「おでんが御座います。」

「おでん一式か。なんでもいゝや。うまさうな物をお呉れ。」

「お一人(ひとり)さんお酣つき、おみつくろひ。」

鼻の先に力を集中したやうな響く聲で、小婢(ちび)は註文を通した。

一寸小ざつぱりした家で、器物も新しくて綺麗だつた。橋口は溫い酒が身内に廻るのを樂しみながら、心持はちつとも浮いて來なかつた、たつた今、やう／＼探しあてた眞木の家で、留守だと斷られた事がひどく不愉快に想ひかへされた。

「遠方から來たんですが、直き歸るんぢやないんですか。」

と取次の女中に訊いて見て、返事次第では上り込んでも待つてゐたかつたが、

「さあ、何時にお歸りで御座いませうか。」

うさん臭さうにじろ／＼見ながら、女中は用心深い口をきいた。

「奥さんは。」

「お留守で御座います。」

とつゝき場が無くなつて、格子の外に出たのだつた。氣のきいた門構への眞新しい二階家が、小癪な氣持がして爲方がなかつた。

眞木と逢はない事が、もう三年になる。しかも此の二年間は、年賀狀さへ受取らなかつた。それは自分も惡いには違ひ無いが、心では始終眞木を忘れた事はなかつた。それなのに何だ。結婚した事も、家を持つた事も知らせて寄越さ無い。あいつに借りた金は、たかゞ百圓を出るか出ないかぢやないか――橋口は三本目の德利が來た頃は、もう筋道を立てゝ物事を考へる力はなくなつてゐた。空腹に沁み込んだ酒で頭がふら／＼した。

「畜生、人が落目になつたと思やあがつて。」

口の中でつぶやいて、あたりを睨み廻した。

「へえ、さうですか。そんなに大きいんですか。」

橋口は吃驚（びつくり）して醉眼を見張ると、直ぐ隣で飲んでゐる近所の小商人（こあきんど）らしい薄禿のおやぢが、その又向ふの二人連の男と話をしてゐるのだつた。

「大きうがすとも。何しろお前さん、一晩に千兩取つた、取られたつて、それが每晩なんですからね。」

箱屋かなんからしい、狡猾さうな男で、賭事の話をして居るのだつた。

「何を云つてやがるんだい。旦那が居らつしやるぢやねえか。」

そいつの連の男は、橋口の方を目で知らせながら、友達の袖を引張つて注意した。

「へ……濟みません、場所柄だ。旦那も聞き流して下さらあな。」

頭をかいて恐縮した形を見せながら、橋口に對して愛嬌笑をした。

「何の事た。」

角袖だと思はれたんだと氣が付いて、橋口も苦笑した。不精に髮も髯も延び、目つきの鋭くなつた自分の顏と、うす汚れた二重廻しの姿を見て、さう思ふのも無理はないと考へた。眞木の家の女中が、厭な目つきをして見たのが、又おもひ出された。

「おい、勘定。」

小婢に拂つて、ふら／＼立上つた。蟇口の中には、五十錢が一枚殘つてゐるばかりだつた。おもてに出ると、霙は容赦なく顏を打つた。

眞木のところに行かう。どうしても行つてやるぞ。」

何となく、友達は自分を逃げてゐるやうな氣がして、押かけてやらなくては氣が濟まなかつた。

泥濘も水溜りも區別なく、びしや〳〵はねを上げながら、頭から濡れて歩いた。

「つい今しがたで御座いますが、橋口さんて方がお見えになりました。なんですか、お身なりなどは餘りいゝ方では御座いませんでした。」

着物を着換へて、茶の間の食臺についた眞木に、女中が報告した。

「橋口さん？　御存じですか。」

妻が受けついで、夫に訊いた。

「矢張り橋口だつたか。それで、何て云つたんだい。」

眞木は胸が騒いだ。留守に來たのだから爲方がないが、自分が故意に逃げたのと同じやうな自責の念が動いた。

「お留守だと申しましたら、奥様はつて、きいてゐらつしやいました。」

「へえ、どんな方なの。」

「目つきの怖い、何時かの新聞記者のやうな人で御座います。」

「まあ厭だ。

妻は女中の言葉に眉をひそめながら夫の方を見た。何時かの新聞記者と云ふのは、「勞資聯盟」とか云ふ新聞の經營者だと稱して、玄關に坐り込んだ男の事だつた。未だ新婚當時で、うつかり取次に出た妻君は、すつかり震へ上つたあげく、自分の帶の間から一圓札を出して歸つて貰つた。

「橋口さんてどんな方。お友達なんですか。いゝ方ですか。」

妻はもう夫を非難するやうな態度できいた。

眞木と橋口は中學時代からの親友だつた。二人とも早く母親を失つたと云ふ身の上の同情もあり、水彩畫を描いたり、小説を讀んだりする趣味の一致もあつた。寄宿舍では同じ室に五年間起臥した。

眞木は役人の古手の三男に生れて、小遣も潤澤では無かつたが、橋口は銀座の大通りの貴金屬商の跡取で、學生仲間では有名な派手者であつた。其の當時の洒落者の間に流行つた色變りの半洋袴に鳥打帽子をかぶつて、自轉車を乘廻し、築地に住む亞米利加の女に會話を習ひに通ふやうな一面もあつた。さうかと思ふと學業をうつちやりつぱなしにして、鏡花の小説に感激したり藤村の詩集に涙を流したりする情熱も持つてゐた。中學を卒業すると、商人に學問は不必要だと云ふ父親の意見で橋口は商業見習の爲めに、亞米利加に渡つたが、三年ばかりの滯在の間に、父親

を失ひ、あわてゝ歸つて來て見ると、動ぎないと思つてゐた自分の家も、父が生前手を出した相場の失敗と、惡い番頭の不正行爲の爲めに、意外にも左前になつてゐた。其の上に、翌年彼は兵隊にとられて入營してしまつた。多年賣込んだ店も人手に渡し、七十幾歳かになるお祖母さんと、女學校も中途で止めさせなければならなくなつた妹は、麻布の十番のうらの方に、昨日に變るみじめな生活を立てゝ、橋口の除隊を待つた。

その留守宅を訪れるのは、仲よしの眞木だつた。大學の制服を着た彼の姿は、目につく程繁々と、橋口の家の格子戸を潛つた。彼は友達の妹に戀してゐた。

「妹は、君に貰つて貰へば幸福だ。」

と橋口も云ひ、頼り無い身の上を見舞つてくれるので、お祖母さんにも可愛がられ、當の妹その人も、眞木を憎くからず思つてゐた。

しかし、橋口の家には、幸福は來なかつた。どうしても、もう一度、銀座通りの家を復活させ度いと、意地になつてしまつた橋口は、兵營を出ると直ぐに、一日々々喰減して行く僅かの貯を資金にして株に手を出したが忽ちすつかり取られてしまつて、眞木にさへ何も知らせずに、一家を擧げて行衛をくらましてしまつた。

半年ばかり音信も無く過ぎたが、九月の初に暴風雨のあつた年で、雨あがりの晴れた日に、當時長兄の家の二階に置いて貰つてゐた眞木を尋ねて來た橋口は、油の沁みた靑服を着て、見違へる程險しい相貌に變つてゐた。今は本所の方の或る機械工場の方に勤めてゐるが、出水の爲めに着物もなくしてしまつたと云つて、眞木の乏しい小遣を貰つて行つた。家は深川も洲崎に近い方だと聞いて、眞木はなつかしさに堪へられず、或日學校の歸りに、自然と足が向いてしまつた。埋立地の近くの露路の奥で、格子をあけて訪ふと、取次に出たのはお祖母さんであつた。

「まあ、眞木さんですか。」

しよぼ／＼した眼で、俄かには誰ともわからなかつたらしいが、眞木だと知ると、涙も洟もいつしよくたに咽喉が詰まつて聲が出なくなつた。橋口は未だ歸らないけれど、上れと云ふので靴を脫ぐと、二間か三間の家の隅に、妹は肺をわづらつて寢てゐるのだつた。出水の後の障子は骨ばかりで、壁にも浸水の痕が殘つてゐた。妹は起上らうとしたけれど、感慨に堪へられなくなつたのであらう、枕に顏を埋めて泣くばかりだつた。

一月とたゝないうちに、橋口からの消息があつたが、それは妹の死んだ事を知らせて來たのだつた。さゝやかな葬式を出した日に、眞木は兩手にいつぱいの白菊を買つて行つて、棺の中に入

れた。すつかり力を落してしまつたお祖母さんも、その年の暮には哀れな一生を終つた。

其後の橋口は自棄も手傳つて、まともな仕事は出來なくなつてしまつた。あまり評判のよくない通信社の記者にもなり、保險會社の勸誘員にもなり、株式仲買の店員にもなつたが、何をしても長くは續かなかつた。度々、眞木の小遣のいくらかが、彼の手にも割かれた。

眞木は平凡に學校を卒業して、その學校の推薦で今の會社に勤める事となつた。最後に橋口に逢つた時は、仲買の店もやめて、今度は飜譯に從事するのだと云つてゐた。その計畫は、外國の小說で、日本では發賣を禁止されさうな物を選んで、祕して會員組織で配布しようと云ふのだつた。

「ね、人の弱點を利用して儲けようつて云ふんだ。僕もなか〳〵機敏になつたぜ。」

昔の面影はなくなつて、橋口は狡猾な笑ひ方をした。その態度にあきたりなく、且つ到底そんな根氣仕事が、橋口に出來ようとは思はれなかつたが、眞木は半期の賞與金の半分を、資金として友達の手に與へた。尙しつゝこくせがまれて、會社の上役だの學校友達の間を勸說し、豫約出版會の會員もつくつてやつたが、豫定の配本は最初の一二箇月ばかりで、あとはちつとも出版されなかつた。前金拂の人々に對して、眞木は面目をつぶしたのである。

靜に飜譯に從事するのだと云つて、橋口は房州の方に住んでゐたが、幾度照會してやつても返

事は來なかつた。眞木はそれつきり音信を絕つた。今年の春結婚した時も、通知だけはしなければならないと思ひながら、妙な意地も手傳つて、愚圖々々になつてしまつた。妻の實家が相當の財産を持つてゐて、新夫婦の生活も、多少は補助を受けるといふ事實も、眞木をして昔の友達に顏を合せ度くなく思はせる原因のひとつだつた。

さう云ふ二人の關係の中から、橋口の妹の事丈をぬかして、眞木は妻に話して聞かせた。

眞木の心には、昔をなつかしむ處もあり、友達の事が氣にもかゝつたけれど、昨夜から續いた不愉快な氣持を忘れて、機嫌のいゝ妻と一緒に、樂しい夜食を終つた。

「今晩は久しぶりで何かして遊ばうか。」

「骨牌(かるた)ですか。春枝も入れて。」

妻は喜んで同(どう)じた。里から連れて來た女中を加へて、時々他愛なく夜を更(ふか)すのだつた。

「それぢやあ私も手傳つて、早く片附けてしまひませう。」

食臺の上の皿小鉢を、大きな盆に乘せて、妻と女中は臺所に運んで行つた。

「少し丸髷が大き過(すぎ)るな。」

眞木はそんな事を考へながら、後姿を見送つた。

チヂヂヂヂ……と玄關の格子戸の呼鈴が鳴つたのは、恰度骨牌を始めかけた時だつた。

「おや、誰か來たやうだわ。」

ばら〳〵音をさせて、かるたを切つて居た妻は、邪魔の侵入を喜ば無い様子で女中を顧みた。

橋口は、訪問者が誰であるかを直感して、幸福を破壞されたやうな氣持がした。

「先刻程の方で御座います。」

女中は主人の不機嫌な顏を見て、自分も困つた表情をして取次いだ。

「折角始めようとしたのにねえ。」

妻はわざとらしく嘆息して、手に持つ札を疊の上に投げ捨てた。眞木は自身立上つて玄關に出て行つた。

「やあ暫く。」

つとめて快活に、昔に變らない態度を見せ度いと思つて、大きな聲を出した。帽子からも、二重廻からも、雫をたらして、ぐしよ濡れの橋口が立つてゐた。ふら〳〵して居る體つきで、醉拂つてゐる事は直ぐわかつた。

「まあ、上り給へ。ひどく濡れてるぢやあないか。」

「上つてもよござんすか。」

橋口はいやに叮嚀な口をきゝながら、帽子を取り、外套をまるめて下駄箱の上に置き、泥だらけの足袋を脱いで土間に捨てた。

眞木が先に立つて、二人は二階に上つたが、橋口の濡れた足跡は、一段々々梯子段に殘つた。

「いゝお住居ですね。」

醉拂つて、足下(あしもと)のきまらないのが、座蒲團の上に崩れるやうに坐りながら、醉眼を見張つて、八疊と六疊の二間續きの室を見廻した。

「先刻(さつき)は失禮しちやつた。恰度直ぐ後に歸つたんだが、君とは何處かで擦れ違つたかもしれない。」

眞木はさう云つてしまつてから心に恥ぢた。おでん屋に入る姿を見たと、何故正直に云はなかつたらうと思ふのだつた。

「いや、お留守だつて云ふから、一寸おでん屋で一杯つてな事になつちまひました。ハハハハハ……」

笑聲迄以前とは違つて、變に咽喉に絡まる聲だつた。
「へえ、何處のおでん屋で。」
眞木は又心にも無い事を云つてしまつた。心の底の底で、どうしてもしらばつくれ度いやうな思ひが動くのだつた。
「一年、二年、三年と。」
相手はそれには答へないで、酒に重たい頭を時々胸の邊迄ぐつたり下げて、仰山に指を折つてゐた。
「三年ですぜ。三年ですぜ。申譯の無い御無沙汰をしちやつた。しかしねえ眞木さん、君の事は忘れた事はないぜ。一日だつて忘れた事はありやしないや。今日は手紙を書かうか、明日は書かうかと思ひながら、三年たつちやつたんだからいひわけも何もありやしないが、忘れた事はないね。ほんとに忘れた事はありませんよ。」
脣が乾くと見えて、しきりに舌でなめながら、低い聲でつぶやくやうに喋り續けた。御無沙汰をしたと云ふ事よりも、自分の半生に對して、取返しのつかない事をしてしまつたと云ふ自責の念が強かつたのだ。

「三年かなあ。こつちも御無沙汰してしまつたからお互様だ。」

「お互様？　そいつあいけない。友達のつきあひつてものは、お互様だなんてすましてゐられるもんぢやあないよ。向ふが音沙汰無しだから、こつちも捨てゝ置くんぢやあ情あひが無さ過(すぎ)るね。」

　眞木の不用意な言葉をとがめて、橋口はしつゝこく云ひ立てた。最初のうちこそ叮嚀な言葉をつかつてゐたけれど、段々ぞんざいになつて來た。その言葉にも、學生時代とは變つた、いろんな調子がまじつてゐた。眞木は醉拂ひの云ふ事が一々尤もに思はれて、返す言葉も無かつた。

「しかしねえ、二三度手紙を出した事はあるぜ。それでも返事が無いものだから、何處かに越したのかと思つてゐた。」

　やつとそれ丈云つて見たけれど、口先の辯解に過ぎない事は自分でも知つてゐた。ほんとの友達なら、それつきりで濟む可きでは無いと思つてゐた。

「そりやあ彼(あ)の飜譯小說刊行會の時代だらう。あの時の事を云はれると面目ないが、人間も食へないとなると、あんな事になるんだぜ。善いも惡いもありやあしない。ありつくものなら何でも喰ふんだ。ハハハハハハ。」

自ら嘲る態度で笑つた。

「そりやあさうと、君は結婚したさうですね。」

眞木の顏をのぞき込んで訊いた。冷かすやうな意地の惡い調子を、眞木はひし／＼と感じた。

「ええ、此の春。」

「さうだつてねえ。此間偶然電車の中で、柳本にあつて聞いたんだがね。大變な持參金だつていふんぢやあないんですか。」

「いゝえ、そんな事が……」

眞木は赤面して言葉が續かなかつた。

「かくさなくたつていゝや。無心に來たわけでも無し、第一、それでなくつて、こんな立派な家に住めるもんか。ハハハハハハ。」

橋口は上機嫌で笑つたが、眞木は不愉快になつて默した。隨分癪にも障つたが、それでゐて自分の弱味に氣臆れする心持を、打消す事が出來なかつた。

その時女中が火鉢に炭をつぎに上つて來た。

「奧さんですか。」

橋口は崩した膝をきちんとし過る程坐り直して、改まつて訊いた。女中だと云ふ事はわかり切つてゐたけれど、わざとさう云つてやつたのだ。

「いゝえ、女中です。」

眞木にも、橋口がわざと訊いたのだと氣が付いた。

「へえ、奥さんはお留守ですか。」

橋口は空とぼけて云つたが、多少は氣がとがめると見えて、一層醉つたふりをして、がつくり首を落した。

「おい、奥さんに手がすいたら二階に來いつて云つておくれ。」

眞赤になつて逃げ出して行く女中を呼び止めて、眞木は腹立たしく叫んだ。女中が階下に下りたと思ふ頃、妻と女中の笑ふ聲が、微かに聞えて來た。眞木は相手を憚つて、一層苦り切つてしまつた。

間も無く又梯子段を上つて來る足音が聞えたのが、今度も女中が紅茶を運んで來たのだつた。

「どうしたんだ。」

いやがつて出て來ないとは分つてゐたが、眞木は妻の心持も氣にして、女中と入違ひに階下に

下りた。茶の間には妻が一人で骨牌を並べて占ひをしてゐた。
「ねえ、一寸でいゝから顏を出して吳れないか。是非逢ひ度いつて云ふんだがね。」
是非に力を入れて云つた。
「だつて醉つてらつしやるんでせう。」
夫を非難する樣子が顏つきにも言葉にもあらはれてゐた。そんな友達を持つてゐるんですかと、云ひ度さうに見えた。
「少々御酩酊さ。」
眞木はわざと事も無げに輕い口をきいた。果して妻もその調子に乘せられて笑つた。
「爲方が無いわねえ。」
鼻の上に皺を寄せて、いやなんだけれど行つて上げますといふ意味を示しながら立上つた。女中の下りて來るのを待つて、二人は連立つて二階に上つた。橋口は、陶器の大火鉢のふちに顏を押つけて居眠つて居た。
「家内です。」
眞木に呼びさまされて、あわてゝ頭を下げた。火の氣の爲めに、又醉ひが發して來たやうに見

えた。

「私は橋口です。眞木さんとは子供の時からの友達なんです。」

鋭い目つきで、妻の頭から足の先迄見逃すまいとするやうに、注視した。妻は目のやり場に困つて、丸髷を見せてうつむいた。赤い手絡が怖ろしく野暮つたく見えた。橋口の痩せた頬邊には一切の世間人事を嘲るやうな冷笑が浮んだ。思つたよりまづい面をしてゐるぢやあないかと、今にも云ひさうな様子に思はれた。眞木は直感して、侮辱された氣持がした。世間見ずの妻に、いやなおもひをさせるのが可哀さうだつた。

「ねえ、奥さん。」

餌食を目の前にして樂しむやうに、橋口は正面から酒臭い息を吹きながら云ふのだつた。

「ほんとに眞木さんと私つてものは、他人ぢやあないんですからね。寄宿舎の同じ室に五年間一緒に暮した仲なんです。喧嘩もしたが、親友でさ。私のやうな感じ易く、涙もろい人間には、眞木さんのやうな何の變哲も無く世の中を渡つて行ける友達が必要なんですよ。そりやあいろ〳〵世話もかけましたさ。」

呂律(ろれつ)のあやしい口で喋つてゐるうちに、橋口は自分の生ひ立ちから今日迄の永い月日を、まざ

〳〵と想ひかへした。その永い月日の間の生活と、眞木の存在は切放しては考へられないやうに思はれて來た。突然、著しく感傷的な氣持に襲はれて橋口は涙組んだ。

「ねえ、眞木さん、僕が學校の前の藥屋の娘に惚れて、毎日々々いりもしない含嗽料を買ひに行つた事がありましたつけね。あんまり度々行くのも氣がとがめるので、君に頼んで、君にも買物をして貰つて、僕はその連れになつて行つた事もあつたつけ。」

橋口はその頃の無邪氣な戀にひきくらべて、其の後の自分の所行を苦々しく考へた。彼は今、房州の或る所で、小金を持つてゐる寡婦の家にころがりこんでゐた。その女から若干かの金を引出して、東京で一旗擧げ度いと思つてゐるのだつた。

毎日含嗽料を買ひに行つた話には妻も思はず微笑しながら、夫の方をぬすみ見た。夫が其の介添役だつた事が、殊にをかしかつた。眞木は面白くない顔をして横を向いてゐた。そんな話はまだいゝが、今にも自分にとつて手ひどいすつぱぬきが出て來さうで不安心だつた。

「しかしみんな昔の話だ。」

橋口は又續けた。彼は自分の追憶を人に聞せる心持の寂しさに、すつかり引入れられてしまつた。聲迄も優しくなつた。

「うちはつぶれる。相場に手を出す。可哀さうなのは何も知らないお祖母さんと妹だつた。あの頃はほんとに、眞木さんの外に賴りにする人はなかつたんです。君のなけなしの小遣錢を、隨分度々ねだつたつけ。大出水の時なんざあ、全く命の親だと思つた。お祖母さんも、妹も、どんなに難有がつたかわかりやあしない。」

橋口はすつかりめいつてしまつて、火鉢のふちに兩手をかけ、その手と手の間に顏を埋めるやうな恰好で、ぼそ〳〵續けてゐたが、時々洟をすゝるのは、涙で咽喉がつまるのらしかつた。眞木も流石に胸が迫つて來た。

「僕もあの時は驚いた。障子は骨ばかりになつてるし、疊も壁も濡れたあとの殘つてゐる中で……」

眞木はその悲慘な裏長屋に、目の勝れて美しかつた人が、蒼白い顏をして寢てゐた光景を想ひ起したが、妻を憚かつて言葉を濁した。

「あの七十幾歲かになるお婆さんが、泣いてゐるのを見た時は如何したらいゝのかぼんやりした位だつた。」

彼もあやしく聲が震へて、不覺にも目頭が熱くなつて來た。夫の聲に誘はれて、妻も何となく

鼻が詰つて來るのを感じた。

「それから妹の死んだ時の事も忘れない。眞木さんが兩手にいつぱい眞盛りの白い菊の花を抱いで來て棺の中に入れて與れたでせう。妹の好きな花でした。君の制服の胸に黃色く花粉がくつついてゐた。そんな事もおぼえてゐますよ。」

橋口はやうやく顏をあげたが、醉のさめかゝつた頰を傳つて、淚が落ちて來た。彼は寒さうに身震ひした。

すつかり醉のさめた橋口は、眞靑な顏をして悄氣てしまつた。惡感がして爲方が無かつた。早く死別れた母親もさうだつたさうだし、妹も同じ病氣だつたから自分も肺をわづらつて死ぬだらうと、餘程前からきめてゐたが、近頃めつきり健康の衰へを感じるので、愈々心細く思はれるのであつた。

ひがんだ心から、懷しさよりも意地惡く、厭がらせてやり度い氣持で尋ねた事が、面白くなく考へられて、その外に少しでも金を融通して貰ひたいと云ふ考へもあるにはあつたのだが、切出さずに歸る心になつた。又來る事を約束して立上つた。

「おや、まだ降つて居りますわ。」

玄關に送り出した妻は、格子の外の往來をすかして見て、

「お傘が無いので御座いませう。」

と夫に相談するやうな調子で云つた。

「いいえ、いりません、いりません。」

濡れた外套を身につけて、橋口は手を振つた。

「そりやあいけないよ。風邪でも引くと惡いから持つて行き給へ。」

眞木の言葉に妻は自分で傘を取つて來て、橋口に渡した。

「難有う。拜借します。」

一度かぶつた帽子をとつて、叮嚀におじぎをして、橋口は格子を出た。

「左樣なら。」

「左樣なら。」

びしや／＼水溜りを踏んで行く音が暫時聞えた。

「足駄も貸してあげればよかつたのに、氣が付きませんでした。」

妻は、さも自分の落度だといふやうな氣持がして、なほ佇んだまゝ雪の降る戸外を見てゐた。橋口の歩いて行つた方で、犬の吠える聲が聞えた。

「寒い、寒い。」

夫はさういひながら、妻の目の前の障子をしめた。

「熱いお茶でも飲んで寝よう。」

「ほんとに寒いわねえ。」

二人は兩方から寄かゝるやうに肩をくつゝけて茶の間に歸つた。

「可哀さうな方ねえ。」

同情に涙組んだ顔をして、妻は橋口の身の上話をおもひかへした。

「そのお妹さんて綺麗な方だつたの。」

「さうねえ、まあ綺麗といふ方だつたらうねえ。」

眞木はその質問にぎよつとしながら、さりげなく答へた。

　ある程の菊なげ入れよ棺の中

彼の大好きな漱石の句を想ひながら、傍の妻の手を強く握つた。

妻も、ふしあはせな人の立去つた後で、深く自分達の身の幸福を感じて、力をこめて握りかへした。（大正十一年十一月二十一日）

師表

一

何時もは其處で食事をするのがおきまりなのだが、其の日は銀行倶樂部に行く事になつて居たので、子爵は午砲の鳴渡るのを聞くと、あわてゝ妾宅を出た。此の頃手に入れた或る劇場附の女優を圍つてから間も無いので、新しい物好きの癖として、子爵は夢中になつてゐた。

玄關の障子のかげにかくれるやうに坐つて、女中が老子爵の足に靴を穿かせるのを待つてゐたお妾は、仰々しい毛皮の襟のついた厚ぼつたい外套に着ぶくれた後姿が格子を出ようとする時、

「では又。」

呼止めるやうに聲をかけた、子爵は一寸振かへつたが、皺だらけの滿面に喜悅の微笑を湛へてうなづいた。

袋地の入口の往來には、はげしい爆音をたてゝ、眞新しい自動車が主人を待つてゐた。十間足らずのところだが、如何に達者をほこつても八十近い老人の足は遲かつた。女中に附添はれて、

とぼ／＼歩いて來るのを、運轉手は運轉臺で、助手は兵隊のやうな姿勢で昇降口の扉に手をかけながら、いづれもどかしく思ひながら待つてゐた。

天氣の續いた初冬の往來は白く乾いてゐた。正午頃にはよくあるならひで、暫時人足が途絶えてゐたが、其の時近所の小學校の門内から、土曜日の早退けで勇み立つた子供達が、なだれを打つて馳出して來た。素晴しく立派な黒塗の自動車は、立派な物に對して無邪氣な尊敬と熱情を持つ子供の心を引いた。男の子は先を爭つて駈寄つて、四方から車を取圍んだ。子爵はその間に割つて入つて、老齡と厚着の爲めに愈々運動の鈍い體を、助手に助けられて漸く乘込んだ。

直ぐに自動車は、一際烈しい音をさせて動き出した。車内の老人が誰であるかは知らないのだが、兎に角偉い人に違ひ無いと思ふので、子供達は崇拜の眼を光らせて見守つた。車内の子爵も其の樣子に氣が付いて、大した滿足を感じながら微笑を浮べた顏を窓の硝子に近く差寄せた。その時佇立してゐる子供の中でも、殊に小柄なのが一人、叮嚀に帽子をとつて挨拶した。

子爵はそれを見逃さなかつたが、自分に對して禮をしたのか如何か、一寸の間迷つた。しかし世間にかくれも無い自分と知つて、小學校の生徒が敬禮したのであらうと思ふと、心の底から嬉しさがこみ上げて來た。山高帽子に手をかけて、挨拶を返してやらうと思つた。けれども、自動

車は既に速力を出してゐて、子爵が帽子に手をかけた時は、もう子供の姿は車の後になつて見えなかつた。

町角を曲つて自動車が見えなくなる迄、小學生は尊敬と羨望に魂を奪はれたやうなうつろな心持で佇んでゐた。

「東條さん、君あのおぢいさん知つてんの。」

中では年かさの、みなりのよくない子供が、青鼻をすゝりながら訊いた。訊かれたのは、今の今、子爵に對して帽子をとつて、叮嚀に禮をした子供で、これは眞新しい紺飛白の羽織と着物の對のを着て、小倉の袴も折目の正しいのを穿いた何處から見ても良家の子に違ひ無かつた。彼は得意さうに頷いた。

「誰？　あの人誰？」

訊く方は好奇心に眼をまんまるくして、訊かないでは置かないといふ風だつた。

「尾形さんて人。子爵だよ。」

小柄な子は、みんなに取圍まれた位置にある自分をもてあましたやうな様子で、心持顔を紅らめて答へた。

「大臣かい。」
「馬鹿ァ。實業家ぢやあないか。」
外の子供が横合ひから口を出したのを、其の隣にゐる腕白さうなのがたしなめるやうに答へた。
子供達の中にも、明治から大正にわたつて、並ぶ者もない實業界の元勳の名前丈は知つてゐる者が多かつた。目の當りさういふ偉い人を見たのだと知つて、ちひさい心は興奮してゐた。
「東條さんは尾形さん知つてるの。」
「あゝ、僕のお父さんが知つてるの、もう先、園遊會に行つた事もあるよ。」
宏大な子爵の邸で古稀の祝のあつた時、此の子供は父親に連れられて行つた事があつた。彼は賑かだつた其の日の光景さへ、友達に誇り度い氣持でおもひ返へしてゐた。
「へえゝ、君のお父さん何してんだい。」
「矢張り實業家だらう。さうだらう。」
口々に先を爭ふ質問を浴びせられて、小柄な子供は羞しさうに面を染めて頷いた。
「さうかい、偉い人なんかい。」
「偉いともさ。東條さんち隨分立派だよ。」

「こんだ遊びに行つていゝかい。」

父が相當な社會的の地位を占めてゐるといふ事は、子供心にも力強い自信を持つてゐた。みんなに羨まれる家の子だといふ事を、彼は得意でもあつたし、羞しくもあつた。おもはず歩調が早くなつた。

ぶぶぶぶぶうう……後の方から鋭い速力で走つて來た、一臺の自動車は、子供の群を脅かして、見る見るうちに遠くに行つた。その爲めにちりぢりになつた子供達は、

「左様なら。」

「左様なら。」

「失敬。」

「失敬。」

てんでに挨拶して、四方の小路に別れ／＼に歸つて行つた。

東條の父親――東條平造は尾形子爵に取立てられた實業家だつた。古い法學士で、學校を出ると直ぐに子爵の創立經營してゐる銀行に入つて、十年一日の如く實直に勤めた。學校時代から別段人に目立つ特徴の無い男で、地味にこつ／＼勉強しながら、席順は何時も中位だつたが、銀行

でも、同期に卒業した同僚より敏腕でも無く、從て出世も早い方では無かつた。ところが恰度二十年ばかり前に、尾形同族會が設立されて、子爵一家の財務の支配人が必要になつた時、人選を託された銀行の專務取締役は、間違ひの無い人間をといふ第一の資格を重んじて、東條を推薦した。

それ以來彼の立身の途は拓けた。適材を適所に置いたのである。同族會の主事として、一族の財政を監理する事から、家庭のいざこざを始末するの迄、一切彼の役廻りだつた。明治維新以來我國の實業界の第一人者として、人も許し自分も勿論確信してゐる子爵は、世間の廣い事に於ても他に比ぶ可き人物が無かつた。會社銀行の創立に、子爵の名が並んでゐると居ないでは、たいした相違があつた。賴まれゝばいやとは云はず、自分の勢力の愈々旺んなのを何よりの滿足に思ふので、何時の間にか諸方の重役の肩書が五十幾つかに及んだ事もあつた。中にはぼろ會社もなくはないので、子爵の名前に安心して引かゝつて、ひどい目にあふ人間も數を知らず、子爵自身さへ迷惑をかうむる事もあつた。さういふ事の一切も、東條の獻身的の忠勤によつて、左迄の破綻も見ずに今日に及んだ。

子爵は有名なる好色者だつた。澤山ある子供も大概は腹が違ふ位で、かりそめに相手をさせた

女の數は數へ切れなかつた。さういふ不しだらの後始末も、東條にとつてはゆるがせならぬ仕事だつた。

何時の頃からか、子爵は單に實業界の元老として丈では滿足しなくなつてゐた。國民の師表として、新時代の青年に精神的感化をも與へ度いといふ一種の名譽心に驅られてゐた。神道と佛教と耶蘇教とを打つて一丸にして、國民の倫理道德を善導しようなどと眞面目になつて考へた事もあつた。薩摩琵琶と浪花節を利用して、同じ目的を達しようと思ひ、先づ天聽に達して、その上でやれば仕事は樂だと考へて、熱心に事を運んだ事もあつた。何事も國家の爲めといふのが彼の標語であつたから、國家の爲めだと持ちかけられゝば、ホテルの重役にもなり、劇場の重役にもなつた。さういふ經路をとつて、彼は實業界の尾形から、日本の尾形になり得た事を確く信じて居た。だから、若い時からの惰性と天性の助平根性で、やめようと努力してもやめられない不身持を、世間に知られる事は何よりも怖かつた。昔は爲方が無い、しかし現在いゝ年をして、おまけに國民全體の師表と仰がれてゐる自分が、さういふ事を世間に知られてはならないと思ふのであつた。さういふ事をしてはならないとは決して考へなかつた。知られてこそ若い者に惡い影響があるかもしれないが、知られなければ何の差支へもないと思つてゐた。數々の不行跡の後始末

は、自ら重大な任務として東條の責任を重くしたのである。

多勢の子供が、いい所は似ないで、惡い癖ばかりがおやぢ似だつた。學校を卒業する前には小間使を犯し、學校を卒業して金廻りがよくなると藝者を弄ぶのが、傳統的に長男から次男三男へと續いた。其の始末も東條がしなければならなかつた。家庭の不取締を祕しかくし度い子爵は、自分自身を省る事には寛大な癖に、息子達の不品行は許して置かなかつた。長男の如きは、一時は勘當同樣の身になつた程である。さういふ事件を新聞に出される事も、子爵のひどく恐れる所だつた。筆でこそ正義を說いてゐるけれど、利慾の前には常に目の無い新聞社を買收する事も、勿論東條の取計ひであつた。つゞめていへば、東條平造の一生は、聲望並び無き尾形子爵一族の暗黑面を覆ひかくす爲めの努力に捧げ盡されたのに外ならないのである。

そのかはり東條は、今ではおしもおされもしない地位と財産とを得た。子爵が先年銀行の頭取を辭して、相談役といふ名目になつた時、後任頭取には東條が推薦された。その外にも子爵の代表といふ顏で數多の會社の重役にもなつた。默つてゐても、他人が益々上に持上げて吳れるのであつた。

一切の事を、全く子爵のおかげだと思つて、彼は衷心感謝してゐた、子爵があつてこその自分

だと思つてゐた。子爵が居なくても、自分の力量で相當の出世をしたに違ひ無いなどとは考へた事も無かつた。今でも、子爵の身に萬一の事でもあれば、此の自分は如何なるだらうと考へる位である。

彼は其の感謝に燃える心から、誰にも彼にも、一切見さかひ無く、子爵の德をたゝへた。それが又東條の謙讓の美德として、世間が彼をほめるたねになつた。

家庭に於ても、妻にも子にも子爵のおかげを說いてやまなかつた。應接間にも書齋にも、子爵の肖像を描いた油繪や、寫眞を掲げてゐた。つい二三年前になくなつた東條の母親は、一人息子の大恩人として、毎朝その額の前に手を合せて拜んだ。床の掛物や額にも、折にふれては書いて貰つた子爵の書が絕えず見られた。多くは論語の中の文句だつた。

論語は子爵の愛誦の書である。或る學者に通俗向の解說をさせたのを、自分の名前で印刷に附して、日頃出入の實業雜誌社から賣出さした。ポケット入の其の本は、爾來子爵の懷から離れなくなつた。毎日一度此の本を讀めば、人の心は淸く、行ひは正しくなる。若し國民全體が讀めば、此の國を擧げて君子となる。そんな事を子爵は始終口にしてゐた。平生恩顧を受ける者は、論語を知らないでは子爵の面前に出られないやうな氣がして、かげでは兎や角いひながら、誰しも讀

むには讀んだのである。子爵の演說には必ず論語が種本になつた。今は東條が主宰する銀行でも、月に二度づつ、論語の會があつて、子爵自身がその書についての感想を述べるのを、かしこまつて聞かなければならなかつた。月給取の根性としては、その講釋を聞かなければ出世させて貰へないやうに思はれ、それを聞けば間違ひなく出世させて貰へるやうな氣がするのであつた。勿論東條は率先して論語の信者になつた。子供達に訓戒を與へる時も、自然とその中の文句が口に出るのであつた。

さういふ父を父として、子供達は幼少の時から、尾形子爵より偉い人は無いと思はせられてゐた。長男の一郎は、父は自分のあととりとして、矢張り實業家に仕立て度かつたが、生來病弱で高等學校の試驗を受ける氣力も無く、中學を卒業すると私立大學の文科の豫科に入つてしまつた。人一倍子煩惱の東條ではあるが、子供が可愛ければ可愛いだけ、文學者や文士などになられては堪らないと思つて、殆んど高壓的に志望をひるがへさせようと努めたが、息子はどうしてもきかなかつた。實業家になるのなら、親の光丈でも間違ひ無く出世出來ると懇々と說いても見たが無駄だつた。出世なんかし度くないと、息子は強情にいひ張つた。弱り切つた父親は、日頃崇拜する子爵の說をきかうと、怖る〳〵顚末を話した。すると子爵は意外にも、文學志望は最も結構だ

と云つた。其の時の子爵の言葉を東條は今も忘れない。

「今日本で何よりも要求して居るのは偉大なる文學者である。沙翁のやうな、ダンテのやうな、又我朝では馬琴のやうな文學者が、大正の今日に生れる事は最も望ましい、文學志望は結構である。どしどし奬勵しなければならない。但し近頃流行るやうな他愛の無い戀愛小說や、人の心を憂鬱にしたり、悲しませたりする害のあるものはいけない。健全なる國民精神の指導となる可き文學でなければならない。その一事さへ忘れなければ、文學志望は邦家の爲めに何よりも悦ばしい。」

さういふ意味の事だつた。さうして、子爵自身の口から、本人に激勵の言葉を贈り度いから、一度邸へ寄越して貰ひ度いといふのだつた。東條は感激して、息子の志望を許し、いやがる本人を引連れて參邸した。子爵は悉く滿足して、若い者の心得と、文學の尊重すべき事を、父子の前で說いたのである。

それ程にして文學科に通ふ事を許された肝腎の息子は、日一日と東條が希ふ方向とは別の方に向つて進んで行くらしかつた。そればかりで無く、子供の時から、天皇陛下の外には此の人程の偉人は無いと話してきかせた尾形子爵を、息子が次第に尊敬しないらしい様子を見せて來たのは、

東條にとつての何よりの心配だつた。さういふ精神では、將來ろくな者にはなれないと思はれるのであつた。彼はやつきになつて子爵が今日の日本の事業界に盡した功績を說き、又老齡の今日も尙國民の師表として、思想の善導に日も足りない事を話してきかせたが、あせればあせる程息子は冷嘲を以て迎へるのであつた。

「口では論語を說いたつて、自分の品行がよくなければ駄目ぢやありませんか。」

しまひには明白に反抗的な言葉さへ口にした。東條は非常なる震撼に聲が詰つて何もいふ事が出來なかつた。彼は息子がどんな事を平生考へてゐるのか見當もつかなくなつた。さうして日ましに我子の將來が心配になつた。

しかし外の子供達には十分いゝ敎へが受入れられてゐると思つてゐた。次男は、子爵が後援してゐる中學に通はせてあつた。修身には論語をくだいて話すといふ位で、全く子爵の思ひのまゝの色彩を帶びてゐる學校だつた。卒業式とか校友會とかの日には、必ず子爵が演壇に立つて訓話をした。長女も次女も學習院に通つてゐたが、これは子爵の孫に當る娘達の學友のやうな形になつてゐた。一番下の三男の三郎は未だ小學校の二年生に過ぎなかつた。子爵が妾宅から出て來て自動車に乘るところを、何の氣も無く見て、叮嚀に帽子をとつたのは此の三郎だつた。

三郎は・子供心に深くも尊敬してゐる尾形子爵を學校の近所で見かけ、しかも自分が禮儀正しく帽子をとつて挨拶したのが嬉しくて堪らなかつた。彼は遠くも無い我家の門前で、級友と別れる時も、その級友よりも自分の方が一段上の人間のやうな氣持がした。

彼はその興奮した心持で母を求めたが、折惡く母親は留守だつた。二人の姉は土曜日毎に洋琴（ピアノ）の稽古に廻るので、未だ學校から歸つてゐなかつた。結局晝の食卓には、男の兄弟三人が顏を合せたばかりで、三郎にとつては頗る物足りなかつた。それでも默つて晩迄とつて置く事は出來なかつた。

「僕ね、今日學校のそばで子爵に逢つたよ。」

「子爵？　子爵つて誰の事だい。」

上の兄には憚りがあつて、二郎に話かけたのだつたが、横合ひから一郎が素早く質問した。何となくとがめるやうな調子を含んでゐた。

「尾形さんの事。」

「馬鹿。尾形さんなら尾形さんていやあいゝぢやあないか。子爵なんて云ふ奴があるもんか。」

御飯が濟んで、お茶を飲んでゐた兄は、不愉快な顏をして睨んだが、ぐつと仰いで飲み干すと、

いきなり立上つてその部屋を出て行つた。縁側から庭下駄を穿いて、口笛を吹きながら、だらだら低くなつてゐる芝生を、池の方に歩いてゆく後姿を見送つて、二人の弟は安心した。

「兄さんは尾形さんの事を子爵つていふと何時でも怒るんだよ。」

二郎は兄の耳をはゞかる様子で、聲をひそませて云つた。

「どうして？　子爵つて云つちやあいけないの。」

「いけなかないさ。だけど兄さんは尾形さんが嫌ひなんだろ。」

「どうして？」

「どうしてつて、兄さんは變物(かはりもの)だからなあ。」

二郎は昂然として云ひ放つた。學校の成績のいゝ弟は、學校の成績のよくない、文學なんぞに凝つてゐる兄を少なからず輕蔑してゐるので、此の時も自ら嘲笑するやうな態度を見せた。

三郎は、何故兄が子爵を嫌ふのか皆目わからなかつたから、二郎の一言で安心した。矢張り二郎さんの方がえらいなあと感心した。

食事が濟むと、二人は芝生でボオルを投げ合つた。

しかし、又晩の食卓についた時は、三郎は其の日の晝の得意な心持をおもひかへした。目の前

に兄のゐるのが氣になつて爲方が無かつた、けれど、その兄よりも一層信頼してゐる兩親が控へてゐるので、暫時躊躇した後で、ながしめに兄の方を見てから、たうとう口を切つた。

「お父さん、今日學校のそばで尾形子爵に逢ひましたよ。」

「ふうむ。何處で。」

「學校の門から一寸來たところで。」

三郎はもう兄が怖い顔をして睨んでゐる事なんか恐れてゐなかつた。父も母も、自分の話に熱心に耳を傾ける樣子を見せてゐるのに誘はれて全く得意だつた。

「立派な自動車がとまつてゐたんです。子爵の自動車又新しいのに變つたんですねえ。」

素晴しく立派な黑塗の自動車は、今もあり／＼と目に見えるのであつた。

「どんな人が乘るんだらうと思つてたら、横町から出て來たのが、尾形子爵なんだもの、驚いちやつた。」

「へえ、横町から出ていらつしやつたの。」

隣に坐つてゐる母親は、ませた口をきく末子の顔をのぞき込んで、目も口も笑つてゐた。

「えゝ細い横町。」

「ふうむ。何處にいらつしやつたのかなあ。ひるは倶樂部でお目にかゝつたが。」
父親は一寸首を捻つたが別段氣には止めてゐなかつた。
「お母さん、さぶちやんはねえ、子爵におじぎしたんですつて。」
それが弟の大きな功名でゞもあるかのやうに感じてゐる二郎は、默つて聞いてゐる丈では氣が濟まなかつた。
「さう、それは感心ねえ。あなたおじぎしたの。」
母親は嬉しさがこみあげて來て、三郎の耳の近く迄顏を寄せて云つた。
「僕つい　おじぎしちやつた。」
あんまり感心されてゐると知つて、かへつて羞しくなつて、三郎は心にもなくとぼけた返事をした。父も母も姉達も聲を揃へて笑つた。たつた一人、一郎だけが、弟のほめられてゐる事にも不愉快を感じるらしく、不機嫌な顏つきをしてゐたが、殆んど誰も氣が付かなかつた。
食卓は常にも増して賑かに樂しかつた。

二

子爵は毎日妾宅に通つた。以前は妾宅――今のお妾とは違つて、新橋の藝者を落籍（ひか）して圍つてゐた――に泊つたり、待合に泊る事も多かつたが、近年は國民道徳の指導者を以て任じてゐるので、夜は必ず我家に眠る事にしてゐた。だから今度の女優のところへも、晝間の二三時間通ふだけだつた。學校の筋向の袋地の入口には、毎日黒塗の自動車が主人を待つてゐた。

學校の生徒も、段々不思議に思ひ始めた。誰の自動車ともわからないうちは左程でも無かつたが、子供の耳にも響いてゐる尾形子爵の自動車だと一人知り二人知り、間も無くかくれもない事になつてしまふと、子供に特有の英雄崇拝に好奇心が加つて、あだには見過（すご）せなくなつたのである。就中（なかんづく）東條三郎は、心の底に潛在する不安に、何故ともなくびくびくしてゐた。何かしら子爵の身に、人並でない事があるやうな豫感が、彼の胸を壓してゐるのであつた。

「お母さん、今日も子爵の自動車が學校の前にゐました。」

彼は父親には知らせないで、母親と自分と二人きりの時に限つて、さゝやくのであつた。

「まあ、ほんとに？」

母親は何か心に疑の起る時の癖で、額に立皺を刻みながら、之（これ）も聲をひそませた。同じ事を三日ばかり續けて聞かされたのであつた。

「あなたの間違ひぢやあないのかい。随分御忙しい方だけれど、あの邊に毎日御用のある筈がないからねえ。」

「うゝむ、ほんと。だつて日向さんが運轉手に訊いたんですもの。」

「なんて？」

「此の自動車尾形子爵のですかつて。さうしたら助手の人が、何故そんな事を訊くんだいつて笑つてゐたけれど、矢張りさうだつていつたんだもの。」

「左様ですか。それぢやあさうかもしれないねえ。」

半分は信用しない顔附で母親がそれつきり取合はなくなつたので、三郎はひどく不滿足だつた。どうしても尾形子爵に違ひ無い事を確めてやらなくてはならないと思つた。

その翌日、學校の歸りに、いつもの通り級友と連立つて來ると、自動車は今日も同じ場所に、退屈さうな運轉手と助手とを乘せて待つてゐた。

「やあ又ゐらあ。」

すつかり馴染になつてしまつた子供達は一齊に駈出して行つた。

「おいおい、そんなところに乘つかつちやあいけないよ。」

助手は子供達のいたづらを叱りながら、顔は暢氣に笑つてゐた。
「僕乘せてくんないか。」
「いけないよ。」
「いゝぢやないか。ちよつと乘せとくれよ。」
遠慮の無い町つ子は、踏段に足をかけて、扉の取手に手をかけた。
「こらッ、いたづらをしてはいかん。」
默つて新聞を讀んでゐた運轉手が、突然大きな聲で怒鳴つた。
「なんでえ、あたいだつて今に華族になつて自動車に乘つてやるぞ。」
鼻垂らしは、憎まれ口をきゝながら、扉にかけた手を放した。
「何つてやんでえ。貴樣なんか華族になれるもんか。自動車に乘りやあ運轉手位なもんだ。」
もう一人の車宿の子は、相手の肩を突飛ばして云つた。運轉手と助手は顏を見合せて苦笑した。
「あのねえ、尾形さんは毎日何しに來るの。」
別の一人が無邪氣に質問した。
「御用があつていらつしやるんだよ。」

助手は又運轉手と顏を見合せて、にや〳〵しながら應じた。

「何の御用？」

「何の御用つて、いろんな御用があらあな。」

「嘘をつけ。お妾んとこへ來るんぢやあないか。」

車宿の子はませた口をきいて、勝ほこつた色を見せた。

「さうだらう、あすこの突當りの須賀田さんてのお妾のうちなんだらう。」

「馬鹿。子供の癖にそんな事を云ふと先生にいひつけてやるぞ。」

助手は又しても運轉手の方を見て笑ひながら、口先ばかり怒つた風をして怒鳴つた。

「お妾なんだよ、知つてらあ。」

「畜生、子供らしくねえ奴だなあ。」

おどかしに立上つて、車から下りて來たので、子供は草履を引擦つて逃げ出した。ばら〳〵に別れて歸る子供の中で、三郎は最も肩身の狹いおもひをして、すた〳〵我家に歸つた。ほんとのやうにも思はれ、嘘のやうにも思はれるが、車宿の子の言葉は、彼に暗い疑惑を與へた。平常自分の一家が尊敬してゐる人に、そんな事があつたら如何しようと思つた。子供の心

にも、お妾といふものは、ひどく惡いものに考へられた。
彼は母親に訴へて見ようかと思つたが、羞しくて止めてしまつた。
「今日も子爵の自動車がゐましたよ。」
何氣ないふりをしてさういつたが、母親は別段氣にも止めないで、
「へえ、今日も。」
と返事をしたばかりだつた。
誰から誰に傳はつたのか、小學校の生徒の間に、尾形子爵は、お妾のところに、毎日自動車で通ふのだといふ噂が廣まつた。三郎は、自分の父と子爵の關係から、みんなが自分を馬鹿にしはしまいかと思つて、すくなからず怖れてゐた。
「東條のお父さんはねえ、尾形子爵のお妾の世話もするんだとよ。」
果してはしたない町つ子は、憎らしく唇をつき出して嘲弄し始めた。
「さうかい、ほんとかい。をかしいな。」
「さうかい、ほんとかい。をかしいな。」
二三人聲を揃へてはやしながら、手拍子をうつて繰返した。

「嘘だい。嘘だい。」

三郎は咽喉が詰つて聲が樂には出なかつた。思はずしらず、涙がいつぱい眼に溜つて來た。

口惜しさのあまり、三郎は母に訴へた。

「みんながね、子爵はお妾んとこに行くんだつていふんだけど……」

何といつてい丶かわからないで、彼は涙ぐんで母の顏を見守つた。

「そんな事をいふものではありません。」

母親は何時に似ない怖い顏をして云つたが、それつきり堅く唇を結んでしまつた。お妾なんて言葉を口にした爲めに、母の機嫌が惡くなつたのだと思ふと、三郎の心は一層悲しくなつた。

其晩、食事が濟んで子供達が勉強部室に引取つてから、丹念に夕刊を讀んでゐる平造の書齋に、夫人はこつそり入つて行つた。どういふものか、廊下の足音を忍ぶ心持があつた。

「あなた。」

夫人は火鉢をへだて丶夫と向合つて、さも一大事のやうに切出した。

「變な事を伺ふやうですが、此の頃は子爵の御身持はい丶んでせうか。」

「何故？」

夫は新聞を机の上に置いて向直つた。殆んど病的に、男性の不品行に對して假借しない妻が、何か又噂でも聞き込んでヒステリックに憤慨してゐるのだらうと思つたのである。

「何故つて、三郎が變な事を云つてるんですよ。」

今はそんな事はないだらうが、以前は確かに東條は子爵の妾の世話迄もしたに違ひなく、それが此の夫人をどの位不愉快にさせたかわからなかつたから、又むかしに立かへつて、面白くない問題に觸れるのは、夫人にとつても決して嬉しい事ではなかつた。

「此の頃度々學校のそばで子爵の自動車を見かけるつて三郎が話してゐましたらう。あれが妾宅へお通ひになるんだつていふんですがねえ……」

「誰がそんな事を云ふんだ。」

「學校の子供達がいふと見えて、三郎がさう申すんです。」

其處で、子供の口から聞いた話と、それに對する夫人自身の意見を、細々と辯じ立てた。

「まさかとは思ふんですが、子供の教育上面白く御座いませんから……」

まるで夫に落度でもあるやうに、しまひには自分の言葉に興奮して夫人の脣は震へた。

「ふうむ、そんな事を云つてゐるのか。しかしまさかと思ふね。七十のお祝の時に、あれ程誓は

れたのだから。」

「それでは兎に角、貴方は御存じない事なんですね。」

「あたりまへさ。」

「でも……」

夫人は夫の知らない事ならば、果して眞實としても、まだしも結構だと思つた。

平造は半信半疑だつた。それが當時のあたりまへだつたに違ひ無いが、子爵の不身持の後始末には閉口した。生れつき臆病で、おまけに處世の第一義としても行ひを愼しまなければならないと思つてゐたから、彼は曾て浮氣をした事が無い。金さへたまれば藝者の世話をするとか、妾を置くとかいふ事を、寧ろ自慢にする實業家の仲間では、名だたる石部金吉で通して來たので、極端に崇拜してゐる子爵に、其の惡癖さへ無ければどの位いゝだらうと、絕えず心中で考へてゐた。

恰度子爵が七十の壽筵を開いた時、大がかりな催しの後で、直參の連中だけが慰勞の爲めに招待された。上機嫌の子爵は其の日は特に最上席に据ゑた平造の前で、今後一切女道樂はしないと宣言した。

「六千萬人の孫どもに申譯が無し、第一東條さんにもあんまり世話をかけ過ぎたから。」

子爵は肥つた體を揺立てて笑つた。國民の師表たる自覺が、其の時は眞實さう思はせたのであつた。一座の者は口を揃へて子爵の人格を讃美した。何をしても、何處からも苦情の出ない身分で、色を愼むといふ事は、此の連中の驚異であつた。本人が七十歳のよぼ／＼であらうと無からうと、そんな事には關係なく感激した。就中感謝の念をも持つて頭を下げたのは東條だつた。席上、子爵が暢氣ないたづら氣分で揮毫した、「戒之在色」といふのは、今も彼の書齋の額になつてゐる。

少なくとも子爵も本氣だつたには違ひ無い。その證據には、當時ある所に圍つてあつた妾には莫大も無い手切金がはりの持參金を持たせて、子爵の邸に出入りする骨董屋の女房にしてしまつた。勿論東條がおもてむき雙方に話をして、一切の型をつけたのである。爾來、自邸に綺麗な小間使を置いて寵愛する事丈は別として、世間の眼に觸れる女道樂は無くなつた。子爵は誰にも氣兼をしずに、只管論語を宣傳した。

さういふ風な經緯があるので、東條は近頃は全く子爵を信じてゐたが、子爵の方ではその經緯の爲めに、最早や東條を煩はす事はいやだつた。其の上、むかしとは違つて、東條も今では一流の實業家であるから、まさかに妾の世話は頼めなかつた。ふとしたはずみで、自分が大株主で重

役にもなつてゐる日本劇場附の女優の中に、日本人には珍しく五尺三寸近くもある大柄な肉體を發見して、好奇心が止度無く動いた時、劇場の支配人に耳うちして萬事の取持ちをさせたが、數年間の誓を破る自分の行爲に對しては、多少忸怩たるものがあつた。子爵は堅く口どめをし、殊に東條に對して、心中密かに烱つたく思つたのである。

平造は七十の壽筵の時の子爵の姿迄を想ひ浮べながら、當面の問題としては、先づ興奮してゐる妻をなだめなければならなかつた。

「何しろ子爵もお年齢だから、まさかそんな事もあるまい。子供達には噂だけでもさういふ事は云はせないやうに敎へて置かなければならない。」

「ほんとにさうでせうねえ。けれども、よしんば噂だけにしても、敎育上面白く御座いませんからねえ。」

夫人は稍しばらくして、嘆息するやうに呟いた。

三

子爵の妾宅通ひは相も變らなかつた。學校へゆきゝする子供達も、最初のうちこそ珍しがつて、

自動車の廻りを取巻いて運轉手や助手と友達のやうな口をきくのを樂しみにしてゐたが、段々其の興味もなくなつてしまつた。

三郎も今では、父や母にむかつて、子爵の自動車を見た事をほこらなくなつた。彼は自分の父の主君のやうに敎へられてゐる子爵が、お妾の家に行くといふ事で、自分迄もすつかり恥しめられたやうな氣持がして悄氣てしまつた。

「東條さんのお父さんはお妾の周旋もするんだとさ。」

友達が今にもさう云ひ出しさうで、何時も心は怯えてゐた。殊に子爵の自動車が主人を待つてゐる時は、其の横を通るのがいやで堪らなかつた。なるべく級友と一緒で無く、わざと遲れて通る事もあつた。

「此の頃は子爵の自動車はお見かけしないの。」

母親の方が氣にして、密かに訊く事もあつたが、

「僕、よく知らない。時々は見るけれど。」

あいまいな返事をして座をはづすのであつた。

或る雨の日、三郎は足駄の鼻緒が切れたので、片方の足を引擦りながら、誰よりも遲れて學校

の門を出た。重たい鞄を肩にかけた上からマントを着て、傘をさしてゐるので、泥濘の道を片足引擦つて歩くのは隨分不自由だつた。何となく我家の遠い氣持がして、三郎は心寂しかつた。それでも今日は例の處に自動車がとまつてゐないので、それ丈は嬉しかつた。

袋地の入口の、其の自動車のとまる場所は、重い轍に自然と凹んで、池のやうな水溜りになつて居た。三郎はその水溜りをよけもしずに、わざとばちやばちや渉つて行つた。

その時袋地の奥から、何か話しながら二人の女が出て來た。

「あら、あんな水溜りを。」

女中らしい赤い頰邊の女が、仰山な聲で、三郎を指さして笑つた。

「可愛らしい坊ちやんだわ。」

おそろしく脊の高い、おまけにゆつたりと肥つた若い女が、恰度振返つた三郎の顏を見ながら女中の方に云つた。

「おやおや、あなた鼻緒が切れちやつたのね。いけないわねえ。」

ちよつちよつと輕く舌うちしながら眉をひそめたが、

「一寸お待ちなさいな。すげてあげるわ。」

さう云ふと、右手の傘を女中に渡して、袂から手巾を取出した。それを裂いてすげて呉れるのだと、三郎にも直ぐに感じられた。彼は顏が眞赤になつてうつむいてしまつた。

「坊ちやん、お待ちなさいつたら。」

女中もともどもに呼止めたが、三郎はふり向きもしないで、片足を引摺つたまゝ駈出した。後の方で二人の女の笑ふ聲が、耳の底迄じいんと響いて來た。三郎は泣き度くなつた。

たしかにあれは、子爵のお妾に違ひ無いと思つた。そんなお妾なんかに言葉をかけられたのが羞しかつた。平常自分が肩身の狹いおもひをするのも、あいつのおかげなんだと思つた。そのくせ、大柄な女に似ない目つきの優しい顏と、甘つたるく響いた聲が忘れられなかつた。どうしても、彼が想像してゐたやうなわる者とは思はれなかつた。その時以來三郎は、お妾よりも子爵の方が、自分の肩身を狹くする人間なんだと思ひ始めた。(大正十二年一月三十一日)

喧嘩

「喧嘩だ、喧嘩だ。」

「喧嘩だ、喧嘩だ。」

教場から、砂利の敷いてある運動場に湧出すやうに群つて出た生徒は、昂奮した調子で口々に叫ぶのであつた。

自分達には痛い目を見るかゝはりの無い喧嘩を、無責任に喜ぶ彌次馬根性は、幼い子供の心にも根深く喰ひ込んでゐるのである。

「何、喧嘩だ？　誰と誰だ。」

木馬や器械體操や平行棒の在る砂場にゐた二三人の上級生は、上級生らしい高慢な態度で近寄つて來た。

「大霜と中川だよ。」

「どうしやあがつたんだ。」

小生意氣な、わざと帽子の後の方を裂いてかぶつて居るのが、下級生をかきわけて入つて行つ

た。もう直き中學に行く年配の、充分ませた奴で、肩を聳やかしてゐた。
口々に勝手な事を云ひながら群つて居る生徒達に取巻かれて、喧嘩の當人は二人とも稍蒼ざめた顔に不安の色を湛へて、固く唇を嚙むやうに引締めて居た。
「おい、お前達喧嘩すんなら原に行つてやれよ。先生に目つかつとよくねえぞ。」
不良少年ぶつた卷舌で、上級生は命令するやうに云つた。ふだんから亂暴で鳴らして居る奴が出て來たので、彌次は愈々緊張し、大霜と中川は一層顔色がなくなつた。さゝいな事から喧嘩になつたのだが、二人ともなぐりあひ迄に行かないうちに、何處かから仲裁が出て來て吳れゝばいゝと念じて居たのだ。しかし、もう斯うなつては逃れられないと思つた。
「原に行つてやるんだとよう。」
彌次は一段と熱して、當の二人を押して行く勢で、校舍の裏手の方になだれて行つた。
朝の、算術と習字の間の遊時間に、二人は外の子供と一緒に、スポンヂ・ボオルを投合つて居た。中川の投げた球が低く地を擦つて、大霜の手の間をパツスして、女生徒の運動場の方に轉がつて行つた。困つたなと思ひはしたが、そんな事は思ひもしないふりをして、大霜は一直線に球の行衞を追つた。ふだん先生から、女生徒の運動場に立入つてはいけないと嚴重に云はれて居る

ので、素早く拾つてかへらなければならなかつた。おまけに、多勢の女生徒が遊んで居る中に飛び込んで行くのが羞しかつた。羞しいので、非常な勢で駈けて行つた。

めぐれど
はしなし
たまきの
ごとくに
まどかに
めぐれよ
やよこども

手をつないで歌ひながら、ぐる／＼廻つて居る女の子の足下迄、球は轉がつて行つた。全速力で駈けて行つた大霜は、手をつないで居る輪の中にころがり込まないうちに拾はなくてはならないと思ひあせつて、のめるやうな姿勢で手を延ばした時、何も知らずにぐる／＼廻つて居た女生徒の一人と、雙方からぶつかつて、折重なつて倒れたのである。

「御免よ。」

しつかりと手につかんだ球を持つて、素早く立上ると、眞赤になつて駈戻つた。自分の失策の爲めに、面白さうに遊んで居た輪が崩れて、倒れた女生徒を抱き起したり、なだめたり、袴についた土をはたいてやつたり、「ひどいわ、ひどいわ」と口々に云つて居る氣配を後に感じながら、てれかくしに一段と速力を出して、みんなの處に駈けて行つた。

「あゝ痛い、轉んぢやつた。」

袴をまくつて見ると、膝つ子を擦りむいて、血が滲んでゐた。彼はつばきをつけて、しかめつ面をした。

「大霜はねえ、女とぶつかりやあがつたんだぜ。いやな奴だなあ。」

大工の子で、うちの職人に聞かされて、男と女の間に行はれる事などを、面白がつて喋るのを得意にして居るのが、大霜の投げかへした球を受取りながら云つた。

「大霜は女と抱合つて轉んだんだつてさ。」

もう一人の町つ子が、直ぐに應じてはやし立てた。

「そんな奴に投げてやんのよせよ。」

「あ、くせえくせえ。此のボオルは女くせえや。」

大工の子は鼻をつまんで、さも汚ないものゝやうに、球をそつぽうに投げ捨てた。それを二三人が争つて追かけて行つた。眞先に拾つたのが中川だつた。

「中川君、はふらない。」

すつかりてれてしまつて、胸をわく／＼させてゐた大霜は、平生仲よしの中川の手に球が入つたので、安心して叫んだ。中川も大霜の方に投げてやり度かつた。もと／＼自分がその球を投げた爲めに、大霜は女生徒の運動場迄拾ひに行かなければならなかつたのだ。

「ようし。」

さう云ひながら、向ふで高く兩手をあげて待つてゐる大霜の方に投げようとした時、

「よせよ。大霜んとこへやるとボオルが女臭くなるとさ。」

又町つ子がしつつこくいやがらせを云つて止めた。中川は力をこめて振上げた手のやり場に困つてしまつた。

「なんだい、はふらないのか。」

からかはれてむしやくしやして居る大霜は、荒々しく怒鳴つた。

「よせ、よせ、中川。」

「こつちにはふれよ。」

悪ふざけではしやいでしまつた子供達は、手をたゝいて騒いだ。

「おい、はふれよ。」

大霜はみんなの意地悪に腹を立てゝ、どうしても自分の手に受取らなくては顔が立たないやうな氣がして、これもしつつこく中川に迫るのであつた。

「俺んとこだよ。」

「僕だよ。」

中川の手の球を奪ひ取らうと一齊に駈寄つた。誰に渡しても外の者に濟まないと思つて、兩手でしつかりと懐に抱いた中川は、誰もゐない方に駈出した。

「畜生。」

大霜は一生懸命に追かけた。町つ子の連中にからかはれるのを逃れるには、一番いゝ機會だと思つた。わざと人ごみを潛りぬけたり、木馬を一廻り廻つたりして逃げ廻るのを、何處迄もと追かけて、最後に小使部屋の側の物置小屋の處へ追ひ詰めた。後から羽織に手をかけるのを、なほも振放して逃げようとする時、いやな音がして乳が切れた。

「何すんだい。」

中川は怒つた顔をして怒鳴つた。つましい暮しをして、母親の手ひとつで育つて來たので、着物を大事にする事は、心の底にしみこんでゐた。

「君が寄越さないからさ。」

「だつて、人の羽織の乳を切る奴があるかい。」

「馬鹿、ボオルをよこせばいいんぢやないか。」

「女ところんだ奴なんかにやるもんかい。」

云ふかと思ふと、中川は手に持つた球を力任せに外の生徒の方に投げた。大霜は一時に我慢が出來なくなつて、いきなり相手の胸ぐらに手をかけた。さつきから町つ子にいやらしい事を云はれて、むか／＼して居た癇癪が、今になつてすつかり中川一人に集中した。

其の時始業の鐘が鳴つて、先生の姿が近くに現はれなかつたら、二人は其の場で格闘したに違ひ無かつた。兩方とも力いつぱい胸のところをつかんで睨み合つてゐたが、先生が集まれの號令をかけたので、どつちからともなく手を放した。

「覺えてゐろ。」

「ゐるとも。」

さう云つて其の場は別れた。

二人は間も無く後悔してゐた。しかし、はたの者が喧嘩をさせなければ承知しなくなつた。

「大霜と中川と喧嘩だとよ。」

町つ子は、先生に知れないやうに聲をひそめて、級中に觸れて廻つた。

大霜は、自分よりも三列前の机に坐つて居る中川の、榮養の悪い首筋を見て居ると可哀さうで堪らなかつた。彼は級中でも力の強い方で、角力を取つては大概の者に負けた事が無かつた。中川なんかは十番に十番負つこのない相手だつた。父親のない中川は、荒物をあきなふ傍、裁縫の師匠をして居る母親と、高等科に通つて居る姉と、ちひさい弟と四人で、貧しく暮らして居るのであつた。

「坊ちやん、仲よくしてやつて下さいね。」

始めて學校にあがつた頃、同じ方角に歸るので、其の姉に云はれた事も想ひ出した。色の白い、學校中でも脊の高い中川の姉さんが、大霜は好きだつた。年が少しでも違ふと、子供の目には先方は全く大人のやうに見えた。彼は一種の思慕の情を持つて居た。夕方なぞ、羽織の下に味噌漉

をかくして、お使ひにゆく中川の姉さんの姿を見かけたりすると、涙ぐんで見送る事もあつた。朝、女學校へ行く時も、午後から歸る時も、抱車に送り迎ひされて居る自分の姉とひきくらべて考へた事もあつた。その中川の姉さんが、自分と弟が喧嘩したと知つたら如何思ふだらう。殊に自分がさんざんに相手を泣かしてしまつたら如何するだらう——どうかして誰かゞ仲裁して呉れゝばいゝと、大霜はしんそこから願つてゐた。けれども、事を好む子供達は、喧嘩を見る面白さに有頂天になつて、決して此の機會をのがしはしなかつた。

「原に行つてやるんだとさ。」

「行け、行け。」

口々にわめきながら、當の二人を取圍んで、小學生の群は學校の裏門を出て行つた。

原と云ふのは、學校の裏手の寺の空地で、此の界隈の子供の遊び場所になつて居た。赤土の草原で、正月凧をあげるのも、ふだん野球の眞似をするのも其處だつた。春秋の學校の運動會も其處で行はれた。時々起る喧嘩は、屹度此の原でやる習慣になつて居た。

春の日はいつぱいに空地の上に漲つてゐた。未だ緑の色の若々しい草むらには、枸杞の實が赤らんで、天道虫の背中が日に光つてゐる頃であつた。上級の餓鬼大將を先頭にして、罪人のやう

に力無く、その癖冷く緊張した二人を取圍んだ一群は、無慙に若草を踏み躙りながら、原の眞只中にやつて來た。

あつちこつちで遊んで居た下の級の子供も何事が起つたのかと思つて、駈出して來た。其の中には一年生の中川の弟もまじつて居た。鞄を肩にかけて、手には海老色の毛糸で編んだ袋に入れた辨當箱を紐長くぶら／＼させて居た。遊び廻つて汗をかいた額を、筒袖の袖口で横撫でにしながら、外の子供達の腕の下をくゞつて、輪取つて居る中に顏を出した。其處には自分の兄が眞青な顏をして、大霜と睨み合つて立つて居た。

「さ、二人とも支度しろ。」

上級生は手に持つた棒きれで地面を叩きながら命令した。

かうなつては免れない運命だつた。ぐるりは同級生に圍まれて、殘されたのは喧嘩の場所だけだつた。二人は手に持つた本包を地面に放り出し、其の上に帽子を脱いで置いた。つましく育てられた中川は、足袋や草履を汚すのを怖れて、はだしになつた。二人とも極度に緊張して、掌に脂汗を握りしめて向ひ合つた。

「中川、しつかりやれ。」

「大霜にはかなはないよ。中川は痩つぽちだもの。」
弱い方に味方して聲援する者もあれば、同情する者もあつた。良家の子に對する反感もあつた。
「おい、喧嘩は一人〳〵だぞ。男同志の喧嘩だ。外の奴が手でも出しやあがるとひつぱたくぞ。
相手が參る迄やれ。さうして濟んだ後では握手して別れるんだ。」
活動寫眞で覺えた決鬪の場面を想ひながら、餓鬼大將は當の二人と、ぐるりの下級生に訓示を與へる態度でいひきかせた。
「いゝか。おいち、二、三。」
其の時、大霜は中川の弟があらはれたのに初めて氣が付いて、一層なさけなくなつた。折角の力が何處かに消えて行つてしまつたやうな心持で、一心こめて飛びかゝつて來さうな中川に對して、多少氣おくれした。
「早くやれ、やれ。」
「早くやんないと先生が來るぞ。」
彌次馬は、手出しをしない二人を、さも意氣地無しのやうに罵つた。
中川は猛然として大霜の胸に飛びかゝつた。かなはないとは知りながら、死物狂にむしやぶり

ついた。大霜はたぢたぢ押されながら、相手の手首をつかんで、危く踏堪へた。

「中川強いぞ。」

弱い方に勝たせ度がつて居る彌次は一齊に喝采した。中川は勢に乘じて右の手を振り切ると、稍ひるんで居る大霜の横面を、力任せに引ぱたいた。引ぱたかれて大霜も、滿身に憤が漲りわたつた。いきなり相手の頭を三つ四つ、續けざまに拳骨でなぐり飛ばしたあげくに、がむしやらに突飛ばした。ひよろひよろして、そのまゝ後に尻餅をつきさうになつた中川を、彌次の一人が背中から押戻した。それに力を得て立直ると、滅茶苦茶に兩手を振廻して、前よりも一層向ふ見ずにむしやぶりついた。取組んだと思ふと、大霜は足を絡んで、相手を地上に捩ぢ倒した。倒れながらもしがみついて放れないので、二人は折重つて、音をさせて轉がつた。上になつたのは大霜で、容赦なく馬乘りになつて、相手の咽喉に左手をかけ、右の手をあげて頭も顏も區別なく、力の限りなぐつた。

赤土の地べたに半面を押つけられたまゝ、中川は兩足をばたばたさせてもがいたが、如何してもはねかへす事が出來なかつた。齒をくひしばつて堪へては居るものゝ、涙がいつぱい目に溜つて來た。何時の間にか鼻血が流れてゐた。

突然、大きな聲で中川の弟が泣出した。先刻から、兄の助勢をし度いと思ひながら手が出せなかつたのだが、あんまり手ひどくやつつけられたのを見ると、きちがひのやうに泣き叫びながら、手に持つた辨當箱を振廻して、大霜にむかつて行つた。勝負がはつきりし過ぎて來たので、大霜に味方する者は一人も無かつた。男同志の喧嘩だと宣告した上級生さへ、弟の助勢を止めようとはしなかつた。敵討の話などで養はれて居る頭腦は、此の時ひどく弟の勇氣に同感した。

「畜生、畜生。」

弟は泣きながら、辨當箱で大霜の背中をなぐつた。大霜は驚いて半身を振向けると、いきなり其の辨當箱をひつつかんで、ぐいと引いた。ひよろひよろして引かれて來るのを、首つ玉に手をかけて、たゞ一突きに突飛ばしてしまつた。ひとたまりも無く横つ倒しになつて、火のつくやうに泣き出した。それつきり手むかひする勇氣は無く、やたらに辨當箱で地面を叩きながら、組みしかれて居る兄と、その敵の廻りをかけ廻つた。

大霜はすつかり闘志を失つてしまつた。後悔と憐憫の外には何も無かつた。喧嘩はもう止め度かつた。殊に相手の鼻血が半面を濡らして居るのを見ると堪らなくなつた。中川の弟の心根も可哀さうだつた。泣きわめく聲も聞いてはゐられなかつた。

一人は地面にしがみついて涙をこらへ、一人は其の上に馬乘りになつて、誰かゞ早く引分けてくれゝばいゝと念じながら、これも矢張り賴りなく、晴れわたつた空に目をそらして涙をこらへて居た。その空の遠くに、飛行機がゆるくゆるく圓を描いて飛んでゐた。格鬪の爲めに踏み躪られた草の、根こそぎひつくりかへつたあとの眞新しい土の上には、地虫がころがつてうごめいてゐた。大霜はそれにも目を落した。

辨當箱を振廻して、地だんだ踏みながら地べたを叩いて居る中川の弟の泣聲も、段々張合の無いものになつて來た。滿身の怒をこめて叫んでゐたのが、今は空虛な機械的なものに變つて來た。見物の彌次も、すつかり興味を失つてしまつた。

「中川、しつかりしろよ。つまんねえなあ。」

あからさまにさう云ふ者さへあつた。

大霜は、自分の膝の下にへたばつて、泥と涙と鼻血にまみれて、うつろな目つきでうらめしさうに睨んでゐる中川が可哀さうで堪らなかつた。此のまゝ家に歸つたら、中川のお母さんはどんなに歎くだらう。中川の姉さんは、明日から自分をどんなに憎むだらう。自分の方が力が強く、無態に勝つたのが悲しかつた。若しも自分が中川のやうに負けてゐたら、かへつて氣が樂だつた

かもしれない。大霜はこらへても堪へても、涙がまぶたのうち側にいつぱいになつて爲方が無かつた。

「あゝ、もう勝負はきまつた。二人とも立上つて握手しろ。」

上級生は、又手に持つ棒で地上を打つて、だみ聲を張あげた。

「なんでえ、つまんねえなあ。」

「もうおしまひか。けちな喧嘩だなあ。」

あつけなくおしまひになつた不平と、なほもけしかけて、子供に特有の殘虐性をたのしまうとする彌次の聲がぶつぶつ聞えた。

大霜は、相手の咽喉にかけてゐた手を放して立上つた。もう勝負はついたから握手しろと云ふ上級生の言葉が嬉しかつた。彼は袴や着物についた泥をはたいてゐた。

けれども中川は、地べたにへばりついたまゝ起きなかつた。むざむざ負けて引分けられるのをいさぎよく思はないらしく、執念深さうな顔をして、横目で大霜を見上げて居た。

「中川、起きろ。」

上級生は命令しながら、襟首に手をかけて引起さうとしたが、中川は草につかまつて地面を離

れまいとした。他人の手で引起されるのを殘念に思つたのである。
「馬鹿。もう喧嘩は濟んだんだ。男らしく握手しろ。」
憎々しさうに云ひながら、上級生は無理やりに中川を引摺り起した。袴も着物も泥だらけになつて、中川の土と涙と血によごれた顏は一層凄かつた。大霜はおづおづしながらも、握手の爲めに手を差延ばしてゐた。
「なんでえ、男らしくない奴だなあ。握手するのがいやなら死ぬ迄やれ。」
其の言葉が終るか終らないに、中川は又猛烈な勢で大霜にむしやぶりついた。
「やつた、やつた。」
「中川えらいぞ。」
もうおしまひとあきらめて居た彌次は手を打つて喝采した。
「馬鹿な奴だなあ、どうせかなひもしないくせに。」
いつたん歸らうとして歩き出した見物も引かへして來て、又圓陣をつくつた。
「よし、やるんならやれ。」
上級生も中川の死物狂の勢に吃驚したらしかつたが、極めておちつき拂つた態度を見せて、奬

勵するやうな口吻で云つた。

誰よりも驚いたのは大霜だつた。もう全く征服しきつたと思つて居たのが、忽ち又手むかひして來たので、止むを得ず防禦の爲めに相手の兩手を押へた。彼にはもう攻勢を取る氣力は無かつた。あんまり執拗くやつて來るのが小面憎くもなつたが、しかしさんざんになぐりつけて、鼻血迄出した相手を可哀さうに思ふ心の方が強かつた。

先方が防禦ばかりしてゐると見てとつた中川は一際力が加はつて來た。彼は全身の力をこめて、大霜の胸に額をつけると、充分に下手に組んで、ひた押しに押した。大霜の心はすつかり混亂してしまつた。自分がわざと力を出さないで居るのに、相手にはそれがわからないのかしら――さう思ふ餘裕のある程、彼は闘爭の意志を失つてゐた。もう一度投げ飛ばしてやらうかな――とも考へながら、其の結果には頓着無く、中川と抱合つたまゝ同體に倒れた。力を出しておつぷせるのは、わけは無かつたが、其の時の心持は、不思議に愛他的だつた。自分と同體に倒れた事で、すつかり滿足して、愈々元氣のよくなつた中川の心根に同情しきつてしまつた。大霜は中川のするまゝに、自分が地べたに背中をつけて、下敷になつてしまつた。

「中川えらいぞ。しつかりやれ。」

「なぐれ、なぐれ。さつきのかたきをうて。」

彌次は狂喜して聲援した。しかし大霜は中川の手首をつかんで自由にはさせなかつた。これ丈讓つてやれば文句はあるまい。此の上なぐられる屈辱迄は忍べないと思つてゐた。彼は下から、存外ゆとりのある心狀で中川を見上げて居た。彌次馬達も、自分がわざと負けてやつたのを知らないんだなと思ふと、すつかり英雄らしい心持になる事が出來た。どうかして兩手の自由を得ようとあせつて居る中川の樣子を見ると、微かながらも得意の微笑さへ浮んだのである。

中川は、大霜の上に馬乘りになつては居たが、單に上になつて居るといふばかりで、手首を握りしめられて、どうする事も出來なかつた。腕力の相違を痛感した。さうして、若しかすると大霜が、わざと本氣にならないのでは無いかと云ふ疑が頭をかすめた。その考で、今迄の得意は消えてしまつた。彼は泣き出し度いやうな焦躁にかられて、いきなり大霜の顏につばきを吐きかけた。

大霜は顏をそむけるひまも無かつた。目をつぶつた上から、容赦なく唾液が散つて來た。其の時兄の優勢に滿足し切つてゐた中川の弟は、いきなり駈寄ると、土足をあげて大霜の頭を蹴飛ばした。蹴飛ばしたばかりでは氣が濟まないで、兄を見倣つて、ぺつぺつと唾をひつかけた。

びつくりして目をあけた大霜は、猛烈な勢で相手をはねかへした。一切自分のした事が嘘僞だつた事を知つた。その嘘僞を打消す爲めには、中川兄弟を滅茶々々になぐりつけてやらなくてはならないと思つた。大霜はあらん限りの力を振つて中川をねぢり倒した。彼は再び優者の地位にかへつた自分を見出して滿足した。

その時、

「先生が來たぞ。」

「校長先生だぞ。」

二三人一時に叫ぶと、直ぐにばたばた駈出した。

「逃げろ、逃げろ。」

不良少年がつてゐた上級生も、眞先に逃げた。後から下級生は、虫のやうにちりぢりにかけて行つた。

大霜と中川は、取組みあつた手を放して、呆然として立上つた。原の向ふの入口から、此方の方に歩いて來る脊の高い校長のフロツクコオトに山高の姿を見ると、中川は本能的に、いきなり本包と帽子を腋の下に挾み、草履と足袋を手につかんで、おびえ切つて駈出した。つゞいて弟も、

海老色の毛糸の袋にはいつてゐる辨當箱を引き擦りながら、兄のあとを追つて逃げた。誰の頭にも、一瞬間喧嘩の事は消え去つて、校長の怖ろしさばかりがいつぱいだつた。

大霜は其の行衞を見送つて佇んだが、まるつきり夢のやうな氣がした。それでも段々近づいて來る校長の姿に壓迫をうけて、心はたゞならず波を打つた。つかまつては大變だと思ふと、これも帽子と包を抱へて、小走りにかけ出した。今にも後から追ひつかれはしないかと思ふと、襟元が寒くなつた。

原を貫いてゐる一筋の道を、彼はすたすた歩いた。茶畑の中を拔けて、お寺の境内を通つて、往來に出てほつとした。此處迄來れば、彼は右に曲り、校長は左に行く事を知つてゐた。それでも未だ歩度をゆるめないで、半町ばかり右手の道を急いでから、大霜は始めて着物の泥を拂ひ落さうとした。地べたに倒れた時の赤土は、かたくこびりついて居て落ちなかつた。

我家に歸つて母にとがめられる事も勿論氣にかゝつたが、それよりも途中で、中川の家の前を通らなければならないのが胸を責めた。中川はもう家に歸つて、一部始終を母親に話したであらう。母親は門口で、自分を待伏せしてゐはしないだらうか。彼はわざわざ遠廻りをして歸る事にきめた。何時の間にか引かゝれてゐたと見えて、頰邊がひりひりした。

進まない足を引擦つて歩いてゐるうちに、段々心がおちついて來ると、一切の事が後悔された。喧嘩をした事は勿論馬鹿々々しかつた。其の喧嘩の原因を考へると、一層馬鹿々々しかつた。中川をひどい目に合はせ、鼻血迄も出させた自分の亂暴は、何とも云へない不愉快な事だつた。それぱかりで無く、わざと敵に勝を讓らうとした自分の所業が、甚しく口惜しかつた。こつちはわざと負けてやつたのに中川はいゝ氣になつて唾をひつかけ、中川の弟は自分を泥足で蹴つた。その點に考が集中すると、彼は今更口惜しさに涙が新しく湧いて來た。

「大霜さん、今お歸り。」

ふいに後から聲をかけられて振りかへると、中川の姉さんが追ひついて來た。學校の歸りに何處かへ廻つたものと見えて、色の褪めた袴を穿いて居た。何も知らないで笑顏をして寄添つて來られたので、大霜の涙は愈々止度もなくなつてしまつた。

「今日は清太郎は御一緒ぢやあないの。」

さう云つてのぞき込むやうに訊かれると、大霜は堪らなくなつて、顏をかくしてすゝりあげた。

「あら、どうしたの。あんた喧嘩したのね。」

泥だらけになつた、しかもみゝずばれのあとのある顏を見て、中川の姉さんは眉をひそめた。

大霜はしやくりあげ、しやくりあげて泣いたが、中川の姉さんに泣顔を見られるのが何よりもつらかつたので、涙を拭いてくれようとする手を振拂つて、まつしぐらに駈出した。中川と喧嘩をした事を悲しむ心は勿論強かつたが、自分の噓僞の英雄的行爲と、相手の卑怯な態度が忌々しくて堪らなかつた。つひぞ今迄知らなかつた人間の世の中のいまはしさが、さうはつきりとではなかつたけれど、限り無く悲しく、不愉快に感じられたのであつた。(大正十二年二月九日)

邂逅

「叔父さんぢやありませんか。」

人通りの途絶えたところで、思ひ切つて追ひ越して、二三間行つてからつかつか戻つて、たしかに叔父に違ひ無いと思はれる男の前で、自分は帽子を取つて頭を下げた。

茶色の褪せた中折帽の山の高いのを阿彌陀（あみだ）にかぶつて、日に燒けた顏に流れる汗を手拭で拭いて居る、頰髯の無性（むしやう）に延びた大男は、叔父に違ひ無かつたが、先方では、大人になつた甥の顏を、すつかり忘れてしまつたらしかつた。

「私は美澤（みさよ）の啓三です。」

と自分から名告（たの）つて、眞正面から叔父の顏を見上げた。

「おゝ、啓坊か。」

暫時（しばらく）ぢいつと見詰めて居たが、通りすがりの人が驚いて振かへつて見た程大きな聲で、叔父はなつかしさうに叫んだ。自分は啓坊と呼ばれたので、すつかり赤面してしまつた。

「啓坊だつたか、大きくなつたなあ。」

底の方に濁音のまじる叔父の聲は、ちつとも昔と變らなかつた。
「どうも叔父さんらしいとは思つたのですが、あんまり久しぶりなもんだから……」
「さうか、それぢやあ後をつけて來たのか。」
叔父は自分の顏をしげじげ見ながら、何か血族の特徴を見出したと見えて、へだての無い聲で高々と笑つた。
薄鼠の汚れた二重廻が、六月の風の無い日なので、殊の外暑苦しく見えるのに、相當の大きさの古鞄を提げて居るのが、たつた今停車場に着いた姿に見えた。
「何時出ていらつしやつたんです。」
「昨日の朝着いた。一寸用事があつてね。」
「御宿はどちらです。」
「宿？　昨夜は友達の所に泊つた。」
叔父は力の無い樣子で答へた。
「うちには來て下さらないんですか。」
明かに、これから又遠くへ歸るらしい叔父に對して、自分の言葉には多少咎めるやうな調子を

帶びて居た。

「行かない事も無いが、今度は急いでゐるから、まあ行くまいかと思つて居た。」

「それぢやあ御用は濟んだのですか。」

「濟んだといへば濟んだのだが、あてにして來た友達があてにならなくて、結局話はつかなかつたから、愚圖々々して居ても爲方無いと思つて、歸る積りで出て來た。俺のやうな田舍者には、東京は怖しくて歩けない。」

話を轉じ度い樣子で、自動車、電車、自轉車、人力車の絕間なく通る往來に目をうつして、とつてつけた笑ひ方をした。その橫顏を見ると、長の年月旅から旅へ、失意の中に流轉して行つた人の衰へにまじつて、自分の母と血を分けた面影は、あきらかに認める事が出來るのであつた。

「何處か近所でお茶でも飮みませうか。」

自分の方から誘ふのも如何かとは思つたが、何時までも立話をして居るのは、往來の人に對しても具合が惡いので、先方の氣を兼ねながら訊いて見た。

「さうだなあ、さうするかな。」

あまり氣は進まないらしかつたが、思ひ直して、左から右の手に鞄を持ちかへると、日和下駄

の歯を鳴らして歩き出した。

同じ學校の學生のよく集まる、おもて通りの繁昌する家を避けて、あんまり見た目のよく無い裏通の一品洋食屋に入つた。

「暑いなあ。」

二重廻(まはし)をとり、帽子をぬいで、叔父はしきりに手拭で汗を拭いた。

「何か召上りますか。」

「喰ふものは欲しくない。麥酒(ビイル)でも貰はうか。」

「それぢやあ麥酒。」

椅子の背につかまつて立つて居る給仕の女を顧みて註文した。

二つのこつぷに白い泡を吹く麥酒を注いでしまふと、女は無表情な顔をして、片隅の卓の上の蓄音機をかけ始めた。義太夫、かつぽれ、カチユウシヤの唄、鴨綠江節、行進曲(マアチ)などを、追かけ追かけ聞かせるのであつた。

「隨分久しぶりだつたなあ。十五六年にもなるか。」

叔父はうまさうに麥酒を飲んで、口髭に白い泡をつけたまゝ、なつかしさうにきいた。

「さうです、お祖母さんが死んで十四年になりますから、あの時以來です。しかもあの前にも長い事御目にかゝりませんでした。」
「さうかなあ。それでもよく俺を覺えてゐたね。」
「そりやあ忘れませんよ。あなたの方では忘れても。」
「うむ、俺はすつかり忘れてしまつた。こんな立派な大男になつて居ようとは思はなかつた。矢張り子供のやうな氣がして居たが、一體幾歳になる。」
「二十三です。」
「學校は。」
「來年卒業の筈です。」
段々心置きなく口がきけるやうになつた。
自分の記憶にある叔父は、明治二十年代のハイカラだつた。學校を優等で卒業して、汽船會社に勤めて可成用ひられて居た。自分から見れば祖母に當る母親と、臺所を働く婆やの三人暮しで、木挽町の河岸の大きな待合の隣に住んで居た。二階一室、階下が三室位の家で、狭い庭に百日紅が一本、塀の外にも枝を延ばして、夏は燃えるやうな花を咲かせた。

自分は、うちにゐる父方の祖母よりも、木挽町のお祖母さんに可愛がられた。容貌も、體質も、氣性も、母方の血を多く引いてゐた。或時、祖母に手を引かれて外出した時、祖母は町角の辻占者に孫の人相を見せた。長い髯をはやした占者に、此の子は成人の後必ず名を擧げると云はれて、祖母はすつかり喜んでしまひ、お前は兄さんよりもお父さんよりも偉くなるに違ひ無いと、口癖のやうに云つて聞かせた。

木挽町に遊びに行く時は、いつも泊りがけだつた。出入の車宿の親方で、ふだんは稼ぎには出ないのが、特別に曳いてくれた。麻布の高臺を下りて愛宕下に出て、新橋を渡つて行く道々、後から來る車にどんどん追ひ越されるのが、自分としては大變口惜しかつた。叔父の家に送りこむと、玄關に腰をかけてお茶を飮みながら、親方は又祖母や婆やを相手に、長々と喋つて行く。一日二日たつと、又ゆるゆる車を曳いて迎ひに來るのであつた。

母の里は、維新の際朝敵の汚名をきせられて、薩長の爲めに散々の目に合はされた某藩の家柄だつた。おちぶれて、父親も死に、つましい中で叔父と、その妹になる自分の母は育つたのである。

叔父が歐洲航路の事務員をしてゐた頃は、いつも珍らしいお土産を持つて來て呉れた。六尺近

い大男で、日本人には類の少ない白皙の面に、稍紅味(あかみ)を帯びた口髯をはやしてゐた。金筋の入つた制服を着て、當時は未だ珍しかつたバナナだの鳳梨(パイナツプル)の籠を提げて來るのが、自分の異國憧憬の心を充分にそゝつた。一度は、南洋の港から買つて來た桃色の鸚鵡が、叔父の家の二階の緣側で、終日籠の金網を嚙みながら、銳い叫聲を立てゝ居た事もあつた。

自分はすつかり叔父を崇拜して居た。晝の間はお祖母さんにまつはりついて遊んで居るが、遊び倦(あ)きると、只管(ひたすら)叔父の歸るのを待つた。夕方、會社のひける頃は、祖母に手を引かれて河岸に出てゐて、大男の叔父の姿が見えると、自分は祖母の手を振切つてかけて行くのであつた。

幼い甥を喜ばせる爲めに、叔父は小石を拾つて、川水の上に遠く投げて見せる。風を切つて飛んで行つて、向岸の海軍大學の石垣にぶつかるのを、自分は驚嘆して見守つた。幼い者の眼には、その向岸が非常に遠く思はれた。一日も早く大人になつて、自分も叔父のやうに遠く迄石を投げ度いと願つた。眞似をしてはふつて見ると、三間とは行かないで、ぽとんと落ちて水底に沈んでしまふのであつた。川を越(こ)して石を投げ得る人は、あらゆる事の勇者のやうに思はれた。

しかし此の勇者は、其後友人の爲めに連帶債務をしよつて、それがもとで會社にも居られなくなり、間もなく東京から姿を消した。祖母は娘の嫁入先に引き取られた。

叔父は田舍で私塾を開いて、英語を敎へてゐると云ふ話だつたが、やがて大阪へ行つて商賣をして失敗し、九州の方へ流れて行つた。十四年前に祖母が死んだ時は、大分縣の或町で、矢張り英語の敎授をして居たのが、喪主として遙々出て來た。葬儀が濟むと直ぐ歸つてしまつたが、程もなく北海道に行つた消息があつたきりで、長年の間、親身のきやうだいの自分の母にさへ文通もなくて過ぎた。妹の夫、卽ち自分の父に、多少の金錢上の迷惑をかけた事を恥ぢて、何かしら成功しない限りは、顏出しをしないと心に誓つてゐたものらしかつた。

自分は、二度とあふ機會があるかどうかもわからなかつた叔父を、偶然途上で見出した不思議の邂逅を喜んだ。

叔父は名だたる大酒だつたから、早くも二三本の麥酒を空にして、心持赤くなつた顏に人のいゝ微笑を浮べ、一切の世の中の事は忘れたやうな陶然とした心持を見せて居た。むかしから口數の少ない人だつた。

「叔父さんは今でも矢張り英語を敎へてゐるんですか。」

自分は叔父が何をしてゐるのか、何をしに東京へ來たのか、いち〳〵訊き度くて堪らなかつた。

「まあそんな事だ。外に藝も無いからなあ。」

持前の高笑をして、又麥酒の滿を引いた。
「今度はどういふ御用です。」
「一寸樺太に仕事があると聞いたので、友達に資本を出させて大儲をしようと思つたが、手紙ではよささうな返事をしてゐた奴が、來て見ると矢張り金を出さない。又手ぶらで歸るところなんだ。」
「うちには是非寄つて下さい。お母さんはさぞかし喜ぶでせう。」
「さうだなあ、久しぶりで逢つても見たいが、お前のお父さんには迷惑のかけつぱなしだからね。」
自分は言葉が續かないで默つた。所謂成功者の一人に數へられる父は、常々此の叔父の事をよく云はなかつた。あの男は學問も出來、才氣もあり、覇氣もあるが、何處かに釘が二三本足りないと、辛辣な批評を加へて居た。
「けれども、うちに歸つて、叔父さんにお目に懸つたと云つたら、何故連れて來なかつたと、屹度云はれます。お母さんも昨年の大病以來、以前の元氣はなくなりましたよ。」
「ふうむ、一時は危なかつたさうだな。」

今ではたつた一人の親身の爲めに眉を寄せた。昨年の春膽嚢炎の手術をした母は、命だけは取りとめたが、爾來まるつきり衰へてしまつた。體にいき／＼した血がなくなつてしまつた。始終蒼い顏をして、度々風邪を引くやうになつた。自分はそれを話して、是非とも逢ひに來て貰ひ度いと勸めた。叔父は酒の醉に重くなつた額を伏せて、卓上のこつぷの中に白い泡を立てゝゐる麥酒の色に目を落して沈默してしまつた。

何となく胸が苦しく感じられて來たので、話を外に轉じ度くなつた。自分は先刻から考へて居た事を口に出した。

「叔父さんのゐた木挽町の家はどうなつたでせう。あの邊にはちつとも行つた事もないが、私にはいろ／＼なつかしく思ひ出されますよ。」

「さあ、どうなつたか。餘程變つたらう。」

「私は今でも忘れないのですが、あなたが向岸迄石を投げるのを、何とも云へない崇拜心を持つて驚嘆したもんです。どうかして大人になつたら、あゝいふ風に偉くなり度いと、心底から念じて居ました。」

吾しらず熱した語調で、如何に石投げが、幼時の心に英雄的に見えたかを力說した。

「さうかなあ、つまらん事ばかり上手だつたと見える。」

叔父は天井を向いて笑つたが、決して愉快な笑聲ではなかつた。胸を壓されるやうな心持を感じて居る事が、かくし切れなかつた。二人は又默然として、麥酒のこつぷを見詰めて居た。

先刻から蓄音機を鳴らしつゞけて居た給仕の女もくたびれて、勸進帳の一枚がおしまひになると、あからさまに大きな欠伸(あくび)をして立上つた。麥酒の外には何の註文も無く、差向(さしむかひ)で話ばかりしてゐる老壯士らしいのと學生の、どつちも相手になつて呉れないのが退屈だつたのであらう、軒先の往來に出て、近所の犬に口笛を吹きながら手を差出した。赤斑(あかぶち)の瘦つこけた犬は、馴染と見えて、尻尾(しつぽ)を振つてかけ寄つて、がむしやらに體を擦りつけながら、差出された手の平(ひら)をなめ廻した。

「さあ、そろ〳〵行かうか。」

叔父は突然顏をあげると、今時は流行(はや)らない大きな銀時計を帶の間から引出して見た。

「それぢやあ、うちに寄つて下さるんですね。」

どうしても連れて行かなくては、自分も自分の一家も薄情過(すぎ)るやうな氣がした。

「まあ兎に角おもてに出よう。」

暫時考へてから、叔父は曖昧な返事をした。
「おい、勘定。」
往來にしやがんで犬にからかつて居る給仕の女を呼んだ。
「あら、もうお歸りですか。」
變に鼻にかゝつた聲で、厚ぼつたい草履を引擦つてかけて來た。出過るかなとは思つたが、自分は素早く女の手に紙幣を渡した。
「これは俺が拂ふ。お前の小遣錢を減らしては氣の毒だ。」
さう云ひながら、懷中から紐のついた財布を出した。
「でも私がお誘ひしたんですから。」
「そりや、いかん。これでも麥酒代位は持つてる。」
叔父は又から／＼笑ひながら、給仕の女を呼戻し、自分の手渡した紙幣を取かへして、あらためて銀貨や小紙幣をまぜて拂つた。
二人は並んで往來に出た。諸官省の大きな建物のづつしりと聳えてゐる上に、暮方の長い初夏の空が、高く遙かに薄光に光つてゐた。

「ひとつ木挽町の方をぶらついて見ようか。」

銀座に向きかけた足をかへして、突然叔父が云つた。自分は喜んで同意した。

水の多い此の邊の空氣は、微醺の肌に心地よく觸れた。いくら預らうといつてもきかないで、叔父は片手に古鞄を持ち、片手に外套を引かけて歩いてゐたが、昔の記憶を辿る樣子で、なつかしさうに附近の樣子を眺めてゐた。

まだ木の香のしさうな大きな待合の角を曲ると、向岸の海軍大學が第一に目に入つた。いきいきした樹立の綠の中にぬきんでゝ、高い屋根がくつきりと夕空に迫つて居る。角の待合から四五軒目で、矢張り大きな待合の隣が、むかしの叔父の住居だつた。今も變らぬ百日紅が、古びた塀の外に枝を延ばしてゐた。その枝の上の二階の欄干には、友染の夜具が、未だ取りこまずに干してあつた。門口には女名前の表札が出て居た。

二人とも口をきく氣持は失つてしまつた。いひ合せたわけではないが、河岸の立木の下にしやがんで、折柄滿潮のゆたかに盛上る川面を見て居た。

子供の時分見たのとは違つて、川幅は意外に狹かつた。叔父の投げる石ころが、唸つて飛んで行く向岸は、隨分遠く思はれたが、今は左程に思はれない。それを叔父にも話した。

「あなたの石が向岸の石垣にぶつかるのを、外の人には出來ない事のやうに感心しましたが、これなら誰にでもわけなさゝうですね。」

「さうか。そんならひとつやつて見るか。」

叔父はいゝ機嫌で、鞄の上に外套を置いて立上ると、足下の小石を拾つて、何の躊躇も無く投げた。石は中空に半圓を描いて飛んで行つたが、向岸迄は屆かないで水に落てしまつた。おやおやそんなに遠いのかと思ひながら、自分も立上つた。手ごろのやつを探して、力任せに投げて見た。風を切つて手を離れたのは、苦も無く對岸の石垣の上の、樹立の中に飛び込んだ。

「これでもか。」

叔父は大きな聲を出して、第二の石を投げた。危なく水に落ちさうであつたが、やつとの事で石垣の水の近いところに音を立てゝ當つた。叔父は一切の屈託を忘れて笑つた。自分もすつかりいゝ元氣になつてしまつた。體を動かした爲めに冷めかけて居た麥酒の醉が盛返して來た。二人はしきりに石を探して、手あたり次第に投げた。

「一、二の三。」

叔父はかけ聲をして、自分のとどつちが遠くへ行くかを爭つた。いくつ投げても自分の方が、

樂々と遠く迄行つた。

いつ迄もあきずに投げて居たが、突然、

「誰だッ。」

と對岸から怒鳴る聲がした。驚いて振上げた手を止めた時、暗くなつた灌木のしげみを押分けて顏を出した人の姿が見えた。

どう思つたのか、叔父は河岸に置いた鞄と外套を引つかむと、下駄の齒を鳴らして一散に逃げ出した。水を距てゝ居る以上は、向岸から追かけて來ることは不可能なのだが、いゝ年をした男として、はしたなさを恥ぢたものらしかつた。さう思ふと、自分も叔父の後を追つて、ちらちらと灯影も見え初めた町の方へかけ出した。

遞信省の横手迄來ると、叔父ははあ〳〵云ひながら立つて居たが、自分の姿を見ると、

「面白かつたなあ。」

と云つて、全身をゆすつて笑つた。

「お前が子供の時に偉いと思つた事も、存外たやすいので驚いたらう。啓坊も大人になつたんだ。」

顏の汗を拭きながら、感慨深く云つたが、そのまゝ、愈々燈火の數を增してかゞやく大通の方に步き始めた。

自分はその後から、何ともいへない嬉しい氣持と、涙ぐましい同情を持つてついて行つた。

銀座の近く迄來ると、叔父は突然足をとめて、

「俺は矢張り今夜の夜行で歸る。うちに歸つたら、お父さんにもお母さんにもよろしく云つておくれ。叔父さんは相變らず貧乏してゐるが、元氣は元氣で、むかしの通り石を投げましたつてハハハハハ。」

高々と笑つたが、直ぐに思ひ切りよく步き出した。無理にも引止めようと追ひすがつたが、叔父はなだめるやうに自分の肩を輕く叩いたばつかりで、一言も云はずに又步き出した。自分は胸が迫つて何も言葉が出なかつた。

しばらくは、往來の人の頭の上を越して、阿彌陀にかぶつた叔父の帽子が見えたが、間もなく人波の中に消えてしまつた。(大正十二年六月十二日)

九月一日

一

八月三十一日の夕方、朔日から學校の始まるちひさい子供達を連れて、主人夫婦は東京に歸る事になり、由井ケ濱の曲淵の別莊には、九人の人數が殘る事になつた。長男の一郞と、長女の甲子と、次女の乙子と、夫人の里の遠緣の者の娘で甲子や乙子の世話をする養子と、一郞の同級生の澤と、女中の延と鐵と、別莊番のぢいやとばあやが居た。外には英國種のポインタアの年をとつてよぼよぼして居るのが居た。

行儀のいゝ事を何よりも好む、神經質で口やかましい主人が居なくなつたので、いひ合せたやうにみんなの心持は愉快に自由に放縱になつた。停車場へ送つて行つた歸りに、一郞は外の者に別れて、一の鳥居の側に居る岡部の兄妹を誘つて、ホテルに出かけた。夏中其處の舞踏場で、一郞の連中は、亞米利加の女や日本の令孃達と踊つたが、今はもう客も少なく、比律賓から夏場の稼ぎに來てゐた樂手達も、小金をためて歸國してしまつて、涼しい風の來る廣い板の間に並べた

卓について、飲料をとる人影も無かつた。それでも一郎は樂しかつた。目の前に明るい顏をしてゐる友達の妹の心を、此頃になつて、漸くしつかりと捉へてしまつた確信があつた。何時でも、此方から求めさへすれば、求めるものは容易に與へられさうないきいきした希望と、流石にそれに伴ふ輕い不安とに、若々しく、健康で、浮氣な胸をおどらせてゐた。

一郎と別れた外の者は、滑川に沿つた砂山から海邊に出て、夕日の沈んで行く頃の、めつきり秋めいて冷い渚に、下駄や裸足の跡を殘して歩いて行つた。

中學時代から同級で、學問でも世間智でも、お坊ちやん育ちの一郎と比べると格段に立勝つて居る澤は、先年父親の死んだ時、學資の關係で廢學しなければならなかつたのを、一郎の父が息子の良友と見込んで、毎月の衣食費から月謝迄補助する事になつたのであつた。來年學校を卒業すると、一郎は洋行する筈になつて居たが、澤は主人の主宰して居る會社に雇はれる事にきまつて居た。彼は小學時代から優等生の誇を持つて居た。模範的の學生だといふ自信もあつた。鄕里では舊家として知られて居たが、母は早く死に、父は政治狂で、山林から田畑迄全部を運動費につかつて、幾度となく議員選擧の候補者に祭上げられたあげく、一度も當選の喜びを知らずに、一人息子を無一物に殘して世を去つた。夏休が來ても、歸る可き家は人手に渡つてしまつたので、

曲淵の一家にくつついて、其の別莊にゐる外には途(みち)が無かつた。以前は對等の友達づきあひだつたのが、主從と迄は行かないでも、今では多少ひけ目を感じる關係になつて居るので、彼の心持には始終滑かでない陰影があつた。學業にこそ身を入れないけれども、何をやつても器用な運動家で好男子の一郎は、富裕に育つた友達と一緒に、夏休といへば、戀の冒險の季節のやうに考へて、避暑地に集る美しい娘達の噂に夢中になつて居るのだが、澤だけは仲間はづれで、氣樂な連中を羨む心持と、輕蔑する心持とを持つて居た。自分はそんなのらくら息子とは譯が違ふのだと云ふ誇に賴つて、密かになぐさめてゐた。

しかし、彼の心の中にも、つい近頃になつて、一人の女の姿がはつきりと浮ぶやうになつた。それは養子だつた。

養子は曲淵夫人の里の緣類の娘で、これも不幸な身の上だつた。事業に失敗した父親が、手形僞造の嫌疑を受けて自殺した後で、繼母は他へ再緣し、兄は殖民地の病院醫として赴任し、外に賴る處が無いので、曲淵の世話になる事になつた。甲子とは四才違ひ、乙子とは七才違ひの、今年二十一ではあるが、姉妹の爲めには家庭敎師のやうな地位に置かれ、殊に體の弱い乙子の爲めには保姆の役目さへ負はされて居た。府立の女學校に通つて居た頃は、女子陸上競技の選手とし

て、短距離競走の記録保持者(レコオドホオルダア)だつた事もある。大柄で、色の白い、目鼻立のはつきりしたのが、大勢の中や、廣々とした場所では、若い男の目につく姿だつた。一郎の友達仲間でも、少なからず問題にして居たが、養子はさういふ連中を頭から馬鹿にしてゐた。

澤は、自分と同じやうな惠まれない境遇に在る養子に對して、素直な同情は先から持つてゐたが、戀らしい心持は最近迄無かつた。ひとつには、生來の己れを高く評價する性質が、不遇な人を哀れみこそはすれ、自分と同等若くはそれ以上のものとして考へる事を妨げたのである。彼は寧ろ、出來る事ならば家門の正しく且現在榮えてゐる家の娘を、將來の妻として迎へ度いと密かに願つてゐた。母親似の一郎とは違つて、角張つた父親に似た甲子ではあるが、自分の才能を見込んで呉れるものなら貰ひ度いと云ふ望を、心の奧底に祕めて居た時代もあつた。

それが、どうして養子を戀しく思ふやうになつたかと云ふと、矢張り同じやうな境遇が結びつけたものと言ふ外は無い。おまけに一方では、甲子の彼に對する態度が、先方が女らしく成熟して來るに連れて、愈々かけはなれたものになつて來たのも、自然と彼女に對する野心とも云ふ可きたゞならぬ心を薄らがせた原因となつた。

一例としては、或時麹町の曲淵の本邸の庭にのぞんだ座敷に、甲子の友達が集つてゐるところ

を、何も知らずに澤が通りかゝつた事があつた。若い派手づくりの令嬢達の見る目にびくびくして、耳のかげ迄赤くなつて足早に過ぎたが、何かさゝやき合ふ氣配を感じたと思ふと、

「あら違ふわ。うちの書生みたいな人なのよ。」

と聲變のしてゐる甲子の打消すのが聞えた。續いて賑かに笑ふ聲に追はれるやうに逃げ出した澤は、屈辱の念に堪へられなかつた。自分とは全く違ふ世界の人間だと云ふ事が、常識の發達した實業家志望の青年の頭腦(あたま)には、別段の無理も無くはつきりとわかつた。

「どうせ私なんか犯罪人の娘よ。」

と、なげやりな口をきゝながら、腹の底にはしつかりした信念を持つて居さうな養子の方が、段々親しみを增して來た。一郎にしても、娘達にしても、浮々と其日々々を遊び暮して居るばかりで、取り止めた考といふものは何ひとつ持つて居ないのに、養子は兎に角學問にも實社會の問題にも多少の理解は持つて居て、同じ新聞を讀むにしても、音樂會や運動會の記事に兄妹が興じて居る時、澤と二人の話は大人の會話だつた。

「澤さんは羨しいわねえ。學校さへ卒業すれば、後は自分の腕次第でせう。男はほんとにいゝと思ふわ。」

何時も養子は口癖にして、女性の生甲斐なさを嘆いて居た。氣の毒な身の上と、女ながらも自力で何かし度いといふ意氣と、世が世ならばと胸中ではなぐさまずにゐながら、さばさばしたとりなりの一切が、澤には氣持よく思はれて來た。

殊に此の一箇月半の鎌倉の生活が、一層二人を親しくした。澤が食當りで五日ばかり寢た時の養子の看護は、母親の慈愛の溫さを知らない青年の心には、忘れ難いものに思はれた。何時の間にか、澤は養子に對して苦しいやうな慕はしさを感じるやうになつた。戀愛の冒險的の興味をつひぞ知らない澤の事だから、戀は直ぐに將來の結婚の問題だつた。身よりの無い二人こそ終生の最もいゝ伴侶だといふやうな、眞面目くさつた考も持つてゐた。兎に角自分の心持丈はいゝ機會に打明けて、先方からもはつきりした言葉を酬いられ度いと願つて居た。心と心とが許しあつた男女の清い交際と云つた風な、感傷的な小說らしい空想が、彼の頭にはいつぱいだつた。

其處に、烟つたい主人夫婦の歸つた後の、解放された延びやかな心持が、もくもく湧返つて來た。一郎が友達を誘つてホテルに出かけて行く姿を、何時もならば苦々しく思ふ筈なのに、共の日は同情にみちた微笑をもつて見送つた。

夕方の濱邊を散步する人の數もめつきり少なくなつて、甲子を眞先に、少し遲れて乙子と養子

がつゞき、最後に澤が、前に行く三人の後姿に興味を持ちながら歩いて行つた。ホテルの涼場の下を通つて、稲瀬川のそば迄行くと、別荘の屋根が見える。其處迄行つて、女達は砂の上に腰を下した。

「澤さん、休め。」

養子が大きな聲で號令をかけたので、姉妹は聲を揃へて笑つた。

「ゑんやらやつと。」

澤もあかるい氣持で冗談をいひながら、晝間のぬくもりの殘つて居る砂の上に兩足を投出した。

磯の日細りて更くる夜半に
岩打つ浪音ひとり高し
かかれるとも船人は寢たり
誰にか語らん旅のこころ

細く高い三人の肉聲が、誰が始めたともなくうたひ出した。澤は其の傍で、初秋の澄んだ海氣を吸ひながら、誰でもいゝから心から親しめる人のほしい、孤獨感に瞼が熱くなりながら、星の出た海の上の空を、ぢいつと見つめて居た。

四人が別荘に歸つたのは、すつかり夜になつてからだつた。あかりの下で、めい／＼勝手な雜誌を讀んだり、編物をしたりして居るのを、縁側の籐椅子に長くなつて、澤は見ないやうなふりをして見て居た。庭先の松の林の向ふに、月の出の明るい色が段々濃くなつて、見て居るうちにまんまるい月が、ぐん／＼空にのぼつて行つた。

「あら、私櫛を落して來たわ。」

突然讀みかけの雜誌を伏せて養子が叫んだのは、大分更けてからだつた。少し舊式の大きい束髮に手をあてて、首をかしげたが、

「きつと先刻休んだ所ですよ。その前には確かにあつたんだから。參圓五拾錢落してしまつちやあ惜いわねえ。」

冗談を云ひながら立上ると、縁側に出て空を見た。

「いゝ月夜だから、一寸行つて見て來よう。乙子さん待つてらつしやい。直き戻つて來ますから。」

「養子さん、一人でよくつて。」

編物の手をとめて、甲子が聲をかけた。

「大丈夫ですよ。こんなに明るいんですもの。」
無雜作に答へて、後姿は步き出した。
「僕が行つて來ませうか。」
澤は、機械體操でもするやうな身の輕さで、椅子から飛下りると、あとを追つて庭に出た。
「いゝえ、いゝんですよ。自分で行きますよ。」
といふ女の聲がはつきりと姉妹の耳に聞えたが、それきり二人とも行つてしまつた氣配だつた。
門の外の、雜草にまじつて芒や野菊も延びてゐる溝川のへりを眞直ぐに海に出ると、月夜のあかるさは一層はつきりしたが、西の方の空には大きな雲が重なり合つて、風も思ひの外強かつた。脚に卷きついたり、吹きまくられたりする白衣の裾を氣にしながら、養子は先に立つて步いて行つた。
靑貝入の西洋櫛は、澤の目にも覺えのある物だつた。きつと其處に落したに違ひ無いと、確信をもつて養子の云ふ幾時間か前にみんなが並んで腰を下した場所を、共々に探したけれど見つからなかつた。
「どうしたんでせう、確かに此處に違ひ無いんですが、拾はれちやつたのかしら。」

養子は思ひ切れないで、幾度も同じ所を見て廻つた。父親が自殺する前に、珍しく一緒に散歩に出た時買つて呉れた遺品(かたみ)だつた。並(な)みでない死に方をした父に對して、執拗な愛情を持つて居る養子には、なくなしては申譯が無いといふ氣持もあつた。

「矢張りなくなしちやつたのかしら。」

あきらめ兼(かね)て、砂の上に長く影を投げて佇みながら未練らしく嘆息した。

「おや、雨かしら。」

たつた一粒、ひやりとした頰ぺたに掌をあてて、澤は後の方の空を振仰いだ。先刻の雲が、月に向つてちぎれて飛んで行くのであつた。

「雨ですよ。」

さう云ふひまも無かつた。はげしい夕立が砂地を打つて落ちて來た。二人は砂山の下の、晝間は海に入る人の着物を預かる葭簀張の茶店の中にかけ込んだ。

月は未だまんまるく、高い處に澄んでゐるのに、空の半分は暗くなつて、なかなか雨は止まなかつた。

「變な天氣ですねえ、氣味が惡いわ。」

「明日が二百十日ですか。」
「いゝえ、あさつてでしよ。」
葭簀の隙間から落ちる雨だれに身をすくめながら、二人は別々の心持で、不思議な其晩の景色を見て立つてゐた。
不意に、目の前の砂濱を手を引合つて驅けて行く男女の姿が見えた。頭から降りそゝぐ雨を避ける場所が無いので女は輕い叫聲をあげながら、男の力に引擦られて行つたが、間もなく大きな漁船のかげにかくれて見えなくなつた。
「今の、一郎さんでしよ。」
養子にさう云はれる迄も無く、それが一郎と、その友達の岡部の妹である事は澤も認めた。何か大きな事件でも目撃したやうな氣持で胸がどき／＼して、返事も出來なかつた。
月は屢々雲にかくれたり、又未練らしく顏を出したが、雨はなかなか止まなかつた。頭から肩へかけて、二人ともぐつしより濡れてしまつた。養子の横顏を澤は何時にも増して艶々しく思つた。
「養子さん。」

非常な努力で、澤が呼びかけた聲は無慙に震へて居た。

「僕は眞面目に貴女に聽いて頂き度い事があるんですが……」

たゞならぬ男の語氣に、身をかたくして振向いた相手の視線に射られて、澤は言葉が詰つてしまつた。こんな事では駄目だぞと思ひながら、どんな態度も、どんな言葉も、此の場合芝居めいてをかしいものに考へられ、脣はすつかり乾いてしまつた。

暫時の間、無言のまゝ、お互の呼吸を感じながら、二人は顏を見合つてゐた。

「澤さん。」

氣力負けして、足下の砂地に澤が視線を落した隙を見て、餘程たつてから養子の方が口を切つた。

「私は犯罪人の娘ですよ。」

驚いて澤が顏を上げた時、養子は強ひて笑はうとしたらしかつたが、笑ふ丈のゆとりが無く、いきなり土砂降の雨の中を、別莊の方に驅出した。

しまつたと思ひながら、澤も直ぐ後から驅出した。

別莊の門を入る時には、雨はぱつたり止んで、又まんまるい月が、けろりとした顏をして、滯

り無く晴れた中空の風に吹かれて居た。

「養子さん、櫛あつて。」

「遲かつたわねえ、濡れちやつたでせう。」

氣づかつて居た姉妹が緣側に出迎へた時、二人ともづぶ濡になつて着物の吸ひつくやうにぴつたり肌にくつついた儘の姿で、せいせい息を切らして居た。

二

九月朔日の朝は、南風が眞當面に吹きつけて、緣側の硝子戸を閉めると蒸暑く、あけると部屋の中のものが舞上つて爲方が無かつた。

養子と一郎は姉妹の相手をして、圓座をつくつてトランプをして居た。一郎はしきりに調子づいて、ノオ・トランプを連呼して居たが心の中はおちついては居なかつた。昨夜は、岡部が故意と二人の爲めに席をはづして撞球場へ行つた後で、翠子を誘つて濱邊に出た。月明の渚を靈山ケ崎迄歩いたが、途中でひたひたの稻瀨川を渡る時は、多少躊躇して居る翠子を、無理におぶつて渡つた。夕立が落ちて來た時は、そろそろホテルの方へ歸るところだつたが、容赦なく降つて來

たのをきつかけに、いきなり相手の手をとつて驅出した。

すくなからぬいたづら氣分で、足の遅い女の倒れさうになるのも構はず、逸散にホテルの葭簀小屋迄驅足を續けた。暗い砂山の下の其の小屋についた時は、一郎さへ呼吸がはずんで口がきけなかつた位だから、翠子は頭から裾迄づぶ濡で、苦しい息づかひをしながら、

「隨分ひどいわ。」

と言はうとしても、言葉は脣迄出て來て吳れなかつた。雨に濡れた全身に、熱い汗が蒸すやうに湧いて來た。もう一歩も進む氣力は無く、手を放せば其儘膝をついてしまひさうな姿に見えた。一郎は、途中でぬいで左手に持つて居た下駄を砂地に捨てると同時に、兩手を擴げて相手のちひさい體を抱いた。抱きしめると、自分の着物の濡れて居るのが、殊に強く感じられた。香料の匂ふ束髮の額を胸につけて、死んだやうに動かない翠子の樣子に、すつかり安心して、目の前にほの白く見える頸に輕く接吻した。

其の時の事を想ひ出すと、妹の相手をしてトランプなんかして居るのが馬鹿々々しくて爲方が無かつた。今日も午後からホテルの庭で、岡部と庭球をする約束になつて居て、翠子もきつと來ると誓つて居たのを考へると、早く午後になればいゝと思ふばかりだつた。自然と、冒險的に骨

牌を打つ氣分だつた。

澤は風邪の氣味で鼻をつまらせながら、微熱の體を籐椅子の上に横たへて居た。

「澤さんは意氣地なしねえ。私だつて昨夜(ゆうべ)はびしよ濡になつたけれど、平氣だわ。」

何事も無かつたやうな晴々した顔附で、養子はトランプの手をやめては冷かして居たが、澤は苦笑するばかりで、縁側の外におびたゞしく延び繁つた臺灣萓の風に吹かれて白い葉裏をかへすのを見て居た。熱を持つて鈍く重たい頭の中で、面白くない事ばかり考へて居た。

それは、自分が養子に對して、時機の熟すのを待たなかつた事の後悔が主なものであつた。先方が、曲淵一家の中にあつて、人一倍自分に親切にして呉れたのは確かだが、それが特殊の意味のあるものだつたかどうかはわからない。幸福で無い自分の境遇に對して、先(さき)も不幸な身の上から、單に同情して居る丈なのかもしれない。澤はふと、つい此間雜誌で讀んだ或有名な富豪の立志物語を想起した。

幼くて兩親を失ひ、祖母の手に育てられた若者は、土地の大百姓の家の作男に住み込んだ。其の時、その家の女中が、他の男達に對するよりも一倍親切に盡して呉れた。どうしてもたゞの親切とは思はれないで、或晩密かに忍んで行くと、女はいきなり横面をひつぱたいて、「身よりも無

くて可哀さうだと思つて、目をかけてやれば、つけあがりやがつて、生意氣な眞似をしやあがる。」と云ふ意味の言葉を浴せかけた。這々の態で逃げ出すと、その夜の中に決心して東京を志し、辛苦の末に百萬長者になつたと云ふ話だつた。

澤は、それが自分の話ででもあるやうな羞恥に、思はず知らず顔が火照つた。

けれども、又一方から考へると、養子の示した態度には、横面を張飛ばすやうな侮辱は無かつた。貴方は未だ學生ではありませんか、そんな事を云ふ時ではないぢやありませんかと、たしなめる心だつたかもしれない。さう想ひかへして、稍救はれた心持になる事も出來たが、何にしても自分のひけめを感じるのは、消す事が出來なかつた。

「ハアトでテン。」

突然養子のはしやいだ聲に、澤も座敷の方に首を向けた時、

「ノオ・トランプ、テン。」

直ぐさま一郎の上手を行く、勝ほこつた聲が聞えた。

その瞬間に、遙かにづしんと響く異樣な音響がしたと思ふ間も無く、大地を搖つて上下動の地震が來た。家はめきめき軋み、疊は湧きかへるやうに持上つた。

澤は夢中になつて身を起すと、僅に隙間のあつた硝子戸の間から、庭の芝生に一飛びに飛んで出た。足が地面につくと共に、もくもく動く大地の力にはねとばされて轉倒したが、其時家の方を見ると、瓦は飛び、硝子は碎け、今にも滅茶々々に壞れさうな座敷の中で、四人の立騷ぐ姿がはつきり見えた。一郎は、甲子を引擦るやうに抱きかゝへて、崩れ落ちる鴨居の下を潛つて、よろめきながら出て來るところだつた。二人が緣側から飛び下りたとたんに、物凄い音を立てゝ、家は柱を折つて倒潰した。澤は其の家の崩れ落ちる瞬間に、逃げ遲れた乙子をかばつて疊の上に突伏した養子の姿を見た。

「乙子ちやん、乙子ちやん、乙子ちやん。」

あらん限りの聲をしぼつて泣き叫びながら、妹思ひの甲子は物狂ほしく驅廻つた。澤と一郎は眞蒼になつて顏を見合せたばかりで、一言も物を言ふ事は出來なかつた。何處から出て來たのか老犬は、おびえ切つた樣子で尻尾を振りながら倒れた家の廻をかけ廻つてゐた。

「乙子ちやん、乙子ちやん、乙子ちやん。」

甲子は叫びつゞけながら、今にも失神しさうな有樣で、一郎の胸にしがみついた。

裏手の方から、ぢいや夫婦と女中がかけつけた。

「ちひさいお孃樣は。」

「駄目だ、養子さんと二人共やられちやつた。」

眞當面にぢいやに顏をのぞき込まれるのがいやなので、泣叫ぶ甲子を女中の手に渡すと、一郎はいきなり倒れた家の屋根に上つて、瓦をめくり始めた。

倒れた家には隙間が無かつた。一枚二枚手あたり次第に瓦をつかんではほふり出したが、何の甲斐も無い事は直ぐわかつた。其の上地震は未だ止まないので、一郎は又芝生に立戻つた。

「ぢいや、人足を多勢呼んで來て呉れ。」

何を愚圖々々してるんだと、叱り飛ばす權幕だつた。

「若旦那、駄目で御座ります。此の界隈には無事なうちは一軒もありやしません。みんなで鋤でも鍬でも持つて來てやつて見る外はありやあしない。」

ぢいやは曲つた腰を振つて、裏の物置の方に行つた。

一郎も澤も、家のつぶれたのは自分達ばかりで無い事に始めて氣がついた。あんまり意外な大地震に驚愕して、他人の事なんか考へるひまが無かつたのだ。あゝさうかと思つて附近を見ると、今迄立つてゐた方々の二階家も見えなくなつて、眞靑に晴れた空が廣々と見渡された。一郎は急

に、乙子や養子の外に、一の鳥居の岡部の別莊の安否が氣になり出した。

誰も彼も、下敷になつた二人は壓死したものと思つて居たが、甲子の外には涙を流す者も無かつた。ちつとも勢が衰へず、ひつきりなしに搖れる地震の脅威に、悲む餘裕さへ無いのであつた。澤は、眞先に逃げ出したのが濟まない氣持はしながら、殆んど氣力を失つて、何もする事が出來なかつた。風邪氣で熱のある頭の重たさに惱んで居たのだが、そんな氣持は消えてしまつて、はげしく動悸のする胸を押へて佇んで居た。彼の頭には、下敷になつた二人の事ばかりが渦卷いて居た。殊に養子が、むごたらしい死骸になつてしまつた事を想像すると、昨夜の月光を浴びて立つて居た姿や、づぶ濡の姿が嘘であるか、今の地震が夢であるか、どつちか一つに違ひ無いと思はれた。

何時迄も地震は止まなかつた。ぢいやの持つて來た鋤や丸太で、男達はしきりに崩れた家の何處かをこじあけようとしたが、きつしりと組合つた儘落ちた家は、微塵も動かなかつた。芝生に倒れて泣いて居る甲子の側で、老犬は空に向つて唸るやうに吠えてゐた。

「おや、變な音がするぞ。」

やけになつて、丸太で屋根瓦をなぐりつけて居た一郎が、振上げた手をそのまゝ、澤をかへり

みた。海の方から、無數の屋根板を吹き飛ばすやうな、ばらばらばらばら云ふ音が聞えて來た。

「海嘯ぢやあないか。」

地震の後には海嘯があるといふいひ傳へと、昔鎌倉に大海嘯があつて、大佛の御堂もさらはれたと云ふ記錄を思ひ出した。

「海嘯だ。逃げろ。」

耳をすましてゐた一郎が上ずつた聲で絕叫した。女達は一齊に門の方へ驅出した。

一郎は追ひすがつて、甲子を扶けながら、半分落ちた石橋を越えて往來に出たが、もう其の時は海岸から、必死になつて山手へ逃る人で、狹い道はいつぱいだつた。半分水浸しになつたのもあり、顏や手足に負傷して、血をしたゝらして居るのもあつた。

町の店家も、一軒として滿足なのは無かつた。兩側から倒れて道をふさいで居るのを踏越えて、一番近い裏山の松林迄逃げた。見る間に澤山の人數が、其處に避難して來た。幾度も途中で膝をついてしまひさうな甲子を抱へて來た一郎は、自分も息が苦しくなつて、大きな松の木の根方に腰を下した。昨夜の雨の未だ乾かない雜草の上に横倒しになつて、甲子は又袂で顏をかくして泣き出した。

「乙子ちやんは、乙子ちやんは、乙子ちやんは。」

つぶやくやうに、祈るやうに妹の名を繰返してゐた。一郎は手のつけやうも無く、膝を抱いて、默してゐた。いつたんはちりぢりになつた同勢が、澤を先に、ぢいやを最後にして、一所に集つた。乙子や養子は、どうせ死んだには違ひ無いが、捨てて逃げて來た氣持がして、誰しも申譯の無い心持を持つてゐた。此處迄來ても、まだ海嘯が來さうな氣がして、口もきけなかつた。別莊のある山の下一帶は、既に全く海になつたであらうと想像してゐた。

後の山はそいだやうに崩れて、赤い肌が生々しく、なほ絶間なく岩石のなだれ落る音が凄かつた。東と西に火の手があがつて、急速に打つ警鐘は、山々に響いてこだました。水に追はれた人と、火に追はれた人が、今にも大きな地割がして、總ての人類は埋もれてしまひさうに脅かす土を踏んで、松林の中にかたまつてゐた。素早く戸板や莚を持つて來て、假の場席をこしらへ、怪我人や子供を寢かして居るのもあつた。

「こりやあ、こつちも莚でも探して來なくちやあなるまい。」

あつちこつち、見知越の顔を見付けては、ひそ／＼話をしてゐたぢいやが、相談するやうに一郎の顔をのぞき込んだ。

「駄目だよ。もう、うちの近所は海になつてるだらう。」
俄に悲しさに堪へられなくなつた聲が著しく震へた。
「なあに海はえらく引いてるさうです。二里も三里も干潟になつたつて云つてます。」
「引いてるつて。それぢやあ海嘯は來なかつたのかい。」
「來たには來たけれど、直きに引いてしまつたさうです。一寸行つて見て參りませう。」
悟り切つた顏をしてゐるぢいやは、いひ捨てて歩き出した。
「待つて呉れ。僕も一緒に行かう。」
非常な決心を示した態度で一郎は立上つた。
「およしなさいまし。まだぐら〳〵搖れてますから。」
ばあやがあわてゝ引止めた。
「なあに、ぢいやが行ける所なら僕だつて行けるよ。」
「それぢやあ僕も行かう。」
澤も、自分一人安全地に殘つて居るのは心がとがめるので、直ぐに一郎と肩を並べて歩き出した。

「直ぐ歸つて來る。大丈夫だ。もう大きいやつは來やあしない。」

男達がみんな行つてしまふのだと思ふと心細くなつて、甲子の泣聲が又高くなつた。

松林を出ると、先刻上つて來た一筋の坂が、見るかげもなくなつた長谷の町へ眞直ぐに續いて居る。三人は默々として下つて行つた。どおんと遠くで土の落るやうな音がすると、間も無くぐらぐら搖れて來る地震も、今ではもう怖くは無くなつてゐた。一郎も澤も、乙子と養子の無慙な死に對し、又あんまり無雜作に人間が壓倒された自然現象に對して、腹立たしい自棄の心持から、死んでも惜くないやうな氣持だつた。

町筋の倒れた家のあたりでは、一たん逃げたのが又戻つて來て、男も女も家財を取出すのに血眼になつて居た。もう一搖り來れば、ひとたまりも無ささうな半つぶれの家にさへ踏込んで行く人間の、財貨に強い執着を持つて居る有樣を、一郎も澤も苦々しく思つた。自分達が今行かうとする所には、二人の若い女が死んで居るのだと思ふと、たゞ其の人達が無事でさへ居てくれたら、他の事はどうでも天に任せると云ふ氣持もあつた。

海へ行く道を曲ると、六尺とは無い狹いところへ、兩側の家の石垣や塀が倒れたり、所々地割のした場所もあつたが、みんなが想像した程水は來ず、別荘のある近所は、僅かに浪頭がかぶつ

た位と見えて、砂地が汚ならしく濡れて居るばかりだつた。

「浪は來なかつたんだね。」

壓死した二人は、その上に海嘯にさらはれたものと想像して居たが、それ丈は免かれたのを知つた。澤は默つてうなづきながら、目の前に倒れてゐる屋根の下に、紫矢飛白の銘仙の着物に赤い唐縮緬の帶をした乙子を抱いて、白地に秋草模樣のゆかたを着た養子が死んでゐるのだと思つて暗然とした。

ぢいやが丹精した花壇は、一段低い處なので、潮の最後の延長が屆いたと見えて、未だ濁水の漂つてゐるところもあり、ダリアや菊や早咲コスモスの丈の高いのは根を洗はれて倒れ、土を這ふ松葉牡丹や脊の低い水引草は砂に半分埋れてゐた。何處の飼猫か、首輪に赤いリボンを結んだのが、汚れた腹をさらして死んでゐた。

三人は臺灣萱の繁みが自然の垣根をつくつて居る庭先へ廻つて行つた。晴れた日の午後の芝生は廣々と靑く日に光つて居たが、其の眞中に、輝くばかり反射する紫の色が、萱の葉の間からはつきり見えた。息の止まる前のやうな叫聲をあげて、三人は一度にかけ出した。

立上つたのは養子だつた。足下には紫矢飛白の乙子が、芝草に取縋つた形で、眞蒼な顔をして

うづくまつて居た。三人の方を見るには見たが、地面から顔を上げる氣力は無かつた。しかし生きてゐると知つたので、一郎は嬉し涙に咽喉の詰まつた聲で、

「乙子、乙子。」

と繰返しながら、倒れるやうに膝を折つて、其上に妹の體を抱起した。乙子は、兄の胸に喰ひついて背中に波を打たせて泣き出した。

側では養子が、異常の脅怖に上ずつてゐた目に俄にいつぱい涙を浮べて、澤の方に手を差延ばした。澤は躊躇しずにその手を取つて強く握りしめた。

「いつたい、何處から出て來たの。」

實は死んだと思つてゐたと云はうとして口をつぐんだ。

「わかりません。たつた一箇所あかりのさしてゐるところがあつたので、其處から出て來たんですけれど、出られたと思ふ嬉しさで夢中になつて、今考へてもわかりません。」

養子の話を聽くと、澤が一番早く庭先へ飛出し、一郎が甲子を引立てて立上つた時、自分も乙子を抱上る積りだつたが、足下がきまらないので力が足らず、もういけないと思つた時は、既に天井が落て來て、眞暗になつてしまつた。それから其の暗闇を手探りで、あちらこちら這ひ廻つ

たが、何處に行つても木材に妨げられて行どまつてしまふ。誰かが助けに來て吳れるものとは思つてゐたが、其の間幾時間たつたものかゐからない。不意に明るい外光がさし込んで來たので、やうやく其處迄たどつて行くと、體の出られる丈の隙間があつた。先づ乙子を先に出し、自分が續いて外に出ると、助かつたと思ふ嬉しさに、何處から出て來たなど丶云ふ見極めのつく考へなんか毛頭無く、芝生の眞中にかけて行つて、一安心したところだつたと云ふ。

何處から救ひの日光がさし込んだか、三人は養子の心當で指さす邊を熱心に見て廻つたが、木材と木材はきつしり喰ひ合つてゐて、一寸の隙間さへ見出せなかつた。

養子は手足に少し擦過傷を受けて居たが、それも大した事は無く、乙子は異常な恐怖に病的におびえて貧血してゐたけれど、着物の裾が裂けて居るばかりだつた。

「兎に角無事でよかつた。愚圖々々してゐて又海嘯が來てやられてはつまらないし、火事も此方が風下だから、何か持つて行けるもの丈持つて引上げよう。」

一郎は乙子を養子に渡して、ぢいやと澤と三人で物置の方へ廻つて行つた。

蓙と戸板と丸太と繩を持つて、いそ〳〵した心持で松林の避難所に歸つて行つたが、一郎の心には岡部の事がいつぱいだつた。乙子と養子が助かつたので、氣が樂になると同時に、友達の家

の安否を確めなくては濟まなくなつて來た。危難にのぞんでゐる翠子を救ひ出す勇士の役目に自分をあてはめて考へると、運動で鍛へた體を動かせ度くて堪らなくなつた。
「僕は、岡部のとこに見舞に行つて來るぜ。」
丁度松林の下の坂の上口迄來た時、一郎は思ひ決して澤に云つた。
「およしなさい。遠走りすると危なう御座いますよ。後でぢいやが行つて來ますから。」
さう云つて止めたけれど、一郎の心は既に驅出してゐた。
「大丈夫だ。直ぐ歸つて來る。」
いきなり兩手に持つてゐたいろんな物をぢいやに押つけると、くるりと背中を見せて、正式に練習の積んだ姿勢で逸散にかけ出した。

三

土に敷いた蓙の上に、甲子と乙子を取圍んで、澤と養子とばあやと女中達は、變災の話から、お互の無事を祝ひ合ひ、又此の先どうなるかを心配して、同じやうな言葉を幾度となく繰返してゐた。ぢいやは食料を探しに行つて、なかなか歸つて來なかつた。

地震は間斷無くやつて來た。その度毎に姉妹は抱合つて泣いた。東の方の火事は停車場の方に燃えて行つたが、西の方の火の手は段々迫つて來て、黑い烟は松林にもかゝつて來た。澤と養子は、萬一此の山が燃えるやうな事があつたら、もう逃げ道はあるまいと、心々に思つてゐた。

養子は着物を短く端折つて、膝から下をむき出しに日に曝してゐた。徒歩競走の選手だつた丈あつて、女にしては長く、生れつき色の白い滑な皮膚に薄青く靜脈の透いて見える二本の足は、澤の目の前に艶めかしく並んでゐた。多分、倒れた家から出て來る時に受けたのであらう。膝頭を擦りむいてゐる外に、澤山の擦過傷が、血のあとを殘してゐた。

「痛みはしませんか。」

默つて見てゐるのはかへつてうしろめたくて、澤はわざと眉をしかめて聞いて見た。

「いゝえ。ほんのかすり傷ですもの。」

「名譽の負傷ですか。」

呑氣らしい事を云つたなと思つたが、養子はそれには答へないで、

「澤さんはひどいわ。私達を扶けようともしないで眞先に逃げてしまふんですもの。」

と、ふだんの通りの快活な口のきゝ方で、斬込んで來た。何とかうまく引ぱづさうと思つたが、

手痛い冗談だつたので、澤は咄嗟に返事が出來なかつた。自分がいちはやく逃げた事に對して、先刻から心の中で、恥ぢたり辯解したり、一人で苦しんで居たのだつた。あの場合に、自分は緣側にゐたので、直ぐに庭へ飛下りる氣になつたのだが、若しみんなと一緒に座敷にゐたら、きつと養子を扶けたに違ひ無い。逃げ道に一番近く居たのが自分の不運なのだと、彼はひどく悄氣てしまつた。

「私達なんか死なうと生きようと、御自分丈助かればよかつたんでせう。」

何の惡氣も無いのであらうが、養子はつけつけと疊みかけた。

「そんな事があるもんですか。」

流石に少しむつとして、澤は養子を眞當面に見ながら、矢張り辯解の言葉に苦しんでしまつた。その樣子をぢつと見守つてゐた養子の目には、いたづらな微笑が浮んで居た。澤は逃げるやうに、視線をそらすと、其處には老犬が疲れた形で長々と寢そべつて居た。ふと、畜類の身の上が羨しく思はれた。地震があらうが、火事があらうが、犬は人間程苦しみはしないだらうと思つた。一面には養子に對するまぎらかしもあつて、輕く口笛を吹いてみた。犬は薄目をあいて彼の方を見たが、直ぐに又眠つてしまつた。

罐詰類と麵麭を買込んで、ぢいやは手柄顏をして歸つて來た。方々で聞いた話を、又みんなに聞かせながら、たつた今人にせがんで貰つて來た一本の巻烟草を、さも惜さうにふかした。

日が西の方に廻つて、松林の中が薄暗くなりかゝつた頃、心配してゐた一郎が疲れ切つて歸つて來た。たゞならず緊張した其の顏を見ると、皆の胸はどきんとした。

「どうしたの。無事だつた。」

澤がきくと、一郎は頭を振つて、

「きやうだい共死んぢやつた。家がつぶれて火事になつて燒死んだんだ。」

詳しい話をしようとする積りだつたが、脣が震へて云へなかつた。一郎は莚の上にうつぶせに身を倒したきり、暫時は動かなかつた。

「まあ、ごきやうだい共。」

養子が僅かにこれ丈云つたばかりで、みんな暗い心持になつた。甲子と乙子がすゝり上げて泣き出した。

横濱の貿易商の子で、當世風の派手好の兄妹を、養子は平生好きでなかつた。一郎がみつともない程翠子の歡心を得ようとしてゐるのなんか、腹立たしくも思はれたが、無慙に死んでしまつ

たのかと思ふと、いきいきした表情を持つてゐた翠子の姿が、いたましく浮んで來た。おもはず涙ぐんだ目を伏せると、長く延ばした自分の脚に、今日の最後の薄日がさしてゐたが、その擦り傷の血の滲んだ所に二疋の蠅が止まつてゐるのを見た。そつと手で拂つたが又やつて來た。ちひさないきものに對して、養子は寧ろ親しい心持を起して、脚を擦り合せたり、翅を振つたりしてゐる微妙な運動を見てゐたが、今度は追ひもしなかつたのに、ふと一疋が飛んだと思ふと、もう一疋の背中に下りた。くるくると二三度もつれあつたと思ふと、完全につるんだ。養子はふと、澤の視線が自分の足に落ちて居るのに氣がついて、顏があかくなつた。

澤も氣が付いて赤面した。それでも、彼は、岡部の悲慘な死態(しざま)や、折角戀を得た一郎の氣の毒な心に對する同情で胸がいつぱいになりながら、養子と自分が無事で、斯うして並んで坐つてゐる幸福を頭の中では強く考へてゐた。(大正十二年十一月二十三日)

後記

「小說三」に收めたのは、前卷收錄の「日曜」(大正八年二月十三日)以後に作られた短篇を採つて本全集一册の分量にしたもので、大正八年四月から同十二年十一月に及ぶ十八篇である。この四年の期間中に、「英京雜記」(大正十一年五月二十一日)と「大阪」(大正十一年十一月十九日)の二つの長篇が作られたのであるが、この場合年代順に據らないで、「大阪」は後の「大阪の宿」(大正十四年十月三日)と並べると、所謂この作者の「大阪物」の集成を示してゐるので、これを一卷とし、また「英京雜記」は、この作者に依つて「都塵」(昭和八年三月五日)と合はせられて「倫敦の宿」を構成してゐるのに、單行本「亞米利加記念帖」の後半を占め、作者が呼んで隨筆となしてゐる數篇を加へて、やはり外國物の集成たるべき一卷としたのである。

茲に收錄した短篇十八の掲載雜誌及び收錄された單行本名を擧げれば次の如くである。

一、「落葉の頃」(大正八年四月九日)――「三田文學」大正八年五月十周年記念號、「亞米利加記念帖」。

二、「紐育――リヴアプウル」(大正八年六月十八日)――「新小說」大正八年六月號、「亞米利加記念帖」。

三、「大空の下」（大正八年六月十八日）――「三田文學」大正八年四月號六月號八月號、「大空の下」。

四、「友情」（大正八年十二月七日）――「新小説」大正九年一月號、「日曜」。

五、「秋」（大正八年十二月十四日）――「三田文學」大正九年一月號、「亞米利加記念帖」。

六、「正月」（大正九年三月十四日）――「改造」大正九年四月特別號、「明窓集」

七、「祭の日」（大正九年二月二十二日）――「人間」大正九年五月號、「亞米利加記念帖」。花袋秋聲五十年記念「現代小説選集」（大正十五年）に再錄。

八、「水夫の家」（大正九年五月十八日）――「三田文學」大正九年六月號、「葡萄酒」。

九、「隣室の犬」（大正九年九月三日）――「人間」大正九年九月號、「葡萄酒」。

一〇、「辻君」（大正九年十一月二日）――「解放」大正十年一月號、「葡萄酒」。

一一、「失職」（大正九年十二月二日）――「新小説」大正十年一月號、「明窓集」。

一二、「葡萄酒」（大正九年十二月十日）――「人間」大正十年一月號、「葡萄酒」。

一三、「虫の命」（大正十年三月十五日）――「人間」大正十年四月號、「明窓集」。

一四、「霙」（大正十一年十一月二十一日）――「新小説」大正十二年一月號、「明窓集」。

一五、「師表」（大正十二年一月二十一日）――「女性改造」大正十二年三月號、「明窓集」。

一六、「喧嘩」（大正十二年二月九日）――「女性」大正十二年四月號、「勤人」。

一七、「邂逅」（大正十二年六月十二日）――「新小説」大正十二年七月號、「勤人」。

一八、「九月一日」（大正十二年十一月二十三日）——「隨筆」大正十三年一月號、「勤人」。

この「小說三」に收められた十八篇を作られた期間は、第一次世界大戰後の好景氣と關東大震災があつた時に當り、初め作者は、明治生命保險株式會社大阪支店副長だつたが、大正八年十月から東京本社詰となり、父母の家を離れて「赤坂の家」を持ち、三田の「撒水車」の家に移り、大正十年四月結婚し、「青山の家」へ移り、更に大正十二年七月には謂ふ所の「元祿屋敷」へ移轉したのだつた。作者の身邊も多事であつたが、小說の外に「貝殼追放」中の優れた數篇を書き、筆硯益々盛んであつた。

單行本「明窓集」には、「安川幸、磯邊隆、小泉富、日比谷八重におくる」といふ作者の姉妹への獻辭がある。序がついてゐるが、それは「貝殼追放」(一)に收めた。「亞米利加記念帖」には「永井荷風先生にささく」、「葡萄酒」には倫敦滯留當時の正金銀行支店長で親交のあつた「巽孝之丞先生同令夫人に捧ぐ」の獻辭がある。

「小說三」も、原稿のある「大空の下」「水夫の家」は原稿を原據とし、その他は、揭載雜誌を照合して校訂をしたが、主として荻野忠治郎君に當つてもらひ、校正には水木京太、平松幹夫の兩君をも煩はしたことを特記して置きたい。（井汲淸治）

東京府規格外許可 已資紙規第一五四號

昭和十六年八月二十五日印刷 水上瀧太郎全集 三卷
昭和十六年八月三十日發行 會費參圓



著者 阿部章藏

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者 岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者 白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所 岩波書店
電話九段(33)一八七番
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

精興社印刷 板倉製本

落丁・亂丁等不完全な品がありましたら直接御申出願ひます。お取替致します。



